

新約聖書研究
マタイの福音書～黙示録

ボブ・アトリー博士
バイブル・レッスンズ・インターナショナル

目次

聖書を有意義に読むための手引き: 立証可能な真実への個人的探求	i
緒言	1
マタイの福音書への導入	3
マルコの福音書への導入	11
ルカの福音書への導入	20
ヨハネの福音書への導入	30
使徒行伝への導入	41
ローマ人への手紙への導入	54
コリント人への手紙第一への導入	61
コリント人への手紙第二への導入	70
ガラテヤ人への手紙への導入	77
エペソ人への手紙への導入	83
ピリピ人への手紙への導入	96
コロサイ人への手紙への導入	104
テサロニケ人への手紙第一・第二への導入	116
牧会書簡群への導入—テモテへの手紙第一・第二とテトスへの手紙	129
テトスへの手紙への導入	139
フィレモンへの手紙への導入	142
ヘブル人への手紙への導入	146
ヤコブの手紙への導入	154
ペテロの手紙第一への導入	161
ペテロの手紙第二への導入	172
ヨハネの手紙第一への導入	179
ヨハネの手紙第二・第三への導入	187
ユダの手紙への導入	190
旧約聖書の預言への導入	197
ヨハネの黙示録への導入	203
補遺1: 用語集	226

補遺2: 原典批評	239
補遺3: ギリシャ語の文法構造の簡単な定義	244

聖書を有意義に読むための手引き: 立証可能な真実への個人的探求

私達は真実を知ることができるだろうか。それはどこで見つかるだろうか。私達はそれを論理的に立証できるだろうか。最高の権威はあるのだろうか。私達の人生と私達の生きる世界とを導くことのできる絶対的存在はあるのだろうか。人生に意味はあるのだろうか。私達はなぜここにいるのだろうか。私達はどこに向かっているのだろうか。これらの疑問—全ての理性ある人々が熟考する疑問—は有史以来人間の知性につきまわってきた(伝道者の書 1: 13-18、3: 9-11)。私は私の人生を支配する中心となるものについて個人的に探究したことを覚えている。主に家族の大多数の証言によれば、私は幼少期にキリストを信じた。大人になるにつれて、私自身と私の生きる世界についての疑問も又深まっていった。単なる文化的・宗教的なありきたりの知識は、本で読んで知ったり実際に体験した出来事に意味を与えなかった。それは混乱、探究、渴望の時であり、また私の生きた非情で厳しい世界に対面したときの絶望感であった。

これらの究極の疑問に対する答えは多くの人々によりなされているが、研究と熟考の後に私は彼らの答えが(1)自分の哲学[個人的信条]、(2)古代の神話、(3)個人的体験、あるいは(4)心理学的投射に基づくことに気付いた。私には、私の世界観、私の人生を支配する中心となるもの、私の生きる理由を確立するために、ある程度の立証、証拠、理性的信念が必要だった。

私はこれらを自らの聖書研究のなかに見出した。私はその信憑性を裏付ける証拠を探し始め、そしてそれが(1)考古学によって確定された、聖書の歴史的信頼性、(2)旧約聖書の預言の信頼性、(3)1600年間にわたってなされた聖書のメッセージの統一性、そして(4)聖書との出会いによって自らの人生が恒久的に変化した人々の個人的証しのなかにあると気付いた。キリスト教は信仰と信条とが一体化した(宗教)体系であり、人間の人生の複雑な疑問を取り扱うことができる。これが与える論理的枠組みだけでなく聖書的信仰の経験的側面も私に喜びの感情と感情の安定をもたらした。

私は、聖句を通して理解した通りに、私の人生を支配する中心はキリストであると自分は気付いていると考えた。それはわくわくする経験であり、感情の解放だった。しかしながら私は、時々同じ教派の複数の教会や(神)学校の間でさえ、この本(注解書)にどれほど多くの異なる解釈がなされ(激しく議論がなされ)るかを考え始めたときの衝撃と痛みをまだ覚えている。聖書の啓示と信憑性を主張することは終りではなく、始まりにすぎない。聖句の中の多くの難解な文章の、それらを絶対視し信憑性を主張する人々によってなされた、様々で互いに対立する解釈を私はどのように立証しあるいは却下すればよいだろうか(福音主義キリスト教は聖書の信憑性を主張するが、それが持つ意味には同意できない)。

この仕事は私の人生の最終目的となり、また信仰深い巡礼となった。私は、私のキリストへの信仰が私に大きな平安と喜びとをもたらしていることをわかっていた。私の心は、自分の(生きてきた)文化と互いに対立する宗教体系の教条(教義)主義と特定の教派への偏重による傲慢さとの相互関係の中心にある絶対的なものを渴望していた。古代の文献の正しい解釈を目的とする自ら

の研究の中で私は自分自身の歴史的、文化的、特定の教派への偏重による、そして経験に基づく偏見に気付いて驚いた。私はしばしば、自分自身の見識を広めるためだけのために聖書を読んでいたのだ。私は自分自身の(主張の)不安定さや不十分さを克服するなかで、他者に反論するための教義の(情報)源として聖書を利用していったのだ。このことに気付いてどんなに心を痛めたことか。

私は決して完全に客観的にはなれないが、聖書をより有意義に読むことはできる。私は自分の持つ偏見を明らかにして認めることによってなくしていくことができる。私はまだそれらを持ち続けているが、私自身の弱さと向き合い続けている。解釈する人はしばしば聖書をより有意義に読むことにおいて最悪の敵なのだ。

私が聖書研究において提唱している前提を、読者の皆さんと一緒に検証するためにいくつか挙げよう。

前提

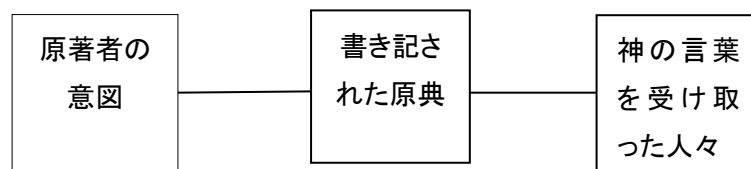
1. 私は聖書が唯一の真の神の唯一の自己啓示であると信じる。従って聖書は、特定の歴史背景の中にいる書き手を通して、元々の書き手でいらっしゃる神の御意志が現れるように翻訳されなければならない。
2. 私は聖書が一般の人—全ての人々—のために書かれたと信じる。神は御自身を、(私達の持つ)歴史的・文化的背景の範囲内ではっきりと私達に語りかける(ことができる)ように適応させられた。神は真実を隠されない—私達に理解を求めておられるのだ。従って聖書は、私達の今生きている時代の背景ではなく、その書かれた時代の背景を考慮して翻訳されなければならない。聖書は、最初にそれを読み聞きした人々が決して私達に伝えていないことを私達に伝えることができない。聖書は一般の人の心によって理解可能であり、人間の通常のコミュニケーションの形式と技術を利用している。
3. 私は聖書が首尾一貫したメッセージと目的を持っていると信じる。聖書には難解な、あるいは逆説的な文章はみられないが、それ自体は矛盾していない。従って、聖書を最もよく解釈するのは聖書自体なのだ。
4. 私は聖書の各文章(預言を含む)が、神の啓示を受けた原著者の意志に基づく一つの、そして唯一の意味を持っていると信じる。私達は決して原著者の意志をわかっているという絶対的な確信を持つことはできないが、それを示す多くの事柄を例示することはできる:
 - a. 聖書のメッセージを表現するために選ばれたジャンル(文学様式)
 - b. 聖書の記述から明らかとなった、聖書の書かれた時代の背景または特別の事情
 - c. 各文章単位および聖書全体の文脈
 - d. メッセージ全体に関係する、文章単位の文体デザイン(概要)
 - e. メッセージ(の意味)を伝えるために用いられている特別な文法的特徴
 - f. メッセージを表現するために選ばれた言葉

g. 並列段落

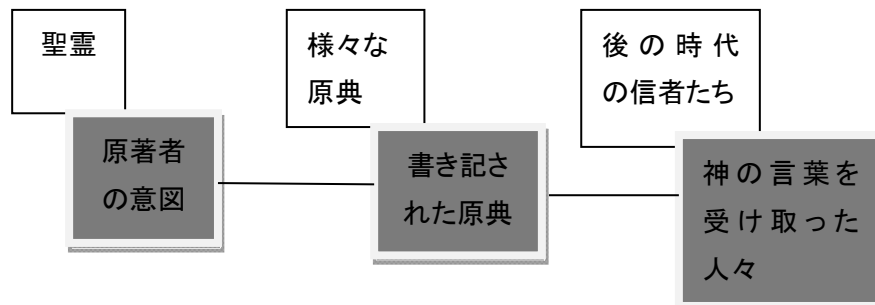
これらの分野の各々の研究が私達の文章研究の目的となっている。有意義な聖書の読み方についての方法論を説明する前に、かなり多くの解釈の逸脱の原因となっていて、その結果避けるべきだといえる、今日用いられているいくつかの不適切な方法について述べよう。

1. 聖書の各書の文脈を無視して、各文、節、あるいは語でさえも、真実ではない、原著者の意志とは無関係な内容の文あるいはより長い文を書くために用いること。これはしばしば「文脈偽装」と呼ばれる。
2. 聖書の各書の歴史的背景を、原典からの裏付けがほとんどまたは全くない、推定上の歴史的背景に置き換えて無視すること。
3. 聖書の各書の歴史的背景を無視して、主に現代のクリスチャン達の書いた(読者の)地元の新聞の朝刊を読むときと同じように聖書を読むこと。
4. 神の言葉を最初に聞いた人々および原著者の意志とは全く無関係な哲学的あるいは神学的メッセージとして原典を寓話(寓意)[訳者注: たとえ話]的に解釈して、聖書の各書の歴史的背景を無視すること。
5. 原典のメッセージを、原著者の目的と語られたメッセージとは無関係な、(読者)自身の神学体系、大切にしている教義、あるいは現世的な内容のものに置き換えて無視すること。この現象はしばしば、話し手が自身の権威を示す目的で、聖書を読み始めた後に起こる。これはしばしば「読者応答」(「文脈が私に示す意味」)的解釈と呼ばれる。

人間の書いた文章には少なくとも3つの関連する構成要素がある:



過去には、様々な読解技術が3つの構成要素の1つに集中していた。しかし、聖書特有の啓示を真に言い表すためには、(上記の)図を修正するほうがより適切だろう。



事実(これらの)3つの構成要素は解釈のプロセスに含まなければならない。立証の目的のために、私の解釈においてははじめの2つの構成要素、つまり原著者の意図と原典に注目する。私

はおそらく(今後もずっと)今までに見てきた悪習、つまり(1)原典を寓話(寓意)的あるいは精神的な意味に解釈すること、そして(2)「読者応答」(「文脈が私に示す意味」)的解釈、に反応していただく。悪習は(解釈の)各段階で起こる可能性がある。私達は自身の動機、偏見、技術、そして適用についていつも確認していかなければならない。しかし、もし解釈に範囲や制限や基準がないなら、私達はどのようにそれらを確認すればよいだろうか。ここに、可能な正しい解釈の範囲を制限するいくつかの基準を私に与えてくれる、原著者の意図と原典の文構造がある。

これらの不適切な読解技術に注目した上で、どのようにすれば、ある程度(そうする)根拠があり一貫性を持った、聖書の有意義な読み方と正しい解釈の仕方ができるだろうか。

聖書を有意義に読むことのできる方法

この点に関して、私は特定のジャンル(文章の種類)を解釈する独特の技術ではなく、聖書の原典の全てのタイプに対して有効な、一般的な聖書解釈の原則について述べたいと思う。ジャンルに特化した(聖書の)読み方を解説した本としては、Zondervan から出版された、Gordon Fee と Douglas Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* が良い。

私の方法論は主に、4つの個人的な読書のサイクルを通して聖霊に聖書を啓蒙化していただいている読者を対象としている。この方法論では聖霊、聖書の原典、そして読者が第一に重要であり、これらは二の次にはされない。また、この方法論は読者が過度に注釈者に影響されるのを防いでいる。私はこのように言われているのをよく聞いている:「聖書は注釈書に多くの光を投げかける。」この言葉は学習参考書(訳者注:ここでは注釈書)をけなすつもりで言われるコメントではなく、むしろそれら(注釈書)を適切なタイミングで用いてほしいという切実な願いをこめたコメントである。

私達は自分達の行う原典自体の解釈について裏付けができなければならない。6つの分野が最低限度それ(原典自体の解釈)を立証している:

- (1) 歴史的背景
- (2) 文脈
- (3) 文法的構造(統語法)
- (4) 現代語(で)の用法
- (5) 関連の並列する文章
- (6) ジャンル

私達は自分達の行う解釈について理由と論理とを述べ、そして説明できる必要がある。聖書は私達にとって信仰と実践の唯一の源である。悲しいことに、クリスチャンはしばしば、聖書の教えあるいは主張に同意しない。

4つの読書のサイクルは以下に示す解釈上の洞察(見識)を与えることを意図している:

- (1) 第1の読書サイクル

(a) その(聖書の)書をまず一通り読みなさい。そしてその書を他の訳、できれば他の翻訳理論に基づいた訳による本で再び読みなさい。

(i) 逐語訳(NKJV、NASB、NRSV)

(ii) dynamic equivalent(TEV、NJB)

(iii) 言い換え(リビングバイブル、拡大版聖書)

(b) その書全体の(書かれた)主な目的を探求しなさい。その書のテーマを明らかにしなさい。

(c) [可能であれば]その書全体の主な目的つまりテーマをはっきりと表現している文章単位、章、段落、あるいは文を抜粋しなさい。

(d) その書の主な文学上のジャンル(類型)を明らかにしなさい。

(i) 旧約聖書

a) ヘブル語の物語

b) ヘブル語の詩(知恵の文学、詩篇)

c) ヘブル語の預言(散文、詩)

d) 法典

(ii) 新約聖書

a) 物語(福音書、使徒行伝)

b) 寓話[たとえ話](福音書)

c) 書簡

d) 黙示文学

(2) 第2の読書のサイクル

(a) その書全体を再び読み、主なトピックつまり主題を明らかにしなさい。

(b) 主なトピックを要約し、その内容を簡単に短く述べなさい。

(c) その書全体の(書かれた)主な目的についての(あなたの)コメントと大体の要約を学習参考書を用いて確認しなさい。

(3) 第3の読書のサイクル

(a) その書全体を再び読み、その聖書の書自体から歴史的背景と書かれた特殊な状況を明らかにしなさい。

(b) その聖書の書に言及されている歴史的な事柄を列記しなさい。

(i) 著者

(ii) 日付

(iii) 神の言葉を受け取る人々

(iv) その聖書の書が書かれた特別な理由

(v) 聖書のその書が書かれた目的に関連する文化的背景

(vi) 歴史上の人々と出来事についての参考文献

(c)あなたが解釈しようとしている聖書のその書の部分の(内容の理解の)ために、歴史的背景と書かれた特殊な状況についてあなたが要約したもの[(a)で行った]を段落レベルまで拡大させなさい。文章単位を常に明らかにし要約しなさい。これはいくつかの章あるいは段落の形にしなさい。これはあなたが原著者の論理と文章デザインに従うことを可能にする。

(d)要約した歴史的背景を学習参考書を用いて確認しなさい。

(4)第4の読書のサイクル

(a)その特別な文章単位の箇所をいくつかの訳で再び読みなさい。

(b)文あるいは文法の構造を探しなさい。

(i)反復聖句

(ii)反復される文法構造

(iii)互いに対照的な概念たち

(c)以下に示す事柄を列記しなさい。

(i)重要な用語

(ii)見慣れない用語

(iii)重要な文法構造

(iv)特に難しい単語、節、そして文

(d)関連のある並列文を探しなさい。

(i)以下に示す文献を用いて、最も明確に(聖書のその書の)主題を表している文を探しなさい。

a)「体系的神学」の本

b)参照聖書

c)コンコーダンス

(ii)主題の中で、ありえる逆説的な対を探しなさい。聖書の真実の多くは論理的な対に表れている。というのは、教派間の衝突の多くが聖書的な(訳者注: 聖書の解釈者間の)緊張に伴う原典の原文偽装に由来するからだ。聖書の全ての書は神の啓示によって書かれたものなので、私達は解釈において霊的なバランスを保つために神からの完全なメッセージを聖書の中に探し出さなければならない。

(iii)同じ書、同じ著者、あるいは同じジャンルの中に並列文を探しなさい。

聖書はそれ自身の最良の解釈者である。なぜなら、聖書は一人の著者、つまり聖霊によって書かれているからである。

(e)歴史的背景と聖書のその書が書かれた特殊な状況を学習参考書(以下に示すもの)を用いて確認しなさい。

(i)スタディバイブル

- (ii) 聖書百科事典、聖書ハンドブック、聖書辞典
- (iii) 聖書入門書
- (iv) 聖書注解書(この点においてあなたの学習では、過去あるいは現在のあなたの所属する信仰共同体[行っている教会やクリスチャンの仲間・友人のグループなど]に手助けや指導を頼みなさい)

応用

この点について、(今までの聖書学習の)応用に話題を移す。今までは聖書原典をその書かれた状況に応じて理解することに時間をかけてきたので、次にそれを生活そして文化に応用していかなければならない。私は(この聖書学習の)聖書的意義を「聖書の原著者が自分の生きた時代の人々に語ったことを理解してその真実を私達の生きる時代に応用すること」と定義する。

応用は原著者の意図の時間的・論理的解釈の後に行なわれなければならない。私達は、聖書のみことばがその書かれた時代の人々に語ったことが何かを知るまでは、それを自分達の生きる時代に応用することはできないのだ。聖書のみことばは、それが決して意味していない意味を持ってはいないのだ。

(第3の読書のサイクルにおいて)あなたがまとめた詳しい要約はあなたのガイドとなってくれるだろう。応用は単語レベルではなく段落レベルで行なわれるべきである。単語は文脈中でのみ意味を持ち、節は文脈中でのみ意味を持ち、文は文脈中でのみ意味を持つ。解釈のプロセスに関わっている、神の啓示を受けた人だけが原著者なのだ。私達はただ、聖霊の啓蒙によって彼の導きに従っているだけである。しかし啓蒙は啓示ではない。「…と主が言われた」と言うためには、私達は原著者の意図を忠実に守らなければならない。応用は、聖書全体の書かれた意図、特定の文章単位、そして段落レベルの(原著者の)考えの発展に特に関係するものでなければならない。

私達の生きる時代の問題を聖書に解釈させてはいけない: 聖書に語らせるのだ! このことで私達は原典から原則を導きだすことを求められるだろう。もし原典が原則を裏付けているならこれは正しいことである。(だが)不幸にも多くの場合、その原則は原典の(はっきり述べている)原則ではなく、「私達の(正しいと思っている)」原則なのだ。

聖書を応用するときには、(預言の中の言葉は別として)一つの、そして唯一の意味が特定の聖書原典について有効であることを覚えておくことが大切である。その意味は原著者が自分の生きた時代の人々に危機感あるいは必要を感じて語った意図と関連がある。この一つの意味から多方面への応用が可能である。それらの応用は神の言葉を受け取る人々の必要に基づくものであろうが、しかしそれは原著者の(聖書のみことばを解釈して確信した)意味と関連がなければならない。

解釈の霊的側面

今まで私は解釈と応用に関わる論理的プロセスについて述べてきた。ここでは私は解釈の霊的側面について簡単に述べることにする。以下に示すチェックリストはとても私の役に立っている:

1. 聖霊の助けを求めて祈りなさい(I コリント 1: 26-2: 16 を参照)。

2. (自分にも他者にも)分かっている罪からの個人的赦しと清めを求めて祈りなさい(Iヨハネ 1:9 を参照)
3. 神を知りたいという、より大きな願いのために祈りなさい(詩篇 19: 7-14、42: 1 以下、119: 1 以下を参照)
4. どんな新しい見識もすぐにあなた自身の生活に応用しなさい。
5. 謙虚で教えられやすい者でありなさい。

論理的プロセスと聖霊の導きとの間でバランスを保つことはとても難しい。以下に示す引用文は私が両者のバランスを保つのを助けてくれている:

1. James W. Sire 著 *Scripture Twisting* の 17-18 ページより:

「啓蒙は霊的に選ばれた者の心にだけでなく、神の人々の心にも来る。聖書的キリスト教にはカリスマ的指導者(権威者)階級も、啓蒙家も、(聖書のみことばを)全て正しく解釈できる人々もない。だから、聖霊は特別な知恵の賜物と知識と霊的識別力を下さる一方で、これらの賜物を持つクリスチャンに御自分のお言葉を単に権威的に解釈させようとはなさらない。権威あるものとして存在する聖書を参照するだけではなく、神が特別な能力を与えられた人々にも意見を聞くことによって学び、判断し、そして見分ける(認識あるいは識別する)ことは神の人々一人一人の責任である。要約すると、私が聖書全体について行っている仮定は、聖書は全ての人に対する神の真の啓示であり、その語る全ての事柄は私達にとって最高の権威あることであり、全体的に見て謎はなく、あらゆる文化圏の一般の人々に十分に理解されるべきものである、ということである。」

2. Bernard Ramm 著 *Protestant Biblical Interpretation* の 75 ページにあるキルケゴールについての記述:

キルケゴールによれば、聖書の文法的、辞書的、歴史的研究は聖書を正しく(有意義に)読むための準備として必要であった。「聖書を**神の言葉**として読むためには、心で、口に出して、わくわくして、(神への)熱烈な期待をもって、そして神と会話しながら読まなければならない。ぼんやりして、注意を払わず、学者や専門家と同じように聖書を読むことは、聖書を神の言葉として読むことにはならない。ラブレターを読むのと同じように聖書を読めば、それが聖書を神の言葉として読むことになるのである。」

3. H. H. Rowley 著 *The Relevance of the Bible* の 19 ページより:

「完全にではなく、ただ単に知的に理解するだけでは、聖書の持つ価値の全てを自分のものとすることはできない。聖書はそのように理解されることをひどく嫌っている。なぜならそれ(単に知的に理解[するような読み方を]しないこと)が完全な理解に不可欠だからである。そうではなく、完全に理解[するような読み方を]したいのなら、霊的価値を霊的に理解できるような読み方をしなければならない。だから、霊的な理解のためには知的な注意深さ以上の何かが必要である。霊的なことは霊的に見分けられ(認識あるいは識別され)るので、聖書を学習する者には、もし科学的研究を超えて神からのより豊か

な恵みを聖書の全ての書から最大限受け取ることを目的とした研究がしたいなら、霊を受け入れようとする態度と、自分が従うべき神を見出そうとする熱意が求められる。」

緒言

1. 一般的用語の定義

- A. 神の御名
 - 1. 主 (YHWH、*Kurios*)
 - 2. 神 (*Elohim*、*Theos*)
 - 3. 人の子
 - 4. 神の子
 - 5. 救い主
- B. 原典および訳本の名
 - 1. マソラ聖書
 - 2. セプトウアギンタ
 - 3. タルガム
 - 4. ウルガタ聖書
 - 5. ペシッタ
 - 6. 死海文書
- C. 用語集(補遺1を見よ)
- D. 聖書批評(補遺2を見よ)
- E. 解釈に影響するギリシャ語の文法用語(補遺3を見よ)

II. 紀元1世紀の地中海世界の簡単な地図

- A. 河川・湖沼・海
 - 1. 地中海
 - 2. 黒海
 - 3. アドリア海
 - 4. エーゲ海
 - 5. ナイル川
 - 6. ヨルダン川
- B. 新約聖書に登場する国
 - 1. エジプト
 - 2. ユデア
 - 3. サマリア
 - 4. デカポリス
 - 5. ガリラヤ
 - 6. シリア

7. フェニキア
 8. シリシヤ
 9. カツパドキア
 10. ガラテヤ
 11. パンフィリア
 12. リシヤ
 13. アジヤ
 14. ベタニア
 15. ポントウス
 16. アカイア
 17. マケドニア
 18. イリリクム
 19. イタリア
- C. 新約聖書に登場する島
1. キプロス
 2. クレタ
 3. パトモス
 4. シチリア
 5. マルタ
- D. 主要都市
1. アレキサンドリア
 2. メンフィス
 3. エルサレム
 4. アンテオケ
 5. タルソス
 6. エフェソス
 7. ペルガモン
 8. コリント
 9. アテネ
 10. ローマ
 11. テサロニケ

マタイの福音書への導入

I. 緒言

- A. ルネッサンスおよび宗教改革の時代まで、マタイの福音書は最初に書かれた福音書と考えられていた(ローマカトリック教会は今でもこの福音書をそのようなものと考えている)。
- B. マタイの福音書は紀元1・2世紀の教会において教義問答集(教義要覧)と初期の礼拝式文の中に最も頻繁に書き写され、引用され、そして用いられた福音書であった。
- C. ウイリアム・バークレーは自著 *The First Three Gospels* の19ページでこのように述べている「マタイの福音書について述べるとすれば、我々はこの書を信徒にとって最も重要な信仰書と呼んでよいだろう。というのは、この書ほど詳細かつ体系的にイエスの(この世での)御生涯とお教えが記されている書は他に見られないからである」。

このような理由でマタイの福音書はイエスのお教えを主題としている。この書は、新しい回心者(ユダヤ人と異邦人)に、キリストでいらっしゃるナザレのイエスの御生涯と御言葉について教えるために用いられた。
- D. この書は古い契約と新しい契約を、そしてユダヤ人信徒と異邦人信徒を論理的に関連づけている。この書は、*kerygma* と呼ばれた、使徒行伝についての初期の説教で用いられたのと同様に、旧約聖書を神のなされた約束とその成就とを記した書として用いた。旧約聖書は50回以上引用され、それ以上の箇所でも暗示されている。また、YHWHを指して用いられている称号とそれに類似した呼び名の多くがイエスに用いられている。
- E. 従って、マタイによる福音書の書かれた目的は伝道と弟子訓練であり、それらは大宣教命令(28: 19-20)の2つの要旨であった。
 - 1. ユダヤ人にイエスの御生涯と御言葉について教え、回心を助ける。
 - 2. ユダヤ人信徒と異邦人信徒を弟子訓練し、信徒としてどのように生きるべきかを教える。

II. 著者

- A. ギリシャ語の新約聖書の最古の写本(紀元3~5世紀)では「マタイによる」と指定されているが、この書自体は著者名が知られていない。
- B. 初期教会では、以前には取税人であったが(マタイ9: 9と10: 7を参照)後にイエスの弟子となったマタイ(レビという名でも知られていた。マルコ2: 14とルカ5: 27と29節を参照)がこの福音書を書いたということが不変の伝統とされていた。
- C. マタイによる福音書とマルコによる福音書とルカによる福音書は驚くほどに似ている(つまり共観[同一の視点から書かれたという意味]福音書である)。
 - 1. これらの福音書にはしばしば、マソラ聖書にもセプトウアギンタにも見られない形式での旧約聖書の引用が共通して見られる。

2. これらの福音書ではしばしば、見慣れない文法構造で、時にはあまり使われることのないギリシャ語の用語を用いてイエスが引用されている。
 3. これらの福音書ではしばしば、全く同じギリシャ語の用語を含む成句や文が用いられている。
 4. 明らかに文章技法上の借用が見られる。
- D. マタイによる福音書とマルコによる福音書とルカによる福音書(共観福音書群)の間の関係に関連するいくつかの理論が発展してきた。
1. 初期教会では、以前には取税人であったが後にイエスの弟子となったマタイ(レビ)がこの福音書を書いたということが不変の伝統とされていた。ルネッサンスおよび宗教改革の時代までは、使徒マタイはこの福音書の著者として普遍的に認められていた。
 2. (紀元)1776年頃に A. E. Lessing(後に 1818年に Gieseler)は共観(同一の視点から書かれたという意味)福音書群の執筆過程における口述段階を理論化した。彼は、それらの福音書は全て、著者らが自身の語る対象とする聴衆に合わせて使い分けた、すでに定型化していた口述の様式に依存していると主張した。
 - a. マタイの場合 聴衆はユダヤ人
 - b. マルコの場合 聴衆はローマ人
 - c. ルカの場合 聴衆は異邦人

各々はそれぞれのキリスト教の中心地に関連していた。

 - a. マタイの場合 シリアのアンテオケ
 - b. マルコの場合 イタリアのローマ
 - c. ルカの場合 パレスティナの臨海シーザリア
 - d. ヨハネの場合 小アジアのエフェソス
 3. 19世紀初頭に J. J. Griesbach は、マタイとルカが各々全く個別にイエスの御生涯について記し、マルコはこれら2つの記述の折衷的な記述を試みるために短い福音書を書いたという理論を発表した。
 4. 20世紀初頭に H. J. Holtzmann は、最初に福音書を書いたのはマルコであり、マタイとルカは彼の福音書の文章構造を用いて、Q(「源」を意味するドイツ語の用語 *quelle*) と呼ばれる、イエスの御言葉を付け加えた独自の福音書を書いたという理論を発表した。この理論は「二原典」理論と呼ばれた(Frederick Schleiermacher も 1832年にこの理論を支持している)。
 5. 後に B. H. Streeter は、「ルカによる福音書の雛型」とマルコによる福音書と Q を仮定した、「四原典」理論と呼ばれる修正「二原典」理論を発表した。
 6. 共観福音書群の構成に関する上述の理論は単なる推測である。「Q」原典と「ルカによる福音書の雛型」であることがはっきりしている、歴史的で現存している原典はない。現代の研究者は福音書群がどのように書かれたのかも誰が書いたのかさえも知ら

ない(旧約聖書の律法と使徒以前の預言者達についても同じことが言える)。しかし、このような情報の欠如は、福音書群が神の靈感による書であることと、歴史書であると同時に信仰書であることについての信憑性に関する教会の見解には影響しない。

7. 共観福音書群の間には文章構造と言葉遣いに明らかな類似性があるが、はっきりした相違点も数多く見られる。相違点は(使徒が)目撃したことに関する記述に頻繁に見られる。初期教会は使徒がイエスの御生涯において目撃したことに関するこれらの3通りの記述の相違点を気にすることはなかった。

その明らかな相違点は、使徒が語る対象とする聴衆や、著者である使徒の用いる文体、あるいは執筆に用いられる様々な言語(アラム語とギリシャ語)によって説明されうる。神の啓示を受けたこれらの著者や編集者にはイエスの御生涯における出来事やお教えを選択・編集・適用・要約する自由があったことは言うておかなければならないだろう(Fee と Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の 113~148 ページを参照)。

- E. 初期教会には、Hierapolis の主教(司教)Papias 以来続く伝統があり(紀元 130 年)、それは Eusebius の *Historical Ecclesiasticus* の第3巻 39 章 16 節の記述によれば、マタイが自身の福音書をアラム語で書いたというものである。しかし現代の研究者は以下に示す理由からこの伝統を拒絶してきた。

1. マタイの福音書のギリシャ語訳にはアラム語に見られる特徴が訳出に反映されていない。
2. ギリシャ語の言葉遊びが見られる(6: 16、21: 41、24: 30 を参照)。
3. 引用されている旧約聖書の大半はヘブル語のマソラ聖書からではなくセプトウアギンタ(LXX)からの引用である。

10: 3 はマタイの福音書の著者を特定するうえでの手がかりとなるだろう。その節では彼の名前の後に「徴税人(取税人)」が付け加えられている。このような自己卑下的な呼称はマルコの福音書には見られない。マタイも新約聖書や初期教会ではあまりよく知られていない人物であった。彼の名前とこの使徒福音書に関してあまりにも多くの伝統が生まれているのはなぜだろうか。

III. 書かれた年代

- A. 多くの意味で福音書の書かれた年代は共観福音書の持っている問題と関連がある。どの福音書が最初に書かれ、そして誰が誰の福音書を借用したのか。
 1. Eusebius は *Historical Ecclesiasticus* の第3巻 39 章 15 節で、マタイはマルコの福音書の文章構造を用いたと述べた。
 2. しかし、アウグスティヌスはマルコをマタイの「同志」と呼び、マタイの福音書を簡略化した人と呼んだ。
- B. 福音書が書かれた可能性のある年代の特定を試みるうえで最良と思われる考え方

1. 紀元 96 年あるいは 115 年以前に書かれたに違いない。
 - a. ローマの Clement は紀元 96 年にコリント人に宛てた手紙の中でマタイの福音書を暗示した。
 - b. アンテオケの主教(司教) Ignatius は紀元 110~115 年に書いた自身の書簡 *To the Smyrneans* の 1: 1 でマタイ 3: 15 を引用した。
2. より難しい質問はどのくらい前(昔)にこの福音書が書かれたかということである。
 - a. 明らかに、紀元 30 年代中期と記録されている出来事の後である。
 - b. それが必要とされ、書かれて回覧されなければならなかったであろう時期
 - c. 24 章を紀元 70 年のエルサレム破壊と関連づけているものは何か。
マタイの福音書には生贄の儀式がその当時まだ行なわれていたことを暗示する箇所がある(5: 23-24、12: 5-7、17: 24-27、26: 60-61)。このことは、紀元 70 年以前にこの福音書が書かれたことを意味している。
 - d. もしマタイの福音書とマルコの福音書がパウロの伝道活動の時期(紀元 48~68 年)に書かれていたなら、なぜパウロはそれらの福音書について全く述べないのだろうか。Irenaeus は、マタイはペテロとパウロがローマにいた頃に自身の福音書を書いたという、Eusebius の *Historical Ecclesiasticus* の第 5 巻 8 章 2 節を引用している。ペテロとパウロはどちらも、紀元 68 年に終わるローマ皇帝ネロの治世に殺された。
 - e. 現代の研究者はマタイの福音書の書かれた年代を最も古くて紀元 50 年であると推測している。
- C. 研究者の多くは 4 つの福音書が、伝統的に認められている著者達よりもキリスト教の中心地と関係があると信じている。マタイの福音書はシリアのアンテオケのユダヤ人および異邦人に関する問題をきっかけとしてその地で紀元 60 年頃に、少なくとも紀元 70 年以前に書かれたようだ。

IV. 対象

- A. この福音書の真の著者と書かれた年代がわかっていないのと同様に、対象となる読者も明らかになっていない。ユダヤ人信徒および異邦人信徒が最も可能性があると考えたほうがよさそうだ。このように考えると、対象となる読者は紀元 1 世紀のシリアのアンテオケの教会であるという見解が最も確実といえる。
- B. Origen は、この福音書がユダヤ人信徒のために書かれたという、Eusebius の *Historical Ecclesiasticus* の第 6 巻 25 章 4 節を引用している。

V. 文章構造の概容

- A. この福音書はどのような文章構造を持っているのだろうか。この福音書全体の文章構造

を調べると、神の啓示を受けた原著者の意図を最もよく知ることができる。

- B. 研究者達はいくつかの文章構造を提唱している。
1. イエスの地理的移動
 - a. ガリラヤ湖
 - b. ガリラヤ湖の北
 - c. ペレアとユデア(エルサレムに行く途中)
 - d. エルサレムで
 2. マタイの5つの論理単位。それらは反復聖句「そしてイエスがこれらのことをなし終えられると」(7: 28、11: 1、13: 53、19: 1、26: 1を参照)によって見分けることができる。これら5つの論理単位の各々がモーセ5書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)の一つと類似していることから、研究者の多くはこれらを、イエスを「新しいモーセ」として描写するためのマタイの試みとみなしている。
 - a. 物語の部分と論説文の部分とが交互に現れる交差状構造
 - b. 反復聖句「イエスが... し始められたときから」(4: 17、16: 21を参照)によって見分けられ、この福音書を3つの部分(1: 1~4: 16、4: 17~16: 20、16: 21~28: 29)に分ける神学的かつ伝記的文章
 - c. 重要語句「成就」(1: 22、2: 15と17節と23節、4: 14、8: 17、12: 17、13: 35、21: 4、27: 9、27: 35を参照)を用いることによってマタイが旧約聖書の預言的文章を強調したこと
- C. 「福音書群」は独特の文学ジャンルである。それらは伝記的ではない。それらは歴史物語ではない。それらは選択神学的で高次構造を持つ文学のタイプである。福音書の著者は各々イエスの御生涯に起こった出来事とお教えからいくつかを選択し、自身が語る対象とする聴衆にイエスの独自性を示した。福音書群は伝道のための冊子である。

VI. 用語と聖句の早見リスト

1. メシア、1: 1
2. 処女、1: 23 と 25 節
3. インマヌエル、1: 23
4. 東方の三博士、2: 1
5. ナザレの人、2: 23
6. 悔い改める、3: 2
7. (罪を)告白する、3: 6
8. パリサイ人、3: 7
9. サドカイ人、3: 7
10. 「その方の履物を脱がせて差し上げる」、3: 11

11. 「これはわたしの愛する子」、3: 17
12. 「神殿の小尖塔」、4: 5
13. 「律法や預言者」、5: 17
14. 「離縁状」、5: 31
15. 「神の足台」、5: 35
16. シナゴーク、6: 2
17. 「狭い門」、7: 13
18. 律法学者、8: 19
19. 「悪霊に取りつかれた者」、8: 28
20. 「同席する」、9: 10
21. ぶどう酒用の革袋、9: 17
22. 笛を吹く者たち、9: 23
23. 使徒、10: 2
24. くびき、11: 29 と 30 節
25. 「この世でも後の世でも」、12: 32
26. たとえ話、13: 3
27. 有毒な雑草、13: 25
28. 「昔の人の言い伝え」、15: 2
29. ハデス(陰府[よみ])、16: 18
30. 姿が変わった、17: 2
31. てんかん、17: 15
32. 「2ドラクマ税(神殿税)」、17: 24
33. デナリオン、20: 2 と 9 節
34. ホザナ、21: 9
35. 「産みの苦しみ」、24: 8
36. 「憎むべき破壊者」、24: 15
37. タラント、25: 20
38. 「最高法院」、26: 59
39. 「天の雲に乗って来る」、26: 64
40. 「血の畑」、27: 8
41. 総督官邸、27: 27
42. 「ゴルゴタ」、27: 33
43. 「しかし疑う者もいた」、28: 17

Ⅶ. 人物早見リスト

1. ゼルバベル、1: 12
2. ヘロデ、2: 13
3. ダビデの子、9: 27
4. 人の子、10: 23
5. わたしの僕[しもべ]、12: 18
6. ベルゼブル、12: 24
7. ヘロディア、14: 6
8. シモン・バルヨナ、16: 17
9. 祭司長や長老たち、21: 23
10. ヘロデ派の人々、22: 16
11. ラビ(先生)、23: 7
12. カイアファ、26: 3
13. ピラト、27: 2
14. バラバ、27: 16
15. マグダラの MARIA、27: 56
16. アリマタヤのヨセフ、27: 57

VIII. 登場する地名の地図上の位置

1. ベツレヘム、2: 1
2. ユデアの荒れ野、3: 1
3. ガリラヤ、3: 13
4. ナザレ、4: 13
5. カファルナウム、4: 13
6. ソドムとゴモラ、10: 15
7. ベトサイダ、11: 21
8. シドン、15: 21
9. フィリポ・カイザリア、16: 13
10. オリーブ山、21: 2
11. ゲッセマネ、26: 36

IX. ディスカッションのための質問

1. マタイの福音書とルカの福音書において家系図が異なるのはなぜか。
2. タマルとラハブとルツの共通点は何か。
3. エリヤと洗礼者ヨハネの共通点は何か。
4. 「天の御国」とは何か。

5. サタンが荒野でイエスを誘惑するためにしようとしたことは正確に言うとか。
6. 5: 17 をあなたの言葉で説明しなさい。
7. 5: 48 をあなたの言葉で説明しなさい。
8. 7: 6 をあなたの言葉で説明しなさい。
9. 8 章 5～13 節はなぜ特異で重要なのか。
10. 10: 38 をあなたの言葉で説明しなさい。
11. 10: 19 をあなたの言葉で説明しなさい。
12. なぜイエスは安息日に癒しの業を行なわれたのか。
13. 聖霊への冒涇とは何か(12: 31-32)
14. 種蒔き人のたとえ話の中で種蒔きはどのように実りと関連づけられているか。
15. 13: 44 をあなたの言葉で説明しなさい。
16. 15: 11 をあなたの言葉で説明しなさい。
17. 16: 20 をあなたの言葉で説明しなさい。
18. 18: 8 をあなたの言葉で説明しなさい。
19. 信徒には皆守護天使がいるのか。
20. 神の御子でいらっしゃるイエスと関連づけて 19: 17 を説明しなさい。
21. 21: 18-19 をあなたの言葉で説明しなさい。
22. 23 章でイエスはなぜ律法学者とパリサイ人に厳しい御言葉をかけられたのか。
23. 24: 36 はなぜ重要なのか。

マルコの福音書への導入

I. 緒言

- A. 古代の教会はマルコの福音書を「リーダースダイジェスト」版(つまり縮約福音書)とみなしていたので、この福音書を書き写したり、研究したり、あるいはマタイの福音書やルカの福音書を参照しながらこの福音書について教えることに概して偏見を持っていた。後にアウグスティヌスはこの見解を特に主張した。
- B. ギリシャの教会の教父達や紀元2世紀の護教論(護教学)者達はあまり頻繁にはマルコの福音書を引用しなかった。
- C. 現代では歴史や文法の観点からの聖書解釈が盛んであるので、マルコの福音書は最初に書かれた福音書とみなされることによって新たな重要性を帯びてきている。マタイの福音書やルカの福音書はこの福音書を、イエスの(この世での)御生涯と(御存在の)重要性を記した書として用いている。従ってマルコの福音書はイエスの(この世での)御生涯の歴史上初の公的な書として教会における基本書となっている。

II. ジャンル

- A. 福音書群は現代でいう伝記や歴史書の類ではない。それらは、様々な聴衆にイエスを紹介し彼らをイエスへの信仰に導くために用いられる、選びの神学の書である。それらは伝道目的で書かれた、イエスの(この世での)御生涯の「良き知らせ」的な記録である。
- B. マルコの福音書には4つの相異なる歴史背景あるいは神学的意図が記されている。
 - 1. イエスの(この世での)御生涯とお教え
 - 2. ペテロの生涯と働き(伝道活動)
 - 3. 初期教会の必要としていたこと
 - 4. ヨハネ・マルコの伝道の目的(意図)
- C. 福音書群は近東地域やギリシャ・ローマ世界の文学の中では独特である。神の啓示を受けた著者達は聖霊のお導きによって、イエスの御性質あるいは御意図が明らかに現れているお教えと御業を選んだ。

彼らは様々な方法でこれらのイエスの御言葉と御業を編集した。例えばマタイの福音書にある山上の説教(マタイ5~7章)はルカの福音書にある平原での説教と対比されている。このことにより、マタイがイエスのお教えの全てを一つの長い説教の中に集約しようとしたこと、そしてルカがこれらと同じお教えを自身の福音書の中で分散させて記していることが明らかとなっている。

このことは福音書の著者達の、イエスのお教えを収集・編集する能力だけでなく自身の神学的意図にお教えを適用する能力をも暗示している(FeeとStuart共著の*How to Read The Bible For All Its Worth*の113~134ページを見よ)。福音書を読むときにはそ

の著者が示そうとしている神学的要点を問い続けなければならない。この特別な出来事と奇跡と教訓はなぜここに記されているのか。

- D. マルコの福音書は、地中海世界の人々の第二言語であったコイネギリシャ語で書かれた書の良い例である。マルコの母語は、イエスと紀元1世紀の全てのユダヤ人の母語がそうであったようにアラム語であった。このセム語的な雰囲気はマルコの福音書の特徴である。

Ⅲ. 真の著者

- A. ヨハネ・マルコは使徒ペテロとともにこの福音書を記した人物と伝統的にいわれてきた。しかし、全ての福音書がそうであるように、執筆活動自体は別の人が行っている。
- B. ペテロが目撃して記していることのもうひとつの証拠となっているのは、ペテロが個人的に関与した3つの特別な出来事をマルコが記していないという事実である。
1. ペテロが水の上を歩いたこと(マタイ 14: 28-33 を参照)
 2. ペテロがフィリポ・カイザリアで十二使徒の信仰の代弁者となったこと(マタイ 16 章 13-20 節を参照)。マルコの福音書では 8: 27-30 に同じ内容の記述が見られるが、そこでは「この岩の上に」と「天国の鍵」を含む文は省略されている。
 3. ペテロが自身とイエスの納める分の神殿税を調達したこと(マタイ 17: 24-27 を参照) 多分ペテロは自身の謙虚さのゆえに自身の説教の中でこれらの出来事を強調しなかったのだろう。
- C. 初期教会の伝統
1. Hierapolis の主教(司教)Papias は紀元 130 年頃に *Interpretation of the Lord's Sayings* を書いた。Eusebius(紀元 275-339)は自著 *Ecclesiastical History* の第3巻 39 章 15 節でその書を引用している。彼(Papias)は、マルコはペテロのイエスについての回想を正確だが非時系列的に記録することによってペテロを解釈した人物であると主張している。明らかにマルコはペテロの説教(複数)の中から一部を取りあげ選択し、自らの福音書に組み入れたのだ。Papias はこの情報を、使徒ヨハネであると思われる「長老」から得たと主張している。
 2. 紀元 180 年頃に書かれた、マルコの福音書への反マルシオン(正典)的序文ではペテロがマルコの福音書におけるイエスの御業の目撃者とされている。その書にはまた、マルコがペテロの死後にイタリアから(伝統的には紀元 65 年頃にローマから)この福音書を書き送ったと記されている。
 3. Irenaeus は紀元 180 年頃に書いた自著の中で、ヨハネ・マルコがペテロの回想をその死後に解釈し収集した人物であると言っている(*Contra Haereses* 第3巻 39 章 15 節を参照)。
 4. 紀元 200 年頃にローマから書き送られたムラトリー断片(正典)は原文が未完である

が、ヨハネ・マルコがペテロの説教を記録したことを認めているようだ。

5. Walter Vessel は自著 *The Expositor's Bible Commentary* 第8巻 606 ページの中で、上述の初期教会の伝統(複数)がそれぞれ地理的に離れた教会中心地に由来するという興味深いことを述べている。

- a. 小アジア出身の Papias
- b. いずれもローマから書き送られた反マルシオンの序文とムラトリー断片
- c. フランスのリヨン出身の Irenaeus (*Adv. Haer.* 第3巻 39 章 15 節を参照)。

Irenaeus の伝統は北アフリカ出身の Tertullian (*Adv. Marc.* 4 章 5 節を参照) やエジプトのアレキサンドリア出身の Clement (Eusebius が自著 *Ecclesiastical History* の第2巻 15 章 1~2 節と第3巻 24 章 5~8 節と第6巻 14 章 6~7 節でその書を引用している *Hypotyposeis* の6章を参照) の著書にも見られる。このように教会中心地が地理的に離れていることは、初期のキリスト教世界において Irenaeus の伝統が広く受け入れられていたことに信頼性を持たせている。

D. 私達はヨハネ・マルコについて何を知っているか

1. 彼の母は自宅を教会とした(多分主の晩餐の夜に; マルコ 14: 14-15、使徒行伝 1 章 13~14 節と 12: 12 を参照)エルサレムでは名の知られた信徒であった。彼は多分、ゲッセマネから逃亡した無名の男であろう(14: 51-52)。
2. 彼はおじのバルナバ(コロサイ 4: 10 を参照)とパウロに伴ってエルサレムからアンテオケに戻った(使徒行伝 12: 25)。
3. 彼は第一回伝道旅行でバルナバとパウロに随行した(使徒行伝 13: 5)が、突然帰宅した(使徒行伝 13: 13)。
4. 後にバルナバは第二回伝道旅行にマルコを連れて行こうとしたが、このことがバルナバとパウロの間に深刻な不和を生んだ(使徒行伝 15: 37-40)。
5. 彼は後にパウロと再会し、パウロの友となり共に働いた(コロサイ 4: 10、II テモテ 4 章 11 節、フィレモン 24 節を参照)。
6. 多分ローマで彼はペテロの仲間となり共に働いた(I ペテロ 5: 13)
7. 紀元 95 年頃にローマから書き送られた I Clements は(*Shepherd of Hermes* と同様に)マルコについて述べている。
8. 殉教者ユスティヌスは紀元 150 年に書いた自著でマルコ 3: 17 を引用し、その聖書箇所はペテロの回想に由来すると付け加えている。
9. アレキサンドリアの Clement は紀元 150 年に書いた自著で、ペテロの説教をローマで聞いた人々が彼の説教を記録してくれるようにマルコに頼んだのだと主張している。
10. Tertullian は紀元 200 年に書いた自著 *Against Marcion* の 4 章 5 節でマルコがペテロの回想を書物としたと言っている。

11. Eusebius の *Ecclesiastical History* の第4巻 25 章によれば、Origen は紀元 230 年に書いた自著 *Commentary on Matthew* (紀元5世紀まではマルコの福音書の注解書で世に知られたものはなかった) の中で、マルコはペテロから説明を受けた通りに自らの福音書を記したと言っている。
 12. Eusebius 自身は自著 *Ecclesiastical History* の第2巻 15 章でマルコの福音書について議論し、マルコはペテロの説教(複数)を聞いた人々の要請でその説教(複数)を全ての教会において読むことができるように記録したと言っている。Eusebius はこの伝統をアレキサンドリアの Clement の著書をもとに定めている。
- E. マルコの関与は、イエスの逮捕直後にゲッセマネの園から逃亡した裸の男の記述のある 14: 51-52 から確かであるようだ。この見慣れない、全く予期しない記述はマルコの個人的体験を反映しているようだ。

IV. 書かれた年代

- A. この福音書は、明らかにペテロの説教(複数)から採られた、イエスの御生涯と御業とお教えについて目撃したことの記録およびその解釈である。それらはペテロの死後に収集および公表されたものであり、反マルシオンの序文と Irenaeus (この人もパウロの死後にそのようなコメントを付け加えている) はそのように言っている。ペテロとパウロはどちらもネロ帝(紀元 54~68 年)の治世にローマで殉教した(教会の伝統)。マルコの福音書の書かれた年代は明らかではないが、もし本当ならば紀元 60 年代の半ば頃であろう。
- B. 反マルシオンの序文と Irenaeus はペテロの死ではなくローマからの脱出(追放)について述べている。ペテロがクラウディウス帝(紀元 41~54 年)の治世にローマを訪れた(Eusebius の *Ecclesiastical History* の第2巻 14 章 6 節)という伝統による証拠(ユスティヌスと Hippolytus)がいくつかある。
- C. ルカは紀元 60 年代の初め頃にまだ獄中にいたときにパウロとともに使徒行伝を書き上げたようだ。ルカがマルコの福音書から記述を借用して自身の福音書を書いたというのが本当ならば、ルカの福音書は使徒行伝の書かれる以前、つまり紀元 60 年代の初め頃以前に書かれたに違いない。
- D. マルコの福音書の真の著者と書かれた年代はあらゆる意味でこの(あるいは他のいかなる)福音書の歴史的、神学的、そして伝道における真理に影響を与えない。著者ではなくイエスが重要人物なのだ。
- E. 福音書群の中で(紀元 95~96 年に書かれたヨハネの福音書でさえも)、古代ローマ帝国の将軍であり後に皇帝となった Titus による紀元 70 年のエルサレム破壊(マタイ24章、マルコ13章、ルカ21章を参照)について述べたりこれを暗示しているものはない。マタイの福音書とルカの福音書もユダヤ教に対するこの大いなる裁き以前に書かれたと考えてよさそうである。共観福音書群が編纂された正確な年代は(福音書間の文学的な相互関係も

含めて)現代では明らかではないと単に言うておかなければならないだろう。

V. 対象

- A. マルコは初期教会の著述家達を通じてローマとの関係があった。
1. I ペテロ 5: 13
 2. 反マルシオンの序文(イタリア)
 3. Irenaeus(ローマ。 *Adv. Haer.* 第3巻1章2節を参照)
 4. アレキサンドリアの Clement(ローマ。 Eusebius の *Historical Ecclesiasticus* の第4巻14章6~7節および第6巻14章5~7節を参照)
- B. マルコはこの福音書を書いた自身の目的を特には述べていない。いくつかの理論が提唱されてきた。
1. ローマ人向けに特別に書かれた(1: 15、10: 45 を参照)伝道用冊子(1: 1 を参照)
 - a. ユダヤ教の教義の解釈(7: 3-4、14: 12、15: 42 を参照)
 - b. アラム語の用語翻訳(3: 17、5: 41、7: 1 と 34 節、10: 46、14: 36、15: 22 と 34 節を参照)
 - c. ラテン語の用語の使用(speculator[6: 27 を参照]、sextanus[7: 4 を参照]、census [12: 14 を参照]、quadrans[12: 42 を参照]、praetorium[15: 16 を参照]、centurio [15: 39 を参照]、flagellare[15: 42 を参照])
 - d. イエスに関連する総括的用語
 - (1)パレスティナの人々に関連する総括的用語(1: 5 と 28 節と 33 節と 39 節、2: 13、4: 1、6: 33 と 39 節と 41 節と 55 節を参照)
 - (2)全ての人々に関連する総括的用語(13: 10 を参照)
 2. 紀元 64 年のローマの大火災後の迫害。ネロ帝は大火災をクリスチャンのせいにして信徒を残酷にも大量虐殺し迫害し始めた。マルコはしばしば迫害について述べている(イエスの受難[8: 31、9: 39、10: 33-34 と 45 節を参照]、イエスの弟子の受難[8 章 34~38 節、10: 21 と 35~44 節])。
 3. イエスの再来がまだ来ていないこと
 4. イエスの目撃証人、特に使徒の死
 5. 広域に分布するキリスト教会内での異端の発生
 - a. ユダヤ教徒化した信徒(ガラテヤ人)
 - b. グノーシス主義者[懷疑主義者](ヨハネの手紙第一)
 - c. a.とb.の混合集団(コロサイ人への手紙、エペソ人への手紙、II ペテロ2章)

VI. 文章構造の概容

- A. マルコの福音書はイエスの御生涯の最終週についての記録が書全体の3分の1を占め

るように構成されている。受難週の神学的意義は明らかである。

- B. 初期教会の伝統によればマルコの福音書はペテロの説教(多分ローマで)をもとに書かれたので、そのことがこの福音書にイエスの御誕生の物語の書かれていない理由となっている。マルコの福音書はペテロが成年イエスとともに経験したことの記述から始まり、メシアの御業への準備として洗礼者ヨハネの語った、悔い改めと信仰のメッセージと神学的に関連がある。

ペテロの説教では「人の子」および「神の子」の概念が用いられたに違いない。この福音書はイエスの御人格に関するペテロ自身の神学を反映している。当初イエスは良き教師であり癒し主でいらっしやったが、後にはメシアとなられたのだ。このメシアは待ち望まれた征服将軍ではなく、苦しむ召使いでいらっしやった。

- C. マルコの福音書の中の地理に関連する記述の基本的概要は他の共観福音書群(マタイの福音書とルカの福音書)から借用されている。
- a. ガリラヤでの伝道活動(1: 14~6: 13)
 - b. ガリラヤの外での伝道活動(6: 14~8: 30)
 - c. エルサレムへの伝道旅行(8: 30~10: 52)
 - d. エルサレム地区での最終週(11: 1~16: 8)
- D. マルコの福音書の文章構造は初期の使徒達の説教(使徒行伝 10: 37-43。C. H. Dodd の *New Testament Studies* の 1~11 ページを参照)の基本的パターンに倣っていると考えるべきだ。このことがもし本当なら、書物となった福音書群は口述伝統(*kerygma*)の時代の最高潮である。ユダヤ教では口頭による教えが、書物となった教典に優ると考えられていた。
- E. マルコの福音書の特徴はイエスの御生涯の目まぐるしく移り変わる記述にある。マルコの福音書にはイエスの長時間にわたるお教えの記録はなく、御生涯の出来事の記述が目まぐるしく移り変わっている(マルコは「すぐに」を繰り返し用いている)。マルコの福音書は御業によってイエスを描写している。しかし、この目まぐるしく移り変わる記述には(ペテロが)肉眼により見てきたことの生き生きとした記述がちりばめられている。

VII. 用語と聖句の早見リスト

1. 悔い改めの洗礼、1: 4
2. らくだの毛衣を着る、1: 5
3. 鳩のように、1: 10
4. 40 日間、1: 13
5. 天の御国は近づいた、1: 15
6. 会堂、1: 23
7. 冒涇、2: 7

8. 律法学者達、2: 6
9. (ワイン保存用の)革袋、2: 22
10. たとえ話、4: 2
11. イエスの服、5: 27
12. パリサイ人たちのパン種、8: 15
13. サタンよ引き下がれ、8: 33
14. イエスのお姿が変わった、9: 2
15. 地獄(ゲヘナ)、9: 47
16. 全ての国の人の祈りの家、11: 17
17. デナリオン銀貨、12: 15
18. 過越祭、14: 1
19. ナルドの香油、14: 3
20. この杯、14: 36
21. 時が来た、14: 41
22. (安息日の前日の)準備の(ための)日、15: 42
23. 週の初めの日、16: 2

VIII. 人物早見リスト

1. シモン、1: 16
2. ゼベダイ、1: 20
3. 汚れた霊、1: 23
4. レビ、2: 14
5. アビアタル、2: 26
6. カナン人、3: 18
7. ベルゼブル、3: 22
8. レギオン、5: 9
9. ヘロデ王、6: 14
10. ヘロディア、6: 17
11. シリア・フェニキア人、7: 26
12. バルティマイ、10: 46
13. カエサル(皇帝)、12: 14
14. 憎むべき破壊者、13: 14
15. 選ばれた者、13: 20
16. 偽キリスト、13: 22
17. 祭司長たち、14: 1

18. アバ、14: 36
19. 最高法院、14: 55
20. バラバ、15: 7 と 11 節
21. キレネ人シモン、15: 21
22. サロメ、15: 40
23. 百人隊長、15: 45

IX. 登場する地名の地図上の位置

1. ユデア、1: 4
2. エルサレム、1: 4
3. ヨルダン川、1: 5
4. ナザレ、1: 9
5. ガリラヤ、1: 9
6. カファルナウム、1: 21
7. イドマヤ、3: 8
8. テイルス、3: 8
9. シドン、3: 8
10. ゲラサ地方、5: 1
11. デカポリス、5: 20
12. ベトサイダ、6: 45
13. ダルマヌタ、8: 10
14. エリコ、10: 46
15. オリーブ山、11: 1
16. ゲッセマネ、14: 32

X. ディスカッションのための質問

1. 聖霊による洗礼とは何か(1: 8)。
2. 新しい契約の求めていることとは何か(1: 15)。
3. イエスのお教えを聞いた人々はなぜ驚いたのか(1: 22)。
4. なぜイエスはものを言うことを悪魔(悪霊)にお許しにならなかったのか(1: 34)。
5. なぜイエスは御自分が癒しの業を行われた人々に対して、御自分が癒しの業を行われたことを他の人に話さないように言われたのか(1: 43)。
6. 2章でなぜイエスは神を冒涇したと非難されたのか。
7. 2: 17 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
8. なぜイエスは安息日に頻繁に癒しの業を行われたのか。

9. なぜイエスはたとえ話を用いて教えられたのか(3: 10-13)。
10. 土のたとえ話をあなた自身の言葉で説明しなさい(4: 3-9)。
11. なぜイエスは御自分の故郷であまり多くの奇跡をなさることがおできにならなかったのか(6: 4-6)。
12. 6章でなぜイエスは水の上を歩かれたのか。
13. 7: 6-7 のイザヤの預言を説明しなさい。
14. 7: 15 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
15. なぜマルコはイエスの用いられたアラム語の用語を引用したのか。
16. 8: 38 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
17. 10章でなぜパリサイ人は離縁についてイエスに説明を求めたのか。
18. 10: 25 でイエスが言われたことに弟子達はなぜ驚いたのか(10: 26)。
19. 11章でなぜイエスは子ろばにお乗りになったのか。
20. 11章でなぜイエスは神殿を浄められたのか。
21. 11: 28 はなぜとても重要な質問なのか。
22. 12章冒頭のたとえ話はなぜとても強烈で、誰のことを言っているのか。
23. 旧約聖書最大の命令は何か。
24. なぜ 13: 30 は解釈がとても難しいのか。
25. 15: 34 をあなた自身の言葉で説明しなさい。

ルカの福音書への導入

I. 緒言

- A. ルカの福音書は最長の福音書である。ルカの福音書と使徒行伝は(ヘブル人への手紙をパウロが書いたものではないとすると)他の著者の書いた新約聖書中のいかなる書よりもはるかにページ数が多い。しかもルカは異邦人で第二世代のクリスチャンなのだ。
- B. ヘブル人への手紙の著者を除くなら、ルカは新約聖書中の書の全ての著者の中でコイネギリシャ語に最も堪能であった。ギリシャ語は彼の母語であった。彼はまた高等教育を受け、内科医でもあったようだ(コロサイ 4: 14 を参照)。
- C. 他者に気に掛けてもらえることさえない人々の面倒をルカは見てあげている。
 1. 女性
 2. 貧しい人々(ルカ 6: 20-23 の、ルカの福音書における幸福に関する章句を参照)
 3. 法的に追放された人々
 - a. 不道德な女性[娼婦など](7: 36-50 を参照)
 - b. サマリア人(9: 51-56、10: 29-37、17: 11-16 を参照)
 - c. らい病を患った人々(17: 11-19 を参照)
 - d. 徴税人(9: 1-10 を参照)
 - e. 犯罪者(23: 39-43 を参照)
- D. ルカはマリアの目撃による回想(使徒行伝の1・2章)、および多分マリアの家系(3章 23-28)も記録している。ルカの福音書は、ユダヤ人女性および異邦人女性へのイエスの関心をはっきりと述べている。

II. 著者

- A. 初期教会の普遍的伝統
 1. Irenaeus は紀元 175~195 年頃に書いた自著 *Against Heresies* 第3巻の 1 章 1 節と 14 章 10 節の中でルカがパウロの説いた福音を 1 冊の本に記録したと言っている。
 2. 紀元 175 年頃に書かれた、ルカの福音書への反マルシオン(正典)的序文ではこの福音書の著者はルカとされている。
 3. Tertullian は紀元 150~220 年もしくは 160~240 年頃に書いた、*Against Marcion* 第4巻の 2 章 2 節と 5 章 3 節でルカがパウロの説いた福音を要約したものを書いたと言っている。
 4. 紀元 180~200 年頃に書かれたムラトリー断片ではルカがこの福音書の著者とされ、彼はパウロに同行した内科医と呼ばれている。また、この書によればルカは聞き書きによって(イエスの御業の目撃者に会って聞いた内容を記録することによって)自身の福音書を書いている。

5. Eusebius も自著 *Historical Ecclesiasticus* 第3巻 4章 2節と6～7節でルカがこの福音書と使徒行伝を書いたことを認めている。

B. ルカがこの福音書の著者であることの内的証拠

1. この書は聖書中の他の多くの書と同様にそれ独自の文章構造を持っている。
2. もしルカの福音書と使徒行伝が2巻1組ならば、しかもそれらの導入部が似ていることからそのことが真実と思われるなら、使徒行伝中の「わたしたち」で始まる箇所(16章 10～17節、20: 5-16、21: 1-18、27: 1～28: 16)は目撃に基づくパウロの伝道活動の記録であるということになる。
3. ルカの福音書の導入部(1: 1-4)ではルカがイエスの御生涯を歴史的観点から記述するためにその目撃証言を調べたと述べられているが、そのことは彼が第二世代の信徒であったことを示している。ルカの福音書の導入部は使徒行伝にも転記されている。

Ⅲ. ルカ、その人物像

A. 紀元 175 年頃に書かれた、ルカの福音書への反マルシオン(正典)的序文

1. シリアのアンテオケ生まれ
2. 内科医
3. 独身
4. アカイアから書き送った
5. 84 歳のときベオティアで死去

B. カイザリアの Eusebius(紀元 275～339 年)著 *Historical Ecclesiasticus* 第3巻 4章 2節

1. アンテオケ出身
2. パウロの伝道活動に同行
3. 自身の福音書と使徒行伝を書いた

C. Jerome(紀元 346～420 年)著 *Migna* 第26巻18章

1. アカイアから書き送った
2. ベオティアで死去

D. 彼は高等教育を受けた人であった。

1. コイネギリシャ語の文法に精通していた。
2. 語彙が豊富であった。
3. 研究的手法
4. 彼は内科医でもあったようだ(コロサイ 4: 14 を参照)。また、マルコ 5: 26 に見られる内科医についての否定的なマルコの発言は、ルカ 8: 43 に見られる言い換え文の中では削除されている。彼は医学、治療、病気などに関連する用語を少なくとも 300 回用いている(W. K. Hobart 著 *The Medical Language of Luke*、あるいはさらに詳しくは A. Harnack 著 *Luke the Physician* を参照)。

- E. 彼は異邦人であった。
1. パウロはコロサイ 4: 10-11 における一連の助手(「割礼を受けていない者たち」と他の助手(エパfras、ルカ、デマス)を区別しているようだ。
 2. 使徒行伝 1: 19 でルカは「彼ら自身の言葉で」と言っているが、これはアラム語を指しており、このことはアラム語が彼の母語ではないことを意味している。
 3. 自身の福音書でルカはユダヤ人の口述による律法に関するパリサイ人との論争の全ての記述を省略している。
- F. 全ての人々の中で、新約聖書の大半を占める最長の福音書および使徒行伝の著者として、知名度の低い、イエスの御業の目撃者ではない(つまり使徒ではない)異邦人が選ばれたことは驚きに値する。しかし、これが初期教会の普遍的な、異議を唱える者のない伝統なのだ。

IV. 書かれた年代

- A. ルカ自身の調査報告書(多分パウロがカイザリアで獄中にいた間に書かれたもの[使徒行伝23~26章、特に 24: 27 を参照])と最終原稿(つまりルカの福音書として知られているもの)およびルカの福音書と使徒行伝として広く読まれているものとの間の真の関係は全く知られていない。
- B. 紀元 95 年以前(もし I Clement に使徒行伝からの引用つまり記述が見られるとすれば)
1. 使徒行伝 13: 22 と I Clement 18: 1
 2. 使徒行伝 20: 36 と I Clement 2: 1
- C. ローマ帝国の将軍 Titus によるエルサレム破壊(紀元 70 年)以前
1. 以下に挙げる人物の死についての記述がない
 - a. 使徒ヤコブ(紀元 62 年)
 - b. 使徒パウロ(紀元 64~67 年)
 2. 使徒行伝7章のステパノの説教には、神の裁きを述べていると思われる、神殿の破壊については述べられていない。
 3. パウロは使徒行伝21章でエルサレムを訪れている。また、もしルカが紀元 70 年以降に自身の福音書を書いたのならエルサレム破壊について述べているはずである。
- D. もしルカがマルコの福音書を要約書として用いたのなら、あるいはパレスティナで調査を行っていた頃に自身の福音書を書いたのなら、彼が自身の福音書を書いたのは紀元 50 年代後半から 60 年代前半ということになる(使徒行伝はパウロがローマでまだ獄中にいた紀元 62~63 年から少し後に書かれている)。

V. 対象

- A. テオフィロ(ルカ 1: 1-4 と使徒行伝 1: 1 を参照)に宛てて。テオフィロの人物像についてはいくつかの理論がある。
1. ルカ 1: 3 で彼がテオフィロを「最も敬愛する方」と呼び、またフェリクス(使徒行伝 23: 26 と 24: 3)とフェストゥス(使徒行伝 26: 25)に対してこれと同じ称号を用いているので、テオフィロはローマ帝国の行政官と思われる。
 2. ルカの福音書と使徒行伝の執筆、出版、流通において費用を援助した裕福な後援者(テオフィロはユダヤ人とギリシャ人の間でよく見られた名であった)
 3. テオフィロという名は「神に愛される者」および「神を愛する者」を意味するので、多分クリスチャンの暗号名であると思われる。
- B. ルカの福音書の対象となる読者は異邦人である。
1. ユダヤ人の慣習を説明している。
 2. 福音は全ての人々のためにある(2: 10 を参照)。
 3. 「全ての肉なる者」について述べている預言(複数)を引用している(イザヤ40章からの引用である 3: 5-6 を参照)。
 4. アダム(全人類の父。3: 38 を参照)まで遡って家系図が記されている。
 5. 異邦人に対する神の愛の実例が数多く記されている(13: 29 でルカは主の宴会に招かれる人々の範囲を広げている)。
 6. 異邦人に対する神の愛の実例を旧約聖書から引用している(2: 32、4: 25-27 を参照)。
 7. ルカの福音書の大宣教命令—罪の赦しが全ての国々に宣べ伝えられる(24: 47 を参照)。

VI. ルカの福音書の書かれた目的

- A. 福音書群は全てが伝道目的のために特定の人々の集団を対象として書かれた(ヨハネ 20: 30-31 を参照)。
1. マタイの福音書はユダヤ人を対象として書かれた。
 2. マルコの福音書はローマ人を対象として書かれた。
 3. ルカの福音書は異邦人を対象として書かれた。
 4. ヨハネの福音書は異邦人を対象として書かれた。
- ルカは 70 人隊(70 人の信徒で構成される伝道チーム。10: 1-24 を参照)について特記している。ユダヤ教の指導者にとって 70 は世界にある言語の数を表す数字であった(創世記10章を参照)。イエスによって 70 人の福音伝道者が送り出されたが、このことで福音は全ての人々のためにあることが様々な地域の人々に伝えられた。
- B. 考えられる他の目的
1. 主の再来がまだ来ていない理由を説明するため

- a. ルカ21章は、キリストの再来と世の終わりが近いことを述べているマタイ24章やマルコ13章とは異なる。
 - b. ルカは世界福音宣教について述べているが、教会がそれを成し遂げるには時間がかかるとも言っている(24: 47を参照)。
 - c. ルカは神の御国が今ここにあることを強調している(10: 9と11節、11: 20、17: 21を参照)。
2. ローマ帝国の行政官にキリスト教を説明するため
- a. 書の冒頭で「最も敬愛する方」という称号を用いている。
 - b. ルカ23章でピラトは「私はこの人に何の誤ちも見いだせない」と3回言っている。
 - c. 使徒行伝では行政官が肯定的に描写されている。パウロのローマ帝国の行政官達に対する挨拶には彼らへの敬意が現れており、行政官達はパウロの挨拶に対して肯定的な応答をしている(使徒行伝 26: 31-32)。
 - d. ローマ帝国の百人隊長は、十字架につけられたイエスについて肯定的な目撃証言をしている(ルカ 23: 47を参照)。
- C. ルカの福音書にはその書かれた目的を表す独特の神学的主題が見られる。
- 1. 貧しい人々対金持ち(ルカ 6: 20-23のルカの福音書の幸福に関する章句)
 - a. 法的に追放された人々
 - (1) 不道德な女性[娼婦など](ルカ 7: 36-50)
 - (2) サマリア人(ルカ 9: 51-56と10: 29-37)
 - (3) ならず者(ルカ 15: 11-32)
 - (4) 徴税人(ルカ 19: 1-10)
 - (5) らい病を患った人々(ルカ 17: 11-19)
 - (6) 犯罪者(ルカ 23: 39-43)
 - 2. ルカの福音書にはエルサレムの神殿についての記述がある。この福音書はユダヤ人と彼らの読んでいた聖書についての記述(つまりイエスが旧約聖書の預言を成就されたこと)から始まるが、ユダヤ人はイエスを拒絶し(11: 14-36を参照)、イエスは全世界の救い主となられた(10: 1-24を参照)。

VII. ルカの福音書は何をもとに書かれたのか

- A. マタイの福音書とマルコの福音書とルカの福音書(共観福音書群)の相互関係に関していくつかの理論が発展してきた。
- 1. 初期教会には、異邦人の内科医ルカがこの福音書を書いたという統一的な伝統があった。
 - 2. 紀元 1776 年頃に A. E. Lessing(後に 1818 年に Gieseler)は古代の口述伝統の発展における口述様式を理論化した。その理論によれば、福音書の著者達は自身の語る対象

とする聴衆に合わせて口述の様式を使い分けていた。

- a. マタイの場合 聴衆はユダヤ人
- b. マルコの場合 聴衆はローマ人
- c. ルカの場合 聴衆は異邦人

各々はそれぞれのキリスト教の中心地に関連していた。

- a. マタイの場合 シリアのアンテオケあるいはユデア
- b. マルコの場合 イタリアのローマ
- c. ルカの場合 パレスティナの臨海シーザリアあるいはアカイア
- d. ヨハネの場合 小アジアのエフェソス

3. 19世紀初頭に J. J. Griesbach は、マタイとルカが各々全く個別にイエスの御生涯について記し、マルコはこれら2つの記述の折衷的な記述を試みるために短い福音書を書いたという理論を発表した。

4. 20世紀初頭に H. J. Holtzmann は、最初に福音書を書いたのはマルコであり、マタイとルカは彼の福音書の文章構造を用いて、Q(「源」を意味するドイツ語の用語 *quelle*) と呼ばれる、イエスの御言葉を付け加えた独自の福音書を書いたという理論を発表した。この理論は「二原典」理論と呼ばれた (Frederick Schleiermacher も 1832 年にこの理論を支持している)。

研究者の中には、イエスにより引用され、旧約聖書の知恵の書のような文章構造を持つ聖書箇所のリストを、マタイが書いたものを Papias が記録したものと推測している者もある。問題は現存するこの御言葉のリストが一つもないということである。もしも初期教会が福音書群をととも注意深く保存していたなら、マタイとルカにより用いられた、この信仰の祖なるお方の御言葉のリストを彼らが散逸することはありえなかつただろう。

5. 後に B. H. Streeter は、「ルカによる福音書の雛型」とマルコによる福音書と Q を仮定した、「四原典」理論と呼ばれる修正「二原典」理論を発表した。

6. 共観福音書群の構成に関する上述の理論は単なる推測である。“Q”原典と「ルカによる福音書の雛型」であることがはっきりしている、歴史的で現存している原典はない。

現代の研究者は福音書群がどのように書かれたのかも誰が書いたのかさえも知らない(旧約聖書の律法と使徒以前の預言者達についても同じことが言える)。しかし、このような情報の欠如は、福音書群が神の靈感による書であることと、歴史書であると同時に信仰書であることについての信憑性に関する教会の見解には影響しない。

7. 共観福音書群の間には文章構造と言葉遣いに明らかな類似性があるが、はっきりした相違点も数多く見られる。相違点は(使徒が)目撃したことに關する記述に頻繁に見られる。初期教会は使徒がイエスの御生涯において目撃したことに關するこれらの3通りの記述の相違点を気にすることはなかつた。

その明らかな相違点は、使徒が語る対象とする聴衆や、著者である使徒の用いる文

体、あるいは執筆に用いられる様々な言語(アラム語とギリシャ語)によって説明されうる。神の啓示を受けたこれらの著者や編集者にはイエスの御生涯における出来事やお教えを選択・編集・適用・要約する自由があったことは言っておかなければならないだろう(Fee と Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の 113~148 ページを参照)。

- B. ルカは目撃証言の収集によって自らイエスの御生涯について調べた(ルカ 1: 1-4 を参照)と特に主張している。パウロがパレスティナの臨海カイザリアにおいて投獄されていたことによってルカにはこれらの目撃証人たちに接触する時間があった。1~2章は3章の家系図と同様にマリアの回想を反映している(Willam Ramsay 卿の著書 *Was Christ Born at Bethlehem?* を参照)。
- C. 初期教会に由来する文献のいくつかには、ルカが使徒パウロの伝道旅行に同行したという記述がある。初期教会に由来するこれらの文献のいくつかにはルカの福音書がパウロの説教の影響を受けているとも述べているものもある。全世界への福音宣教がルカの福音書と使徒行伝およびパウロの著書において明確でしかも成就された預言であることは疑う余地がないだろう。

VIII. ルカの福音書の独自性

- A. 最初の2つの章はルカの福音書において独特であり、3: 23-28 の家系図と同様にマリアに由来しているようだ。
- B. ルカの福音書において独特な奇跡
 - 1. ナインという町に住んでいるやもめ(未亡人)の息子が生き返ったこと、7: 12-17
 - 2. 安息日に会堂で病気の女性が癒されたこと、13: 10-17
 - 3. 安息日に会堂で病気の男性が癒されたこと、14: 1-6
 - 4. 十人のらい病患者が癒され、そのうちの一人が神に感謝しながら戻ってきたこと、17 章 11~18 節
- C. ルカの福音書において独特なたとえ話
 - 1. 善いサマリア人、10: 25-37
 - 2. 粘り強い友、11: 5-13
 - 3. 愚かな金持ち、12: 13-21
 - 4. 無くした銀貨、15: 8-10
 - 5. 二人の息子、15: 11-32
 - 6. 不正な管理人、16: 1-8
 - 7. 金持ちとラザロ、16: 19-31
 - 8. 不正な裁判官、18: 1-8
 - 9. パリサイ人と徴税人、18: 9-14

D. マタイの福音書にもあるが用いられ方の異なる、ルカの福音書の中のたとえ話

1. 12: 39-46(マタイ 24: 43-44)
2. 14: 16-24(マタイ 22: 2-14)
3. 19: 11-27(マタイ 25: 14-30)

E. その他の独特な記述

1. 最初の2つの章の出来事
2. 徴税人ザアカイ、19: 1-10
3. ピラトは尋問のためにイエスをヘロデのもとに送った、23: 8-12
4. エマオへの途上の二人の人、24: 13-32

F. ルカの福音書において最も独特な記述は 9: 51~18: 14 に見られる。これらの箇所ではルカはマルコの福音書あるいは「Q」(マタイにより書かれたと思われる、イエスの御言葉)に頼っていない。同様の出来事あるいはお教えでさえも異なる形で記されている。この箇所の統一的な主題は「エルサレムへの途上で」(9: 51、13: 22 と 33 節、17: 11、18 章 31 節、19: 11 と 28 節)であり、これは文字通り主のたどられた十字架への道のりである。

IX. 用語と聖句の早見リスト

1. 不妊、1: 7
2. 救い、1: 6 と 8 節
3. 救いの角、1: 69
4. 住民登録、2: 1
5. 熱心党、6: 15
6. 神の御国、6: 20
7. 笛を吹いた、7: 32
8. 会堂長、8: 49
9. 人の子は必ず苦しみを受ける、9: 22
10. サマリア人
11. あなたたちは不幸だ、11: 42 と 43 節と 44 節と 47 節と 52 節
12. 悔い改める、13: 3 と 5 節
13. 狭い戸口、13: 24
14. 自分の十字架を背負う、14: 27
15. (悪や腐敗の根源としての)富、16: 11
16. 律法と預言者、16: 16
17. アブラハムのすぐ隣、16: 22
18. 挽き臼、17: 2
19. 異邦人の時代が終わるまで、21: 24

20. 長老会、22: 66

21. 楽園、23: 43

X. 人物早見リスト

1. テオピロ、1: 3

2. ザカリア、1: 5

3. 主の天使、1: 11 と 2: 9

4. ガブリエル、1: 26

5. キリニウス、2: 1

6. アンナ、2: 36

7. ティベリウス、3: 1

8. 属領主ヘロデ、3: 1 と 19 節

9. カイアフア、3: 2

10. ナアマン、4: 27

11. 南の国の女王、11: 31

12. ゼカリア、11: 51

13. ラザロ、16: 23

14. ザアカイ、19: 2

15. ヨセフ、23: 50

16. クレオパ、24: 18

X I . 登場する地名の地図上の位置

1. ガリラヤ、1: 26

2. ナザレ、1: 26

3. ベツレヘム、2: 4

4. イトラヤ、3: 1

5. ベトサイダ、9: 10

6. コラジン、10: 13

7. ティルス、10: 13

8. カファルナウム、10: 15

9. サマリア、17: 11

10. ソドム、17: 19

11. エリコ、19: 1

12. エマオ、24: 13

13. ベタニア、24: 50

X II. ディスカッションのための質問

1. 神がイエスの御誕生をまず羊飼いだにお知らせになったことの重要性は何か。
2. 2: 49 でイエスがおっしゃったことの重要性は何か。
3. なぜルカの福音書では主イエスの家系図がアダムまで遡って記されているのか。
4. 6: 1-5 で弟子達はどのように律法を破ったのか。彼らが破ろうとしていた律法とは何か。
5. 6: 46 のイエスの御言葉を説明しなさい。
6. 17: 18-23 でなぜヨハネはイエスが約束されたメシアでいらっしやることを疑ったのか。
7. なぜゲラサの人々はイエスに立ち去っていただきたかったのか。
8. 9: 62 の意味をあなた自身の言葉で説明しなさい。
9. サタンはいつ天国から落ちたのか。
10. ユダヤ人はなぜサマリア人を嫌うのか。
11. 12: 41-48 は処罰の程度あるいは地獄の階層を意味しているのか。
12. 13: 28-30 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
13. 15: 11-32 で放蕩息子のたとえ話が語られた目的とは何か。
14. 16: 18 を歴史的背景を考慮して解釈しながらをあなた自身の言葉で説明しなさい。
15. 17: 34-35 は秘かな喜びを裏付けているのか。それはなぜか、あるいはなぜそうではないのか。
16. 20: 2 はなぜとても重要な質問なのか。
17. 20: 10 のぶどう園の農夫たちとはなぜか。
18. 22: 3 から考えると、ユダは自身の行動に責任を持っていたのか。
19. なぜ 23: 20 はルカにとって記すべき重要な聖句であったと思われるのか。

ヨハネの福音書への導入

I. 緒言

- A. マタイの福音書とルカの福音書はイエスの御誕生の記述で始まり、マルコの福音書はイエスの洗礼の記述で始まるが、ヨハネの福音書は天地創造の記述で始まる。
- B. ヨハネの福音書は第一章第一節からナザレのイエスの完全な神性を解説し、この福音書全体を通してこの神性を繰り返しつつ強調している。共観福音書群はこの真理を徹底的に明らかにしている(「救世主の神秘」)。
- C. 明らかにヨハネは共観福音書群の内容を基本的に認めながら彼の福音書を書き進めている。彼は(紀元1世紀後半の)初代教会の要請に応じてイエスの御生涯とお教えを補完して解釈しようとしている。
- D. ヨハネは以下に示す事柄で救世主イエスについて自分なりの記述をしているようだ。
 - 1. 7つの奇跡あるいはしるしとそれらの解釈
 - 2. イエスの目撃証人達との面談あるいは対話
 - 3. 特定の礼拝日と祝祭日
 - a. 安息日
 - b. 過越の祭り(5~6章を参照)
 - c. 仮庵の祭り(7~10章を参照)
 - d. ハヌカ(10: 22-39を参照)
 - 4. 「私は」という発言
 - a. 神の御名(YHWH)に関連がある
 - 1) わたしは神である(4: 26、8: 24と28節、13: 19、18: 5-6)
 - 2) アブラハムが生まれる前からわたしはある(8:54-59)
 - b. 述語と主語を伴って
 - 1) わたしはいのちのパンである(6: 35と41節と48節と51節)
 - 2) わたしは世の光である(8: 12)
 - 3) わたしは羊小屋の戸である(10: 7と9節)
 - 4) わたしは良い羊飼いである(10: 11と14節)
 - 5) わたしはよみがえりであり、いのちである(11: 25)
 - 6) わたしは道であり、真理であり、いのちである(14: 6)
 - 7) わたしは真のぶどうの木である(15: 1と5節)
- E. ヨハネの福音書と他の福音書との違い
 - 1. ヨハネの福音書の書かれた主な目的が神学的であることは事実だが、彼が執筆に用いた歴史と地理はきわめて正確で詳細である。共観福音書群とヨハネの福音書との間の記述内容の不一致の正確な理由は不明である。

a. ユデアでの初期の伝道活動(神殿の初期の浄化)

b. イエスの御生涯の最終週の時系列と日付

c. 意図的な神学的再構成

2. ヨハネの福音書と共観福音書群との間の明らかな違いについてこの場で議論する機会を持つ方がよいと思われる。George Eldon Ladd著*A Theology of the New Testament* からそれらの違いについての議論の見られる箇所を引用させていただく。

a. 「第4の福音書は共観福音書群とあまりにも異なっているので、問題はまさにその福音書がイエスのお教えを正確に記録しているかどうかということ、あるいは歴史が神学的解釈に包括されるという伝統をクリスチャンの信仰が大きく変えてきたかどうかということであると言わなければならない。」(215ページ)。

b. 「最も簡単に思いつく解答はイエスのお教えがヨハネ自身の言葉で表現されていることである。もしこれが正しい解答なら、また我々が第4の福音書をヨハネ自身の言葉で表現されていると結論付けなければならないなら、この重要な問題は次のようなことになる『第4の福音書の神学はどの程度イエスの神学よりはヨハネの神学に近いと言えるのか。イエスの教えはどの程度ヨハネの心に同化され、それがイエス御自身のお教えの正確に表していることよりはヨハネの解釈として我々の知るところとなっているのか。』」(215ページ)。

c. LaddはW. D. DaviesとD. Daube共編の*The Background of the New Testament and its Eschatology* 中のW. F. Albrightの論説「パレスチナとヨハネの福音書において最近明らかとなったこと」も引用している。

「ヨハネの福音書と共観福音書群との間にはイエスのお教えについての記述に根本的な違いはない。それらの違いはキリストのお教えの特定の側面、特にエッセネ派の教えに最も似ていると思われるものばかりが注目されるという伝統にある。

イエスのお教えが歪曲または偽造されてきたこと、または重要な新しい記述が追加されてきたことを示す文献は全くない。我々は初期教会の要請が福音書に記載される記事(イエスの御生涯とお教えの目撃証言)の選択に影響を与えたことを容易に認めているが、初期教会の要請が神学的重要性を発生あるいは発展させたということを裏付ける理由となるものはない。

批判的な新約聖書学者や神学者の最も奇妙な仮定の一つは、イエスのお教えがあまりにも限定されて記述されたために、ヨハネの福音書と共観福音書群との間の明らかな違いは初期信徒の神学者の間の見解の違いによるものに違いない、というものである。偉大な思想家や人物は様々な友人と聞き手によって様々な解釈されるので、見聞きしたことから最も好ましく有用であると思われるものを選び出そうとする」(170~171ページ)。

d. そしてこれもGeorge E. Laddの著書からの引用:

「それらの違いは、ヨハネの福音書が神学的であり他の福音書がそうではないということではなく、全ての福音書が異なる意味で神学的であるということである。解釈された歴史は単に時系列順に並んだ出来事よりも歴史背景の真相をより忠実に表すことがある。もしヨハネの福音書が神学的な解釈による書であれば、それはヨハネが歴史の中で起こったと確信している出来事を解釈した書である。共観福音書の意図することは明らかにイエスの *ipsissima verba* (御言葉自体) の記録でもなくイエスの御生涯に起こった出来事を記した伝記でもない。それらはイエスを描写したものであり、イエスのお教えを要約したものである。マタイとルカは自分達の意のままにマルコの福音書中の記述を並べ換えてイエスのお教えを記すことができた。もしヨハネにマタイとルカよりもそのようにする自由があったなら、それは彼がイエスをより深遠にかつ最終的に描写したいと望んでいたからである。」(221～222ページ)

II. 著者

- A. この福音書には著者名が記されていないが、ヨハネが著者であるという手がかりがある。
1. 著者は目撃証人でもある(19: 35を参照)
 2. 聖句「愛弟子」(PolycratesとIrenaeusはその人物が使徒ヨハネだと言っている)
 3. ゼベダイの子ヨハネの名前は登場しない。
- B. 歴史背景は福音書自体から明らかであるから、著者が誰であるかという問題は解釈において重要な事柄ではない。著者が神の啓示を受けてこの福音書を書いたことを認めることが重要なのだ。
- ヨハネの福音書の著者が誰であるかということと書かれた年代は神の啓示ではなく解釈に影響する。解説者は歴史背景とこの福音書が書かれるようになったきっかけを探し求める。ヨハネの二元論を
1. ユダヤ教における2つの世
 2. Qumranの義の教師
 3. ゾロアスター教
 4. グノーシス思想
 5. イエスの独特な観点
- と比較するべきだろうか。
- C. 初期教会の伝統的な見解は、ゼベダイの息子である使徒ヨハネが人間であり目撃証人であるということである。福音書の執筆について紀元2世紀の外界(使徒達が福音伝道を行った地域)の文献が他の文献と関連しているように思われるので、これは明らかにされなければならない。
1. 仲間の信徒達とエペソ人の長老達がこの年老いた使徒に福音書を書くように励ました(EusebiusがアレクサンドリアのClementの言葉を引用している)。
 2. 仲間の使徒アンドレ(紀元180～200年頃にローマから書き送られたムラトリー断片)
- D. 現代の学者達の中には、福音書の様式や主題についてのいくつかの仮定に基づいて、別の著

者を想定している者もある。彼らの多くは紀元2世紀初頭(AD 115以前)にこの福音書が書かれたと想定している。

1. ヨハネの教えを覚えている彼の弟子達(ヨハネの影響を受けた人々)によって書かれた(J. Weiss, B. Lightfoot, C. H. Dodd, O. Cullmann, R. A. Culpepper, C. K. Barrett)
2. Eusebius(AD 280~339年)により引用されているPapias(紀元70~146年)の意味不明の文章によれば、使徒ヨハネの神学と術語(専門用語)の影響を受けたアジア出身の初期教会の指導者達の集団の一人である「長老ヨハネ」によって書かれた。

E. ヨハネ自身がこの福音書の執筆における主な参考資料であることの証拠

1. 内的証拠

- a. 著者はユダヤ教の教えや儀式を知っており、それらの旧約聖書的世界観を紹介した。
- b. 著者は紀元70年以前のパレスチナとエルサレムの状況を知っていた。
- c. 著者はイエスの目撃証人であることを主張している。

- 1) 1: 14
- 2) 19: 35
- 3) 21: 24

- d. 著者は使徒団の一員だった。というのは、彼が

- 1) 時間と場所についての記述(特に夜の行動について)
- 2) 数についての記述(2: 6の水がめと21: 11の魚)
- 3) 人についての記述
に精通していたからである。
- 4) 著者は出来事の詳細とそれらへの応答の仕方を知っていた
- 5) 著者は「愛弟子」と呼ばれているようだ
 - a) 13: 23と25節
 - b) 19: 26-27
 - c) 20: 2-5と8節
 - d) 21: 7と20~24節

- 6) 著者はペトロとともに「内なる輪」(12使徒)の一員であったようだ。

- a) 13: 24
- b) 20: 2
- c) 21: 7

- 7) ゼベダイの子ヨハネの名はこの福音書に全く見られないが、彼が「内なる輪」(12使徒)の一員であったことから考えると、このことはとても不思議に思われる。

2. 外的証拠

- a. この福音書を紹介した人々

- 1) Polycarpと親交があり、使徒ヨハネを知っていたIrenaeus[紀元120~202年]

(Eusebiusの*Historical Ecclesiasticus* の第5巻20章6～7節を参照)—「主の胸に寄りかかり、またアジアのエフェソスにおいて自身の福音書を書いた、主の弟子ヨハネ」(*Historical Ecclesiasticus* の第5巻8章4節で引用された*Haeresis* 第3巻1章1節)

- 2) アレクサンドリアのClement(紀元153～217年)—「友らに促されて聖霊によって神のもとに移され、霊的な福音書を書いたヨハネ」(Eusebiusの*Historical Ecclesiasticus* の第6巻14章7節)
 - 3) 殉教者ユスティヌス(紀元110～165年)—自著*Dialogue with Trypho* の81: 4で
 - 4) Tertullian(紀元145～220年)
- b. 最も初期の目撃証人による、ヨハネがこの福音書の著者であるという主張
- 1) [紀元155年に]Smyrnaの司教であったPolycarp(紀元70～156年、Irenaeusによる記録)
 - 2) PhrygiaのHierapolisの司教であり、使徒ヨハネの弟子であったと言われているPapias(紀元70～146年、ローマから書き送られた反マルシオンの序文とEusebiusが記録)

F. 著者についての伝統に対して異議を唱えるのに用いられている理由

1. 福音書とグノーシス主義的主題との関係
2. 21章についての内容の明らかな追記
3. 共観福音書群の記述の時系列上の相異
4. ヨハネは自身を「愛弟子」とは言っていないようだ。
5. ヨハネはイエスについての記述において共観福音書群とは異なる語彙やジャンルを用いている。

G. 使徒ヨハネがこの福音書を書いたと仮定するなら、私達はその人物に何を仮定しうるだろうか。

1. 彼はエフェソスからこの福音書を書き送った(Irenaeusは「エフェソスからこの福音書を書き送った」と言っている)
2. 彼は年老いてこの福音書を書いた(Irenaeusは彼がトラヤヌス帝の治世[紀元98～117年]まで生きたと言っている)

III. 書かれた年代

A. 使徒ヨハネがこの福音書を書いたと仮定するなら

1. ローマ帝国の将軍(後に皇帝となった)Titusによってエルサレムが破壊された紀元70年以前
 - a. ヨハネ5: 2「エルサレムの羊の門の近くにはヘブライ語でベテスダと呼ばれる池があり、そこには5つの回廊があった」
 - b. 使徒のグループを示すために初期信徒の称号「弟子」が繰り返し用いられている。

- c. 後に、死海文書の中に発見され、紀元1世紀の神学的な用語の一部であることが示されたグノーシス主義的記述によって裏付けられた。
 - d. 紀元70年のエルサレムの神殿の破壊については述べられていない。
 - e. 有名なアメリカの考古学者W. F. Albrightはこの福音書が紀元70年代あるいは80年代初頭に書かれたと主張している。
2. 後に紀元1世紀中に書かれたとの見解が発表された。
- a. ヨハネの神学の発展
 - b. エルサレムの陥落はその20年くらい前に発生したため述べられていない。
 - c. グノーシス主義的な言い回しと強調をヨハネは用いている。
 - d. 初期教会の伝統
 - 1) Irenaeus
 - 2) Eusebius
- B. 「長老ヨハネ」がこの福音書を書いたと仮定するなら、書かれた年代は紀元2世紀の初頭から中期ということになるだろう。この理論はDionysiusが(文学的理由から)使徒ヨハネがこの福音書を書いたことを認めなかったことで始まった。神学的な理由から使徒ヨハネが黙示録を書いたことを認めなかったEusebiusは、(1)使徒と(2)長老の2つの呼び名で「ヨハネ」が挙げられているPapiasの引用文(*Historical Ecclesiasticus* の第3巻39章5節と6節)中のまさにその箇所と同時に別の「ヨハネ」を見つけたと感じた。

IV. 対象

- A. 元々この福音書は小アジアのローマ帝国の属州、特にエフェソスにある諸教会に書き送られた。
- B. ナザレのイエスの御生涯と御人格についてのこの記述があまりにも簡潔でかつ意味深長であるので、この福音書はヘレニズム世界の異邦人信徒達やグノーシス派の人々に好まれるようになった。

V. 書かれた目的

- A. この福音書自体は福音伝道の目的で書かれたと主張している(20: 30-31)。
 - 1. ユダヤ人の読者のために
 - 2. 異邦人読者のために
 - 3. 初期グノーシス主義者の読者のため
- B. この福音書には護教学(弁証論)的な趣旨の記述が見られるようだ。
 - 1. 洗礼者ヨハネの狂信的な追従者達に対して
 - 2. 初期グノーシス主義者の偽教師に対して(序章では特に)。これらのグノーシス主義者は新約聖書の他の書の背景ともなっている。
 - a. エペソ人への手紙

- b. コロサイへの手紙
 - c. 牧会(霊的指導)的使徒書簡(テモテへの手紙第一、テトスへの手紙、テモテへの手紙第二)
 - d. ヨハネの手紙第一(ヨハネの手紙第一はこの福音書の序文的な書簡の役割を果たしているようだ)
- C. 書かれた目的についての20: 31の記述は、救いの表現のために現在時制が一貫して用いられているので、忍耐および伝道の教義を強調するものとして理解されうようだ。この意味でヨハネはヤコブのように、小アジアの諸学派によるパウロの神学(Ⅱペテロ3: 15-16を参照)の過度の強調に対して釣り合いを取ろうとしていたようだ。エフェソスにいたのがパウロではなくヨハネであったと初期教会で伝統的に言われていたことは驚くべきことである(F. F. Bruce著*Peter, Stephen, James and John: Studies in Non-Pauline Christianity* の120~121ページを参照)
- D. 最終章(21章)は初代教会からの特定の質問への答えとなっているようだ。
- 1. ヨハネは共観福音書群の記述に付け加えを行っている。しかし、彼は、ユデヤでの伝道活動、特にエルサレムでの働きを重点的に述べている。
 - 2. 21章の追記で取り上げられている3つの質問
 - a. ペトロの復活
 - b. ヨハネの長寿
 - c. イエスの再来がまだ起こっていないこと
- E. 解説者の中には、3章(洗礼についての記述)と第6章(聖餐式や主の晩餐についての記述)で完璧な文章表現があるにもかかわらず、ヨハネが宗教儀式自体を意図的に無視したり記録しなかったり議論しなかったりすることによって礼典主義を軽視したと見る者もいる。

VI. ヨハネの福音書の要旨

- A. 哲学的かつ神学的な序文(1: 1-18)と実用的な結語(21章)
- B. イエスの公的なお働き(2~12章)の中の7つの奇跡のしるしとその解釈
 - 1. カナの婚礼の祝宴でワインを水に変えられたこと(2: 1-11)
 - 2. カファルナウムで王宮の役人の息子を癒されたこと(4: 46-54)
 - 3. エルサレムにあるベセスダと呼ばれている池で足の不自由な人を癒されたこと(5: 1-18)
 - 4. ガリラヤで約5000人に食事を与えられたこと(6: 1-15)
 - 5. ガリラヤ湖の上を歩かれたこと(6: 16-21)
 - 6. エルサレムで生まれつき目が見えない人を癒されたこと(9: 1-41)
 - 7. ベタニアでラザロをよみがえらせたこと(11: 1-57)
- C. イエスの目撃証人との面談と対話
 - 1. 洗礼者ヨハネ(1: 19-34、3: 22-36)
 - 2. 弟子たち
 - a. アンドレとペテロ(1: 35-42)

- b. ピリポとナタニエル(1: 43-51)
- 3. ニコデモ(3: 1-21)
- 4. サマリアの女(4: 1-45)
- 5. エルサレムのユダヤ人(5: 10-47)
- 6. ガリラヤの群衆(6: 22-66)
- 7. ペテロと弟子達(6: 67-71)
- 8. イエスの兄弟達(7: 1-13)
- 9. エルサレムのユダヤ人(7: 14~8: 59、10: 1-42)
- 10. 二階の部屋の弟子(13: 1~17: 26)
- 11. ユダヤ人によるイエスの逮捕と尋問(18: 1-27)
- 12. ローマでの尋問(18: 28~19: 16)
- 13. 復活後の会話、20: 11-29
 - a. マリアと
 - b. 十人の使徒と
 - c. トマスと
- 14. 結語でのペテロとの対話、21: 1-25
- 15. (7: 53~8: 11、姦通の女の話は元々ヨハネの福音書の一部ではない)
- D. 特別な礼拝日と祝祭日
 - 1. 安息日(5: 9、7: 22、9: 14、19: 31)
 - 2. 過越の祭(2: 13、6: 4、11: 55、18: 28)
 - 3. 仮庵の祭(8~9章)
 - 4. ハヌカ(光の祭り、10: 22を参照)
- E. 「私は『ある』』という発言の文の使用
 - 1. 「私は『神』である」(4: 26、6: 20、8: 24と28節と54~59節、13: 19、18: 5-6と8節)
 - 2. 「私はいのちのパンである」(6: 35と41節、48節、51節)
 - 3. 「私は世の光である」(8: 12、9: 5)
 - 4. 「私は羊の門の戸である」(10: 7と9節)
 - 5. 「私は善い羊飼いである」(10: 11、14節)
 - 6. 「私はよみがえりでありいのちである」(11: 25)
 - 7. 「私は道であり真理でありいのちである」(14: 6)
 - 8. 「私は真のぶどうの木である」(15: 1と5節)

VII. 用語と聖句の早見リスト

- 1. 言(ことば)、1: 1
- 2. 信じる、1: 7

3. 「世は言(ことば)によってできた」、1: 10
4. 「言(ことば)は肉となった」、1: 14
5. 真理、1: 17
6. 預言者、1: 21
7. 「神の小羊」、1: 29
8. 「鳩のように」、1: 32
9. ラビ、1: 38
10. 「まことに、まことに、」、1: 51
11. 「昇り降りする神の天使達」、1: 51
12. 「6つの石の水がめ」、2: 6
13. 「ユダヤ人の指導者」、3: 1
14. 「新たに生まれる」、3: 3
15. 「人の子は上げられなければならない」、3: 14、12: 34
16. 「永遠の命」、3: 16
17. 「わたしは命のパンである」、6: 35 と 48 節
18. 「仮庵の祭り」、7: 2
19. 「あなたは悪霊に取りつかれている」、7: 20、8: 48、10: 20
20. 離散(diaspora)、7: 35
21. 「イエスはまだ栄光を受けておられなかった」、7: 39
22. 「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』」、8: 58
23. 「会堂から追放する」、9: 22
24. 「羊の門」、10: 7
25. 「神殿奉献記念祭」、10: 22
26. 冒涇、10: 36
27. 「ろばの子を見つけて、それにお乗りになった」、12: 14
28. 「時」、12: 23
29. 「サタンが彼の中に入った」、13: 27
30. 「新しい掟」、13: 34
31. 「住む所」、14: 2
32. 「わたしにつながっていなさい」、15: 4
33. 「御目を天に上げられて」、17: 1
34. 唯一のまことの神、17: 3
35. 「世のできる前から」、17: 24
36. 鞭打たれた、19: 1
37. ガバタ、19: 13

38. ゴルゴタ、19: 17
39. 「脚を折るようにピラトに願い出た」、19: 31
40. 「ユダヤ人の準備の日」、19: 42

VIII. 人物早見リスト

1. ヨハネ、1: 6
2. 神の子、1: 34
3. メシア、1: 41
4. ケファ、1: 42
5. ニコデモ、3: 1
6. 預言者、7: 40
7. ラザロ、11: 2
8. デイデイモ、11: 16
9. イスカリオテのユダ、13: 2
10. 弁護者、14: 26
11. マルコス、18: 10
12. アンナス、18: 24
13. クロパの妻マリア、19: 25

IX. 登場する地名の地図上の位置

1. ガリラヤ、1: 43
2. ナザレ、1: 45
3. カナ、2: 1
4. カファルナウム、2: 12
5. サリムの近くのアイノン、3: 23
6. サマリア、4: 4
7. ティベリアス、6: 1
8. ベツレヘム、7: 42
9. ベタニア、11: 1
10. キドロン、18: 1
11. ティベリアス湖、21: 1

X. ディスカッションのための質問

1. ヨハネ 1: 1 がとても重要なのはなぜか。
2. ヨハネの洗礼はなぜ通常とは異なっていたのか。
3. 新たに生まれるとはどのような意味か。

4. 「信じる」と「従う」はどのように 3: 35 と関連があるか。
5. 4: 24 はどのような意味か。
6. ヨハネ 5: 4 にはなぜ括弧がつけられているのか。
7. 9: 2 は生まれ変わりを意味するか。もしそうでないなら、それはなぜか説明しなさい。
8. 9: 4 の反語を説明しなさい。
9. 10: 34-35 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
10. 13章でなぜイエスは弟子達の足を洗われたのか。13~17章の設定は何か。
11. ヨハネ 14: 6 がとても重要なのはなぜか。
12. ヨハネ 14: 23 がとても重要なのはなぜか。
13. ヨハネ 15: 16 を説明しなさい。
14. ヨハネ17章は「大祭司としてのイエスの祈り」と呼ばれている。イエスは3種類の相異なる人々あるいは集団のために祈られたが、それらの人々あるいは集団の名を挙げなさい。
15. ヨハネ 18: 34-35 のイエスとピラトの問答を説明しなさい。
16. 20: 22 あるいは使徒行伝1章の五旬節において弟子達は聖霊を受けたのか。
17. なぜヨハネ 20: 31 は重要なのか。

使徒行伝への導入

I. 緒言

- A. 使徒行伝は(福音書の中の)イエスの御生涯に関する記述とその解釈および新約聖書の使徒書簡におけるこれらの真理の応用とを関連づけるうえで不可欠な書である。
- B. 初期教会は新しい契約に関する書として2種類の書、つまり福音書と使徒書簡(パウロの手紙など)を製本し公に頒布した。しかし、紀元2世紀にキリスト教系の異端が出現し始めたので、使徒行伝がその価値を知られるようになった。使徒行伝には使徒達の説教の内容と目的ならびに福音伝道のもたらした驚くべき結果が記されている。
- C. 使徒行伝の歴史的正確さは現代の考古学上の発見によって、特にローマ帝国の行政官の称号(例えば *strategoi* [16: 20, 22 節, 35 節, 36 節, 38 節[神殿の大祭司についても用いられている(ルカ 22: 4 と 52 節, 使徒行伝 4: 1, 5: 24-26)]], *politarchas* [17: 6 と 8 節], *proto* [使徒行伝 28: 7]。A. N. Sherwin-White 著 *Roman Society and Roman Law in the New Testament* を参照)に関する発見によって強調かつ確認されてきた。ルカは初期教会内部にあった緊張をパウロとバルナバの口論(使徒行伝 15: 39 を参照)をも含めて記録している。このことは(使徒行伝を含めた新約聖書中の全ての書が)[イエスの御生涯等の目撃証言のある事柄に関して]公正であり、また[特定の見解に偏らない]公平であり、さらに詳細な調査に基づいた歴史書かつ神学書であることを反映している。
- D. この書の題名は古代ギリシャ語の原典群の中で若干異なった呼称で見受けられる。
1. 原典^κ(シナイ文書)および Tertullian、デディモ、Eusebius らの著書では「使徒行伝」と呼ばれている(ASV、NIV)。
 2. 原典 B(バチカン文書)、D(Bazae)、(著者の)署名のある^κ、および Irenaeus、Tertullian、Cyprian、アタナシウスらの著書では「使徒言行録」と呼ばれている(KJV、RSV、NEB)。
 3. 原典 A²(アレキサンドリア文書の最初の改訂版)、E、G、および Chrysostom の著書では「聖使徒言行録」と呼ばれている。

ギリシャ語の用語 *praxeis* と *praxis*(行動、行動様式、生態、行為、実践の意味)は、著名な影響力のある人々(ヨハネ、ペテロ、ステパノ、ピリポ、パウロ)の生涯と働きを記した古代地中海世界の文学ジャンルを反映していると思われる。この書には(ルカの福音書と同様に)元々は題名が付いていなかったようだ。

- E. 使徒行伝には明らかに2つの文章構成上の伝統が見られる。短い方の伝統はアレキサンドリア文書(MSS P⁴⁵、P⁷⁴、^κ、A、B、C)に由来する。西方原典群(P²⁹、P³⁸、P⁴⁸、D)にはもっと多くの記述が見られるようだ。それらが使徒行伝の真の著者の意図によるものなのか、あるいは後に律法学者達が初期教会の伝統に基づいて付け加えたものなのかは不明である。聖書学者の多くは、見慣れない原典あるいは難解な原典の消去あるいは修復が試みられているため、またはさらなる記述が付け加えられているため、あるいはイエス

がキリストでいらっしやることを強調する特別な聖句が付け加えられているため、もしくは紀元1～3世紀の初期信徒である文章家達の著書からの引用が見られないことから、西方原典は後に付け加えられたのだと信じている(F. F. Bruce 著 *Acts: Greek Text* の69～80ページを参照)。より詳細な議論が米国聖書協会刊の Bruce M. Metzger 著 *A Textual Commentary on the Greek New Testament* の259～272ページにあるので参照されたい。

II. 著者

- A. この書には著者名が記されていないが、ルカであるという見解が有力である。
1. 「我々」で始まる独特の、そして驚くべき箇所である 16: 10-17(ピリピでの第二回伝道旅行)と 20: 5-15 と 21: 1-18(第三回伝道旅行の終わり)と 27: 1～28: 16(パウロのローマへの送監)はルカがこの書の著者であることをはっきりと暗示している。
 2. ルカ 1: 1-4 を使徒行伝 1: 1-2 と比較すれば、この第三の福音書と使徒行伝の関連は明らかである。
 3. コロサイ 4: 10-14 とフィレモン 24 節とⅡテモテ 4: 11 に見られる異邦人内科医についての記述は、新約聖書で唯一の異邦人の著者であるルカを暗示している。
 4. 初期教会で公認されている証言
 - a. ムラトーリ正典断片(紀元 180～200 年頃にローマから書き送られた書で、「内科医ルカにより書かれた」と記されている)
 - b. Irenaeus の著書(紀元 130～200 年頃に書かれた)
 - c. アレキサンドリアの Clement の著書(紀元 156～215 年頃に書かれた)
 - d. Tertullian の著書(紀元 160～200 年頃に書かれた)
 - e. Origen の著書(紀元 185～254 年頃に書かれた)
 5. 文体と語彙(特に医学用語)という内的証拠によってルカがこの書の著者であることが確認されている(William Ramsay 卿と A. Harnack)。
- B. ルカに関する情報源が3つある。
1. 新約聖書中の3つの聖書箇所(コロサイ 4: 10-14 とフィレモン 24 節とⅡテモテ 4: 11)と使徒行伝自体
 2. 紀元2世紀(紀元 160～180 年頃)に書かれた、ルカの福音書への反マルシオンの序文
 3. 紀元4世紀の初期教会の歴史学者 Eusebius は *Ecclesiastical History* の第3巻4章でこのように述べている「ルカはアンテオケの生まれで職業は内科医であり、主としてパウロと交際し他の使徒達とはあまり交流はなく、神の啓示によって記した自身の福音書と使徒言行録に彼らから得た魂の癒しの例を記している」。
 4. これはルカの人物像のまとめである。
 - a. 異邦人(コロサイ 4: 12-14 に挙げられている。エパfrasとデマスの援助を受けた

がユダヤ人からは援助を受けていない)

- b. シリアのアンテオケ(ルカの福音書への反マルシオンの序文による)とマケドニアのピリピ(William Ramsay 卿の著書のルカ 16: 19 についての記述による)の出身
- c. 内科医(コロサイ 4: 14、あるいは少なくとも高等教育を受けた人とは言える)
- d. アンテオケの教会の始まった後に、自らの中年期に回心した(反マルシオンの序文による)
- e. パウロの伝道旅行に同行した(使徒行伝中の「我々」で始まる箇所)
- f. 独身
- g. 第三の福音書と使徒行伝を書いた(導入部および文体と語彙が似ている)
- h. Boeotia で 84 歳で死去

C. ルカがこの書の著者であることへの批評

- 1. アテネのマルスの丘におけるパウロの説教では一般常識として古代ギリシャの哲学の概念や用語が用いられた(使徒行伝17章を参照)が、ローマ1章と2章でパウロは不毛の説明にあらゆる「一般常識」(自然、内的[心的]道徳)を用いているようだ。
- 2. 使徒行伝の中のパウロの説教や発言はモーセを重要人物とみるユダヤ人信徒としての彼の姿を描写しているが、パウロの書簡群においては律法が問題の多く廃棄されるべきものとして軽視されている。
- 3. 使徒行伝の中のパウロの説教では、彼が伝道活動の初期に書いた書(テサロニケ人への手紙第一と第二)とは異なり、終末論が強調的に述べられていない。
- 4. この用語や文体や強調点の対比は興味深いが決定的なものではない。これと同じ判断基準を福音書群に適用すれば、共観福音書群に見られるイエスの御言葉はヨハネの福音書に見られるものとは大きく異なるといえる。しかし、それらがどちらもイエスの御生涯を反映したものであるという見解に反論する学者も少なからずいる。

- D. 使徒行伝の著者についての議論で重要となるのは、その議論がルカに関する情報源についての議論だということである。というのは、多くの学者(例えば C. C. Torrey)はルカが(使徒行伝の)1~15章の多くにアラム語の文献(あるいは口述伝統)を用いていると信じているからである。もしこれが真実なら、ルカはこの書の著者ではなく編集者であるということになる。パウロの後の説教においてさえも、ルカはパウロの言葉自体ではなくその要約のみを述べている。ルカによる文献の使用はルカがこの書の著者であるということと同様に重要な問題である。

Ⅲ. 書かれた年代

- A. 使徒行伝の書かれた年代についての議論と異議は数多くあるが、その執筆自体は紀元 30～63 年頃(パウロは紀元 60 年代中期にローマの監獄から釈放され、ネロ帝の治世、多分紀元 65 年の迫害時に再び捕えられて処刑された)である。
- B. ローマ帝国政府に関してこの書の護教学的(弁証学[論]的)特質を仮定するなら、この書の書かれた年代は(1)紀元 64 年(ネロ帝によるローマの信徒迫害の開始)以前であるか、あるいは(2)紀元 66～73 年のユダヤ人の反乱に関連がある。
- C. 使徒行伝を時系列に沿ってルカの福音書と関連づけようとするなら、ルカの福音書の書かれた年代は使徒行伝の書かれた年代に影響を与える。紀元 70 年の Titus によるエルサレム陥落は預言されたことであった(ルカ 21 章)が記されていないので、そのことから考えるとルカの福音書の書かれた年代は紀元 70 年以前ということになるようだ。もしそうなら、その次に使徒行伝が書かれた年代は紀元 80 年代ということになるに違いない。
- D. 話の急な終り方を気にするなら(F. F. Bruce によればパウロはまだローマで獄中にいた)、使徒行伝の書かれた年代はパウロのローマでの最初の投獄の終わりに関連して紀元 58～63 年であると考えるのがよい。
- E. 歴史的年代の中には、使徒行伝に記された歴史的出来事と関連しているものがある。
1. クラウディウス帝の治世の全国的飢饉、使徒行伝 11: 28、紀元 44～48 年
 2. ヘロデ・アグリッパ I 世の死、使徒行伝 12: 20-23、紀元 44 年(春)
 3. セルジウス・パウルスの総督就任、使徒行伝 13: 7、紀元 53 年任命
 4. クラウディウス帝によるローマからのユダヤ人追放、使徒行伝 18: 2、紀元 49 年(?)
 5. ガリオの総督就任、使徒行伝 18: 12、紀元 51 年あるいは 52 年(?)
 6. フェリックスの総督就任、使徒行伝 23: 26 と 24: 27、紀元 52～56 年(?)
 7. フェリックスからフェストゥスへの総督職の交代、使徒行伝 24: 27、紀元 57～60 年(?)
 8. ユデアのローマ帝国行政官
 - a. 代官
 - ーポンテオ・ピラト、紀元 26～36 年
 - ーマルセルス、紀元 36～37 年
 - ーマルルス、紀元 37～41 年
 - b. 紀元 41 年にローマ帝国政府の代官制度が経験者任命制度に変わった。ローマ皇帝クラウディウスは紀元 41 年にヘロデ・アグリッパ I 世を代官に任命した。
 - c. 紀元 44 年のヘロデ・アグリッパ I 世の死後、代官制度は紀元 66 年まで再制定された。
 - ーアントニウス・フェリックス
 - ーポルシウス・フェストゥス

IV. 書かれた目的と文章構造

A. 使徒行伝の書かれた目的のひとつは、イエスを信じる人々の急速な成長を、ユダヤ人への伝道から全世界への宣教に至るまで、また鍵のかかった2階部屋からローマ皇帝の居る宮殿に至るまで記録することである。

1. 福音のこの地理的広がりには使徒行伝 1: 8 に記されているように使徒行伝における大宣教命令(マタイ 28: 19-20)である。
2. 福音のこの地理的広がりには幾通りにも表現されている。
 - a. 大都市や国境を用いて。使徒行伝には 32 の国々と 54 の都市と 9 の地中海の島が登場する。3つの大都市とはエルサレムとアンテオケとローマである(使徒行伝 9: 15 を参照)。
 - b. 重要人物を用いて。使徒行伝は大きく2つの部分、つまりペテロの伝道活動とパウロの伝道活動に分けられる。使徒行伝には 95 人以上が登場するが、その中の主な人物はペテロとステパノとピリポとバルナバとヤコブとパウロである。
 - c. 使徒行伝には2つあるいは3つの繰り返し現れる文章形式があり、それらは著者の意図的試みを反映しているようだ。

(1) 要約

- 1: 1~6: 7(エルサレムで)
- 6: 8~9: 31(パレスティナで)
- 9: 32~12: 24(アンテオケへ)
- 12: 25~16: 5(小アジアへ)
- 16: 6~19: 20(ギリシャへ)
- 19: 21~28: 31(ローマへ)

(2) 成長の記録

- 2: 47
- 5: 14
- 6: 7
- 9: 31
- 12: 24
- 16: 5
- 19: 20

(3) 数の使用

- 2: 41
- 4: 4
- 5: 14
- 6: 7

9: 31

11: 21 と 24 節

12: 24

14: 1

19: 20

B. 使徒行伝は明らかに、イエスの死に関する誤解(背信につながる)と関連がある。周知のように、ルカは異邦人(ローマ帝国の行政官と思われるテオピロ)に(この書を)書き送っている。彼はペテロとステパノとパウロの説教を用いてユダヤ人の回心とローマ帝国の行政官達のキリスト教認可のいきさつとを示している。ローマの人々はイエスを信じる人々を恐れなかった。

1. クリスチャンの指導者達の説教

a. ペテロ、2: 14-40、3: 12-26、4: 8-12、10: 34-43

b. ステパノ、7: 1-53

c. パウロ、13: 10-42、17: 22-31、20: 17-25、21: 40-22: 21、23: 1-6、24: 10-21、26: 1-29

2. ローマ帝国の行政官達との出会い

a. ポンテオ・ピラト、ルカ 23: 13-25

b. セルジウス・パウルス、使徒行伝 13: 7 と 12 節

c. ピリピの高級行政官達、使徒行伝 16: 35-40

d. ガリオ、使徒行伝 18: 12-17

e. エフェソスのアジア担当官(ローマ帝国のアジア属州の競技を主催した文官や宗教儀式を担当した司祭)、使徒行伝 19: 33-41(特に 31 節)

f. クラウディウス・リジ阿斯、使徒行伝 23: 39

g. フェリックス、使徒行伝24章

h. ポルシウス・フェストウス、使徒行伝25章

i. アグリッパ2世、使徒行伝26章(特に 32 節)

j. プブリウス、使徒行伝 28: 7-10

3. ペテロの説教とパウロの説教を比較すれば、パウロが福音的真理を刷(革)新したのではなく、一使徒としてそれを忠実に宣言したことは明らかである。*Kerygma* は一つとなったのだ。

C. ルカはローマ帝国政府の前でキリスト教を弁護しただけではなく(John W. Mauk 著 *Paul on Trial: The Book of Acts as a Defence of Christianity* を参照)、異邦人教会の前でパウロを弁護した。パウロはユダヤ人のグループ(ユダヤ教徒化したガラテヤの信徒達。IIコリント10~13章の偽使徒達)やヘレニズム主義者のグループ(グノーシス主義者のコロサイ人やエペソ人)から繰り返し攻撃された。ルカはパウロの伝道や説教における精神や神学

を明らかにすることでパウロの正常さを示した。

- D. 使徒行伝は教義書を意図して書かれたものではないが、C. H. Dodd が *Kerygma*(つまりイエスに関係する重要な真理)と呼んでいる初期の使徒達の説教が記されている。これによって初期の使徒達が福音の本質、特にイエスの死と復活に関する事柄の中で何が重要と感じていたかを知ることができる。

特別なトピック: 初期教会の *kerygma*

- A. 旧約聖書の中でなされた神の約束は今や救世主イエスが来られたことで成就している(使徒行伝 2: 30、3: 19 と 24 節、10: 43、26: 6-7、22 節、ローマ 1: 2-4、I テモテ 3: 16、ヘブル 1 章 1-2 節、I ペテロ 1: 10-12、II ペテロ 1: 18-19)。
- B. イエスは洗礼を受けられた際に神によってメシアとして聖別された(使徒行伝 10 章 38 節)。
- C. イエスは洗礼を受けられた後にガリラヤでの伝道の働きを始められた(使徒行伝 10: 37)。
- D. イエスの伝道のお働きは神の御力によって善を行い力強い業を行うことであった(マルコ 10: 45、使徒行伝 2: 22、10: 38)。
- E. メシアは神の永遠の目的によって十字架に架かれた(マルコ 10: 45、ヨハネ 3: 16、使徒行伝 2: 23、3: 13-15、4: 11、10: 39、26: 23、ローマ 8: 34、I コリント 1: 17-18、15: 3、ガラテヤ 1: 4、ヘブル 1: 3、I ペテロ 1: 2 と 19 節、I ヨハネ 4: 10)。
- F. イエスは死者の中からよみがえられて弟子達にお姿を現された(使徒行伝 2: 24、31-32 節、3: 15 と 26 節、10: 40-41、17: 31、26: 23、ローマ 8: 34、10: 9、I コリント 15: 4-7、12 節以降、I テサロニケ 1: 10、I テモテ 3: 16、I ペテロ 1: 2、3: 18 と 21 節)。
- G. イエスは神によって高く上げられて「主」の名を与えられた(使徒行伝 2: 25-29、33-36 節、3: 13、10: 36、ローマ 8: 34、10: 9、I テモテ 3: 16、ヘブル 1: 3、I ペテロ 3: 22)。
- H. 私達が神との新しい交わりを始められるようにイエスは聖霊を下さった(使徒行伝 1: 8、2 章 14-18 節、38-39 節、10: 44-47、I ペテロ 1: 12)。
- I. イエスは裁きと万物の回復のために再来されることになっている(使徒行伝 3: 20-21、10: 42、17: 31、I コリント 15: 20-28、I テサロニケ 1: 10)。
- J. 御言葉を聞く者は皆悔い改めて洗礼を受けるべきである(使徒行伝 2: 21 と 38 節、3: 19、10: 43 と 47-48 節、17: 30、26: 20、ローマ 1: 17、10: 9、I ペテロ 3: 21)。

これら一連の事柄は初期教会の主な公告であるが、新約聖書の著者達は自らの説教の中でその一部を省いたり他の特別な事柄を強調したりした。マルコの福音書は全体的に *kerygma* の使徒ペテロの解釈に厳密に従っている。伝統的にマルコは自らの福音書の執筆の際にペテロのローマでの説教を取り入れたと考えられている。マタイとル

カはマルコの福音書の基本構造に従っている。

- E. Frank Stagg は自身の注解書 *The Book of Acts, the Early Struggle for an Unhindered Gospel* で使徒行伝の書かれた目的は主として、イエスに関するメッセージ(つまり福音)の、厳格な国家主義的ユダヤ教から全人類への普遍的メッセージへの変化であると主張している。Stagg の注解書ではルカが使徒行伝を書いた目的が注目されている。1~18ページには様々な理論の要約と分析が見られる。Stagg は用語「何の妨げもなく」を選び、これに注目しているが、この用語は一つの書の結句としては見慣れない形をとっているものの、キリスト教の布教における強調点を理解する過程に存在する全ての障害を取り除くので、その強調点の理解において重要である。
- F. 使徒行伝には聖霊についての記述が50箇所以上見られるが、それらは「聖霊の御業」ではない。使徒行伝に28ある章のうち11の章には聖霊についての記述がない。聖霊についての記述が最もよく見られるのは使徒行伝の前半(1~14章)であり、そこでルカは他の文献(多分元々がアラム語で書かれているもの)を引用している。使徒行伝が聖霊について記された書ではないのと同じように福音書はイエスについて記された書である。この見解は聖霊の御立場を軽視するという意味ではなく、私達が聖霊中心の使徒行伝を無視した神学をつくりあげないようにするという意味のものである。
- G. 使徒行伝は教義を教えることを目的とした書ではない(FeeとStuart共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の94~112ページを参照)。このことの例は、墮落を招くことが運命づけられている、使徒行伝に由来する回心の神学に頼ろうとする試みであろう。使徒行伝の中で回心の手順と事情は様々である。それなら、どのような回心の様式が標準的なのだろうか。教義上の事柄は使徒書簡に助けを求めて調べなければならない。しかし、学者達の中に(特に Hans Conzelmann)未来の *parousia* に向けて忍耐強く伝道の働きを続けるという紀元1世紀の主観的な終末論にルカが意図的に最注目したのだと見ている者がいるのは興味深い。神の御国は今ここに君臨し、人の人生を変えている。今伝道の働きをしている教会は終末論的な希望ではなく神の御国が集中的に現れたものなのだ。
- H. 使徒行伝の書かれた目的と考えられるもうひとつの事柄は、ユダヤ人はなぜユダヤ人のメシアを拒絶したのか、そしてなぜ(初期)教会のメンバーの大半が異邦人で占められるようになったのかについて記したローマ9~11章と似ている。使徒行伝の中のいくつかの箇所では福音の世界規模的特徴が明記されている。イエスは使徒達を全世界に送られた(1:8)。ユダヤ人はイエスを拒絶したが、異邦人はイエスに応答した。イエスのメッセージはローマに届いた。ルカが使徒行伝を書いた目的は、ユダヤ人のためのキリスト教(ペテロの説いた)と異邦人のためのキリスト教(パウロの説いた)とが共に存在し成長しうることを示すことであったようだ。両者は拮抗せず、世界福音宣教の中に組み込まれる。
- I. 使徒行伝の書かれた目的に関する限り、ルカの福音書と使徒行伝は元々一つの書であった

のでルカの福音書の序文(1: 1-4)は使徒行伝の序文の役割も果たしているのだという F. F. Bruce の見解 (*New International Commentary* の 18 ページ)に私 (アトリー) は同意する。ルカは全ての出来事を目撃してはいないが、自身の歴史的・文学的・神学的思想の枠組みを用いて注意深く全ての出来事を調べて正確に記録した。

ルカは自身の福音書と物語の中にイエスと初期教会の歴史的眞実と神学的忠実さ(ルカ 1 章 4 節を参照)とを示そうとしている。使徒行伝の強調点は成就(誰にも妨げられないこと)の主題であるようだ。この主題はいくつかの相異なる語句によって議論されていく(Walter L. Liefeld 著 *Interpreting the Book of Acts* の 23~24 ページを参照)。福音はあと知恵や代替案や新しい考え方ではない。福音は神の御予定による計画である(使徒行伝 2: 23、3: 18、4 章 28 節、13: 29 を参照)。

V. ジャンル

- A. 新約聖書でいう使徒行伝は旧約聖書でいえばヨシュア記から第二列王記までの書にあたる。つまりこれらの書は歴史物語である。聖書の歴史物語は事実に基づいているが、強調されているのは時系列に沿って記された膨大な数の出来事の記録ではない。神がどのようなお方であるか、私達は何者か、神は私達をどのように義なる者として造られたのか、そして神は私達にどのように生きてほしいと願っておられるのかを説明する特定の出来事が選ばれているのだ。
- B. 聖書の物語の解釈における問題は著者達が原文中に(1)何の目的で書いたのか(2)中心となる眞理は何か(3)記録されている事柄に私達はどのように倣うべきなのかを全く記していないということである。読者には以下に示すような質問を通して考えることが求められる。
 - 1. なぜその出来事は記録されたのか。
 - 2. その出来事はそれ以前に聖書中の書に記録された事柄とどのように関係があるのか。
 - 3. その中心となる神学的眞理は何か。
 - 4. その文脈は重要か(先行あるいは付随する出来事は何か、この主題は他の聖書箇所では取り上げられているか)。
 - 5. その文脈はどれくらいの長さがあるか(時として長大な物語は一つの神学的主題あるいは意図を持つことがある)。
- C. 私達は歴史物語だけから教義を学ぶべきではない。記録されている出来事はしばしば著者の意図を反映するようになることがある。歴史物語はしばしば他の聖書箇所に記載された眞理を表す。記されているからというだけで全世代の全ての信徒に対する神の御心であるとはいえない(例えば自殺、一夫多妻[一妻多夫]制、聖戦、蛇使いなど)。
- D. 歴史物語の解釈方法についての最良かつ簡潔な議論は Gordon Fee と Douglas Stuart

共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の 78～93 ページおよび 94～112 ページに見られる。

VI. 注解書および学習の手引き書

- A. John Sterling 著 *An Atlas of the Acts*
- B. Curtis Vaughan 著 *A Study Guide Commentary, Acts* (簡潔だが優れた注解書)
- C. Tyndale 注解書シリーズの *The Acts of the Apostles*、E. M. Blaiklock 著(ギリシャ・ローマ世界およびパレスティナ内外のユダヤ教を歴史的にうまく要約している)
- D. 新国際注解書シリーズの *Commentary on the Book of the Acts*、F. F. Bruce 著(Bruce は私[アトリー]の好きな解説者の一人である)
- E. Frank Stagg 著 *The Book of Acts, the Early Struggle for an Unhindered Gospel*
- F. Newman と Nida 共著 *A Translator's Handbook of the Acts of the Apostles*
- G. Fee と Stuart 共著 *How to Read The Bible For All Its Worth*
- H. Carson と Moo と Morris 共著 *An Introduction to the New Testament*

VII. 上記の注解書の基本的概要

- A. Curtis Vaughan の注解書と the New International Study Bible は使徒行伝 1: 8 に基づいている。
- B. Tyndale 注解書シリーズの E. M. Blaiklock の注解書はとても詳しい解説書である。
- C. 新国際注解書シリーズの F. F. Bruce の注解書は使徒行伝の要約的な記述に基づいている(この章の IV. の A. の 2 の c. の私の解説を参照)。

VIII. 用語と聖句の早見リスト

- 1. 「数多くの証拠」、1: 3
- 2. 「40 日」、1: 3
- 3. 「神の御国」、1: 3
- 4. 「雲がイエスを覆った」、1: 9
- 5. 「安息日に歩くこと」、1: 12
- 6. 「血の土地」、1: 19
- 7. 「くじ」、1: 26
- 8. 「五旬祭」、2: 1
- 9. 「聖霊に満たされて」、2: 4
- 10. 「他の国々の言葉で」、2: 4
- 11. 「改宗者」、2: 10、13: 43
- 12. 「神が予めお定めになった御計画とすでに御存知のこと」、2: 23

13. 「陰府(よみ)」、2: 31
14. 「神の右」、2: 33
15. 「悔い改めなさい」、2: 38、3: 19
16. 「パンを裂くこと」、2: 42 と 46 節
17. 「祈りの時」、3: 1
18. 「施しを乞う」、3: 2
19. 「ソロモンの回廊」、3: 11、5: 12
20. 「聖なる正しい方」、3: 14
21. 「慰めの時」、3: 19
22. 「無学の人」、4: 13
23. 「ステパノは眠りについた」、7: 60
24. 「この道」、9: 2
25. 「私の上に手を置いて」、9: 12(8: 17 を参照)
26. 「歩兵隊長」、10: 1
27. 「キリスト者」、11: 26
28. 「占い」、16: 16
29. 「家族の者たちも」、16: 33
30. 「エピクロス派」、17: 18
31. 「ストア派」、17: 18
32. 「アレオパゴス」、17: 22
33. 「ユダヤ人の祈祷師たち」、19: 13
34. 「魔術. . . 書物」、19: 19
35. 「アルテミスの神殿の銀細工模型」、19: 24

IX. 人物早見リスト

1. テオピロ、1: 1
2. 婦人たち、1: 14
3. マティア、1: 23
4. サドカイ派の人々、4: 1、5: 17
5. アンナス、4: 6
6. カイアフア、4: 6
7. 「民の議員、また長老の方々、」、4: 8
8. アナニア、5: 1、9: 10
9. サフィラ、5: 1
10. ガマリエル、5: 34

11. ステパノ、6: 5
12. サウル、7: 58、8: 1、9: 1
13. ピリポ、8: 5
14. ドルカス、9: 36
15. コルネリウス、10: 1
16. アガボ、11: 28 と 21: 10
17. エウティコ、20: 9

X. 登場する地名の地図上の位置

1. エルサレム、1: 8
2. ユデア、1: 8
3. サマリア、1: 8
4. パルティア、2: 9
5. カッパドキア、2: 9
6. ポントス、2: 9
7. アジア、2: 10
8. フリギア、2: 10
9. パンフィリア、2: 10
10. エジプト、2: 10
11. リビア、2: 10
12. キレネ、2: 10
13. クレタ、2: 11
14. ナザレ、2: 22
15. アレキサンドリア、6: 9
16. キリキア、6: 9
17. ダマスコ、9: 2
18. カイサリア、9: 30
19. ヤッファ、9: 36
20. フェニキア、11: 19
21. キプロス、11: 20
22. タルソス、11: 25
23. シドン、12: 20
24. フィリピ、16: 12
25. ベレア、17: 10
26. アテネ、17: 16

X I . ディスカッションのための質問

1. 1: 6 は使徒達の理解不足をどのように明らかにしているか。
2. 1: 8 はマタイ 28: 19-20 とどのような関連があるか。
3. 使徒となるための資格を挙げなさい(1: 22)。
4. なぜ「風」と「火」は聖霊と関連があるのか(2: 2-3)。
5. 2: 8 の奇跡を説明しなさい。
6. ペテロはヨエルの預言が成就すると言っている。では 2: 17 と 19~20 節をあなたはどのように説明するか。
7. イエスが「主」そして「キリスト」と呼ばれることの神学的重要性は何か(2: 36)。
8. 2: 44 は聖書における意味での共産主義的な命令か。
9. 3: 18 の意味を説明しなさい。
10. 4: 11 で旧約聖書はどのようにイエスに適用されているかを説明しなさい。
11. 聖霊の満たしは使徒行伝における証言と常に関連があるか。
12. 使徒行伝6章の「7人」に選ばれるための資格を挙げなさい。彼らは執事か。
13. なぜサウルは信徒をひどく迫害したのか(8: 1-3)。
14. 8: 15-16 は救いに至る出来事の順序を現代の信徒に示しているか。
15. 10: 44-48 における異言の目的は何か。
16. パウロはなぜ地方の会堂で最初に説教をしたのか(13: 5)。
17. パウロとバルナバが自分達の衣服を裂く原因となった、リストラでの出来事は何か(14: 8-18)。
18. 使徒行伝15章のエルサレム会議の目的は何か。
19. パウロとバルナバはなぜ口論したのか(15: 36-41)。
20. なぜ聖霊はパウロにアジアへ行くことを禁じられたのか(16: 6)。
21. 16: 35-40 でなぜ都市の高官達は動揺したのか。
22. プリスキラとアクィラはどのようにアポロを助けたのか(18: 24-28)。
23. 20: 21 はなぜ重要な聖句なのか。
24. 21: 9 の意味は何か。
25. 使徒行伝21章でパウロはなぜエルサレムで投獄されたのか。
26. 23: 6-7 をあなた自身の言葉で説明しなさい。

ローマ人への手紙への導入

I. 緒言

- A. ローマ人への手紙は使徒パウロによる最も組織的かつ論理的な教義書である。この書にはローマでのパウロの境遇の影響が見られるので、「即興的」文書であるといえる。パウロをこの手紙を書く気持ちにさせた何かが起こったのだ。しかし、ローマ人への手紙にはパウロの著書の中で最も中立的な見解が述べられており、この書でパウロは福音と日々の生活における福音の意味とを明確に説明することによって特定の問題(多分ユダヤ人信徒と異邦人の教会指導者との間の嫉妬)を取り扱っている。
- B. ローマ人への手紙におけるパウロの福音の説明は教会の全世代の信徒の人生に衝撃を与えた。
1. アウグスティヌスは紀元 386 年にローマ 13: 13-14 を読んで回心した。
 2. マルティン・ルターが紀元 1517 年に詩篇 31: 1 をローマ 1: 17 (ハバクク 2: 4 を参照)と同じ内容の聖句であるとみなしたときに彼の救いの理解度は劇的に変わった。
 3. John Wesley は紀元 1738 年にローマ人への手紙を紹介したルターの説教(訳者注: 多分 Wesley の生きた時代の宣教師が記録に残っているルターの説教を紹介したものと思われる)を聞いて回心した。
- C. ローマ人への手紙を知ることはキリスト教を知ることなのだ。この手紙にはイエスの御生涯とお教えが教会の全世代の信徒にとっての基本的真理として書き記されている。

II. 著者

パウロが著者であることは間違いない。1: 1 に彼の典型的な挨拶が見られる。パウロの「肉の棘」が視力の低さであることは公認のことであるから、実際にこの手紙を書いたのはパウロ自身ではなく、書記つまり代筆者のテルティオであった(16: 22)。

III. 書かれた年代

ローマ人への手紙が書かれた年代は多分紀元 56~58 年である。この書簡は新約聖書の書の中でも書かれた年代がほぼ正確に特定されうる数少ない書の一つである。書かれた年代の特定は使徒行伝 20: 2 以降とローマ 15: 17 以降との比較によってなされる。ローマ人への手紙は多分パウロの第3回伝道旅行の終わり頃に、つまりパウロがエルサレムへ出発する直前にコリントで書かれたと思われる。

IV. 対象

ローマ人への手紙には宛先がローマだと記されている。ローマで教会を始めたのが誰であるかは分からない。

- A. この手紙は、五旬祭の日にエルサレムを訪れて回心し、教会を始めるために帰郷した人々に宛てたものと考えられる。
- B. この手紙はステパノの死後にエルサレムで起こった迫害を逃れた使徒達に宛てたものと考えられる。
- C. この手紙はパウロの伝道旅行中にローマに向かう途上で回心した人々に宛てたものと考えられる。パウロがこの教会を訪れることはなかったが、訪れたいという願いはあった(使徒行伝 19: 21 を参照)。そこには彼の友人達が数多くいた(ローマ16章を参照)。

明らかにパウロは「愛の賜物」を持ってエルサレムを訪れた後にスペインへ行く途中で(ローマ 15: 28 を参照)ローマに立ち寄るつもりだった。パウロは東地中海での自らの伝道活動が終わったと感じた。彼は新たな伝道活動の場を見出した(16: 20-23 を参照)。ギリシャにいたパウロがローマに書き送った手紙を受け取ったのはその方面へ向かっていた女性執事フェベであったようだ(ローマ 16: 1 を参照)。コリントの裏通りで紀元1世紀にユダヤ人幕屋職人が書いたこの手紙はなぜそのように重要なのだろうか。マルティン・ルターはローマ人への手紙を「新約聖書の主要な書であり最も純粋な福音書」と呼んでいる。この書の価値は、回心したユダヤ教指導者で異邦人伝道の使徒と呼ばれたタルソスのサウロ(パウロ)が福音を詳しく説いた書であるという事実に見出される。パウロの書簡の大半には伝道活動で訪れた地域の実情が色濃く描かれているが、ローマ人への手紙にはそのような傾向はない。この手紙には一使徒の長い期間持続する信仰が体系的に表わされている。

親愛なる信徒の読者の皆さんは、「信仰」「義認」「(罪の)転嫁」「扶養」「聖化」を表現するために現在用いられている専門用語の大半がローマ人への手紙に由来するものであることを認めますか。この素晴らしい手紙によって私達が共に日々の生活において自由に神の御心を探ることができるよう神に祈りましょう。

V. 書かれた目的

- A. スペインへの伝道旅行への援助を求めるため。パウロは東地中海での自らの使徒としての働きは終わったと見ていた(16: 20-23 を参照)。
- B. ローマの教会におけるユダヤ人信徒と異邦人信徒との間の問題について述べるため。これは多分ローマからの全てのユダヤ人の追放と後の帰還の結果だろう。そのことによってユダヤ人信徒の指導者達は異邦人信徒の指導者達に交代した。
- C. ローマの教会に自己紹介するため。パウロはエルサレムの誠実な回心者のユダヤ人達(使徒行伝15章のエルサレム会議)と不誠実なユダヤ人達(ガラテヤ人への手紙およびⅡコリント 3: 10-13 のユダヤ教転向信徒達)および福音を自分達の尊重する理論や哲学に混入しようとする異邦人達(コロサイ人やエペソ人)から猛烈に非難されていた。
- D. イエスのお教えを大胆不敵にふれ回る危険な改革者としてパウロは告発されていた。ローマ人への手紙はパウロが旧約聖書とイエスのお教え(福音書)を用いて自分の説く福音

がいかに真理であるかを示すことによる体系的な自己弁護の手段であった。

VI. 簡単な概要

- A. 導入部(1: 1-17)
 - 1. 挨拶(1: 1-7)
 - a. 著者(1~5節)
 - b. 宛先(6節~7節前半)
 - c. 挨拶(7節後半)
 - 2. 書く理由[動機](1: 8-15)
 - 3. 主題(1: 16-17)
- B. 神の義の必要(1: 18~3: 20)
 - 1. 異邦人世界の墮落(1: 18-32)
 - 2. ユダヤ人や異端道徳家達の偽善(2: 1-16)
 - 3. ユダヤ人の裁き(2: 17~3: 8)
 - 4. 万人への罰(3: 9-20)
- C. 神の義とは何か(3: 21~8: 39)
 - 1. 信仰のみによる義(3: 21-31)
 - 2. 義の本質: 神の約束(4: 1-25)
 - a. アブラハムの(神に対する)正しい姿勢(4: 1-5)
 - b. ダビデ(4: 6-8)
 - c. アブラハムと割礼との関係(4: 9-12)
 - d. 神のアブラハムへの約束(4: 13-25)
 - 3. 義の実現(5: 1-21)
 - a. 無償の愛、最上の喜び(5: 1-5)
 - b. 神の素晴らしい愛(5: 6-11)
 - c. アダムの違犯と神の備え(5: 12-21)
 - 4. 聖化の実践的側面(6: 1~7: 25)
 - a. 罪からの解放[自由](6: 1-14)
 - (1) 予想される異議(6: 1-2)
 - (2) 洗礼の意味(6: 3-14)
 - b. サタンの奴隷か、神の奴隷か、選ぶのはあなたがたです(6: 15-23)
 - c. 律法の下での人の結婚(7: 1-6)
 - d. 律法は善だが罪は善を妨げる(7: 7-14)
 - e. 信徒の内の善と悪との永遠の闘争(7: 15-25)
 - 5. 義の結果(8: 1-39)

- a. 聖霊による命(8: 1-17)
 - b. 被造物の救い(8: 18-25)
 - c. 聖霊の絶え間ない助け(8: 26-30)
 - d. 真理の大勝利(8: 31-39)
- D. 歴史における神の目的(9: 1~11: 32)
- 1. イスラエルの選び(9: 1-33)
 - a. 信仰の真の相続者(9: 1-13)
 - b. 神の統治(9: 14-26)
 - c. 神の、異邦人を含めた全人類の救いの御計画(9: 27-33)
 - 2. イスラエルの救い(10: 1-21)
 - a. 「神の義」対「人類の義」(10: 1-13)
 - b. 神の慈みを伝える人の必要、世界宣教への召し(10: 14-18)
 - c. イスラエルの相続くキリスト不信(10: 19-21)
 - 3. イスラエルの墮落(11: 1-36)
 - a. ユダヤ人の残党(11: 1-10)
 - b. ユダヤ人の嫉妬(11: 11-24)
 - c. イスラエルの一時的盲目(11: 25-32)
 - d. パウロのあふれんばかりの賛美(11: 33-36)
- E. 義の実践的応用(12: 1~15: 13)
- 1. 献身への召し(12: 1-2)
 - 2. 賜物の使用(12: 3-8)
 - 3. 他の信徒との関係(12: 9-21)
 - 4. 国との関係(13: 1-7)
 - 5. 隣人との関係(13: 8-10)
 - 6. 私達の主との関係(13: 11-14)
 - 7. 仲間の教会員との関係(14: 1-12)
 - 8. 私達が他者に及ぼす影響(14: 13-23)
 - 9. キリストらしさにおける関係(15: 1-13)
- F. 結論(15: 14-33)
- 1. パウロの個人的計画(15: 14-29)
 - 2. 祈りの要請(15: 30-33)
- G. 追伸(16: 1-27)
- 1. 挨拶(16: 1-24)
 - 2. 祝祷(16: 25-27)

Ⅶ. 用語と聖句の早見リスト

1. 使徒、1: 1
2. 肉によるダビデの子孫、1: 3
3. 聖なる者、1: 7
4. 義、1: 17
5. 神の怒り、1: 18
6. 悔い改め、2: 4
7. 神は分け隔てをなさいません、2: 11
8. 割礼、2: 25
9. 「神のお言葉」、3: 2
10. 義とされる、3: 4
11. なだめ、3: 25
12. 「わたしたちは苦難をも誇りとします」、5: 3
13. 「今やキリストの血によって義とされ」、5: 9
14. 義の賜物、5: 17
15. 「死んだ者は罪から解放されています」、6: 7
16. 聖化、6: 19
17. 「神の霊があなたがたの内に宿られる」、8: 9
18. アバ、8: 15
19. 忍耐、8: 25
20. 前もって知っておられた、8: 29
21. 予め定められました、8: 29
22. 栄光を受けられる、8: 29
23. 神の右、8: 34
24. 「支配する者も．．．力ある者も」、8: 38
25. 神の子としての身分、9: 4
26. 契約、9: 4
27. 「つまずきの石」、9: 33
28. 告白、10: 9
29. 「家族の者たちも」、10: 4 と 11 節
30. 自然に生えた枝、11: 21
31. 謎、11: 25
32. アーメン、11: 36
33. もてなす、12: 13
34. 呪う、12: 14

35. 「上に立つ権威に従いなさい」、13: 1
36. 「脱ぎ捨てて. . . 身につけましょう」、13: 12
37. 「信仰の弱い人」、14: 1
38. 「わたしたち強い者」、15: 1

VIII. 人物早見リスト

1. アブラハム、4: 1
2. 先祖たち、9: 5
3. エサウ、9: 13
4. バアル、11: 4
5. フェベ、16: 1
6. プリスカとアキラ、16: 3
7. ユニアス、16: 7 (KJV ではユニア)
8. テルティオ、16: 22

IX. 登場する地名の地図上の位置

1. ローマ、1: 7
2. ケンクレアイ、16: 1

X. ディスカッションのための質問

1. なぜユダヤ人はメシアなるイエスを拒絶したのか。
2. なぜギリシャ人はイエスを拒絶したのか。
3. なぜパウロは 1: 18-25 と 2: 1-5 で哲学について否定的なことを述べたのか。
4. 1: 26-31 の意味を説明しなさい。
5. 3: 10-15 は誰のことを述べているか。
6. 5: 1-8 でなぜ教会はパウロの叱責を受けたのか。
7. 6: 1-11 は現代の信徒が訴えを起こすことを妨げているか。
8. 7章でパウロは独身主義(禁欲)が神の御心であるという意味のことを述べているのか。
9. 7: 12-13 は信徒が未信者と結婚してよいという意味のことを述べているのか。
10. 8章はローマ14章とどのように似ているか。
11. なぜパウロはコリントの教会から金銭を受け取らなかったのか(9: 3-18)。
12. 9: 19-23 の意味を説明しなさい。
13. 10: 1-13 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
14. 10: 13 はなぜ信徒にとって素晴らしい聖句なのか。
15. 10: 23 の霊的原則をあなた自身の言葉で述べなさい。

16. 11: 5 は 14: 34 とどのように矛盾しているか。
17. 11: 30 は信徒の中に主の晩餐にあずかって死んだ者がいるということを意味しているのか。
18. 11: 34 でパウロが述べたことの詳細を説明しなさい。
19. 11: 7 の霊的原則の意味は何か。
20. 霊的賜物は生まれつきの資質とどのように関連しているか。信徒はいつ自身の霊的賜物を受け取るのか。
21. 12: 29-30 は「全ての信徒は異言で話すべきか」という質問にどのように答えているか。
22. 13: 8 では何が去り何が残ることになっているのか。
23. 14章は公の礼拝での異言の使用をどのように説明しているか。
24. 14章でパウロが公の礼拝への参加を制限している3つの集団とは何か。
25. 15: 1-4 の福音の要点を挙げなさい。
26. 15: 6 の出来事がイエスの御生涯の中で起こったのはいつか。
27. 15: 22 はローマ 5: 12-21 とどのように似ているか。

コリント人への手紙第一への導入 (混乱する教会への実践的助言)

I. コリント人への手紙第一の独自性

- A. この書はパウロの他の著書よりも頻繁に引用され、それらよりも前に書かれているが、そのことはこの書の重要性と有用性を示している。
- B. ローマから(紀元 180~200 年頃)書き送られた聖書正典のリストであるムラトリー断片ではこの書はパウロの著書の中で最初に挙げられているが、そのこともこの書の重要性を示している。
- C. この実用的な手紙の中でパウロは自身の個人的見解と神の御命令とをはっきりと区別している。しかし、この手紙の主題はイエスのお教えについてのパウロの知識に基づいている。パウロは自身の見解も神の啓示を受けたものであり権威あるものであると信じていた(7: 25 を参照)。
- D. 信徒の自由とそれに伴う責任に関するパウロの指導原則は律法ではなく愛に基づいている。
- E. この手紙には(コリント人への手紙第二とともに)新約聖書の時代の初期教会の様子、特にその成り立ち(教会員の人種構成と教会内の組織構造)と伝道方法とメッセージが記されている。しかし、この教会が問題の多く、模範的ではない信徒の集団であったことも覚えておかなければならない。

II. 都市コリント

- A. 冬季に船でギリシャ最南端の地(マレア岬)周辺を通る航路はとても危険であった。従って、できる限り最短距離をたどる陸路が重要であった。地理上、コリント湾(アドリア海)とサロン湾(エーゲ海)に挟まれた4マイルの地峡の上に位置しているコリントは商業(種々の陶器と特定種の真鍮製器具に特化した出荷および貿易の中心地)および軍事の大中心地となった。パウロの時代にはコリントは文字通り東西文化の出会いの場所であった。
- B. 紀元前 581 年に(ポセイドン神殿で)始まった隔年開催のコリント地峡の(体育)祭典の主催都市であったので、コリントはギリシャ・ローマ世界の文化の大中心地でもあった。規模および重要性でこの祭典に匹敵するのは、アテネで4年おきに開催されるオリンポスの(体育)祭典だけであった(トゥキディデス著「歴史」第1巻13章5節)。
- C. 紀元前 146 年にコリントはローマに対する反乱に加担(アカイア同盟の加盟都市として参加)し、市街地は将軍 Lucius Mummius の率いるローマ帝国軍によって破壊され、市民は四散した。その経済的ならびに軍事的重要性のゆえにコリントは紀元 46 年と 48 年にユリウス・カエサルの命令によって再建された。コリントはローマ帝国軍人が退役後に住む植民地となった。コリントは紀元前 27 年にはローマ帝国の建築様式と文化を模倣した、アカ

イア州の中でローマ帝国流の(元老院を最高議決機関とする)行政の中心地であった。アカイア州は紀元 15 年にローマ帝国の属州となった。

- D. 海拔 1880 フィートの高さにある、コリントの旧市街地のアクロポリス(都市の中心地)はアフロディテ神殿のある場所であった。この神殿には 1000 人の娼婦が群がっていた(Strabo 著「地理」第8巻6章20~22節)。コリント人(*Korinthiazesthai*、アリストファネス[紀元前 450~385 年]の造語)と呼ばれることは怠惰で放埒な生活を送る人と呼ばれることと同じであった。この神殿は、コリントにあった多くの神殿と同様に、パウロがコリントに来る 150 年位前に地震で崩壊し、紀元 77 年の地震でさらに崩壊した。この豊穡の神の崇拜がパウロの時代にも続いていたかどうかは明らかではない。ローマ人が紀元前 146 年にコリントの市街地を破壊し全市民を殺害あるいは奴隷としたので、コリントのギリシャ的色彩はうすれてローマ帝国の植民地としての地位にとって代わられた(Pausanias 第2巻3章7節)。

III. 著者

- A. 使徒パウロが第二回伝道旅行で来たのがこの都市であった。そのことの記述が使徒行伝 18: 1-21 に見られる。幻を通して主はパウロに、多くの人々が信じるようになり、パウロの伝道の働きへの妨害は失敗に終わることになることを明らかにされた(使徒行伝 18: 9-21 を参照)。
- B. パウロの伝道戦略は、自分の時代に大都市であった都市に教会を開拓し、その教会で回心した訪問者や行商人や船員が行く先々で福音を広めているかどうかを確認することであった。地域教会にはその所在地域において福音伝道と弟子訓練を行う責任があった。
- C. コリントでパウロは、自分と同じユダヤ人信徒であり、また同じ幕屋職人であり皮革加工技術者でもあったアキラとプリスキラに出会った。アキラとプリスキラは紀元 49 年のクラウディウス帝のユダヤ教儀式禁止の勅令(Orosius 著「歴史」第7巻6章15~16節)によってローマから追放されていた(使徒行伝 18: 2 を参照)。パウロは一人でコリントに来た。シラスとテモテはマケドニアで(パウロから)任された伝道活動の最中であった(使徒行伝 18: 5 を参照)。パウロはとても落胆した(使徒行伝 18: 9-19 と I コリント 2: 3 を参照)。しかし、パウロは耐え忍んで 18 ヶ月間コリントに滞在した(使徒行伝 18: 11 を参照)。
- D. パウロがこの書の著者であることは、紀元 95 年と 96 年にコリントへ手紙を書き送ったローマの Clement (*I Clement* 37: 5, 47: 1-3, 49: 5)によって証言されている。パウロがこの書の著者であることは、現代の学者達がいかに批判しようとも、全く疑う余地のないことなのだ。

IV. 書かれた年代

- A. パウロがコリントを訪れた年代は、デルファイで発見されたクラウディウス帝の碑文によって確定されており、ガリオが(アカイア州の)総督であった紀元 51 年の 7 月の初めから 52

年の7月にこの碑文が建てられたとされていることから(使徒行伝 18: 12-17を参照)、パウロがコリントに来た年代は紀元 49~50 年頃と考えられる。

- B. 従ってパウロがこの手紙を書いた年代は紀元 50 年代の中期のある時期と考えられる。パウロは2年間(使徒行伝 19: 10 を参照)から3年間(使徒行伝 20: 34 を参照)伝道活動を行ったエフェソスからこの手紙を書き送った。
- C. F. F. Bruce と Murry Harris の学説に若干の修正を加えると、パウロの著書の書かれた順序はこのようになると考えられる。

	書	書かれた年代	書かれた場所	使徒行伝との関係
1.	ガラテヤ人への手紙	紀元 48 年	シリアのアンテオケ	14: 28、15: 2
2.	テサロニケ人への手紙第一	紀元 50 年	コリント	18: 5
3.	テサロニケ人への手紙第二	紀元 50 年	コリント	
4.	コリント人への手紙第一	紀元 55 年	エフェソス	19: 20
5.	コリント人への手紙第二	紀元 56 年と 57 年	マケドニア	20: 2
6.	ローマ人への手紙	紀元 57 年	コリント	20: 3
7. ~10. 獄中書簡				
7.	コロサイ人への手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
8.	エペソ人への手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
9.	フィレモンへの手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
10.	ピリピ人への手紙	紀元 62 年後半 ~ 63 年	ローマ	28: 30-31
11. ~13. 第4回伝道旅行				
11.	テモテへの手紙第一	紀元 63 年(あるいはそれ以降。ただし紀元 68 年より前)	マケドニア	
12.	テトスへの手紙	紀元 63 年	エフェソス(?)	
13.	テモテへの手紙第二	紀元 64 年	ローマ	

V. この手紙の宛先

- A. この手紙は教会員の大半が異邦人で構成される開拓されて間もない教会に宛てて書か

れた。コリント市民の人種と文化は様々であった。考古学と聖句(使徒行伝 18: 4-8 を参照)からコリントには会堂があったことが分かっている。

- B. ローマ帝国軍人は 20 年間の兵役を終えた後にコリントに住んだ。コリントは自由都市であり、ローマ帝国の植民地であり、ローマ帝国の属州アカイアの州都であった。
- C. この手紙はいくつかの集団を反映しているようだ。
 - (1) 自分達の哲学の伝統にとても誇りを持ち続けており、信徒への啓示を自分達の古い慣習や知識の伝統に融合させようとするギリシャの知識人達
 - (2) ローマの後援者達や社会的エリート達
 - (3) 大半が「神を恐れる」異邦人で構成されている、会堂に集まっているユダヤ人信徒の分派
 - (4) 大多数の回心した奴隷達

VI. この手紙の書かれた目的

- A. コリントで増大しつつあった問題をパウロは下記の4つの情報源によって知った。
 - 1. クロエ家の人々、1: 11
 - 2. 教会からの質問の手紙、7: 1 と 25 節、8: 1、12: 1、16: 1 と 12 節
 - 3. 教会の人々からの報告
 - 4. ステファナ、フォルトナト、アカイコの個人的訪問、16: 17。この3人が 2. の手紙を持ってきたようだ。パウロが教会から得た情報をもとにして M. J. Harris がコリント人への手紙第一の概略を記しているのは興味深い。
 - 1. クロエ家の人々からの口頭での報告。パウロはこの報告をもとに1~4章を書いた。
 - 2. 教会の代表者(ステファナ、フォルトナト、アカイコ)からの口頭での報告。パウロはこの報告をもとに5~6章を書いた。
 - 3. 教会からの質問の手紙。パウロはこの報告をもとに7~16章を書いた。
- B. 教会は分裂し、各分派はそれぞれ異なる指導者についた。パウロ、アポロ、ペテロ、あるいはイエスに(1: 12 を参照)。教会の分裂の原因は分派だけでなく種々の道徳的問題および霊的賜物の用い方についての意見の対立であった。主な論点はパウロの持つ権威にあったのだ。

VII. パウロとコリントの教会との交流—暫定的提唱

- A. パウロがコリントに手紙を書き送った回数
 - 1. 2回だけ。コリント人への手紙第一と第二
 - 2. 3回。うち一通は紛失。
 - 3. 3回。うち二通は紛失。

4. 現代の学者達の中には、紛失した二通の手紙の一部をコリント人への手紙第二の中に発見した者がいる。
- コリント人への手紙以前の手紙(Ⅰコリント 5: 9)をⅡコリント 6: 14~17: 1に
 - 厳しい内容の手紙(Ⅱコリント 2: 3-4 と 9 節、7: 8-12)をⅡコリント10~13章に
5. 5回。Ⅱコリント10~13章は5通目の手紙であり、テトスがさらに悪い知らせを報告した後に書き送られた。
- B. A.の 3. の理論が最も合理的であると思われる。
- コリント人への手紙以前の手紙。紛失(Ⅰコリント 5: 9)
 - コリント人への手紙第一
 - 厳しい内容の手紙(多分その一部はⅡコリント 2: 1-11 と 7: 8-12 の中に記されている)
 - コリント人への手紙第二
- C. この手紙の再構成についての学説

年代	訪問	手紙
紀元 50~52 年 パウロの第2回伝道旅行	第2回伝道旅行でパウロは 18 ヶ月間コリントに滞在した(使徒行伝 18: 1-11 を参照)。	
紀元 52 年 ガリオは紀元 52 年から(アカイア州の)総督であった(使徒行伝 18: 12-17 を参照)。		Ⅰコリント 5: 9-11 は教会内の不道德な状況についての手紙であると思われる。この手紙は、一部の解説者が示唆しているように、Ⅱコリント 6: 14~7: 1 がその一部であるか、あるいはⅡコリント 2: 3 と 4 節と 9 節が使徒を主語とするアオリスト(不定過去)時制の文であり、さらにコリント人への手紙第二について述べている限りは未知である。

<p>紀元 56 年(春)</p>	<p>エフェソスにいるときにパウロは教会内の問題についてクローエ家の人々(Ⅰコリント 1: 11)とステファナ、フォルトナト、アカイコの3名(Ⅰコリント 16: 17)から聞いていた。明らかにステファナ、フォルトナト、アカイコの3名はコリントの家庭教会からの質問の手紙を持ってきてパウロに渡した。</p>	
<p>紀元 56 年(冬)あるいは 紀元 57 年(冬)</p>	<p>パウロは緊急に、痛みを伴いながらコリントを訪れた(使徒行伝には記されていない。Ⅱコリント 2: 1 を参照)。この訪問は失敗であったが、パウロは再び訪れると誓った。</p> <p>パウロはトロアスでテスに会う計画を立てたが、テスが来なかったためマケドニア(Ⅱコリント 2: 13 および 7: 5 と 13 節を参照)に行った。ピリピにも行ったようだ(MSS の B^c、K、L、P を参照)。</p>	<p>パウロはコリント人への手紙第一を書くことでこれらの質問に答えた(Ⅰコリント 7: 1 と 25 節、8: 1、12: 1、16: 1 と 12 節を参照)。テモテ(Ⅰコリント 4 章 17 節を参照)はエフェソスから(Ⅰコリント 16: 8 を参照)返事の手紙をコリントに出した。テモテには教会内の問題を解決できなかったのだ。</p> <p>パウロは厳しい内容の手紙(Ⅱコリント 2: 3-4 と 9 節、7: 8-12 を参照)をコリントの家庭教会に宛てて書き、テスに届けさせた(Ⅱコリント 2: 13 および 7: 13-15 を参照)。この手紙は、一部の解説者が示唆しているように、その一部がⅡコリント 10~13 章に含まれている限りは未知である。</p>

紀元 57～58 年(冬)	パウロのコリント訪問の最後の記録は使徒行伝 20: 2-3 にあるようだ。その聖書箇所にもコリントの名は述べられていないが、それがパウロの最後のコリント訪問であると推定されている。パウロは冬の数ヶ月間コリントに滞在した。	パウロはテスに会い、教会が自分の指導力に対して応答していることを聞き、大いなる感謝を込めてコリント人への手紙第二を書いて(7: 11-16 を参照)テスに届けさせた。 1～9章と10～13章の間の劇的な(文法上の)法の変化は、一部の学者達によって、1～9章が書かれた後にコリントの家庭教会からもたらされたより悪い知らせ(多分以前からいる反抗勢力の再発生と新たな反抗勢力の参入)と説明されている(F. F. Bruce の学説)。
---------------	--	---

VIII. 結論

- A. コリント人への手紙第一には教会内の問題に対する牧師パウロの取り扱いが見られる。この手紙とガラテヤ人の手紙にはパウロが教会の必要に応じて普遍の真理を様々な形で適用しているのが見られる。教会の必要とは、ガラテヤの教会の場合は自由、コリントの教会の場合は自制であった。
- B. この書は一連の「文化の恐竜」であるとともに特定の歴史的・文化的背景に適用される真理の宝庫でもある。真理とその真理を文化に適用することとを混同しないように気をつけなければならない。この聖書解釈上のとても重要な問題は Gordon D. Fee と Douglas Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* 中で十分に議論されている。
- C. この書は私達が自身の霊的な聖書解釈能力の限界に挑戦する上で助けとなるだろう。この書によって私達は自身の神学の内容を考え直さなければならなくなるだろう。聖書中の他の書による場合と同じように、この書によって私達は自分達の生きている時代に対する神の御心、つまり実用的なお言葉を知ることになるだろう。

IX. コリント人への手紙第一の簡単な概要

- A. 導入部(1: 1-9)
 - 1. 挨拶(1: 1-3)

- 2. 感謝(1: 4-9)
- B. コリントの教会内の問題についての報告(1: 10~6: 20)
 - 1. クリスチャンの指導者(パウロ、アポロ、ペテロ)の指導方針とメッセージに対する誤解による教会内の分裂(1: 10~4: 12)
 - 2. 衝撃的な不道徳さ(5: 1-13)
 - 3. クリスチャンの訴訟(6: 1-11)
 - 4. 責任によって制限されたクリスチャンの自由(6: 12-20)
- C. コリントからの質問責めの手紙(7: 1~16: 4)
 - 1. 人の性的性質(7: 1-40)
 - 2. 偶像崇拜の文化とクリスチャンの自由との関係(8: 1~11: 1)
 - 3. クリスチャンの礼拝と霊的性質(11: 2~14: 40)
 - 4. 終末論、特に復活についての洞察(15: 1-58)
 - 5. エルサレムの母教会への言葉(16: 1-4)
- D. 結語
 - 1. パウロ(と同行する伝道者達)の旅行計画(16: 5-12)
 - 2. 最後の祝祷と挨拶(16: 13-24)

X. 用語と聖句の早見リスト

- 1. 聖なる者、1: 2
- 2. 世、2: 7 と 8 節
- 3. 「神の深み」、2: 10
- 4. 「神の建物」、3: 9
- 5. 「あなたがたは神の神殿です」、3: 16 と 17 節
- 6. 「神の秘められた計画」、4: 1
- 7. 「このような者をサタンに引き渡したのです」、5: 5
- 8. 「わたしたちは天使たちを裁くことがある」、6: 3
- 9. 「あなたがたの中にはそのような者もいました」、6: 11
- 10. 「未婚の人たちについて」、7: 25
- 11. 「わたし自身が失格者となってしまうためです」、9: 27
- 12. 「悪霊への献げ物」、10: 20
- 13. 「主の杯を飲む」、10: 21
- 14. 「天使たちのために」、11: 10
- 15. 「あなたがたの間に仲間割れがあると聞いています」、11: 18
- 16. 「イエスは呪われる」、12: 3
- 17. 「霊を見分ける」、12: 10

18. やかましいシンバル、13: 1
19. 「完全なものが来るとき」、13: 10
20. 「鏡の中にぼんやりと見ている」、13: 12
21. 預言、14: 39
22. 滅ぼす、15: 24
23. 聖なる者たち、16: 1

X I . 人物早見リスト

1. ソステネ、1: 1
2. クロエ家の人々、1: 11
3. アポロ、1: 12
4. ケファ、1: 12
5. クリスポとガイオ、1: 14
6. この世の支配者たち、2: 6 と 8 節
7. 自然の人、2: 14
8. 霊の人、3: 1
9. キリストの赤子、3: 1
10. ケファ、15: 5
11. 十二人、15: 5
12. ヤコブ、15: 7

X II . 登場する地名の地図上の位置

1. コリント、1: 2
2. ガラテヤの諸教会、16: 1
3. エルサレム、16: 3
4. マケドニア、16: 5
5. エフェソス、16: 8
6. アカイア、16: 15
7. アジア、16: 19

X III . ディスカッションのための質問

1. なぜユダヤ人はメシアなるイエスを拒絶したのか。
2. なぜギリシャ人はイエスを拒絶したのか。
3. なぜパウロは 1: 18-25 と 2: 1-5 で哲学について否定的なことを述べたのか。
4. 1: 26-31 の意味を説明しなさい。

5. 3: 10-15 は誰のことを述べているか。
6. 5: 1-8 でなぜ教会はパウロの叱責を受けたのか。
7. 6: 1-11 は現代の信徒が訴えを起こすことを妨げているか。
8. 7章でパウロは独身主義(禁欲)が神の御心であるという意味のことを述べているのか。
9. 7: 12-13 は信徒が未信者と結婚してよいという意味のことを述べているのか。
10. 8章はローマ14章とどのように似ているか。
11. なぜパウロはコリントの教会から金銭を受け取らなかったのか(9: 3-18)。
12. 9: 19-23 の意味を説明しなさい。
13. 10: 1-13 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
14. 10: 13 はなぜ信徒にとって素晴らしい聖句なのか。
15. 10: 23 の霊的原則をあなた自身の言葉で述べなさい。
16. 11: 5 は 14: 34 とどのように矛盾しているか。
17. 11: 30 は信徒の中に主の晩餐にあずかって死んだ者がいるということを意味しているのか。
18. 11: 34 でパウロが述べたことの詳細を説明しなさい。
19. 11: 7 の霊的原則の意味は何か。
20. 霊的賜物は生まれつきの資質とどのように関連しているか。信徒はいつ自身の霊的賜物を受け取るのか。
21. 12: 29-30 は「全ての信徒は異言で話すべきか」という質問にどのように答えているか。
22. 13: 8 では何が去り何が残ることになっているのか。
23. 14章は公の礼拝での異言の使用をどのように説明しているか。
24. 14章でパウロが公の礼拝への参加を制限している3つの集団とは何か。
25. 15: 1-4 の福音の要点を挙げなさい。
26. 15: 6 の出来事がイエスの御生涯の中で起こったのはいつか。
27. 15: 22 はローマ 5: 12-21 とどのように似ているか。

コリント人への手紙第二への導入

I. 緒言

- A. この書にはパウロの他の書簡以上に異邦人に対する彼の使徒としての愛情と関心が表れている。この書は事実上パウロの自伝である。
- B. この書には、パウロ自身と同様に、彼の浮き沈みする霊的レベルの変化と、怒りから大いなる喜びまで移り変わる彼の感情の自由な流れとが見慣れない組み合わせ方で記されている。
- C. この書は事実上一通の手紙であり、一通の手紙としては会話の一人称で記されている。論理的な前提と背景の多くは失われている。このことは、新約聖書の使徒書簡が本来は神学の論文としてではなく特別な必要に対する応答として書かれているという事実の良い例である。
- D. この書は学者達からは無視され、説教では話題として取り上げられてはいない。この書にパウロの最も衝撃的な比喩が見られることを考えると、このことは不運といえる。この書はパウロが信徒の受難について最も詳細に議論した書でもある。
- E. 牧師にとってこの書は地域教会に関する問題の解決方法を模索するうえで助けとなる。個人攻撃や誤解のただ中にある信徒にパウロは(問題解決の)全事例を示してくれている。

II. 歴史的背景

A. 著者

- 1. 聖書中の各書の著者が誰であるかについての伝統的見解が現代では否定されているなかで、パウロがこの書の著者であることは全く疑われていない。
- 2. この書は自伝的色彩が非常に濃く、一部がとても理解し難いので、誰かがパウロの文体をまねてこの様な書を書いた可能性は極めて低い。模倣が困難であることはパウロがこの書の著者であることの信憑性を示している。
- 3. 1: 1 と 10: 1 にはパウロが著者であると記されている。私 (Uttley) はこのことが著者に対する疑問を解決していると思う。

B. 書かれた年代

- 1. コリント人への手紙第二の書かれた年代はコリント人への手紙第一と使徒行伝の書かれた年代と密接に関連している。
- 2. 使徒行伝 18: 1-18 と 20: 2-3 はパウロのコリント滞在と関連しているが、記録にない訪問も少なくとも1回あったようだ(Ⅱコリント 2: 1. 3回目の訪問は 12: 14 と 13: 1-2 に述べられている)。
- 3. パウロのコリント訪問の時期とパウロがコリントに手紙を書き送った時期との関係が

主な疑問となっていることである。

4. コリント関連の出来事の年代特定における現実問題は、2通のコリント人への手紙自体の不明確な内的証拠以外に、使徒行伝 18: 1-18 と 20: 2-3 の間の外的証拠つまり情報が無いということである。

5. パウロとコリントの教会との交流—暫定的提唱

年代	訪問	手紙
<p>紀元 52 年 (ガリオは紀元 52 年から[アカイア州]総督であった。使徒行伝 18: 12 を参照)。</p>	<p>第2回伝道旅行でパウロは 18 ヶ月間コリントに滞在した(使徒行伝 18: 1-11 を参照)。</p> <p>エフェソスにいるときにパウロは教会内の問題についてクロエ家の人々(I コリント 1: 11) とステファナ、フォルトナト、アカイコの3名(I コリント 16: 17) から聞いていた。明らかにステファナ、フォルトナト、アカイコの3名はコリントの家庭教会からの質問の手紙を持ってきてパウロに渡した。</p>	<p>I コリント 5: 9-11 は教会内の不道徳な状況についての手紙であると思われる。この手紙は、一部の解説者が示唆しているように、II コリント 6: 14~7: 1 がその一部である限りは未知である。</p>
<p>紀元 56 年(春)</p>	<p>パウロは緊急に、痛みを伴いながらコリントを訪れた(使徒行伝には記されていない。II コリント 2: 1 を参照)。この訪問は失敗であったが、パウロは再び訪れると誓った。</p> <p>パウロはトロアスでテスに会う計画を立てたが、テスが来なかったためマケドニア(II コリント 2: 13 および 7: 5 と 13 節を参照)に行った。ピリピにも行ったようだ(MSS の B^c、K、L、P を参照)。</p>	<p>パウロはコリント人への手紙第一を書くことでこれらの質問に答えた(I コリント 7: 1 と 25 節、8: 1、12: 1、16: 1 と 12 節を参照)。テモテ(I コリント 4 章 17 節を参照)はエフェソスから(I コリント 16: 8 を参照)返事の手紙をコリントに出した。テモテには教会内の問題を解決できなかったのだ。</p>

<p>紀元 56 年(冬)あるいは 紀元 57 年(冬)</p>		<p>パウロは厳しい内容の手紙（Ⅱコリント 2: 3-4 と 9 節、7: 8-12 を参照）をコリントの家庭教会に宛てて書き、テスに届けさせた（Ⅱコリント 2: 13 および 7: 13-15 を参照）。この手紙は、一部の解説者が示唆しているように、その一部がⅡコリント 10～13 章に含まれている限りは未知である。</p> <p>パウロはテスに会い、教会が自分の指導力に対して応答していることを聞き、大いなる感謝を込めてコリント人への手紙第二を書いて（7: 11-16 を参照）テスに届けさせた。</p>
<p>紀元 57～58 年(冬)</p>	<p>パウロのコリント訪問の最後の記録は使徒行伝 20: 2-3 にあるようだ。その聖書箇所にはコリントの名は述べられていないが、それがパウロの最後のコリント訪問であると推定されている。パウロは冬の数ヶ月間コリントに滞在した。</p>	<p>1～9 章と 10～13 章の間の劇的な（文法上の）法の変化は、一部の学者達によって、1～9 章が書かれた後にコリントの家庭教会からもたらされたより悪い知らせ（多分以前からいる反抗勢力の再発生と新たな反抗勢力の参入）と説明されている（F. F. Bruce の学説）。</p>
<p>紀元 62～68 年</p>	<p>牧会書簡に第 4 回伝道旅行の部分的な記録があるなら、1 回以上の訪問の可能性はある。</p>	

C. パウロがコリントに手紙を書き送った回数

1. 2 回だけ。コリント人への手紙第一と第二
2. 3 回。うち一通は紛失。
3. 3 回。うち二通は紛失。
4. 現代の学者達の中には、紛失した二通の手紙の一部をコリント人への手紙第二の中に

発見した者がいる。

- a. コリント人への手紙以前の手紙(Ⅰコリント 5: 9)をⅡコリント 6: 14~17: 1に
 - b. 厳しい内容の手紙(Ⅱコリント 2: 3-4 と 9 節、7: 8-12)をⅡコリント10~13章に
5. 5回。Ⅱコリント10~13章は5通目の手紙であり、テトスがさらに悪い知らせを報告した後に書き送られた。
6. 私(Utley)は 3. が適していると思う。
1. コリント人への手紙以前の手紙。紛失(Ⅰコリント 5: 9)
 2. コリント人への手紙第一
 3. 厳しい内容の手紙(多分その一部はⅡコリント 2: 1-11 と 7: 8-12 の中に記されている)
 4. コリント人への手紙第二

D. コリントにおけるパウロの敵

1. 第一の問題は生粋のコリント人(コリントで生まれ育った人々)に関するものであったようだ。彼らの不道德な異教崇拝とギリシャ哲学の思想背景がその問題の源であったと思われる(Ⅱコリント 2: 1-11 と 6: 14~7: 1)。
2. パウロのもうひとつの敵は、パレスティナからやって来て問題を起こすユダヤ人達であった。このユダヤ人達は、ユダヤ教に転向したガラテヤ人信徒達やコロサイのユダヤ人あるいはギリシャ人律法学者達とは異なっていた(Ⅱコリント10~13章)。

E. コリント人への手紙第二の書かれた理由と目的

コリント人への手紙第二の書かれた目的は下記の3つに大別される。

1. パウロの指導に対して教会が積極的に応答していることへの感謝(7: 11-16)
2. 教会にパウロの3回目の訪問に備えさせるため(10: 1-11)
[パウロの2回目の訪問は明らかに苦痛を伴い、失敗に終わった。]
3. パウロの人間性と伝道の動機および使徒としての権威ならびに伝えている福音を拒絶する、巡回布教(説教)者であるユダヤ人偽教師達(10~12章)への反論のため

F. 簡単な概要

1. この書の要約は以下の理由で非常に難しい。
 - a. (パウロの)気分の移り変わり
 - b. 様々な主題
 - c. 冗長な括弧(2: 14~7: 1 あるいは 7: 4)
 - d. 地域教会の状況についての限られた知識
2. しかし、明らかに主題は3つに大別される。
 - a. パウロはテトスの手紙に回答して旅行計画を練った、1~7章(パウロの使徒としての働きを記した箇所が大括弧で括られている[2: 14~7: 1 あるいは 7: 4])。
 - b. エルサレムの教会への援助を全うするというパウロの励まし、8~9章
 - c. 自らの使徒としての権威についてのパウロの弁護、10~13章

3. 私 (Utlely) はコリント人への手紙第二の統一性を認める。
 - a. ギリシャ語原典のいずれにも不一致の兆候が見られない。
 - b. 文章単位に多様性が見られない。
 - c. 13の章全てを含んでいないMSはない。
4. 明らかにローマの Clement が紀元 96 年に記した著書では知られていなかったにもかかわらず、Polycarp は紀元 105 年に記した著書でコリント人への手紙第二を引用している。
5. コリント人への手紙第二はひとつの文章単位として理解されうる。統一性を示す「受難」のような特定の主題(複数)があるようだ。
6. 内的証拠は非常に限られていて、コリント人への手紙第二を強制的に分割する行為に対する弁護を行うには不十分である。

Ⅲ. 用語と聖句の早見リスト

1. 恵みと平和、1: 2
2. 「わたしたちの主イエスの来られる日に」、1: 14
3. 証印を押して、1: 22
4. 「わたしたちを勝利の行進に連ならせ」、2: 14
5. 甘い香り、2: 14
6. 「神の言葉を売り物にする」、2: 17
7. 「推薦状」、3: 1
8. 「これは主の霊の働きによることです」、3: 18
9. 外なる人、4: 16
10. 内なる人、4: 16
11. 地上の幕屋、5: 1
12. 「証しとしての霊」、5: 5
13. 新しく創造されたもの、5: 17
14. 和解させた、5: 18
15. 「わたしたちの戦いの武器は肉のものではなく」、10: 4
16. 光の天使、11: 14
17. 第三の天、12: 2
18. 楽園、12: 4
19. 聖なる口づけ、13: 12

Ⅳ. 人物早見リスト

1. 「この世の神々」、4: 4

2. ベリアル、6: 15
3. テトス、7: 6

V. 登場する地名の地図上の位置

1. アカイア、1: 1
2. アジア、1: 8
3. マケドニア、1: 16
4. ユデア、1: 16
5. コリント、1: 23
6. トロアス、2: 12
7. ダマスコ、11: 32

VI. ディスカッションのための質問

1. 1: 20 の神学的意味を説明しなさい。
2. 3: 6 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
3. 用語「覆う」は3章でどのように2通りの意味で用いられているか(4: 3)。
4. 4: 7-11、6: 4-10、11: 23-28 でのパウロの受難を挙げなさい。
5. 信徒はキリストの裁きの御座の前に出ることになっているのか。もしそうなら、それは何のためか。
6. 5: 14-15 の霊的原則をあなた自身の言葉で述べなさい。
7. 5: 21 で述べられている教義は何か。
8. 8~9章に見られる施しの原則を挙げなさい。
9. 10: 10 でパウロの敵はパウロについてどのように述べているか。
10. 11: 4 でパウロは誰について述べているか。
11. 11: 21-30 に見られるパウロの自身と他者との比較のし方を挙げなさい。
12. パウロの肉の棘とは何か(12: 7)。

ガラテヤ人への手紙への導入

I. 緒言

- A. ガラテヤ人への手紙は、キリストお一人への信仰のみを通した、恵みだけによる救いの斬新で自由な真実の最も明確な表現のひとつである。それはしばしば「クリスチャンの自由のマグナ・カルタ」と呼ばれている。
- B. この手紙はプロテスタント派による宗教改革の炎をかき立てた。
1. Martin Luther は「ガラテヤ人への短い手紙は私の手紙である。私はその手紙と婚約している。その手紙は私の妻である。」と言っている。
 2. John Wesley はガラテヤ人への説教に永久の平和を見出した。
 3. Curtis Vaughan は自著 *Study Guide Commentary* の11ページで「(ガラテヤ人への手紙ほど)人々の精神により深く影響し、とても長い人類の歴史をつくり、そして現代生活の最大の要求とのこれほどの適合性を語り続けている書は他にない」と述べている。
- C. この教義(教理)指向の手紙はおそらくパウロが(信徒向けに)最初に書いた手紙でローマ人への手紙の前に書かれたものであり、それが信仰を通した恵みによる義認の教義(教理)へと発展したことは、ユダヤ教においてモーセの律法を守ることが強調されていることや長老たちの伝統(口伝の伝統)とは別のことである。
1. 救いは律法と恵みのどちらにも見出すことはできない。
 2. 救いは律法と恵みのどちらにも見出されなければならない。
 3. キリストのようになることは真の回心の後に起こることである。
 4. クリスチャン的な律法尊重主義に注意せよ。
- D. 信仰のみを通した、恵みだけによる、この斬新で自由な救いは私達の生きる時代に切に求められている。なぜならそれが私達の自己中心的で行い指向の宗教意識を繰り返し少しずつ刺激するからである。いつの時代も、人間の悔い改めと謙遜な信仰を通して仲介される、神の始められた自己犠牲的で無条件の契約の愛は試されているのだ。それは偽りの教師が救いにおけるキリストの中心的位置を拒絶していたということではなく、彼らがキリストを虚飾していたということである。それは私達が付け加えることではなく、私達がいかなることでも付け加えているということである。

II. 著者

パウロがこの手紙を書いたことは、手紙の内容がパウロの主張の根本を成していることから全く疑う余地がない。ガラテヤ人への手紙はとても自伝的で個人的である。この手紙は読むと非常に心を動かされるが、一方で論理的に正確である。

Ⅲ. 書かれた時代と宛先人

- A. 背景的事柄のこれら2つの特徴は一緒に取り扱われなければならない。なぜなら、宛先人の識別に関する2つの相反する理論がこの手紙の書かれた年代の決定に影響するからである。この2つの理論はどちらも論理的な重要性を有し、数少ない聖書的な証拠を含む。
- B. それら2つの理論は：
1. 18世紀まで通説であった伝統的な理論
 - a. それは「北部ガラテヤ人理論」と呼ばれている。
 - b. それはトルコの北部中央平原の少数民族のガラテヤ人を言い表した「ガラティア」であると思われる（Ⅰペテロ 1:1を参照）。これらの少数民族のガラテヤ人は紀元前3世紀にこの地域に侵入したケルト人（ギリシャ語の *Keltoi* やラテン語の *Gall*）であった。彼らは西ヨーロッパの同類の部族と区別するために「ガロ-ギリシャ人」と呼ばれている。彼らは紀元前230年にペルガマンの王アタラスⅠ世の支配下に置かれた。彼らの地理上の支配地は小アジアの北部中央地域、つまり現在のトルコに限定された。
 - c. もしこの少数民族である可能性を考慮すれば、この手紙の書かれた年代はパウロが第二あるいは第三の伝道旅行をした紀元50年代半ばであると考えられる。パウロはシラスとテモテとともに旅をしたようだ。
 - d. ガラテヤ 4:13でパウロの罹った病気はマラリアだと言う研究者もいる。彼らは、パウロはマラリア感染者の多い海岸沿いのじめじめした低地を去って北部の高地へと移動したのだと主張している。
 2. 第2の理論は Wm. M. Ramsay 卿著 *St. Paul the Traveller and Roman Citizen* (New York の G. P. Putnam's Sons が 1896年に刊行) によって擁護されている。
 - a. 伝統的な理論が「ガラティア」を少数民族と定義しているように、この理論はその語を行政(管理)官と定義している。パウロはしばしばローマ帝国の州の名前を用いたようだ（Ⅰコリント 16:19、Ⅱコリント 1:1と8:1などを参照）。ローマ帝国のガラテヤ州は少数民族の住んでいた「ガラティア」より大きな地域を含んでいた。これらの少数民族のケルト人はごく初期からローマ帝政を支持し、(他地域)より大きな地方自治権と領土支配権を与えられていた。もしこの広大な地域が「ガラティア」の名で知られていたならば、使徒行伝13～14章に記されている、ピシディア州のアンティオキア、リストラ、デルベ、イコニオンなどのこれら南部の都市へのパウロの最初の伝道旅行でこれらの都市に教会が開かれた可能性がある。
 - b. もしこの「南部理論」が正しいとするならば、ガラテヤ人への手紙が書かれた年代はかなり早い時期、つまりガラテヤ人への手紙について同じ議題が話し合われた使徒行伝15章の「エルサレム会議」に近いがそれ以前であったと考えられる。その会議は紀元48～49年に開かれたが、ガラテヤ人への手紙は多分それと同時期に書かれたのだろう。も

しこのことが真実なら、ガラテヤ人への手紙は新約聖書のパウロの手紙の中で最初のものということになる。

c. 南部ガラテヤ人理論を裏づけるいくつかの証拠がある。

(1) パウロと一緒に旅行した人の名前については述べられていないが、バルナバの名は3回登場する(2: 1と9節と13節を参照)。これはパウロの最初の伝道旅行の事実と合致する。

(2) テトスは割礼を受けていないと言われている(2: 1~5を参照)。これは、ガラテヤ人への手紙が書かれた年代が使徒行伝15章の「エルサレム会議」以前であったという考えと最もよく合致する。

(3) ペテロの発言(2: 11~14を参照)と異邦人との交わりの問題は、ガラテヤ人への手紙が書かれた年代が使徒行伝15章の「エルサレム会議」以前であったという考えと最もよく合致する。

(4) エルサレムに金銭が持ち込まれたときに、様々な地域(使徒行伝 20: 4を参照)出身のパウロの仲間数名が列挙されている。しかしガラティア北部出身の者は、これら少数部族のガラテヤ人が教会に出席していたことを私達が知っているにもかかわらず、全く挙げられていない(I コリント 16: 1を参照)。

3. これらの理論に関する様々な議論の詳細については専門的な注解書を参照せよ。それらはそれぞれ正当な観点を有しているが、時間に関するこの点において見解は一致しておらず、「南部理論」が全ての事実と最もよく合致するようだ。

C. ガラテヤ人への手紙と使徒行伝の関係

1. パウロはエルサレムを5回訪れており、そのことは使徒行伝の中でルカにより記されている。

- a. 9: 26~30、彼自身の回心後
- b. 11: 30と12: 25、異邦人の教会から飢餓の救済をするため
- c. 15: 1~30、エルサレム会議
- d. 18: 22、短期訪問
- e. 21: 15 前半、異邦人の働きの新たな説明

2. ガラテヤ人への手紙にはエルサレムを2度訪れたと記されている。

- a. 1: 18、3年後
- b. 2: 1、14年後

3. 使徒行伝 9: 26 がガラテヤ人への手紙 1: 18 と関連があることは最も確からしいようだ。

使徒行伝 11: 30 または 15: 1 前半あるいは記録にない訪問は多分ガラテヤ人への手紙 2: 1 でも述べられている。

4. 使徒行伝 15 章とガラテヤ人への手紙 2 章の記述にはいくつかの相違点があるが、これは多分以下に示すようなことによる：

- a. 見解の相違
- b. パウロとルカの意図の相違
- c. ガラテヤ人への手紙 2 章は、使徒行伝 15 章に記された会議の少し前に書かれ、その会議と関連があるかもしれないという事実

IV. この手紙の書かれた目的

A. パウロは偽りの教師達のメッセージについて特定の地域3箇所の名を挙げている。これらの異端者達は、クリスチャンになる前にユダヤ教徒にならなければならないと信じていたので、「ユダヤ教徒化した人々」と呼ばれてきた(6: 12 を参照)。彼の関心はユダヤ教徒化した人々への非難にあった。

1. パウロは現実には(他の)12使徒のような使徒ではなかった(使徒行伝 1:21-22 を参照)。そのため彼は使徒の権威、つまり少なくともエルサレムの母教会の権威に頼っていた。
2. パウロのメッセージは偽りの教師達の誤ったメッセージとは異なっていた。このメッセージは「律法とは別の信仰による義認」の概念と直接関連があるようだ。エルサレムの伝道者達は自分達の個人的生活においてまだ非常にユダヤ教的であった。
3. 自由思想(主義)の中のある概念がある意味でこれらの教会と関係があった(5: 18~6: 8 を参照)。まさしくこれをどのように説明すべきかが議論されている。パウロの手紙の中で2つのグループ、つまりユダヤ教徒化した人々とグノーシス主義者に注目する研究者もいる(4: 8-11 を参照)。しかし、これらの節は偶像崇拜と関連づけるのが最もよいようだ。信仰あるユダヤ教徒は信仰ある異教徒の生活様式に関心があった。パウロの斬新で自由な恵みはどのように偶像崇拜と関連があり、そしてそれを超越したのか？

B. 教義(教理)上はこの手紙はパウロのローマ人への手紙ととてもよく似ている。これら2つの手紙は、様々な状況の中で反復され発展したパウロの主要な教義(教理)を含んでいる。

V. 簡単な概要

- A. 序文、1: 1-10
 1. この手紙の一般的な紹介
 2. この手紙が書かれた理由
- B. 自らの使徒の地位についてのパウロの弁護、1: 11-2: 14
- C. 自らの福音の教義(教理)的真理についてのパウロの弁護、2: 15-4: 20
- D. 自らの福音の実践的意味についてのパウロの弁護、5: 1-6: 10
- E. 個人的要約と結語、6: 11-18

VI. 用語と聖句の早見リスト

1. 「今のこの悪の世」、1: 4

2. 他の福音、1: 6
3. ユダヤ教、1: 13
4. 先祖からの伝統、1: 14
5. 「決してそうではありません」、2: 17
6. 「ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち」、3: 1 と 3 節
7. 惑わした、3: 1
8. 「あれほどのことを体験したのは無駄だったのですか」、3: 4、4: 11
9. 「呪われている」、3: 10
10. 「その子孫」、3: 16
11. 「天使たちを通し、仲介者によって定められた」、3: 19
12. 「わたしたちは律法の下に囚われていました」、3: 23
13. 「諸霊」、4: 3 と 9 節
14. アバ、4: 6
15. 「体の病」、4: 13
16. 「奴隷の女から... 自由な身の女から」、4: 23
17. たとえて言うなら、4: 24
18. 「霊によって歩みなさい」、5: 16
19. 霊の実、5: 22
20. 「こんなに大きな字」、6: 11
21. キリストの焼き印、6: 17

VII. 人物早見リスト

1. 「天使たち」、1: 8
2. ケファ、1: 18
3. バルナバ、2: 1
4. テトス、2: 2
5. 「名ある人々」、2: 2 と 6 節
6. 「偽の兄弟たち」、2: 4
7. 「柱と見られる名ある人々」、2: 9
8. 「割礼を受けている者たち」、2: 12
9. 「後見人や管理人」、4: 2
10. ハガル、4: 25

VIII. 登場する地名の地図上の位置

1. ガラテヤの諸教会、1: 2

2. アラビア、1: 17
3. ダマスコ、1: 17
4. シリア、1: 21
5. キリキア、1: 21
6. アンテオケ、2: 11

Ⅸ. ディスカッションのための質問

1. 1: 11-12 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
2. パウロはなぜ神の教会を迫害したのか(1: 13)。
3. テトスに割礼を受けさせたいと思う者たちがいたのはなぜか(2: 3)。
4. 2: 6 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
5. ガラテヤ 2: 16 はこの書全体の主題といえるかもしれない。なぜか。
6. 2: 20 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
7. 3: 3 のパウロの問いにあなたはどのように答えますか。
8. パウロがガラテヤ 3: 6-8 で創世記 15: 6 と 8 節を引用していることの重要性を説明しなさい。
9. イエスはどのように呪われたのか(3: 13)。
10. 3: 19 で旧約聖書が引用されている意図は何か。
11. 3: 22 はなぜとてもよい要約となっているのか。
12. 3: 28 はなぜとても重要な真理なのか。
13. 4: 13 で述べられているパウロの体の病とは何か。
14. キリスト教の目標は何か(4: 19)。
15. 5: 3 でパウロが述べている神学的要点とは何か。
16. 5: 9 のことわざを説明しなさい。
17. 5: 4 の「いただいた恵みを失う」とは何を意味するか。
18. 5: 13 はローマ 14: 1~15: 13 とどのように関連しているか。
19. 5: 23 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
20. 信徒は罪を犯している他の信徒とどのように関わるべきか(6: 1-5)。
21. 6: 7 で述べられている霊的原則は何か。
22. 6: 10 は信徒の集まりの外にいる人々とどのように関連しているか。

エペソ人への手紙への導入

I. 緒言

- A. この書の真理は多くの聖なる人々の人生に衝撃を与えている。
 - 1. Samuel Coleridge はこの書を「人間による神曲」と呼んだ。
 - 2. ジャン・カルヴァンはこの書を聖書中の書で自らのお気に入りの書と言った。
 - 3. John Knox は自らが死の床にあるときにジャン・カルヴァンのエペソ人への手紙についての説教を読み聞かせてほしいと頼んだ。
- B. この書はパウロの神学の「王冠石」つまりかさ石と呼ばれてきた。パウロの偉大なる主題の全てが素晴らしい要約の形で表現されている。
- C. 神がローマ人への手紙を用いて宗教改革を始められたのと同じように、分派したキリスト教徒達を神はエペソ人への手紙を用いて再統一しようとしている。信徒達の一致とキリストへの共通の信仰は彼らの違いを感じさせなくさせる。

II. 著者

- A. パウロ
 - 1. 1: 1 と 3: 1 に明記されている。
 - 2. 3: 1 と 4: 1 と 6: 20 で投獄(多分ローマで)について述べられている。
 - 3. ほぼ一般的な教会の伝統
 - a. ローマの Clement が紀元 95 年にコリントへ書き送った手紙が 4: 4-6 に引用されている。
 - b. 1: 9, 2: 19, 3: 4-9 に引用されているように、Ignatius(紀元 30~107 年)。
 - c. 使徒ヨハネの弟子でスミルナの主教であった Polycarp(紀元 65~155 年)はパウロがエペソ人への手紙を書いたと主張している。
 - d. Irenaeus(紀元 130~200 年)はパウロがエペソ人への手紙を書いたと主張している。
 - e. アレキサンドリアの Clement(紀元 150~210 年)はパウロがエペソ人への手紙を書いたと主張している。
 - 4. エペソ人への手紙が収録されている聖書正典
 - a. Marcion(紀元 140 年代にローマに来た人)による、聖書正典と認められた書のリスト
 - b. ローマから書き送られた聖書正典のリストであるムラトリー断片(紀元 180~200 年頃に編纂)はエペソ人への手紙をパウロの著書として収録している。
 - 5. コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙の結語はどちらも、ギリシャ語でほぼ全く同じ 29 語である(コロサイ人への手紙ではさらに 2 語付け加えられている)。

B. 他の著者

1. パウロがエペソ人への手紙を書いたという説に最初に疑いを持ったのはエラスムスであった。その疑いの根拠は以下のようなことであった。
 - a. 文体—パウロの他の書簡の文調とは全く異なる冗長な文章
 - b. 個人的な挨拶の言葉が見られないこと
 - c. 独特の語彙
2. 紀元18世紀の学者による批判はパウロがエペソ人への手紙を書いたという説の否定から始まっている。
 - a. いくつかの節、例えば 2: 20 や 3: 5 は第二世代の信徒が書いたと思われる。
 - b. 様々な定義で用いられている神学用語(例えば「神秘」)
 - c. 回覧書簡という文学ジャンルの独自性

D. エラスムスの指摘への回答

1. 文体がパウロの他の書簡と異なるのは、パウロが獄中でエペソ人への手紙を書いたときに考える時間があつたからである。
2. 個人的な挨拶の言葉が見られないことは、エペソ人への手紙がその地域の多くの教会に書き送られた回覧書簡であつたという事実で説明がつく。エフェソスと Lycus 川渓谷を含むローマ帝国時代の郵送経路を黙示録2~3章に見ることができる。パウロはいくつかの個人的な挨拶の言葉を記した2通の手紙、つまりエペソ人への手紙とコロサイ人への手紙を3つの教会の特定のグループに書き送っている。
3. エペソ人への手紙の中の独特な用語の数はローマ人への手紙の中の独特な用語 (*hapax legomena*) の数と全く同じである。エペソ人への手紙の書かれた目的、主題、宛先、そして書かれた事情は新しい用語を用いて説明がつく。
4. パウロは I コリント 12: 28 で「使徒たちと預言者たち」について述べているが、同じようにエペソ 2: 20 と 3: 5 でも述べている。パウロがコリント人への手紙第一を書いたことは疑う余地がない。

III. エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙の間の文学的關係

A. エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙の間の歴史的関係

1. エパfras(コロサイ 1: 7、4: 12、フィレモン 23 節)はパウロがエペソ人に福音伝道していた時期に回心した(使徒行伝 19 章)。
 - a. エパfrasは自分が新たに見出した信仰を胸に故郷の Lycus 川渓谷に戻つた。
 - b. エパfrasはヒエラポリスとラオディキアとコロサイに3つの教会を開拓した。
 - c. エパfrasは、異端によってこのように世の価値観がキリスト教と混ざり合っていることに対する対処方法についてパウロに助言を求めた。紀元 60 年代初頭にパウロはローマで投獄されていた。

2. 偽教師達が来て、ギリシャ哲学の存在論を福音に混入し始めた。
 - a. 霊と物質はともに永遠である。
 - b. 霊(神)は善である。
 - c. 物質(被造物)は悪である。
 - d. イーオンの集団(諸々の天使階層)が、善で崇高なる神と、物質を造った下位の神との間に存在する。
 - e. 救いは、人々がイーオンの集団(諸々の天使階層)を通過するのを助ける秘密の暗号についての知識に基づく。

B. パウロの2通の手紙の間の文学的關係

1. パウロは個人的に訪れることのなかったこれらの教会の中の異端について話を聞いた。
2. パウロは偽教師達に宛てて短い感情的な文で衝撃的な内容の手紙を書いた。この手紙の中心主題はイエスが宇宙の主でいらっしゃるということである。この手紙はコロサイ人へのパウロの手紙として知られている。
3. 明らかに、コロサイ人への手紙を書いてからしばらくして、獄中で時間をかけて手書きによって、パウロはこれらと同じ主題をエペソ人への手紙の中で展開した。エペソ人への手紙の特徴は長い文と発達した神学的概念である(1: 3-14、15~23 節、2: 1-10、14~18 節、19~22 節、3: 1-12、14~19 節、4: 11-16、6: 13-20)。エペソ人への手紙はコロサイ人への手紙を議論の始点とし、その神学的意味を引き出している。エペソ人への手紙の中心主題はキリストによる万物の統一であり、初期教会の時代のグノーシス主義の概念とは対照的である。

C. 文学的ならびに神学的構造の関連

1. 基本構造の類似点

- a. 書き出し(冒頭部分)がとてもよく似ている。
- b. 両者とも主にキリストについて述べている教義編がある。
- c. 同じ神学分野と用語と聖句を用いてクリスチャンの好ましい生活様式を勧める実践編がある。
- d. 両者ともギリシャ語で一続きの 29 語の全くよく似ている結句があり、コロサイ人への手紙ではさらに2語付け加えられている。

2. 用語あるいは短い成句の類似点

エペソ 1: 1 後半とコロサイ 1: 2 前半	「忠実な」
エペソ 1: 4 とコロサイ 1: 22	「聖なる汚れのない者」
エペソ 1: 7 とコロサイ 1: 14	「贖い... 罪の赦し」
エペソ 1: 10 とコロサイ 1: 20	「あらゆるもの... 天... 地」
エペソ 1: 15 とコロサイ 1: 3-4	「... すべての聖なる者たちを愛していると聞き」

エペソ 1: 18 とコロサイ 1: 27	「豊かな栄光」
エペソ 2: 1 とコロサイ 1: 13	「あなたがたは死んでいたのです」
エペソ 2: 16 とコロサイ 1: 20	「十字架... 和解させ」
エペソ 3: 2 とコロサイ 1: 25	「務め」
エペソ 3: 3 およびコロサイ 1: 26 と 27 節	「秘められた計画」
エペソ 4: 3 とコロサイ 3: 14	「一致」
エペソ 4: 15 とコロサイ 2: 19	「頭」と「成長する」
エペソ 4: 24 とコロサイ 3: 10 と 12 節と 14 節	「身に着け」
エペソ 4: 31 とコロサイ 3: 8	「憤り」、「怒り」、「悪意」、「そしり」
エペソ 5: 3 とコロサイ 3: 5	「猥褻」、「不浄」、「貪欲」
エペソ 5: 5 とコロサイ 3: 5	「偶像崇拜」(貪欲)
エペソ 5: 6 とコロサイ 3: 6	「神の怒り」
エペソ 5: 16 とコロサイ 4: 5	「時をよく用いなさい」

3. 全く同じ聖句あるいは文

エペソ 1: 1 前半とコロサイ 1: 1 前半
エペソ 1: 1 後半とコロサイ 1: 2 前半
エペソ 1: 2 前半とコロサイ 1: 2 後半
エペソ 1: 13 とコロサイ 1: 5
エペソ 2: 1 とコロサイ 2: 13
エペソ 2: 5 後半とコロサイ 2: 13 後半
エペソ 4: 1 後半とコロサイ 1: 10 前半
エペソ 6: 21-22 とコロサイ 4: 7-8(似ている 29 個の連続する語。コロサイ人への手紙では「 <i>kai syndoulos</i> 」が追加されている)

4. 聖句あるいは文の類似点

エペソ 1: 21 とコロサイ 1: 16
エペソ 2: 1 後半とコロサイ 1: 13
エペソ 2: 16 とコロサイ 1: 20
エペソ 3: 7 前半とコロサイ 1: 23 後半と 25 節前半
エペソ 3: 8 とコロサイ 1: 27
エペソ 4: 2 とコロサイ 3: 12
エペソ 4: 29 とコロサイ 3: 8 と 4: 6
エペソ 4: 32 後半とコロサイ 3: 13 後半
エペソ 5: 15 とコロサイ 4: 5
エペソ 5: 19-20 とコロサイ 3: 16

5. 神学的に同じ概念

エペソ 1: 3 とコロサイ 1: 3	感謝の祈り
エペソ 2: 1 と 12 節およびコロサイ 1: 21	神からの疎外
エペソ 2: 15 とコロサイ 2: 14	律法との戦い
エペソ 4: 1 とコロサイ 1: 10	価値ある歩み
エペソ 4: 15 とコロサイ 2: 19	頭から成熟してゆくキリストの体
エペソ 4: 19 とコロサイ 3: 5	性的不浄
エペソ 4: 22 と 31 節およびコロサイ 3: 8	「見逃される」罪
エペソ 4: 32 とコロサイ 3: 12-13	互いに親切な信徒達
エペソ 5: 4 とコロサイ 3: 8	信徒の会話
エペソ 5: 18 とコロサイ 3: 16	聖霊の満たし=キリストの御言葉
エペソ 5: 20 とコロサイ 3: 17	全てのことについての神への感謝
エペソ 5: 22 とコロサイ 3: 18	妻たちよ夫に従いなさい
エペソ 5: 25 とコロサイ 3: 19	夫たちよ妻を愛しなさい
エペソ 6: 1 とコロサイ 3: 20	子供たちよ両親に従いなさい
エペソ 6: 4 とコロサイ 3: 21	父親たちよ子供を叱ってはいけない
エペソ 6: 5 とコロサイ 3: 22	奴隷たちよ主人に従いなさい
エペソ 6: 9 とコロサイ 4: 1	主人たちと奴隷たち
エペソ 6: 18 とコロサイ 4: 2-4	パウロの祈りの要求

6. コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙の両方で用いられているが、パウロの他の著書には見られない用語

a. 「豊かさ」

エペソ 1: 23	「全てにおいて全てを満たしておられる方の豊かさ」
エペソ 3: 19	「神の豊かさの全てに満たされ」
エペソ 4: 13	「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで」
コロサイ 1: 19	「満ちあふれるものの全てを御子の内に宿らせ」
コロサイ 2: 9	「キリストの内には満ちあふれる神性の全てが宿っていて」

b. 教会の「頭(かしら)」なるキリスト

エペソ 4: 15 と 5: 23 およびコロサイ 1: 18 と 2: 19

c. 「疎外され」

エペソ 2: 12 と 4: 18 およびコロサイ 1: 21

d. 「時をよく用いる」

エペソ 5: 16 とコロサイ 4: 5

e. 「根ざし」

エペソ 3: 17 とコロサイ 2: 7

f. 「真理の言葉、福音」

エペソ 1: 13 とコロサイ 1: 5

g. 「忍耐し」

エペソ 4: 2 とコロサイ 3: 13

h. 見慣れない聖句と用語(「結び合わされる」、「補う」)

エペソ 4: 16 とコロサイ 2: 19

D. 要約

1. コロサイ人への手紙の中の用語の3分の1以上がエペソ人への手紙にもある。エペソ人への手紙の中の 155 の節のうちの 75 の節がコロサイ人への手紙の中の節の言い換えであると推測される。これら2つの事実はパウロが獄中でこれら2つの手紙を書いたことを主張する根拠となる。
2. これら2つの手紙はどちらもパウロの友人のティキコが届けた。
3. これら2つの手紙はどちらも同じ地域(小アジア)に送られた。
4. これら2つの手紙はどちらも同じキリスト教学のトピックを扱っている。
5. これら2つの手紙はどちらも教会の頭(かしら)なるキリストを強調している。
6. これら2つの手紙はどちらも信徒にふさわしい生活を勧めている。

E. 主な相違点

1. コロサイ人への手紙は常に局所的な(特定の地点の)教会に宛てて書かれているが、エペソ人への手紙は普遍的な(その地域のあらゆる)教会に宛てて書かれている。このことはエペソ人への手紙の回覧書簡としての性質によると思われる。
2. 異端はコロサイ人への手紙の最も主要な議題であるが、エペソ人への手紙では直接的には述べられていない。しかし、これら2つの手紙はどちらも特徴的なグノーシス主義的用語を用いている(「知恵」、「知識」、「豊かさ」、「神秘」、「支配権と力」、「責任」)。
3. 主イエス・キリストの再来はコロサイ人への手紙では差し迫ったことだと述べられているが、エペソ人への手紙ではまだ先のことだと述べられている。教会は墮落した世の中で仕えるように召されたが、現在でもそうである(2: 7, 3: 21, 4: 13)。
4. パウロの用いた特徴的な用語のいくつかは様々な意味で用いられている。一つの例は用語「神秘」である。コロサイ人への手紙では神秘はキリスト(コロサイ 1: 26-27, 2: 2, 4章 3節)の意味で用いられているが、エペソ人への手紙では(1: 9 と 5: 32)、元々隠されていたが今や明らかとなった、異邦人とユダヤ人とを結び合わせる神の御計画の意味で用いられている。
5. エペソ人への手紙には旧約聖書の聖句を暗示する箇所がいくつか見られる(1: 22—詩篇 8篇と 2: 17—イザヤ 57: 19, 2: 20—詩篇 118: 22, 4: 8—詩篇 68: 18, 4: 26—詩篇 4: 4, 5: 15—イザヤ 26: 19 と 51: 17 と 52: 1 と 60: 1, 5: 3—創世記 3: 24, 6: 2-3—出エジプト 20: 12, 6: 14—イザヤ 11: 5 と 59: 17, 6: 15—イザヤ 52: 7)が、コロサイ人への手紙では1~2箇所だけである(2: 3—イザヤ 11: 5, 2: 22—29: 13)。

- F. 用語、聖句、あるいはしばしば要旨がともによく似ているとは言うものの、これら2つの手紙はそれぞれ独自の真理も述べている。
1. 三位一体主義的な恵みの祝福—エペソ 1: 3-14
 2. 恵みに関する文—エペソ 2: 1-10
 3. ユダヤ人と異邦人の一つの新しい体への融合—エペソ 2: 11~3: 13
 4. キリストの体の統一と潜在能力—エペソ 4: 1-16
 5. 「キリストと教会」(の関係)は「夫と妻」(の関係)の模範—エペソ 5: 22-33
 6. 霊的戦いに関する文—エペソ 6: 10-18
 7. キリスト教学に関する文—コロサイ 1: 13-18
 8. 人間の行う宗教儀式と規範—コロサイ 2: 16-23
 9. コロサイ人への手紙の中のキリストの宇宙的重要性の主題と、これに対するエペソ人への手紙の中のキリストによる万物の統一の主題
- G. 結論としては、パウロがコロサイ人への手紙の中の思想を重要な真理に発展させながら内容的によく似たこれら2つの手紙(エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙)を書いたという A. T. Robertson と F. F. Bruce の主張を認めるのが最もよいと思われる。

IV. 書かれた年代

- A. この手紙の書かれた年代はパウロがエフェソスやピリピやシーザリアやローマで投獄されていた時期と関連がある。ローマで投獄されていた時期が使徒行伝に記された事実と最もよく適合する。
- B. ローマで投獄されていた時期と仮定すると、いつ頃かという疑問が生じる。使徒行伝の記述によればパウロは紀元 60 年代の初め頃に獄中にいたが、釈放されて牧会書簡群(テモテへの手紙第一と第二およびテトスへの手紙)を書き、その後再び捕えられて、ローマ皇帝ネロが自殺した紀元 68 年 6 月 9 日より前に殺された。
- C. エペソ人への手紙の書かれた年代についての有識者達の推測の中で最も確からしいものは、パウロがローマで最初に投獄された紀元 60 年代の初め頃である。
- D. 多分、ティキコはオネシモと一緒にコロサイ人への手紙とエペソ人への手紙とフィレモンへの手紙を小アジアに届けたと思われる。
- E. F. F. Bruce と Murry Harris の学説に若干の修正を加えると、パウロの著書の書かれた順序はこのようになると考えられる。

書	書かれた年代	書かれた場所	使徒行伝との関係
ガラテヤ人への手紙	紀元 48 年	シリアのアンテオケ	14: 28、15: 2
テサロニケ人への手紙第一	紀元 50 年	コリント	18: 5
テサロニケ人への手紙第二	紀元 50 年	コリント	

コリント人への手紙第一	紀元 55 年	エフェソス	19: 20
コリント人への手紙第二	紀元 56 年と 57 年	マケドニア	20: 2
ローマ人への手紙	紀元 57 年	コリント	20: 3
コロサイ人への手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
エペソ人への手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
フィレモンへの手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
ピリピ人への手紙	紀元 62 年後半 ～63 年	ローマ	28: 30-31
テモテへの手紙第一	紀元 63 年(あるいはそれ以降。ただし紀元 68 年より前)	マケドニア	
テトスへの手紙	紀元 63 年	エフェソス(?)	
テモテへの手紙第二	紀元 64 年	ローマ	

V. この手紙の宛先

- A. 多くの原典 (Chester Beatty パピルス P⁴⁶、シナイ文書^ℵ、バチカン文書 B、Origen のギリシャ語原典、Tertullian のギリシャ語原典) は 1: 1 の「エフェソスにいる」を省略している。RSV と Williams 訳聖書はこの聖句を省略している。
- B. 1 節のギリシャ語文法は地名に適合しているようだ。多分、回覧書簡として、読んだ諸教会の人々が補うことができるように教会の地名は空欄とされたのだろう。このことは、多分エペソ人への手紙にもある、コロサイ 4: 15-16 中の聖句「ラオデキアの人々からの手紙」を説明している (マルシオン正典はエペソ人への手紙を「ラオデキア人への手紙」の表題で収録している)。
- C. 2: 1 と 4: 17 によればエペソ人への手紙は主として異邦人に宛てて書かれており、1: 15 と 3: 2 によればパウロはそれらの異邦人達に会っていない。Lycus 川渓谷の諸教会 (ラオデキア、ヒエラポリス、コロサイ) を始めたのはパウロではなくエパfrasであった (コロサイ 1 章 7 節、4: 15、フィレモン 23 節)。

VI. この手紙の書かれた目的

- A. この書の主題は 1: 10 と 4: 1-10 に見られ、キリストにある万物の統一を強調している。キリストは人の内と世 (*kosmos*) の中に神のお姿を取り戻された。
- B. エペソ人への手紙はパウロが投獄中に書いた 4 通の書簡のうちの一つである。エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙の概要はとてもよく似ている。コロサイ人への手紙は初期教会の時代に小アジアの Lycus 川渓谷にいたグノーシス主義の異端と闘うために書かれた。エペ

ソ人への手紙は諸教会に来るべき異端との闘いに備えさせるために同地域に回覧書簡として書かれた。コロサイ人への手紙はぶっきらぼうで辛辣な手紙であるが、エペソ人への手紙は同じ真理を非常に長い文を用いて論理的に述べた文章である(1: 3-14 と 15~23 節、2: 1-9、3: 1-7 等を参照)。

VII. 簡単な概要

- A. この書は(パウロの著書の大半がそうであるように)本質的に2つの部分に分かれる。
 - 1. キリストにある統一、1~3章(神学)
 - 2. 教会内の一致、4~6章(適用)
- B. 提唱されている主題に基づく概要
 - 1. パウロの定型的な序文、1: 1-2
 - 2. 父なる神のキリストにある万物の統一の御計画、1: 3~3: 21
 - a. 父なる神へのパウロの賛美、1: 3-14
 - (1)生まれる前からの父なる神の愛に対して
 - (2)時にかなって御子の内に現れる、父なる神の愛に対して
 - (3)時を超えて聖霊によって注がれ続ける、父なる神の愛に対して
 - b. パウロの父なる神への諸教会のための祈り、1: 15-23
 - (1)父なる神がキリストの内に現わされた啓示が理解されるように
 - (2)父なる神の御力が信徒達の内にかたく働かれるように
 - (3)父なる神がキリストを万物の上に引き上げられるように
 - c. 全人類に対する父なる神の御計画についてのパウロの理解、2: 1~3: 13
 - (1)罪深い人類の必要
 - (2)父なる神の恵み深い備え
 - (3)人類の契約への応答の必要
 - (4)父なる神の御計画は全て現われた。
 - d. パウロの父なる神への信徒のための祈り、3: 14-21
 - (1)[聖霊によって]内なる強さを受けるように
 - (2)経験と愛を通して(父なる神の御計画についての真理だけでなく)福音の全てを理解するように
 - (3)神の豊かさ(つまりキリスト)に満ちあふれるように
 - (4)全能なる神からのこの全てのもの
 - 3. 御自分の新しい民が一致するようという父なる神のお望み、4: 1~6: 20
 - a. 三位一体の神の一致は神の子らの一致に反映されている、4: 1-16
 - (1)一致は均一性ではなく、生活様式に表れる愛である。
 - (2)神は三位一体なお方でいらっしゃる。

(3) 靈的賜物は個人の名譽のためのものではなく、体の善のためのものである。

(4) 一致には働きが必要である。

(5) 一致は天使の攻撃にさらされている。

(6) 一致はキリストに基づく。

b. 異教徒の自己中心性と対照的な信徒の一致、4: 17～5: 14

(1) 古い生活での行いをやめる。

(2) キリストらしさを身につける。

c. 一致の達成と維持の手段、5: 15～6: 9

(1) 聖靈に満たされ続けること

(2) 聖靈に満たされている生活を表している事柄

(a) 5つの分詞、19～22 節

(b) 家族内の3つの例

i. 夫と妻

ii. 親と子

iii. 主人と奴隸

d. キリストらしい一致のための闘い

(1) 靈的戦い

(2) 神の鎧

(3) 祈りの力

4. 結語、6: 21-24

VIII. 偽教師達の思想の哲学的・神学的背景(グノーシス主義)

A. 紀元1・2世紀のグノーシス派の思想

1. 靈(神)と物質(現実の物事)との間の存在論的(永遠)二元論

2. 靈は善であり、物質は悪である。

3. イーオンの集団(諸々の天使階層)が、善で崇高なる神と、悪の物質を造った下位の神との間に存在する。

4. 救いへの道

a. 天使のいる天球を通過するのを助ける秘密の暗号についての知識

b. 全ての人々が救いのための知識を理解しあるいは受け取るとはいえないとしても、
全ての人々の内に輝いている神の煌めき

c. 特別な啓示によってあるエリート集団にのみもたらされた知識

5. 倫理

a. 靈的生活とは全く無関係(自由意志論、二律背反)

b. 救いに不可欠(律法主義)

B. 歴史的・聖書的キリスト教との矛盾

1. キリストの人間性と神性とを分離(グノーシス派はキリストが完全に神あるいは人間であることはありえないと言っている)
2. 救いへの唯一の道であるキリストの身代わりの死を除外
3. 神の無償の恵みを人間的な知識と置き換えている。

IX. 用語と聖句の早見リスト

1. 聖なる者たち、1: 1
2. 主、1: 2
3. 天のあらゆる場所、1: 3
4. 「天地創造の前に」、1: 4
5. 汚れのない、1: 4
6. 予め定められた、1: 5
7. 「贖い」、1: 7
8. 秘められた計画、1: 9
9. 「時が満ちるに及んで」、1: 10
10. 証印を押された、1: 13
11. 保証、1: 14
12. 栄光、1: 17
13. 「キリストを御自分の右の座に着かせ」、1: 20
14. 「全てにおいて全てを満たしているキリストの満ちておられる場所」、1: 23
15. 「この世を支配する者」、2: 2
16. 「神の賜物」、2: 8
17. 「聖なる民に属する者」、2: 19
18. 「かなめ石」、2: 20
19. 「大胆に確信をもって神に近づく」、3: 12
20. 「人々を惑わす」、4: 14
21. 「人々を誤りに導こうとする者たちに」、4: 13
22. 「愛によって歩みなさい」、5: 2
23. 「香り」、5: 2
24. 「キリストと神の国」、5: 5
25. 「互いに仕え合いなさい」、5: 21
26. 「神の武具」、6: 11
27. 「腰に締めなさい」、6: 14
28. 霊の剣、6: 17

X. 人物早見リスト

1. グノーシス派の人々
2. 「空中に勢力を持つ者」、2: 2
3. 異邦人
4. 使徒、4: 11
5. 預言者、4: 11
6. 福音宣教者、4: 11
7. 頭、4: 15
8. 悪魔、4: 27
9. 不従順な者たち、5: 6
10. 光の子、5: 8
11. 「悪の諸霊」、6: 12
12. ティキコ、6: 21

X I . 登場する地名の地図上の位置—なし

X II . ディスカッションのための質問

1. 1: 3-14 の重要なテーマは何か。
2. 聖句「神の栄光をたたえる」はなぜ 1: 3-14 中で3回も用いられているのか。
3. なぜパウロはこの書の中で「知恵と洞察」あるいは「知識」について頻繁に述べているのか。
4. 1: 19 は誰に対して語られているか。
5. ユダヤ教における2つの世の概念を説明しなさい。
6. 2: 1-3 のトピックを要約しなさい。
7. 2: 4-6 のトピックを要約しなさい。
8. 2: 14 の歴史的意味を説明しなさい。
9. パウロが 3: 3 で述べている啓示とはどのようなものか。
10. なぜパウロは自分を「全ての聖なる者たちの中で最もつまらない者」と言っているのか (3: 8)。
11. 用語「一つ」はなぜ 4: 4-6 の中で頻繁に用いられているのか。
12. 4: 7 におけるキリストの賜物は何か。
13. 4: 8 でパウロが引用している旧約聖書の箇所はどこか。パウロが引用している旧約聖書の箇所はなぜ現代の旧約聖書と異なるのか。
14. 4: 12 はなぜとても重要なのか。
15. 5: 5 は救われうる人々を限定しているか。

16. 泥酔することは霊に満たされることとどのように関連しているか(5: 18)。
17. 教会に対するキリストの愛と犠牲はなぜ信徒の家庭と関連しているのか(5: 25-33)。
18. 「名誉」と「従属」はどのように関連しているか。
19. 6: 18 はなぜ現代にとっても必要とされるのか。

ピリピ人への手紙への導入

I. 緒言

- A. この手紙はパウロの書簡の中で最も非公式な(口語[会話]体の)ものの一つである。このピリピの教会に対してパウロは自らの使徒の権威を主張する必要はないと感じた。パウロがピリピの教会に対してあふれるばかりの愛情を持っていたことは明らかである。パウロはピリピの教会からの金銭供与を拒ばなかったが(1: 5 と 7 節および 4: 15 を参照)、このことはパウロにはとても珍しいことであった。
- B. パウロは投獄されるが、(自らの書簡の中で)喜びを意味する用語(名詞と動詞)を16回以上も用いている。パウロの心の平安と希望は自らの置かれた状況には依らなかったのだ。
- C. ピリピの教会には誤った教えを広める者たちがいた(3: 2 と 18 節および 19 節を参照)。これらの異端は、ユダヤ教転向者と呼ばれた、ガラテヤの教会にいた(偽教師の)グループと似ていたようだ。それらの異端グループは、クリスチャンになりたい者はまずユダヤ教徒とならねばならないと主張していた。
- D. この手紙には初期教会における賛美歌と信条と礼拝用韻文の実例が示されている(2: 6-11 を参照)。この手紙は新約聖書全体を通じて最も高級なキリスト教的文章の一つである(ヨハネ 1: 1-14、コロサイ 1: 13-20、ヘブル 1: 2-3 を参照)。パウロはこの手紙を、教義的ではない意味で(2: 1-5 を参照)、全ての信徒が模範とすべきキリストの謙遜の実例を示す文章として用いている。
- E. この手紙の104の節の中にはイエスの御名と称号が51回登場する。パウロの心と精神と神学の中心は誰であるかは明らかである。

II. ピリピとマケドニア

A. 都市ピリピ

- 1. この都市を含む地域は紀元前 356 年に、アレキサンダー大王の父であるマケドン王ピリポ2世が占領し拡張した。この地域には元々 *Krenides* (泉を意味する)と呼ばれるトラキア人の村があった。この地域には金鉱があったのでこの都市は重要であった。
- 2. 紀元前 168 年の Pydna の戦いでこの地域はローマ帝国の属州となり、後にマケドニアの4つの州の一つとなった。
- 3. 紀元前 42 年にブルートゥスと Cassius(共和政府軍)はローマの政治改革をめぐるピリピ近郊でアントニウスとオクタ비아ヌス(帝国軍)と戦った。戦いの後、アントニウスは勝利に貢献した軍の高級武官たちをこの地域に住ませた。
- 4. 紀元前 31 年にアクティウムの戦いでオクタ비아ヌスがアントニウスに勝利した後、ローマ在住のアントニウスの支持者たちは追放されて逃げるようにこの地域に移住した。
- 5. 紀元前 31 年にピリピはローマ帝国の植民地となった(使徒行伝 16: 12 を参照)。ピリピ市

民は公的にローマ市民と定められた。ラテン語が公用語となり、都市は小ローマ的色彩を帯びるようになった。ピリピはローマ帝国内を東西に走る幹線道路の Ignatian 道に沿って存在する都市であった。ピリピ市民にはローマ市民と同様の特権があった。

- a. 人頭税と地税の免除
- b. 財産売買権
- c. ローマ法による完全な身柄の保護と権利付与
- d. 特別な地方の政治指導者(プラエトル[執政官[consul]に次ぐ1年任期の高級行政官]とリクトル[束棒[斧に縛り付けた棒の束で、執政官の権威の象徴とされた]を持って執政官を先導した下級官吏])となる権利

B. ピリピへの福音伝道

1. 第2回伝道旅行でパウロは北へ向かって中央アジア北部(現代のトルコ。聖書ではベタニアの名で登場)に入るつもりであった。しかし、幻の中でパウロはマケドニア(ギリシャ北部)の一人の男性(多分ルカ)が助けに来てくれるよう自分を呼んでいるのを見た(使徒行伝 16: 6-10 を参照)。この幻によって聖霊はパウロにヨーロッパへ行くように示された。
2. パウロは第2回伝道旅行に助手を連れていった。
 - a. シラス(シルワノ)
 - (1)シラスはエルサレムの教会出身の指導者であり、バルナバの代わりにパウロの伝道旅行に助手として同行した預言者であった(使徒行伝 15: 15 と 22 節と 32 節と 36~41 節を参照)
 - (2)シラスとパウロはピリピで投獄された(使徒行伝 16: 16-26 を参照)
 - (3)パウロは常にシラスをシルワノと呼んだ(Ⅱコリント 1: 19、Ⅰテサロニケ 1: 1、Ⅱテサロニケ 1: 1 を参照)。
 - (4)シラスは後に、ヨハネ・マルコと同様に、ペテロの仲間になったと思われる(Ⅰペテロ 5: 12 を参照)。
 - b. テモテ
 - (1)テモテはパウロの第1回伝道旅行で回心した(使徒行伝 16: 1-2、Ⅱテモテ 1 章 5 節と 3: 15 を参照)。
 - (2)テモテの祖母と母はユダヤ人だが、父はギリシャ人であった(使徒行伝 16: 1、Ⅱテモテ 1: 5 を参照)。
 - (3)テモテは兄弟達に評判が良かったので(使徒行伝 16: 2 を参照)、パウロはテモテの内に伝道の賜物を見て(Ⅰテモテ 4: 14、Ⅱテモテ 1: 6 を参照)、ヨハネ・マルコに代わる助手としてテモテを選んだ(使徒行伝 13: 13 を参照)。
 - (4)ユダヤ人に受け入れられるようにするためにパウロはテモテに割礼を施した(使徒行伝 16: 3 を参照)。

(5) テモテは使徒の代表者としてパウロに信頼されるようになった(ピリピ 2 章 19~22 節、I コリント 4: 17 と 3: 2 と 6 節、II コリント 1: 1 と 19 節を参照)。

c. ルカ

(1) 著者名は記されていないが、多分ルカの福音書と使徒行伝の著者である。

(2) ルカは異邦人の内科医であったことが明らかとなっている(コロサイ 4: 14 を参照)。用語「内科医」を「高等教育を受けた人」と考える人もいる。ルカが医学以外のいくつかの技術分野、例えば航海術を修めたことは確かに事実である。しかし、イエスはこれと同じギリシャ語の用語を「内科医」の意味で用いられた(マタイ 9: 12、マルコ 2: 17 と 5: 26、ルカ 4: 23 と 5: 31 を参照)。

(3) パウロの伝道旅行に同行した(使徒行伝 16: 10-17、20: 5-15、21: 1-18、27 章 1 節~28: 16、コロサイ 4: 14、II テモテ 4: 11、フィレモン 24 節を参照)。

(4) 使徒行伝の「わたしたち」で始まる段落がピリピでの伝道活動の記録に終始しているのは興味深い。自著 *Paul, Apostle of the Heart Set Free* (の 219 ページ) で F. F. Bruce はルカがピリピに滞在して新しい回心者達を助け、エルサレムの教会のために異邦人救済金を集めたことを示唆している。

(5) ある意味でルカはパウロのかかりつけ医であったようだ。パウロは自身の回心(使徒行伝 9: 3 と 9 節を参照)と伝道活動(II コリント 4: 7-12、6: 4-10、11: 23-29 を参照)および特別な弱さ(II コリント 12: 1-10 を参照)によるいくつかの身体的問題をかかえていた

3. パウロは第3回伝道旅行でピリピに戻った(使徒行伝 20: 1-3 と 6 節を参照)。パウロは予めシラスとテモテをピリピに送っていたのだ(使徒行伝 19: 19-24、ピリピ 2: 19-24 を参照)。

C. ローマ帝国の植民地としてのピリピ

1. パウロは自らの用いた術語の中でこの都市のローマ帝国の植民地としての状況を次のように表現している。

a. 「プラエトルの護衛兵」、1: 13

b. 「市民権」、3: 20(使徒行伝 16: 22-34、35~40 節)

c. 「皇帝の家の人々」、4: 22

2. この都市には退役あるいは脱走したローマ帝国の軍人が住んだ。多くの意味でこの都市は「小ローマ」であった。ローマで流行していることはピリピの市内でも見られたようだ(使徒行伝 26: 21 を参照)。

3. パウロとシラスはともにローマ市民であったので、法的権利と社会的地位が与えられていた。

D. 属州マケドニア

1. マケドニアではローマ帝国の他の地域よりも多くの社会的自由と経済活動の機会が女性

に与えられていた。

2. このことは次のように記されている。
 - a. ピリピ市外の川岸で礼拝する多くの女性達がいた(使徒行伝 16: 13 を参照)。
 - b. 商売をする女性リディア(使徒行伝 16: 14 を参照)
 - c. 福音伝道活動の女性協力者達(4: 2-3 を参照)
 - d. テサロニケ人への手紙でも述べられている女性指導者達(マケドニアにもいた。使徒行伝 17: 4 を参照)

Ⅲ. 著者

- A. この会話体の言葉の多用された手紙は常にパウロの書いたものと特定されている。一人称代名詞「わたし」と「わたしの」が 51 回も登場する。
- B. この手紙は初期教会の時代の作家達によって引用あるいは暗示されている(完全な引用リストについては H. C. G Moule 著 *Studies in Philippians* [Kregel 社刊]の 20~21 ページを見よ)
 1. ローマのクレメンティウスが紀元 95 年頃にコリントの教会に宛てて書いた「クレメンティウスの手紙第一」の中で
 2. イグナティウスが紀元 110 年頃に書いた「イグナティウス書簡群」の中で
 3. 使徒ヨハネの仲間のポリカルポスが紀元 110 年頃に書いた「(ポリカルポスの)ピリピ人への手紙」の中で
 4. (異端マルシオン聖典に倣って)紀元 170 年頃に書かれた、マルシオン正典中のピリピ人への手紙への序文の中で
 5. イレネウスが紀元 180 年頃に書いた自著の中で
 6. アレキサンドリアのクレメンティウスが紀元 190 年頃に書いた自著の中で
 7. カルタゴのテルテウリアヌスが紀元 210 年頃に書いた自著の中で
- C. 1: 1 にテモテはパウロと連名で登場するが、テモテはパウロの助手であって共著者ではなかった(パウロの書記を長年務めていたにもかかわらず)。

Ⅳ. 書かれた年代

- A. この手紙の書かれた年代はパウロが投獄されていた場所と関連がある(Ⅱコリント 11 章 23 節を参照)。
 1. ピリピ、使徒行伝 16: 23-40
 2. エフェソス、Ⅰコリント 15: 32、Ⅱコリント 1: 8
 3. エルサレムとカイザリア、使徒行伝 21: 32~33: 30
 4. ローマ、使徒行伝 28: 30(マルシオン正典中のピリピ人への手紙への序文の中で述べられている)

- B. 多くの学者達はパウロがローマに投獄されていたときにこの手紙を書いたという学説がパウロの生涯に関する文脈と使徒行伝に最もよく適合していると信じている。もしそうなら、この手紙の書かれた年代は紀元 60 年代初頭であるというのが最も確からしい。
- C. この書はパウロの獄中使徒書簡群(コロサイ人への手紙、エペソ人への手紙、フィレモンへの手紙、ピリピ人への手紙)の一つである。それら書簡群の内容についての考察から、コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙とフィレモンへの手紙はパウロがローマに投獄されていた時期の初め頃に書かれてティキコが小アジアにもたらしたことは明らかである(コロサイ 4: 7、エペソ 6: 21)。ピリピ人への手紙では事情が異なる。パウロはこの手紙を獄中から出すこと(1: 17-26)とピリピの信徒達のところを訪問すること(2: 24)を秘密にしていたようだ。

獄中使徒書簡群に関するこのような事情は(1)パウロの影響がローマ帝国兵士達[1 章 13 節、使徒行伝 28: 16 を参照]と奴隷達[4: 22 を参照]に及んでいた時期と(2)パウロとピリピの教会からの使者達の間通信の時期についても述べている。

V. この手紙の書かれた目的

- A. 数回にわたって金銭的に援助してくれたばかりでなく、エパフロデイトを協力者として送ってくれたこと(1: 3-11、2: 19-30、4: 10-20 を参照)に対してこの愛すべきピリピの教会に感謝の気持ちを伝えるため。パウロはまだ獄中にいたときに、エパフロデイトを早くピリピの教会に返すためにその理由を説明するためにもこの手紙を書いたようだ。
- B. その当時パウロが置かれていた状況に関係していたピリピの人々を励ますため。福音は事実上獄中で発展していった。パウロは囚われていたが、福音は囚われていなかったのだ。
- C. ガラテヤ人信徒達の中に紛れていたユダヤ教転向者達ととてもよく似た偽教師達の誤った教えにさらされていたピリピの信徒達を励ますため。これらの異端達は新しい回心者にまずユダヤ教徒となってからクリスチャンとなるように要求していた(使徒行伝 15 章を参照)。しかし、3: 19 に列記されている罪はユダヤ教徒よりもギリシャの偽教師達(グノーシス主義者)にあてはまるので、どの異端を指しているかは明らかではない。信徒達の中には以前の異教の生活様式に戻る者もいたようだ。
- D. 教会内外からの迫害にさらされていたピリピの信徒達に、自分達の置かれている状況に依らずに喜ぶように励ますため。パウロの喜びは自分の置かれている状況ではなくキリストへの信仰に依るものであった。

苦難のただ中にあってもこのように喜ぶことは禁欲的な忍従ではなく、キリスト教の世界観であり、また絶え間ない闘争であった。パウロは信徒の生活における緊張を表現するためにいくつかの生活場面から比喻を用いた。

- 1. 競技(3: 12 と 14 節、4: 30 を参照)

2. 軍事(1: 7、12 節、15 節、16 節、17 節、22 節、28 節、30 節を参照)
3. 商業(3: 7 と 8 節、4: 15 節と 17 節と 18 節を参照)

VI. 文脈の概要

- A. ピリピ人への手紙はとても私的で非公式な手紙なので要約が難しい。キリストにある友人達と信頼を置いた協力者達にパウロは語りかけている。パウロの精神が彼の思想をまとめる前に彼の心はあふれ出していた。驚くほど明解に、異邦人に福音伝道したこの偉大な使徒の心をこの書は表現している。いかなる状況に置かれようとも、また福音伝道の働きにおいても、パウロはキリストにあって「喜び」を感じていたのだ。
- B. 文章単位
1. パウロの典型的な導入文、1: 1-2
 - a. 挨拶
 - (1)パウロ(とテモテ)から、1: 1
 - (2)ピリピの聖なる者たちへ、1: 1
 - (3)パウロの定型的な祈り、1: 2
 - b. 祈り、1: 3-11
 - (1)パウロの福音伝道活動のはじめからの協力者達、1: 5
 - (2)パウロの福音伝道活動の支持者達、1: 7
 - (3)パウロの求め
 - (a)あふれるばかりの愛、1: 9
 - (b)豊富な知識、1: 9
 - (c)優れた分別、1: 9
 - (d)全き聖さ、1: 10
 2. 獄中における、ピリピの人々が自分に寄せる関心以上の、パウロのピリピの人々に寄せる関心
 - a. 神はパウロに獄中において福音伝道活動をする機会を与えられた。
 - (1)皇帝の衛兵に、1: 13
 - (2)皇帝の家の人々に、1: 13、4: 22
 - (3)大胆に説教する人々、1: 14-18
 - b. 釈放へのパウロの確信
 - (1)ピリピの信徒達の祈りによる、1: 19
 - (2)聖霊による、1: 19
 - c. 釈放されても死んでもパウロの内にある確信、1: 20-26
 3. パウロの励まし、1: 27~2: 18
 - a. 迫害の中にあってもキリストの体として一致するよという召し、1: 27-30

- b. キリストのような無私の心で生きるように、2: 1-4
- c. 私達の模範はキリスト、2: 5-11
- d. キリストを模範として心の平安と一致のもとに生きるように、2: 12-18
- 4. ピリピに関するパウロの計画、2: 19-30
 - a. テモテを送る、2: 19-24
 - b. エパフロデイトを返す、2: 25-30
- 5. 偽教師達に対して堅く立つ、1: 27 と 4: 1
 - a. 犬ども、割礼を受けた偽信徒達、ユダヤ教転向者達(使徒行伝15章、ガラテヤ人への手紙)、3: 1-4
 - b. ユダヤ人としてのパウロの過去
 - (1)偽教師として、3: 5-6
 - (2)キリストに従う者としての見方、3: 7-16
 - c. 偽教師達に対するパウロの悲しみ、3: 17-21
- 6. パウロの訓戒の繰り返し
 - a. 一致、4: 1-3
 - b. キリストのような人格、4: 4-9
- 7. ピリピの教会の助けに対するパウロの感謝の繰り返し
 - a. ピリピの教会にその当時現われていた賜物、4: 10-14
 - b. ピリピの教会にそれ以前に現われていた賜物、4: 15-20(1: 5)
- 8. 典型的なパウロの結語、4: 21-23

VII. 用語と聖句の早見リスト

1. 「監禁されているときに」、1: 7 と 13 節
2. 「愛」、1: 8
3. 「キリストの日」、1: 10
4. 「義の実」、1: 11
5. 「プラエトルの衛兵」、1: 13
6. 「キリストのために苦しむこと」、1: 29
7. 「御自分を無にされ」、2: 7
8. 「人と同じものに」、2: 7
9. 告白する、2: 11
10. 「わたしが走ったことは無駄ではなく、労苦したことは無駄ではなかった」、2: 16
11. 「わたしの血がいけにえとして注がれるとしても」、2: 17
12. 「犬どもに注意なさい」、3: 2
13. 「ヘブル人の中のヘブル人」、3: 5

14. 「キリストの十字架に敵対している者たちがいます」、3: 18
15. 「わたしたちの本国は天にあります」、3: 20
16. 「命の書に名を記されている」、4: 3

VIII. 人物早見リスト

1. 監督者たち、1: 1
2. 執事、1: 1
3. テモテ、2: 19
4. エパフロデイト、2: 25
5. 「割礼を受けた偽信徒達」、3: 2
6. シンティケ、4: 2

IX. 登場する地名の地図上の位置

1. ピリピ、1: 1
2. マケドニア、4: 15
3. テサロニケ、4: 16

X. ディスカッションのための質問

1. 1: 6 で強調されている教義は何か。
2. 1: 16 でパウロは何を言っているのか。
3. 聖句「イエス・キリストの霊」の意味は何か。
4. 1: 21 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
5. イエスがすでに存在しておられたこととイエスの神性を 2: 6 はどのように関連づけているか。
6. イエスはなぜ十字架上で死なれたのか(2: 8)。
7. 「天と地と地下にいる者たち」とは誰を指しているか。
8. 「恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい」とはどのような意味か(2 章 12 節)。
9. 2: 4-6 でパウロが述べているユダヤ人の特徴を挙げなさい。
10. 3: 9 で重要なことは何か。
11. ピリピ 4: 4 には「主は近くにおられます」とある。もしそうなら、イエスはなぜこの世に戻ってきておられないのか。

コロサイ人への手紙への導入

I. 緒言

- A. コロサイに異端がいたことを神に感謝しよう。というのは、そのことがきっかけでパウロがこの強烈な手紙を書いたからである。この書の理解には歴史背景との関連づけが不可欠であることを覚えておきなさい。パウロの書簡群は、普遍的な福音の真理に伴う地域的な問題が述べられているので「臨時報告文書」と呼ばれている。コロサイの異端思想はギリシャ哲学(グノーシス主義)とユダヤ教とが異常に混ざりあった思想であった。
- B. この書の中心主題はイエスが宇宙の主でいらっしゃるということである(1: 15-17を参照)。この書のキリスト教学に優るものはないのだ。コロサイ人への手紙はエペソ人への手紙を根本的に要約したものとなっている。異端が小アジアに増えていくであろうことはパウロには分かっていた。コロサイ人への手紙では誤った教えが痛烈に批判され、エペソ人への手紙ではその中心主題が来たるべき異端に備えるようにとの諸教会への呼びかけに発展している。コロサイ人への手紙ではキリスト教学的な事柄が強調されているが、エペソ人への手紙では万物の主なるキリストにある万物の統一が強調されている。
- C. パウロはユダヤ教とギリシャの律法主義にとっても強烈な言葉で反論している。

II. 都市コロサイ

- A. 元々都市コロサイはフリギアにあったベルガモン王国の一部であった。紀元前 133 年にこの都市はローマ元老院の所有地となった。
- B. パウロの時代以前にはコロサイは商業の大中心地であった(ヘロドトス著「歴史」第7巻30章と Xenophon 著 *Anabasis* 第1巻2章6節を参照)。
 - 1. コロサイのあった渓谷は古代地中海世界において羊毛、特に黒色羊毛および紫色や緋(深紅)色に染めた羊毛の大生産地であった。火山岩性の土壌は牧羊に素晴らしく適しており、白亜質(訳者注: 化石化した貝殻から構成される)の水は染色工程において有利であった(Strabo の著書の第13巻4章14節を参照)。
 - 2. 火山活動によってこの都市は市史上数回にわたって壊滅した。最後に壊滅したのは紀元 60 年(Tacitus の記録による)あるいは紀元 64 年(Eusebius の記録による)であった。
- C. コロサイは、100 マイル下流のエフェソスまで流れていた Maeander 川の支流である Lycus 川沿岸にあった。この一つの渓谷にはヒエラポリス(6 マイル遠方)とラオデキア(10 マイル遠方)があった(1: 2, 2: 1, 4: 13 と 15~16 節を参照)。
- D. コロサイを迂回して東西に走る大街道 *Via Ignatia* をローマ人が建設した後、(一都市としての)コロサイの重要性はほとんど無くなった(Strabo の著書による)。このことは、パレスティナのトランスヨルダン地域にあったペトラに起こったことと似ていた。
- E. コロサイ市民の大半は異邦人(フリギア人とギリシャ人定住者)であったが、ユダヤ人も多

かった。Josephus によれば Antiochus3世(紀元前 223~187 年)がユダヤ人 2000 人をパ
ビロンから連れ出してコロサイに住ませた。記録によれば紀元 76 年までユダヤ人男性
11,000 人がコロサイを首都とする地域に住んでいた。

Ⅲ. 著者

- A. この手紙の送り手は2人、パウロとテモテである(コロサイ1: 1を参照)。しかし、主な著者は
パウロである。テモテはパウロの協力者としてパウロの挨拶の言葉を伝えたので、多分パ
ウロの書記(*amanuensis*)を務めていたのだろう。
- B. 古代の文献は全て使徒パウロがこの手紙を書いたと述べている。
 - 1. 旧約聖書に依存する異端に対抗するマルシオン(紀元 140 年代にローマから来た)は
自身の収集したパウロの著書群の中にコロサイ人への手紙を加えている。
 - 2. ムラトリー正典(紀元 200 年頃にローマからもたらされた、正典とされる書のリスト)では
コロサイ人への手紙がパウロの書簡群の中に加えられている。
 - 3. 初期教会の教父達数名は自著にコロサイ人への手紙からの引用を載せ、パウロをこ
の手紙の著者と特定している。
 - a. イレネウス(紀元 177~190 年に自著を執筆)
 - b. アレキサンドリアのクレメンス(紀元 160 から 216 年まで存命)

Ⅳ. エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙の間の文学的關係

- A. エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙の間の歴史的関係
 - 1. エパfras(コロサイ 1: 7、4: 12、フィレモン 23 節)はパウロがエペソ人に福音伝道してい
た時期に回心した(使徒行伝19章)。
 - a. エパfrasは自分が新たに見出した信仰を胸に故郷の Lycus 川溪谷に戻った。
 - b. エパfrasはヒエラポリスとラオディキアとコロサイに3つの教会を開拓した。
 - c. エパfrasは、異端によってこのように世の価値観がキリスト教と混ざり合っていること
に対する対処方法についてパウロに助言を求めた。紀元 60 年代初頭にパウロはロ
ーマで投獄されていた。
 - 2. 偽教師達が来て、ギリシャ哲学の存在論を福音に混入し始めた。
 - a. 霊と物質はともに永遠である。
 - b. 霊(神)は善である。
 - c. 物質(被造物)は悪である。
 - d. イーオンの集団(諸々の天使階層)が、善で崇高なる神と、物質を造った下位の神との
間に存在する。
 - e. 救いは、人々がイーオンの集団(諸々の天使階層)を通過するのを助ける秘密の暗号
についての知識に基づく。

B. パウロの2通の手紙の間の文学的關係

1. パウロは個人的に訪れることのなかったこれらの教会の中の異端について話を聞いた。
2. パウロは偽教師達に宛てて短い感情的な文で衝撃的な内容の手紙を書いた。この手紙の中心主題はイエスが宇宙の主でいらっしゃるということである。この手紙はコロサイ人へのパウロの手紙として知られている。
3. 明らかに、コロサイ人への手紙を書いてからしばらくして、獄中で時間をかけて手書きによって、パウロはこれらと同じ主題をエペソ人への手紙の中で展開した。エペソ人への手紙の特徴は長い文と発達した神学的概念である(1: 3-14、15~23 節、2: 1-10、14~18 節、19~22 節、3: 1-12、14~19 節、4: 11-16、6: 13-20)。エペソ人への手紙はコロサイ人への手紙を議論の始点とし、その神学的意味を引き出している。エペソ人への手紙の中心主題はキリストによる万物の統一であり、初期教会の時代のグノーシス主義の概念とは対照的である。

C. 文学的ならびに神学的構造の関連

1. 基本構造の類似点

- a. 書き出し(冒頭部分)がとてもよく似ている。
- b. 両者とも主にキリストについて述べている教義編がある。
- c. 同じ神学分野と用語と聖句を用いてクリスチャンの好ましい生活様式を勧める実践編がある。
- d. 両者ともギリシャ語で一続きの 29 語の全くよく似ている結句があり、コロサイ人への手紙ではさらに2語付け加えられている。

2. 用語あるいは短い成句の類似点

エペソ 1: 1 後半とコロサイ 1: 2 前半	「忠実な」
エペソ 1: 4 とコロサイ 1: 22	「聖なる汚れのない者」
エペソ 1: 7 とコロサイ 1: 14	「贖い... 罪の赦し」
エペソ 1: 10 とコロサイ 1: 20	「あらゆるもの... 天... 地」
エペソ 1: 15 とコロサイ 1: 3-4	「... すべての聖なる者たちを愛していると聞き」
エペソ 1: 18 とコロサイ 1: 27	「豊かな栄光」
エペソ 2: 1 とコロサイ 1: 13	「あなたがたは死んでいたのです」
エペソ 2: 16 とコロサイ 1: 20	「十字架... 和解させ」
エペソ 3: 2 とコロサイ 1: 25	「務め」
エペソ 3: 3 およびコロサイ 1: 26 と 27 節	「秘められた計画」
エペソ 4: 3 とコロサイ 3: 14	「一致」
エペソ 4: 15 とコロサイ 2: 19	「頭」と「成長する」
エペソ 4: 24 とコロサイ 3: 10 と 12 節と 14 節	「身に着け」

エペソ 4: 31 とコロサイ 3: 8	「憤り」、「怒り」、「悪意」、「そしり」
エペソ 5: 3 とコロサイ 3: 5	「猥褻」、「不浄」、「貪欲」
エペソ 5: 5 とコロサイ 3: 5	「偶像崇拜」(貪欲)
エペソ 5: 6 とコロサイ 3: 6	「神の怒り」
エペソ 5: 16 とコロサイ 4: 5	「時をよく用いなさい」

3. 全く同じ聖句あるいは文

エペソ 1: 1 前半とコロサイ 1: 1 前半	
エペソ 1: 1 後半とコロサイ 1: 2 前半	
エペソ 1: 2 前半とコロサイ 1: 2 後半	
エペソ 1: 13 とコロサイ 1: 5	
エペソ 2: 1 とコロサイ 2: 13	
エペソ 2: 5 後半とコロサイ 2: 13 後半	
エペソ 4: 1 後半とコロサイ 1: 10 前半	
エペソ 6: 21-22 とコロサイ 4: 7-8(似ている 29 個の連続する語。コロサイ人への手紙では「 <i>kai syndoulos</i> 」が追加されている)	

4. 聖句あるいは文の類似点

エペソ 1: 21 とコロサイ 1: 16	
エペソ 2: 1 後半とコロサイ 1: 13	
エペソ 2: 16 とコロサイ 1: 20	
エペソ 3: 7 前半とコロサイ 1: 23 後半と 25 節前半	
エペソ 3: 8 とコロサイ 1: 27	
エペソ 4: 2 とコロサイ 3: 12	
エペソ 4: 29 とコロサイ 3: 8 と 4: 6	
エペソ 4: 32 後半とコロサイ 3: 13 後半	
エペソ 5: 15 とコロサイ 4: 5	
エペソ 5: 19-20 とコロサイ 3: 16	

5. 神学的に同じ概念

エペソ 1: 3 とコロサイ 1: 3	感謝の祈り
エペソ 2: 1 と 12 節およびコロサイ 1: 21	神からの疎外
エペソ 2: 15 とコロサイ 2: 14	律法との戦い
エペソ 4: 1 とコロサイ 1: 10	価値ある歩み
エペソ 4: 15 とコロサイ 2: 19	頭から成熟してゆくキリストの体
エペソ 4: 19 とコロサイ 3: 5	性的不浄
エペソ 4: 22 と 31 節およびコロサイ 3: 8	「見逃される」罪
エペソ 4: 32 とコロサイ 3: 12-13	互いに親切な信徒達

エペソ 5: 4 とコロサイ 3: 8	信徒の会話
エペソ 5: 18 とコロサイ 3: 16	聖霊の満たし=キリストの御言葉
エペソ 5: 20 とコロサイ 3: 17	全てのことについての神への感謝
エペソ 5: 22 とコロサイ 3: 18	妻たちよ夫に従いなさい
エペソ 5: 25 とコロサイ 3: 19	夫たちよ妻を愛しなさい
エペソ 6: 1 とコロサイ 3: 20	子供たちよ両親に従いなさい
エペソ 6: 4 とコロサイ 3: 21	父親たちよ子供を叱ってはいけない
エペソ 6: 5 とコロサイ 3: 22	奴隷たちよ主人に従いなさい
エペソ 6: 9 とコロサイ 4: 1	主人たちと奴隷たち
エペソ 6: 18 とコロサイ 4: 2-4	パウロの祈りの要求

6. コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙の両方で用いられているが、パウロの他の著書には見られない用語

a. 「豊かさ」

エペソ 1: 23	「全てにおいて全てを満たしておられる方の豊かさ」
エペソ 3: 19	「神の豊かさの全てに満たされ」
エペソ 4: 13	「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで」
コロサイ 1: 19	「満ちあふれるものの全てを御子の内に宿らせ」
コロサイ 2: 9	「キリストの内には満ちあふれる神性の全てが宿っていて」

b. 教会の「頭(かしら)」なるキリスト

エペソ 4: 15 と 5: 23 およびコロサイ 1: 18 と 2: 19

c. 「疎外され」

エペソ 2: 12 と 4: 18 およびコロサイ 1: 21

d. 「時をよく用いる」

エペソ 5: 16 とコロサイ 4: 5

e. 「根ざし」

エペソ 3: 17 とコロサイ 2: 7

f. 「真理の言葉、福音」

エペソ 1: 13 とコロサイ 1: 5

g. 「忍耐し」

エペソ 4: 2 とコロサイ 3: 13

h. 見慣れない聖句と用語(「結び合わされる」、「補う」)

エペソ 4: 16 とコロサイ 2: 19

D. 要約

1. コロサイ人への手紙の中の用語の3分の1以上がエペソ人への手紙にもある。エペソ人への手紙の中の 155 の節のうちの 75 の節がコロサイ人への手紙の中の節の言い

換えであると推測される。これら2つの事実はパウロが獄中でこれら2つの手紙を書いたことを主張する根拠となる。

2. これら2つの手紙はどちらもパウロの友人のティキコが届けた。
3. これら2つの手紙はどちらも同じ地域(小アジア)に送られた。
4. これら2つの手紙はどちらも同じキリスト教学のトピックを扱っている。
5. これら2つの手紙はどちらも教会の頭(かしら)なるキリストを強調している。
6. これら2つの手紙はどちらも信徒にふさわしい生活を勧めている。

E. 主な相違点

1. コロサイ人への手紙は常に局所的な(特定の地点の)教会に宛てて書かれているが、エペソ人への手紙は普遍的な(その地域のあらゆる)教会に宛てて書かれている。このことはエペソ人への手紙の回覧書簡としての性質によると思われる。
2. 異端はコロサイ人への手紙の最も主要な議題であるが、エペソ人への手紙では直接的には述べられていない。しかし、これら2つの手紙はどちらも特徴的なグノーシス主義的用語を用いている(「知恵」、「知識」、「豊かさ」、「神秘」、「支配権と力」、「責任」)。
3. 主イエス・キリストの再来はコロサイ人への手紙では差し迫ったことだと述べられているが、エペソ人への手紙ではまだ先のことだと述べられている。教会は墮落した世の中で仕えるように召されたが、現在でもそうである(2: 7, 3: 21, 4: 13)。
4. パウロの用いた特徴的な用語のいくつかは様々な意味で用いられている。一つの例は用語「神秘」である。コロサイ人への手紙では神秘はキリスト(コロサイ 1: 26-27, 2: 2, 4章 3節)の意味で用いられているが、エペソ人への手紙では(1: 9と5: 32)、元々隠されていたが今や明らかとなった、異邦人とユダヤ人とを結び合わせる神の御計画の意味で用いられている。
5. エペソ人への手紙には旧約聖書の聖句を暗示する箇所がいくつか見られる(1: 22—詩篇 8篇と2: 17—イザヤ 57: 19, 2: 20—詩篇 118: 22, 4: 8—詩篇 68: 18, 4: 26—詩篇 4: 4, 5: 15—イザヤ 26: 19と51: 17と52: 1と60: 1, 5: 3—創世記 3: 24, 6: 2-3—出エジプト 20: 12, 6: 14—イザヤ 11: 5と59: 17, 6: 15—イザヤ 52: 7)が、コロサイ人への手紙では1~2箇所だけである(2: 3—イザヤ 11: 5, 2: 22—29: 13)。

F. 用語、聖句、あるいはしばしば要旨がとてもよく似ているとは言えるものの、これら2つの手紙はそれぞれ独自の真理も述べている。

1. 三位一体主義的な恵みの祝福—エペソ 1: 3-14
2. 恵みに関する文—エペソ 2: 1-10
3. ユダヤ人と異邦人の一つの新しい体への融合—エペソ 2: 11~3: 13
4. キリストの体の統一と潜在能力—エペソ 4: 1-16
5. 「キリストと教会」(の関係)は「夫と妻」(の関係)の模範—エペソ 5: 22-33
6. 霊的戦いに関する文—エペソ 6: 10-18

7. キリスト教学に関する文—コロサイ 1: 13-18
 8. 人間の行う宗教儀式と規範—コロサイ 2: 16-23
 9. コロサイ人への手紙の中のキリストの宇宙的重要性の主題と、これに対するエペソ人への手紙の中のキリストによる万物の統一の主題
- H. 結論としては、パウロがコロサイ人への手紙の中の思想を重要な真理に発展させながら内容的によく似たこれら2つの手紙(エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙)を書いたという A. T. Robertson と F. F. Bruce の主張を認めるのが最もよいと思われる。

V. 書かれた年代

- A. コロサイ人への手紙の書かれた年代はパウロが(エフェソスやピリピやシーザリアやローマで)投獄されていた時期と関連がある。ローマで投獄されていた時期が使徒行伝に記された事実と最もよく適合する。
- B. ローマで投獄されていた時期と仮定すると、いつ頃かという疑問が生じる。使徒行伝の記述によればパウロは紀元 60 年代の初め頃に獄中にいた。しかし彼は釈放されて牧会書簡群(テモテへの手紙第一と第二およびテトスへの手紙)を書き、その後再び捕えられて、ローマ皇帝ネロが自殺した紀元 68 年 6 月 9 日より前に、多分紀元 67 年に殺された。
- C. コロサイ人への手紙(とエペソ人への手紙とフィレモンへの手紙)の書かれた年代についての有識者達の推測の中で最も確からしいものは、パウロが最初に投獄された紀元 60 年代の初め頃である(ピリピ人への手紙は獄中書簡群のうち最後に、多分紀元 60 年代の初め頃から中頃に書かれた)。
- D. 多分、ティキコはオネシモと一緒にコロサイ人への手紙とエペソ人への手紙とフィレモンへの手紙を小アジアに届けたと思われる。後に、多分数年後にエパフロディトが自らの病から回復した後にピリピ人への手紙を自分の母教会に持ち帰った。
- E. F. F. Bruce と Murry Harris の学説に若干の修正を加えると、パウロの著書の書かれた順序はこのようになると考えられる。

書	書かれた年代	書かれた場所	使徒行伝との関係
ガラテヤ人への手紙	紀元 48 年	シリアのアンテオケ	14: 28、15: 2
テサロニケ人への手紙第一	紀元 50 年	コリント	18: 5
テサロニケ人への手紙第二	紀元 50 年	コリント	
コリント人への手紙第一	紀元 55 年	エフェソス	19: 20
コリント人への手紙第二	紀元 56・57 年	マケドニア	20: 2
ローマ人への手紙	紀元 57 年	コリント	20: 3
獄中書簡群			
コロサイ人への手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	

エペソ人への手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
フィレモンへの手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
ピリピ人への手紙	紀元 62 年後半 ～63 年	ローマ	28: 30-31
第4回伝道旅行			
テモテへの手紙第一	紀元 63 年(あるいはそれ以降。ただし紀元 68 年より前)	マケドニア	
テトスへの手紙	紀元 63 年	エフェソス(?)	
テモテへの手紙第二	紀元 64 年	ローマ	

VI. 宛先と事情

- A. コロサイの教会がエパfras(1: 7 と 8 節、2: 1、4: 12-13 を参照)によって始められたのは明らかである。エパfrasはエフェソスでパウロによって回心したと思われる(1: 7 と 8 節を参照、2: 1 と比較)。コロサイの教会は大半が異邦人であった(1: 21、3: 7 を参照)。エパfrasは獄中のパウロに会いに来て、キリスト教とギリシャ哲学を混合したグノーシス主義(2 章 8 節)と呼ばれる誤った教えを広める偽教師達とユダヤ教的律法主義(ユダヤ教の慣習 [2: 11 と 16 節と 17 節、3: 11]、天使崇拜[1: 16、2: 15 と 18 節]、禁欲主義[2: 20-23]を参照)の問題を報告した。コロサイにはヘレニズム(アレクサンドロス大王以降のギリシャ文明)化を高めつつあったユダヤ人のとても大きな共同体があった。その問題の本質はキリストの御人格と御業を中心とするものであった。グノーシス主義は物質と霊との永遠の二律背反的二元論であるので、イエスが完全に人間でいらっしゃることを否定し、イエスが完全に神でいらっしゃることを肯定した。グノーシス主義者達はイエスの神性を肯定しイエスの人間性を否定しようとした。彼らはまた、神と人間の仲介者としてのイエスの優位性を否定した。グノーシス主義によれば善なる崇高な神と人間の間には多くの天使階層(*eons*)があり、イエスは最高位にいらっしゃるにもかかわらず神々のひとり子でいらっしゃる。グノーシス主義者達は特別な有識者集団を自負し(3: 11、14 節、16 節、17 節を参照)、神に出会うための道として、イエスが聖別された方で自分達の身代わりに犠牲となってくださったことを人類が悔い改めて受け入れ、神が無償で罪を赦してくださることに信仰で応答することの代わりに、特別な秘密の知識を強調した(2: 15、18 節、19 節を参照)。
- B. このような神学的・哲学的雰囲気を持つために、コロサイ人への手紙は以下に示すようなことを強調している。
1. イエスの御人格の独自性と成し遂げられた救いの御業
 2. ナザレのイエスが宇宙の主でいらっしゃることに御統治と重要性—御誕生、お教え、

御生涯、御逝去、復活、そして昇天についての—
イエスは万物の主でいらっしゃるのだ。

VII. 書かれた目的

パウロがこの手紙を書いたのはコロサイの異端に反論するためであった。この目標を達成するためにパウロはキリストを神と全く同じお姿を持つお方(1: 15)、創造主(1: 16)、すでに世におられて万物を維持される方(1: 17)、教会の頭[かしら](1: 18)、最初に復活された方(1章 18 節)、身体に神性の満ちあふれておられる方(1: 18、2: 9)、和解の仲介をされる方(1章 20~22 節)として崇めている。だからキリストは完全な豊かさを持った方なのだ。信徒は「キリストにある豊かさを与えられている」(2: 10)。コロサイの異端は霊的救いをもたらすには神学的に全く不十分であった。コロサイの異端は実質のない虚偽の哲学であり(2: 8)、古い罪の性質を統制することができなかった(2: 23)。

コロサイ人への手紙で繰り返し述べられている主題は、単なる人間の哲学の空しさと対比される、キリストの完全な豊かさである。この豊かさはイエスが宇宙の主でいらっしゃるという事実に表現されている。イエスは万物の、見えるものも見えないものも含めた全てのものの所有者であり創造主であり統治者でいらっしゃるのだ(1: 15-18 を参照)。

VIII. 概要

A. 慣習的なパウロの緒言

1. 送り手の明記、1: 1
2. 宛先の明記、1: 2 前半
3. 挨拶、1: 2 後半

B. キリストの優位性(トピック 1~10 は NKJV の段落の概要より抜粋)

1. キリストにある信仰、1: 3-8
2. キリストの優位性、1: 9-18
3. キリストにある和解、1: 19-23
4. キリストのための労苦、1: 24-29
5. 哲学ではなくキリストに、2: 1-10
6. 律法主義ではなくキリストに、2: 11-23
7. 肉欲ではなくキリストに、3: 1-11
8. キリストを着る、3: 12-17
9. 家庭にキリストを反映させる、3: 18~4: 1
10. 日常生活にキリストを反映させる、4: 2-6

C. パウロの使者たち、4: 7-9

D. パウロの友人たちの挨拶、4: 10-14

- E. パウロの挨拶、4: 15-17
- F. 自筆によるパウロの結語、4: 18

IX. グノーシス主義

- A. このコロサイの異端について私達が知ることの大半は紀元2世紀のグノーシス主義についての書に由来している。しかし、その始まりと言える概念はすでに紀元1世紀にあった(死海文書)。
- B. コロサイにおいて問題となった異端思想とは、キリスト教と初期グノーシス主義とユダヤ教の律法主義の混合思想であった。
- C. コロサイにおいて問題となった異端思想の中には、紀元2世紀にバレンティヌスが提唱したグノーシス主義およびコリントにおいて発展したグノーシス主義の教義をもとにしたものもあった。
 1. 物質と霊はともに永遠である(存在論的二元論)。物質は悪で、霊は善である。霊なる神は悪なる物質の形成に直接関与できない。
 2. 神と物質の間にはエマナチオン(*eons*、つまり天使階層)が存在する。最下位の天使は旧約聖書に登場する YHWH であり、宇宙(*kosmos*)を形成する。
 3. イエスは YHWH と同様にエマナチオンであるが、より大きく、より真の神に近い。上記の教義の中にはイエスを最高位の天使としながらも神よりは下位で、受肉した神(ヨハネ 1 章 14 節を参照)ではありえないとしている。物質は悪なので、イエスは人間の体を持つはずはなく、神であるはずだ。イエスは人間の姿で現れたが、実は霊である。(I ヨハネ 1: 1-3 と 4: 1-6 を参照)。
 4. 救いはイエスへの信仰および特定の人々にのみ知られている特別な知識を通して得られる。知識(暗号)は天球を通過するのに必要である。ユダヤ教の律法主義も神のもとに行くのに必要である。
- D. グノーシス主義者の偽教師達は2つの相反する倫理体系を主張した。
 1. ある人々にとっては生活様式は救いと全く無関係である。彼らにとって救いと霊性とは天使階層(*eons*)を通過するのに必要な秘密の知識(暗号)に内包される。
 2. (1. とは)他の人々にとっては生活様式は救いに不可欠である。この書で偽教師達は真の霊性の現れとして禁欲的な生活様式を強調している(2: 16-23 を参照)。
- E. 参考文献としては Beacon Press 刊の Hans Jonas 著 *The Gnostic Religion* がよい。

X. 用語と聖句の早見リスト

1. 「あなたがたのために天に蓄えられている希望」、1: 5
2. 福音、1: 5
3. 「闇の力」、1: 13

4. 贖い、1: 14
5. 「見えない神」、1: 15
6. 「満ちあふれるものを全て御子のうちに宿らせ」、1: 19
7. 「御子の十字架の血によって平和をもたらされ」、1: 20
8. 「キリストの苦しみの欠けたところを満たしています」、1: 24
9. 「人の言い伝え」、2: 8
10. 「世を支配する霊」、2: 8 と 20 節
11. 「洗礼によってキリストとともに葬られ」、2: 12
12. 「罪の中に死んでいたあなたがた」、2: 13
13. 「負債の証書を無効にし」、2: 14
14. 「あなたがたの命はキリストと共に神の内に隠されているのです」、3: 3
15. 未開人、3: 11
16. 「ラオデキアから回ってくるわたしの手紙」、4: 16

X I . 人物早見リスト

1. エパfras、1: 7、4: 12
2. 「全ての造られたものの中で最初に生まれた方」、1: 15
3. 「王座も主権も、支配も権威も」、1: 16
4. 「死者の中から最初に生まれた方」、1: 18
5. スキタイ人、3: 11
6. ティキコ、4: 7
7. オネシモ、4: 9
8. マルコ、4: 10
9. ルカ、4: 14
10. デマス、4: 14

X II . 登場する地名の地図上の位置

1. コロサイ、1: 2
2. ラオデキア、2: 1
3. ヒエラポリス、4: 13

X III . ディスカッションのための質問

1. なぜパウロは知識と知恵についてとても多く語っているのか(1: 9)。
2. 1: 23 の警告は何を意味するか。
3. 過去の時代から隠されてきた神の秘められた計画とは何か(1: 27)。

4. パウロはこのコロサイの教会の人々を知らなかったのか(2: 1)。
5. 惑わす者はどのようにコロサイの教会の人々を哲学でとりこにしようとしたのか(2: 8)。
6. 2: 9 で強調されている教義は何か。
7. 2: 15 のローマの歴史背景を説明しなさい。
8. 2: 16-17 は誰に対して語られているか。
9. 2: 14-23 では律法主義がどのように述べられているか。
10. 3: 5 の罪はなぜ偶像崇拜と同じなのか。
11. コロサイ 3: 11 はガラテヤ 3: 28 とどのように関連しているか。
12. 3: 16 はエペソ 5: 18 とどのように関連しているか。
13. 3: 23 の霊的原則は何か。
14. 4: 6 の諺をあなた自身の言葉で説明しなさい。
15. なぜパウロは(この手紙に)自分の書いた全ての手紙の結語を書いたのか(4: 18)。

テサロニケ人への手紙への導入

I. 緒言

A. 短い要約

1. テサロニケ人への手紙には、宣教師としての、また牧師としてのパウロの深遠な洞察が表されている。この書簡から、彼が短期間で教会を建て上げて祈りを続け、そして教会の成長と発展と働きに関与したことがうかがえる。
2. この書簡から、彼が忠実に福音を宣べ伝え、未信者の回心に関与し、彼ら(未信者)を叱咤し、誉め、導き、忠告し、教え、愛し、そして自身を捧げることさえしたことがうかがえる。その点で彼は彼らの成長をわくわくしながら見守っていたが、彼らの成熟の速さについては失望していた。
3. これらの使徒たちの中には(宣教に)熱心な愛すべき神のしもべと、小さく熱心で成長する新しい教会が見られる。どちらも忠実で、神に用いられ、神の人々の間には稀であったキリストのような仕え方を互いに行っていた。

B. テサロニケという都市について

1. テサロニケの歴史の簡単な説明

- a. テサロニケはテルマ湾の先端にあった都市である。テサロニケは、ローマから東方に走るローマ帝国の大きな道 Via Ignatia(国道)に面した沿岸都市であった。この町には港があり、肥沃で水はけのよい海岸沿いの平原にも非常に近かった。これら3つの利点によってテサロニケはマケドニアで最大の、そして最も重要な商業と政治の中心となった。
- b. テサロニケは元々テルマと呼ばれていたが、その名はこの地域にあった温泉の名に由来する。古代の歴史家の老プリニウスはテルマとテサロニケが共存していたと言っている。もしこれが事実なら、テサロニケはテルマと境を接していてこれを併合したということになる(Leon Morris 著 *The First and Second Epistles to the Thessalonians*, [Grand Rapids の Wm. B. Eerdmans 出版社が 1991 年に刊行]の 11 ページ)。しかし大半の歴史学者達は、アレキサンダー大王の将軍の一人であった Cassander が紀元前 315 年に、フィリッパというマケドニアの娘とアレキサンダー大王の異父(母)姉妹で妻でもあったテサロニカの名にちなんでこの町を再びテルマと呼んだのだと信じている(Strabo VII 21 章)。キリスト教が広められた最初の数世紀の間に時々、テサロニケは住んでいるクリスチャンの特徴から「(キリスト教)の公認都市」というあだ名をつけられるようになっていた(Dean Farrar 著 *The Life and Work of St. Paul* [New York の Cassell and Company 有限会社が 1904 年に刊行] の 364 ページ)。現代ではテサロニケはサロニカという名で知られ、今もギリシャの主要都市の一つである。

- c. テサロニケはコリントと同様に国際的大都市であり、当時知られていた全ての世界から人々がやってきて住みついた。
 - (1) 北方からやってきて住みつき、異教と異教文化とをもたらした野蛮なゲルマン人
 - (2) アカイアから南下して、あるいはエーゲ海の諸島から来て住みつき、自分達の洗練された文化と思想をもたらしたギリシャ人
 - (3) 西方からやってきて住みついたローマ人。彼らの大半は退役軍人であり、自分達の意志の強さと富と政治権力をもたらした。
 - (4) 最後に、ユダヤ人が東方から大勢やってきた。ついには人口の4分の3をユダヤ人が占めるようになった。彼らは自分達の倫理的な一神教信仰と国家についての(訳者注:他の人種への)偏見を持ちこんだ。
- d. テサロニケは人口約20万人を有し、まさしく国際都市であった。この町には温泉があったので保養地となり、また健康センターでもあった。港があり、肥沃な平原とイグナティア道に近かったのでこの町は商業の中心であった。
- e. テサロニケはマケドニアの首都であり最大の都市であるとともに政治の中心でもあった。ローマの属州の州都でありローマ市民(大半は退役軍人)が大勢住んでいたのので、この町は自由都市となった。テサロニケ人の大半はローマ市民であったので、彼らには進貢(訳者注:貢物[みつぎもの]、つまり現代でいう税を納めること)の義務がなく、また彼らはローマの法の統治下にあった。従ってテサロニケの統治者は「行政官」と呼ばれた。この肩書は文献のどこにも見られないが、Vardar 門の名で知られるテサロニケの凱旋門の上部に刻まれて保存されている(Farrar の著書の 371 ページ中頃)。

2. パウロがテサロニケに来るきっかけとなった出来事

- a. パウロをテサロニケに導いた出来事は数多くあるが、しかし実際に彼が置かれていた環境の全て以上に決定的となったのは直接的で明確な神の召しであった。パウロには元々ヨーロッパ大陸に入る計画はなかった。この第二の伝道旅行における彼の望みは、最初の伝道旅行において彼が建て上げた小アジアの諸教会を再訪し、そして東方へと向かうことであった。しかし彼が北東方向へ向かおうとしたまさにそのとき、神は扉を閉ざし始められた。これの最高潮はパウロのマケドニアに対する見方であった(使徒行伝 16: 6-10 を参照)。これによって起こった出来事は2つある。ひとつはヨーロッパ大陸に福音が伝えられたことであり、もうひとつはパウロがマケドニアにおいて自身の置かれていた環境のゆえに使徒書簡を書き始めたこと(Thomas Carter 著 *Life and Letters of Paul* [Nashville の Cokesbury Press が 1921 年に刊行] の 112 ページ)であった。
- b. 上記の霊的導きの他にパウロをテサロニケに導いた、実際に彼が置かれていた環境は以下に示すような事柄であった。
 - (1) パウロはシナゴグのない小さな町ピリピに行った。そこでの彼の働きは予言者的で

悪魔的な奴隷の少女の所有者達と町議会によって挫折した。パウロは打ちのめされ辱められたが、これら全ての出来事のただ中で1つの教会がつくられた。反発と肉体への処罰のために、パウロは希望していたよりも早くピリピを去らなければならなかった。

- (2) そこから彼はどこへ行ったのか？彼はピリピと同じくシナゴグのないアンフィポリスとアポロニアを通過した。
- (3) 彼はその地域で最大の都市でありシナゴグのあるテサロニケに来た。パウロはまず最初に地域のユダヤ人のところに行くことを習慣としていた。彼がこのようにした理由は以下に示すようなことであった。
 - (a) 彼らが旧約聖書の知識を持っていたから
 - (b) シナゴグで教え説教する機会を求めて
 - (c) 彼らの選ばれた民、つまり神の契約の民としての立場から(マタイ 10: 6、15 章 24 節、ローマ 1: 16-17 と 9-11 節を参照)
 - (d) イエスは御自身をまず彼らに、そして世に捧げられた。だからパウロもイエスに倣おうとした。

3. パウロの仲間達

- a. パウロはテサロニケではシラスとテモテと一緒にいた。ルカはピリピではパウロと一緒におり、その地に留まった。このことは使徒行伝 16 章および 17 章の文中の代名詞「わたしたち」と「彼ら」から分かる。ルカはピリピでは(自分とパウロを)「わたしたち」と称したが、テサロニケでは「彼ら」と称した。
- b. シラス、つまりシルワノは、バルナバとヨハネ・マルコがキプロスに戻った後にパウロが第二の伝道旅行の同行者として選んだ人であった。
 - (1) 彼は使徒行伝 15: 22 で初めて聖書に登場するが、その箇所によれば彼はエルサレムの教会の兄弟達の間で頭(かしら)と呼ばれていた。
 - (2) 彼は預言者でもあった(使徒行伝 15: 32 を参照)
 - (3) 彼はパウロと同様にローマ市民であった(使徒行伝 16: 37 を参照)
 - (4) 彼とユダ・バルサバは状況調査のためにエルサレムの教会からアンテオケに遣わされた(使徒行伝 15: 22 と 30-35 節を参照)。
 - (5) II コリント 1: 19 でパウロは彼を賞賛し、いくつかの書簡で彼について記した。
 - (6) 後に彼はペテロとともにペテロの手紙第一を書いたとされている(I ペテロ 5: 12 を参照)。
 - (7) ルカは彼をシラスと呼んだが、パウロとペテロは彼をシルワノと呼んだ。
- c. テモテもパウロの仲間であり共に働いた人であった。
 - (1) パウロは最初の伝道旅行中にリストラで彼に出会い、彼を回心させた。
 - (2) テモテはギリシャ人の父とユダヤ人の母の間に生まれた。パウロは異邦人伝道におい

て共に働く者として彼を用いたいと思っていた。

- (3)パウロは彼がユダヤの民と共に働くことができるように彼に割礼を施した。
- (4)テモテはコリント人への第二の手紙とコロサイ人への手紙とテサロニケへの第一・第二の手紙とピレモンへの手紙の挨拶文中にその名が登場する。
- (5)パウロは彼について「伝道におけるわたしの息子」と言っている（Ⅰテモテ 1: 2、Ⅱテモテ 1: 2、テトス 1: 4を参照）。
- (6)自身の書簡群全般を通してのパウロの一般的な語り口はテモテが若く臆病であったことを暗示している。しかしパウロは彼を大いに信頼していた（使徒行伝 19: 27、Ⅰコリント 4: 17、ピリピ 2: 19を参照）。
- d. パウロの仲間達の一同にはテサロニケから来てパウロの後の働きに加わったと言われている人々がいる。彼らはアリストアルコ（使徒行伝 19: 29、20: 4、27: 2）とセクンド（使徒行伝 20: 4）。デマスもテサロニケから来たと考えられている（ピレモン 24 節、Ⅱテモテ 4: 10を参照）。

4. 都市におけるパウロの働き

- a. テサロニケにおけるパウロの働きは、まず最初にユダヤ人のところに行き、それから異教徒のところを訪問するという、彼がいつも行っていたことであった。パウロはシナゴークで安息日について3回説教した。彼のメッセージは「イエスはメシア（救世主）である」というものであった。メシアが苦しみを受けられるメシア（創世記 3: 15 とイザヤ53章を参照）であり政治的な一過性のメシアではないことを示すために彼は旧約聖書の御言葉を用いた。パウロはまた、キリストの復活と全ての人に与えられる救いも強調した。全ての人を救うことのできる時機が来てからイエスがメシアとして君臨されることははっきりとしていた。
- b. このメッセージに対する応答は、ユダヤ人の一部と多くの敬虔な異教徒と多くの女性の有名人達がイエスを救い主として、また主として受け入れたことであった。これら回心者達のグループ（の特徴）を分析することは、パウロがこの教会に対して後に送った書簡（の内容）の理解においてとても重要である。
- c. この2つの使徒書簡（テサロニケ人への第一の手紙と第二の手紙）のどちらにも旧約聖書からの暗示がないことから、（テサロニケの）教会員の大半が異教徒であったことが分かる。以下に示すいくつかの理由から異教徒は容易にイエスを救い主として、また主として受け入れた。
 - (1)彼らの伝統的な宗教は無力な迷信であった。テサロニケはオリンポス山の裾野にあり、人々は皆その標高がゼロであることを知っていた。
 - (2)福音は全ての人に対して無償である。
 - (3)ユダヤ教の排他的国民主義はキリスト教にはない。ユダヤ教はその一神教主義と崇高な道徳性で多くの人を魅了したが、一方で（割礼のような）その嫌悪感を起こさせるような儀式および固有の人種的かつ国民的偏見で非常に嫌がられた。

- d. 多くの「女性の有名人達」は自身の宗教を選ぶ能力のゆえにキリスト教を受け入れた。マケドニアと小アジアの女性は他のギリシャ・ローマ世界の女性より自由な身分であった(Wm. M. Ramsay 卿著 *St. Paul the Traveller and Roman Citizen* [New York の G. P. Putnam's Sons が 1896 年に刊行]の 227 ページ)。しかし、より貧しい階層の女性は自由な身分ではあったが迷信と多神教の影響の下にあった(Ramsay の著書の 229 ページ)。
- e. 多くの解説者はパウロのテサロニケ滞在期間の長さの問題を見出している。
- (1)使徒行伝 17: 2 はパウロがテサロニケ滞在中にシナゴークで安息日について3回説教した理由について述べている。
 - (2) I テサロニケ 2: 7-11 はパウロがテサロニケ滞在中に行った(伝道の働きとは別に収入を得るための)仕事について述べている。この仕事とは幕屋作り、あるいは一部の解説者達の意見によれば皮革工芸(「皮なめし」など)であった。
 - (3)ピリピ 4: 16 は、滞在期間はもっと長くてそのテサロニケ滞在中にパウロはピリピの教会から金銭の贈り物を2回受けたという意見を支持している。この2都市間の距離は約 100 マイルである。解説者達の中には、パウロは約2~3ヶ月滞在し、ユダヤ人への伝道の働きでのみ安息日について説教したという意見もある(Shepard の著書の 165 ページ)。
 - (4)使徒行伝 17: 4 と I テサロニケ 1: 9 と 2: 4 とで回心についての記述が異なることはこの意見を支持している。これらの記述の最も重要な相違点は異教徒による偶像の拒絶であった。使徒行伝に登場する異教徒はユダヤ人の転向者(改宗者)であり、すでに偶像を否定していた。文脈はパウロがユダヤ人よりもその他の民族の異教徒への伝道に力を注いでいたことを暗示している。
 - (5)パウロは(初めて訪れる地では)常にまず最初にユダヤ人のところへ行っていったので、彼がユダヤ人よりもその他の民族の異教徒への伝道に力を注いでいたらしいことは分かるとしても、その内容は明らかではない。自分のメッセージをユダヤ人が拒むと彼はその他の民族の異教徒のところへ行った。異教徒達が大量で福音に应答するとユダヤ人は嫉妬し(パウロの伝道におけるテクニックのひとつ。ローマ9~11章を参照)、(テサロニケの)市中の場末で暴動を始めた。
- f. 暴動のせいでパウロはヤソンの家を去ってシラスとテモテと一緒に身を隠したので、暴徒達が彼らを探しにヤソンの家に押しかけたときには彼らはいなかった。行政官は市中の保安のためにヤソンの身柄を拘束した。このことがもつてパウロは夜陰にまぎれてテサロニケを去りベレアに行った。それでも(テサロニケの)教会は多くの反対に遭いながらもキリストを証しすることをやめなかった。

II. 著者

- A. テサロニケ人への第一の手紙 現代知られている文体を見る限りでは、パウロがテサロニケ人への第一の手紙の真の著者であることを批評家達はかなり疑っているが、彼らの結論を多くの学者達は納得していない。テサロニケ人への第一の手紙は Marcion の正典 (紀元 140 年) と Muratorian Fragment (紀元 200 年) に収録されている。この2つの新約聖書の正典はローマ人の間で盛んに読まれた。イレネウスは紀元 180 年頃に書いた自著でテサロニケ人への第一の手紙の名を引用した。
- B. テサロニケ人への第二の手紙
1. テサロニケ人への第二の手紙は必ずしもパウロの書いた他の使徒書簡ほどには受け入れられず、いくつかの見地に基づいて攻撃されてきた。
 - a. 問題の一つは語彙である。この書簡にはパウロの書いた他の使徒書簡には見られない用語が数多く見受けられる。
 - b. 「文体は型にはまっていて時々不思議なくらいに形式的である」(Heard の著書の 186 ページ)
 - c. これら2つの書簡の終末論は一貫していない。
 - d. テサロニケ人への第二の手紙は新約聖書に典型的な反キリストについての見解が記されているので、解説者達の中にはこの書簡がパウロの書いたものではないという結論を出しているものもいる。
 2. パウロがテサロニケ人への第二の手紙の真の著者であることはいくつかの仮定に基づいている。
 - a. Polycarp、Ignatius、Justin はそれを認めている。
 - b. それは Marcion の正典に収録されている。
 - c. それは Muratorian Fragment に収録されている。
 - d. イレネウスは自著でその手紙の名を引用している。
 - e. 語彙、文体、神学はテサロニケ人への第一の手紙でパウロが用いているものと同じである。
- C. 2つの書簡の比較
1. これら2つの書簡は、著者の主張だけでなく実際の文体もとてもよく似ている。冒頭句と結句を別にすれば、類似点は書簡全体の約4分の3にも見られる。
 2. テサロニケ人への第二の手紙の一般的な語り口は第一の手紙とは異なり、より他人行儀で形式的である。しかし、第一の手紙が書かれた感情的背景と第二の手紙において深刻化した問題を知ればこれは容易に理解できる。
- D. 書簡の書かれた順序
1. F. W. Manson は Johannes Weiss の解説を用いてもうひとつの興味深い仮説を発表している。彼はこれら2つの書簡の書かれた順序は逆であると主張している。この理由は以下に

示すようなものである。

- a. テサロニケ人への第二の手紙では試練と苦難は最高潮に達しているが、テサロニケ人への第一の手紙ではそれらは過去のこととされている。
 - b. テサロニケ人への第二の手紙では書簡の著者の内的困難が彼が知ったばかりの新展開として語られているが、テサロニケ人への第一の手紙では状況は全ての当事者が熟知していた。
 - c. もしもテサロニケ人がテサロニケ人への第二の手紙2章に精通していたら、彼らが時間と季節について教えられる必要がない(I テサロニケ 5: 1)という発言はきわめて正しい。
 - d. I テサロニケ 4: 9 と 13 節および 5: 1 中の定型句「～に関しては」は I コリント 7: 1 と 25 節、8: 1、12: 1、16: 1 と 12 節中に見られるものと同様であり、それらの箇所では著者は自分に宛てて書き送られた書簡中で指摘された点に答えている。Manson はその返答がテサロニケ人への第二の手紙の中で提起されたある問題と関連しているのではないかと考えている。
2. いくつかの仮説はこの議論に反論するものであるようだ。
- a. パウロが目している問題はテサロニケ人への第一の手紙からテサロニケ人への第二の手紙へと増大し深まっている。
 - b. テサロニケ人への第二の手紙の文脈はパウロからのある書簡(2: 2 と 15 節および 3 章 17 節)について述べているので、この書簡がテサロニケ人への第一の手紙ではないと私達が確信するなら、問題はある紛失した書簡にあるということになる。
 - c. 第一の手紙の主要部を構成する個人的回想は第二の手紙には述べられていないが、この手紙が第一の手紙の続きならばそれは当然のことである。
 - d. これら2つの書簡の書かれた順序が逆ならば、これらの語り口はこの状況について全く不自然に思える。

Ⅲ. 書かれた時期

- A. テサロニケ人への手紙が書かれた時期はパウロの書簡群に記されている最も特定された時期のうちの一つである。その時期はパウロが「コリントで捕えられてアカイア総督ガリオの前に連れてこられた」頃であると記録されている。デルフィで発見された碑文はこの疑問に答え、この同じガリオの名があることから(テサロニケ人への手紙が書かれた時期は)クラウディウス帝の治世であると言っている。それはこの皇帝が裁判権力を持ってから 12 年目であり、皇帝として承認されてから 26 年目であった。この 12 年目の年とは紀元 52 年 1 月 25 日から紀元 53 年 1 月 24 日までであった。一方、皇帝として承認されてから 26 年目の年とは正確には分かっていないが、27 年目の年とは紀元 52 年 8 月 1 日以前であることは分かっている。クラウディウス帝の決断は紀元 52 年の前半期にガリオ総督に伝えられたに違いな

い。というのは当時は通常、総督は初夏に着任して1年の任期を務めたからである。つまりガリオは紀元 51 年の初夏に着任したということになる(Morris の著書の 15 ページ)。

- B. このように総督の在任期間を明らかにすることではテサロニケ人への手紙が書かれた時期を明らかにするという問題を完全に解決することにはならない。パウロはコリントに 18 ヶ月滞在した(使徒行伝 18: 11)が、ガリオの前に連れてこられたのがその頃であったかどうかは分かっていない。大半の解説者達はテサロニケ人への手紙第一と第二が書かれた時期を紀元 50~51 年と考えている。

IV. テサロニケ人への手紙の背景となった出来事

- A. パウロがテサロニケ人への手紙を書ききっかけとなった出来事は複雑で互いに絡み合っている。はっきりした相違点、特に実情と感情的背景に関する違いが述べられなければならない。(テサロニケの)市中の場末に住む迷信深い多神教的な連中をユダヤ人が扇動して暴動を起させ、そして暴徒達がパウロと彼の仲間達を探しにヤソンの家に押しかけたので、パウロはテサロニケの新しい信徒達のもとを去らなければならなかった。行政官の前で尋問を受けた後、ヤソンと他のクリスチャンの指導者達は市中の保安のために身柄を拘束された。パウロはこのことを聞いてこの若く未熟な教会(クリスチャン達)のもとを去らなければならぬと悟った。だから彼はシラスとテモテと一緒にベレアに行った。明らかに最初に同行したのはテモテであり(使徒行伝 17: 10 を参照)後にシラスが加わって一緒にアテネに行った(使徒行伝 17: 15 を参照)。最初にパウロはベレアのユダヤ人から誠意ある歓待を受けたが、以前にユダヤ人の猛烈な反対に直面した彼にとってそれは祝福であった。しかしこれは長くは続かなかった。テサロニケのユダヤ人はベレアに南下して問題を起こし始めた。従ってパウロは再びその地を去らなければならなかった。
- B. このときパウロはアテネに行き、そこで冷たく無反応な対応を受けた。哲学者達にとって彼は目新しい人物となった。マケドニアで彼が経験したのは迫害と反発であった。彼は殴られ、衣服を剥ぎ取られて裸にされ、町中を夜中じゅう追い回された。学者達は彼をあざけり、異教徒と彼と同国の人々は彼を忌み嫌った(Ⅱコリント 4: 7-11, 6: 4-10, 11: 23-29 を参照)。
- C. パウロは重要な時にこのテサロニケの約束された教会を去るように強制された。彼ら(テサロニケの約束された教会のクリスチャン達)の信仰は未熟であり、彼らは苦難と迫害に直面していた。パウロはそれ以上の精神的苦痛に耐えられなかった。若い回心者達を心配して、ベレアとアテネの間のあらゆる所からパウロはテモテとシラスをマケドニアの新しい教会に送り返した。多くの解説者は彼が 6 ヶ月から 1 年間そこに滞まって宣教したと感じている。教会は自分達を教え安心させ励ましてくれる人を渴望していた。テモテ自身は正真正銘の新しい回心者であった。彼はパウロの最初の伝道旅行中に回心したが、パウロと一緒にいたのはその旅行中だけであった。というのはパウロが二回目の伝道旅行中にリストラに行ったからである。彼は伝道の初心者であったがパウロは彼を大いに信頼していた。これはテモテにとってパウロの公式の代

表者としての最初の課題であった。

- D. アテネではパウロは一人で伝道したが、マケドニアで告げ知らせた福音とその地の新しいクリスチャンに絶えず関心を寄せたことに対する応答がなかったのでも気落ちし落胆した。彼は特にテサロニケの教会について関心を持たれていた。そのように短い時間と困難な状況で教会が建てられて維持されていけたのだろうか。(Carterの著書の115ページによれば)これに加えて彼はしばらくの間(解説者達の中にはほんの1~2ヶ月だと言う者もいるが、半年から1年の間)テモテとシラスから言葉を掛けられることはなかった(Farrarの著書の369ページ)。このことからパウロがコリントに着いたときの感情の状態が分かる。
- E. コリントではパウロにとって大きな励ましとなる2つの出来事があった。
1. コリントの多くの人々が福音に応答するであろうというビジョンが神から与えられた(使徒行伝 18: 9-10)。
 2. テモテとシラスが到着して良い知らせをもたらした。パウロがコリントからテサロニケの人々に宛てて手紙を書くきっかけとなったのはテモテのテサロニケからのメッセージであった。パウロはその地の教会からの教義的および実際の質問に答えるつもりだったのだ。
- F. テサロニケ人への第二の手紙が書かれた時期は第一の手紙が書かれてから間もなくであった。というのはその書簡はパウロがそうなるように望んだことの全てを叶えなかったからである。また、彼は他にも問題があることに気付いていた。研究者達の多くはテサロニケ人への第一の手紙が書かれた6ヶ月後に第二の手紙が書かれたと信じている。

V. この手紙の書かれた目的

- A. テサロニケ人への手紙には3つの(書かれた)目的がある。
1. 迫害の最中にあってもテサロニケ人が神に忠実で、またキリストらしくいたことについての神へのパウロの喜びと感謝を分かち合うこと。
 2. 彼の意志と性格に対してなされていた批判に答えること。
 3. 主の再来についての議論をすること。パウロの説教の中のこの終末論はテサロニケのクリスチャン達の心の中に2つの疑問を生んだ。
 - a. 主の再来の前に死んだ信徒達に何がおこるのだろうか。
 - b. (伝道の)働きをやめてただじっと主の再来を待っていた信徒達に何がおこるのだろうか(Barclayの著書の21~22ページ)。
 4. 教会がした特定の質問に答えること(4: 13と5: 1を参照)。
- B. 上記の事柄の大半はこのテサロニケの教会(クリスチャン達)が若くてとても熱心であったという事実によって説明できる。しかしそのような状況のゆえに彼らの訓練と教化は不完全であった。これらの問題はこのような性質の教会について予想されること、つまり新しい信徒、(信仰の)弱い人々、臆病な人々、怠惰な人々、空想家(夢想家)、錯乱した人々を表す。

- C. テサロニケ人への第二の手紙の存在意義(どのようなものとして書かれたものか)は「最初の治療において現われていなかった特定のしつこい症状が発見された後に書かれる、同じ症状に対する第二の処方箋」(Walker の著書の 2968 ページ)であった。

VI. 引用文献

William Barclay 著 *The Letters and the Revelation*、*The New Testament* 第2巻、New York の Collins が 1969 年に刊行

Thomas Carter 著 *Life and Letters of Paul*、Nashville の Cokesbury Press が 1921 年に刊行

Dean Farrar 著 *The Life and Work of St. Paul*、New York の Cassell and Company が 1904 年に刊行

Richard Heard 著 *An Introduction to The New Testament*、New York の Harper and Row 出版社 が 1950 年に刊行

Bruce Manning Metzger 著 *The New Testament : Its Background, Growth and Content*、Nashville の Abingdon Press が 1965 年に刊行

T. W. Manson 著 *Studies in the Gospels and Epistles*、Philadelphia の Westminster が 1962 年に刊行

Leon Morris 著 *The First and Second Epistles to the Thessalonians*、Grand Rapids の Eerdmans
174
が 1991 年に刊行

W. M. Ramsay 著 *St. Paul the Traveller and Roman Citizen*、New York の G. P. Putnam's Sons
が 1896 年に刊行

J. W. Shepard 著 *The Life and Letters of Paul*、Grand Rapids の Wm. B. Eerdmans 出版社が 1950
年に刊行

R. H. Walker 編 *The International Standard Bible Encyclopedia* 第5巻、N. D.

VII. 簡単な概要*

A. 挨拶、1: 1

B. 感謝の祈り、1: 2-4

C. 回想、1: 5-2: 16

1. 最初の説教へのテサロニケ人の応答、1: 5-10

2. テサロニケでの福音説教、2: 1-16

a. (伝道)チームの意志の純粹さ、2: 1-6 前半

b. 援助を受けることを(伝道)チームが拒んだこと、2: 6 前半-9

c. (伝道)チームのふるまいは申し分なかった、2: 10-12

d. (伝道)チームによる神の御言葉のメッセージ、2: 13

e. 迫害、2: 14-16

D. パウロとテサロニケ人との関係、2: 17-3: 13

1. テサロニケ人のとほりに戻りたいという彼の願ひ、2: 17 と 18 節
2. テサロニケ人についてのパウロの喜び、2: 19 と 20 節
3. テモテの働き、3: 1-5
4. テモテの報告、3: 6-8
5. パウロの満足、3: 9 と 10 節
6. パウロの祈り、3: 11-13

E. クリスマン生活についての奨励の言葉、4: 1-12

1. 一般、4: 1 と 2 節
2. 性的純潔、4: 3-8
3. 兄弟愛、4: 9 と 10 節
4. 生計を立てる、4: 11 と 12 節

F. 主の再来に関する問題、4: 13-5: 11

1. 主の再来の前に死んだ信徒達、4: 13-18
2. 主の再来の時、5: 1-3
3. 昼の子、5: 4-11

G. 一般的な奨励の言葉、5: 12-22

H. 結論、5: 23-28

*この書簡にはパウロの他の書簡の大半に見られるような教義編と実践編の整然とした要約が見られない。一般的様式に従うなら 4: 17-18 における主の再来についてのパウロの議論が教義編ではなく実践編となるのだ。主の再来はただ受け入れられるべき教義ではなく、主が再びこの世に戻られるその時を期待しながら生活することなのである。

VIII. 用語と聖句の早見リスト

1. 「あなたがたはわたしたちに倣う者となりました」、1: 6
2. 「生けるまことの神」、1: 9
3. 「来るべき怒り」、1: 10
4. 「母親が子供を大事に育てるように」、2: 7
5. 「あらゆる人々に敵対し」、2: 15
6. 「サタンに妨げられました」、2: 18
7. 「あなたがたの信仰に欠けているものを補う」、3: 10
8. 聖化、4: 3
9. 眠りにつゐた、4: 13
10. 「すでに眠りにつゐた人々よりも先になることはありません」、4: 15

11. 「神のラツパ」、4: 16
12. 「雲」、4: 17
13. 「このようにしてわたしたちはいつまでも主とともにいることとなります」、4: 17
14. 眠る、5: 6と7節
15. 身を慎む、5: 8
16. 「信仰と愛の胸当て」、5: 8
17. 「救いの希望を兜として」、5: 8
18. 聖なる口づけ、5: 26
19. 忍耐、Ⅱテサロニケ 1: 4
20. 永遠の破滅、Ⅱテサロニケ 1: 9
21. 背信、Ⅱテサロニケ 2: 3
22. 「主は御自分の口から吐く息で殺してしまわれます」、Ⅱテサロニケ 2: 8

Ⅸ. 人物早見リスト

1. シルワノ、Ⅱテサロニケ 1: 1
2. 大天使、Ⅰテサロニケ 4: 16
3. 「人々が...と言っている間に」、Ⅰテサロニケ 5: 3
4. 「不法の者」、Ⅱテサロニケ 2: 3
5. 「今のところ抑えている者」、Ⅱテサロニケ 2: 7
6. 「怠惰な生活をしている者」、Ⅱテサロニケ 3: 6

Ⅹ. 登場する地名の地図上の位置

1. テサロニケ、1: 1
2. マケドニア、1: 8
3. アカイア、1: 8
4. ピリピ、2: 2
5. ユデア、2: 14
6. アテネ、3: 1

ⅩⅠ. ディスカッションのための質問

1. 2: 3と5節でパウロは自らの説教を5通りに記している。それらを挙げなさい。
2. なぜパウロは自分が説教した諸教会から金銭を受け取ろうとしなかったのか(2: 9)。
3. 4: 11(とⅡテサロニケ 3: 6-12)はパウロがこの手紙を書くきっかけとなった歴史的状況とどのように関連しているか。
4. 4: 17は歓喜とどのように関連しているか。

5. 5: 1は何について述べているか。
6. なぜパウロは信徒を「兵士」と表現しているか(5: 8)。
7. 5: 12-13は現代の伝道活動とどのように関連しているか。
8. 5: 14-22で信徒が行うように召されている事柄を挙げなさい。
9. 5: 23によれば人間は三分割説(訳者注:ギリシャ思想で人間を肉体・霊・精神の3つに分けて理解すること)で理解されうるか。
10. IIテサロニケ1章の中心主題は何か。それはIテサロニケ1章の中心主題とどのように異なるか。
11. IIテサロニケ2: 4はユダヤの神殿の再建の命令か。
12. IIテサロニケ2: 11は人間の自由意志および責任とどのように関連しているか。
13. IIテサロニケ2: 13-15は予定運命および自由意志とどのように関連しているか。

牧会書簡群への導入 テモテへの手紙第一・第二とテトスへの手紙

I. 緒言

- A. テモテへの手紙第一とテトスへの手紙およびテモテへの手紙第二の中に述べられている地理上の所在地は使徒行伝とパウロの他の書簡群の中の時系列とは符合しない。
1. エフェソスの訪問 (I テモテ 1: 3 を参照)
 2. トロアスの訪問 (II テモテ 4: 13 を参照)
 3. ミレトスの訪問 (II テモテ 4: 20 を参照)
 4. クレタでの伝道活動 (テトス 1: 5 を参照)
 5. スペインでの伝道活動 (ローマのクレメンスの紀元 95 年の著書と紀元 180-200 年編纂のムラトリー正典を参照)
- であるから私はパウロが監獄から釈放されて (紀元 60 年代初頭から中頃; 紀元 95 年頃に書かれた I クレメンス 5 章に記されている) 第 4 回伝道旅行をし、再び逮捕されて紀元 68 年 (ローマ皇帝ネロの死んだ年) より前に殺害されたのだと思う。
- B. これらの手紙の書かれた目的は一般的に監督 (教会運営) と考えられている。しかし Gordon Fee は *New International Biblical Commentary* シリーズ中の自身の注解書「I・II テモテおよびテトスへの手紙」でこれらの手紙の書かれるきっかけとなった出来事はエフェソスの家庭教会およびクレタ島に現れた誤りの教えであると述べており、私はその意見に納得している。
- C. ある意味で牧会書簡群はエッセネ派の *Manual of Discipline* に似た規範的運営方式を確立する役割を果たしている。これらの指導指針は、初期教会において使徒の教えと指導方式からの逸脱が普遍的に見られたことから、全てにおいて必要とされた。
- D. ルカの福音書と使徒行伝中でルカが用いている語彙と牧会書簡群中でパウロが用いている語彙が似ているのはパウロがルカに書記を務めてもらっていた事実によると思われる (C. F. C. Moule 著 *The Problem of the Pastoral Epistle: A Reappraisal* を参照)。S. G. Wilson も自著 *Luke and the Pastoral Epistles* 中で、これら 3 つの書はローマからの福音の広がり記録した第三の書を書こうとルカが試みたものと思われると主張している。
- E. なぜこれら 3 つの書は一まとめで扱われているのか。それらは個別の時期、場所、出来事を記したものとみなしてよいのだろうか。事実、テモテへの手紙第一とテトスへの手紙は教会運営についての書である。現実に関連づけていると思われるのは (1) 用いられている語彙 (2) 偽教師 (3) [一まとめで扱われるなら] これらの書の時系列が使徒行伝の時系列と容易には一致しないという事実である。

II. 著書

- A. これらの手紙自体には使徒パウロから使徒の代表者2名、つまりテモテとテトスに宛てて書かれたと記されている（I テモテ 1: 1、II テモテ 1: 1、テトス 1: 1 を参照）。
- B. 牧会書簡群の著書についての議論は紀元19世紀および20世紀に始まった。著書がパウロではないという学説の根拠は一般的に次のような事柄である。
1. 教会運営の発展（指導者の任命）
 2. グノーシス主義の蔓延（紀元2世紀の記録による）
 3. 神学（信条告白）と様々な語彙および文体の発展（これらの手紙で用いられている語彙の3分の1はパウロの他の著書では用いられていない）
- C. これらの学説の違いは以下の事柄によってはっきりと説明されうる。
1. これらが多分ルカが書記を務めて書かれたパウロの最後の著書であるという事実
 2. 語彙と文体に書かれた事情が反映されている。
 3. グノーシス主義思想は紀元1世紀のユダヤ教思想を発展させたものである（死海文書）。
 4. パウロは優れた神学者であり、語彙を豊富に用いる創造的な著述家であった。
- D. （著書選定の）歴史的慣例は以下の事柄に関して理解が深められている。
1. パウロはクリスチャンの職業書記（この手紙の執筆時、多分ルカだろう）を採用している。
 2. パウロは共同執筆者（自分の伝道チームの一員。I テモテ 1: 5 を参照）を採用している。
 3. パウロは自著で礼拝つまり賛美の言葉を引用している（Hawthorne と Martin 共編で IVP 刊の *Dictionary of Paul and His Letters* の 664 ページに十分な要約が見られる）。
パウロが牧会書簡群に他の聖書箇所からの礼拝つまり賛美の言葉の引用を載せているという指摘から、*hapax legomena*（新約聖書にただ1度だけ用いられている用語）とパウロ独自のものではない聖句の数およびパウロ独自の用語法の説明がつく。指摘されているのは以下のような事柄である。
 - a. 頌栄歌[神の栄光をたたえる歌]（I テモテ 1: 17 と 6: 15-17 を参照）
 - b. 悪行のリスト（I テモテ 1: 9-10 を参照）
 - c. 婦人の適切な品行についての示唆（I テモテ 2: 9~3: 1 前半を参照）
 - d. 監督にふさわしい資格についての示唆（I テモテ 3: 1 後半~13 節を参照）
 - e. 賛美歌の形をとる告白（I テモテ 2: 5-6 と 3: 16、II テモテ 1: 9-10、テトス 3: 3-7 を参照）
 4. 賛美歌（I テモテ 6: 11-12 と 15~16 節、II テモテ 2: 11-13、テトス 2: 11-14 を参照）
 - a. 旧約聖書の *midrash*（I テモテ 1: 9-10、2: 9~3: 1 前半、5: 17-18、II テモテ 2 章 19~21 節、テトス 3: 3-7 を参照）
 - b. 定型句
 - (1)「言葉は真実である」（I テモテ 1: 15 と 2: 9~3: 1 前半、II テモテ 2: 11-13、テトス 3: 3-8 を参照）
 - (2)「このことを知っていれば」（I テモテ 1: 9-10、II テモテ 3: 1-5 を参照）

(3)「これらのこと」(Ⅰテモテ 4: 6 と 11 節、Ⅱテモテ 2: 14、テトス 1: 15-16 と 2: 1 を参照)

5. ギリシャの詩からの引用(テトス 1: 12 を参照[エピメニデスあるいはエウリピデス])

E. 紀元2世紀頃の「パウリニスト」が、パウロの著書の他の箇所には述べられていない人名(ヒメナイ[Ⅰテモテ 1: 20 とⅡテモテ 2: 17]、アレクサンドロ[Ⅰテモテ 1: 20])、ゼナス[テトス 3: 13]と出来事(ミレトスでのトロフィモの病気[Ⅱテモテ 4: 20]、やもめ[未亡人]の役割[Ⅰテモテ 5: 9])について特記しているのは驚くべきことである。この「パウリニスト」の著書はどのようにして偽造文書と判断すべきだろうか。

新約聖書の書簡群の偽名に関する十分な議論としては Carson と Moo と Morris 共著の *An Introduction to the New Testament* の 367~371 ページが挙げられる。

Ⅲ. 書かれた年代

A. パウロがこれら3つの牧会書簡群を獄中から出した(使徒行伝の結語を書いた後。多分紀元 59~61 年)のがもし本当なら、パウロの出獄後の行動には以前から何らかの慣習があったと考えられる(例えばスペインへの伝道[ローマ 15: 24 と 28 節を参照])。

1. 牧会書簡群(Ⅱテモテ 4: 10 を参照)

2. Ⅰクレメンス5章

a. パウロは東と西(スペイン)に伝道した。

b. 「総督たち」(Tigellinus と Sabinus。ネロ帝の治世の最終年である紀元 68 年に在任)の命令によって殺された。

3. ムラトリー断片(紀元 180~200 年にローマから書き送られた正典のリスト)の序文

4. Eusebius 著 *Historical Ecclesiasticism* の第2巻22章1~8節にはパウロがローマの監獄から釈放されたと記されている。

B. テモテへの手紙第一とテトスへの手紙はパウロの再逮捕以前に相次いで書かれたようだ。テモテへの手紙第二はパウロの投獄中に書かれたパウロの最後の著書であり、パウロの別れの挨拶となった。

Ⅳ. 宛先

A. 「牧会書簡群」という書名はそれらの独特の性質と内容を理由に D. N. Berdot が紀元 1703 年に書いた自身の注解書の中で命名した。しかしテモテとテトスは牧会者ではなく、使徒の代表者である。

B. これらの手紙は諸教会に宛てて書き送られているが、手紙の文体から判断するとパウロの助手のテモテとテトスに宛てて書き送られたといえる。パウロは教会の指導者チームに対するのと同じように教会の会衆に呼びかけている。このようにパウロがより多くの聴衆に呼びかけたことを知る手がかりは次のような事柄である。

1. パウロの使徒の身分についての公的な紹介
2. これら3つの手紙の結語中の複数形代名詞「あなたがた」
3. 自身の召しに関するパウロの弁解（Ⅰテモテ 2: 7を参照）
4. テモテがパウロと一緒にいた時期からすでに知っている事柄について、パウロがテモテに書き送った事柄（Ⅰテモテ 3: 15を参照）

V. 書かれた事情と目的

- A. 旧約聖書には信仰共同体の運営についての特別な指導指針が記されている。新約聖書には教会の運営に関する特別な指導指針は記されていない。牧会書簡群（テモテへの手紙第一と第二およびテスへの手紙）は可能な限り指導指針となるように書かれた。
- B. 諸教会の総括的運営以外のもう一つの目的は台頭しつつあった異端達と対決するためであった（Ⅰテモテ 1: 3を参照）。この特殊な異端はユダヤ教思想とグノーシス主義思想の混成したものであったようだ（エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙の中に登場する異端と酷似している）。多分2つの相異なるグループがあったと思われる。
- C. テモテへの手紙第一が書かれた目的
 1. エフェソスにとどまるようにテモテに頼むため（Ⅰテモテ 1: 3を参照）
 2. 偽教師達と対決するため
 3. 教会の指導運営を助けるため（Ⅰテモテ3章を参照）
- D. テスはテモテと同様の使命を受け、クレタにおいて偽教師達と対決し、教会の運営にあたった（1: 5を参照）。
- E. テモテへの手紙第二には釈放の望み薄いパウロの獄中での様子が見受けられる（4: 6-8と16~18節を参照）。
- G. これらの手紙には「健全な教え」[正しい教義]（Ⅰテモテ 1: 10と4: 6と6: 3、Ⅱテモテ 1: 13と4: 3、テス 1: 9と2: 1を参照）と「健全な信仰」（テス 1: 13と2: 2を参照）が強調されている。神はこの「健全な教え」をパウロに任せられ（Ⅰテモテ 1: 11を参照）、パウロがそれをテモテに任せた（Ⅰテモテ 6: 20を参照）のでテモテはその「健全な教え」を忠実な人々に任せるよう命じられた（Ⅱテモテ 2: 2を参照）。

このことは初期の諸教会における会衆の数の増大および攻撃的な異端の台頭を示している。

VI. 偽教師達

- A. 紀元1世紀の特定の情報が入手できないために、偽教師達について議論することは難しい。偽教師達を直接知る人々にパウロは（これらの手紙[牧会書簡群]を）書き送っている。だからパウロは（ユダがそうしたように）偽教師達の神学を詳細に議論することはせず、概して彼らの生活様式と指導方針を戒めている。

- B. 解釈上の主な問題は偽教師達が
1. ユダヤ人
 2. ギリシャ人
 3. ユダヤ人とギリシャ人の混成
- であるかどうかに関連している。
- C. 偽教師達はユダヤ人とグノーシス主義者の混成だったようだ。しかしこれらの全く逸脱した宗教運動はどのように現れたのだろうか。
1. ユダヤ教は常にいくつかの二元論的思想を取り入れていた(死海文書)。
 2. 紀元2世紀のグノーシス主義はこれらの一般的な近東の哲学的・神学的主題からのみ発展した。
 3. ディアスポラのユダヤ教は現代の学者達の予想以上にはるかに折衷主義的であった。
 4. 紀元1世紀には、コロサイ人への手紙に登場する、ユダヤ教とグノーシス主義の折衷主義的な異端の前例があった。
- D. パウロが述べている偽教師達とは次のような者達である。
1. ユダヤ教の聖職者達
 - a. 偽教師達
 - (1) 律法の教師達(I テモテ 1: 7 を参照)
 - (2) 割礼を受けている人達(テトス 1: 10 を参照)
 - b. ユダヤ教の神秘を警戒する偽教師達(I テモテ 3: 9、テトス 1: 14 を参照)
 - c. 食物についての律法を説く偽教師達(I テモテ 4: 1-5 を参照)
 - d. 家系図について説く偽教師達(I テモテ 1: 4 と 4: 7、II テモテ 4: 4、テトス 1: 14-15、3: 9 を参照)
 2. グノーシス主義者
 - a. 禁欲主義
 - (1) 結婚の禁止(I テモテ 2: 15 と 4: 3 を参照)
 - (2) ある種の食物を断つこと(I テモテ 4: 4 を参照)
 - b. 性的搾取(I テモテ 4: 3、II テモテ 3: 6-7、テトス 1: 10 と 15 節を参照)
 - c. 知識の強調(I テモテ 4: 1-3、6: 20 を参照)

VII. 正典性

- A. パウロの書簡群は「使徒書簡」と呼ばれる1冊の本にまとめられて全ての教会で回覧された。パウロの書簡群のギリシャ語原典の中で紀元 200 年代に書かれた P⁴⁶ と呼ばれるパピルス原典(Chester Beatty パピルスの一部)だけがテモテへの手紙第一と第二およびテトスへの手紙(ならびにテサロニケ人への手紙第二とフィレモンへの手紙)のない原典である。この原典にはいくつかの結論のページがないのでこれも推測である。他のギリシャ

語原典には全て「牧会書簡群」と呼ばれるようになった手紙が存在する。

- B. 牧会書簡群を引用、暗示、あるいは述べている古代の文献のリスト
1. 初期教会の指導者達の著書
 - a. 擬バルナバ的書(紀元 70~130 年)、テモテへの手紙第二とテトスへの手紙を引用。
 - b. ローマのクレメンス(紀元 95~97 年)、テモテへの手紙第一と第二を暗示し、テトスへの手紙 3: 1 を引用。
 - c. ポリカルポス(紀元 110~115 年)、テモテへの手紙第一と第二およびテトスへの手紙を暗示。
 - d. ヘルマス(紀元 115~140 年)、テモテへの手紙第一と第二を引用。
 - e. イレネウス(紀元 130~202 年)、テモテへの手紙第一と第二およびテトスへの手紙からしばしば引用。
 - f. ディオニエトス(紀元 150 年)、テトスへの手紙を引用。
 - g. テルトウリアヌス(紀元 150 年)、テモテへの手紙第一と第二およびテトスへの手紙を引用。
 - h. オリゲン(紀元 185~254 年)、テモテへの手紙第一と第二およびテトスへの手紙を引用。
 2. 牧会書簡群を含む正典のリスト
 - a. ムラトリー断片(紀元 200 年頃ローマから書き送られた)
 - b. Barococcio(紀元 206 年)
 - c. 使徒のリスト(紀元 300 年)
 - d. Cheltenham のリスト(紀元 360 年)
 - e. アタナシウスの手紙(紀元 367 年)
 3. 牧会書簡群を含む初期の聖書
 - a. 古代ラテン語聖書(紀元 150~170 年)
 - b. 古代シリア語聖書(紀元 200 年)
 - c. 牧会書簡群が神の啓示による書であると認めた初期教会の会議
 - d. ニケーア公会議(紀元 325~340 年)
 - e. ヒッポ公会議(紀元 393 年)
 - f. カルタゴ公会議(紀元 397 年と 419 年)
- C. ローマ帝国内の初期教会の見解が統一してゆく過程の中で正典は定められていった。この統一見解は内外の社会的圧力に大きな影響を受けた。正典編入に必要とされた事柄は根本的に次のようなことであった。
1. 使徒に関する事柄
 2. 他の使徒の著書と一致するメッセージ
 3. これらの著書を読んだ人々の生活の変化

4. これらの初期教会の間で受け入れられた著書のリストが認められるようになったこと
- D. 正典の必要性が増した理由
1. イエスの再来がまだであったこと
 2. 諸教会と使徒の間の地理的距離
 3. 使徒達の死
 4. 初期教会の時代の偽教師達の台頭
 - a. ユダヤ教
 - b. ギリシャ哲学
 - c. ギリシャ・ローマ世界の他の神秘的宗教

このことは福音が種々の文化に広まるにつれて見られるようになった。
- E. 正典性の問題は、著者が誰かということと歴史的に関連がある。初期教会は牧会書簡群をパウロの著書として受け入れた。正典性についての私自身の仮説には、聖典の執筆においてだけではなくそれらの収集と保存においての聖霊の関与が含まれている。(私の推測による)パウロが著書であることへの疑問は神の啓示と正典化(正典編入)に影響を与えない。

VIII. テモテへの手紙第一の用語と聖句の早見リスト

1. 「信仰によるまことの子」、1: 2
2. 神を冒瀆する者、1: 13
3. アーメン、1: 17
4. 仲介者、2: 5
5. 贖い、2: 6
6. 「聖い手を挙げて」、2: 8
7. 「非のうちどころがなく」、3: 2
8. 「酒におぼれず」、3: 8
9. 「信仰の秘められた真理」、3: 9
10. 「悪霊どもの教え」、4: 1
11. 「自分たちの良心に焼き印を押されており」、4: 2
12. 「俗悪で愚にもつかない作り話」、4: 7
13. 「手を置いたとき」、4: 14 と 5: 22
14. 長老たち、4: 14
15. 「身寄りのないやもめ」、5: 3
16. 「前にした誓い」、5: 12
17. 「二倍の報い」、5: 17
18. 満ち足りること、6: 6

19. 近寄り難い光、Ⅱテサロニ 6: 16

Ⅸ. テモテへの手紙第一の人物早見リスト

1. 父なる神、1: 2
2. 「律法の教師」、1: 7
3. 「永遠の王」、1: 17
4. ヒメナイとアレクサンドロ、1: 20
5. 監督、3: 2
6. 執事、3: 8
7. 婦人たち、3: 11
8. 長老たち、5: 7
9. ポンテオ・ピラト、6: 13

Ⅹ. テモテへの手紙第一に登場する地名の地図上の位置

1. マケドニア、1: 3
2. エフェソス、1: 3

ⅩⅠ. テモテへの手紙第一についてのディスカッションのための質問

1. 1: 3-4 に述べられている偽教師達をあなた自身の言葉で説明しなさい。
2. 1: 9-11 は十戒を反映しているか。もしそうなら、異なる点は何か。
3. なぜパウロは自身を全ての罪人たちの中で最たる者とみなしているのか(1: 15)。
4. 1: 18 はテモテの生涯に起こったどの出来事を指しているか。
5. パウロが誰かをサタンに引き渡したとは何を意味しているか(1: 20)。
6. なぜ 2: 4 はとても重要な聖句なのか。
7. 紀元1世紀の文化を踏まえて 2: 9 を説明しなさい。
8. 2: 12 は現代にどのように適用されうるか。
9. 2: 15 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
10. 監督の資質を挙げなさい(3: 1-7)。
11. なぜ 3: 16 は古代の賛美歌からの引用と考えられているのか。
12. なぜ偽教師達は結婚を禁じているのか(4: 3)。
13. 4: 4 はローマ14章とどのように関連しているか。
14. 4: 10 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
15. 4: 14 はどの出来事について述べているか。
16. 5: 19 はどのように旧約聖書を反映しているか。
17. 5: 23 はどの文化的問題を指しているか。

18. 6: 10 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
19. 6: 15 のイエスへの称号はどこに由来するか。

X II. テモテへの手紙第二の用語と聖句の早見リスト

1. 「神の賜物を再び燃えさせたせる」、1: 6
2. 「あなたがたにゆだねられている宝」、1: 14
3. 壊疽、2: 17
4. 「このように記されている」、2: 19
5. 器、2: 20
6. 主人、2: 21
7. 「折[時期]が良くても悪くても」、4: 2
8. 神の秘められた真理、4: 4
9. 「書物. . . 羊皮紙の書物」、4: 13
10. 「獅子の口」、4: 17

X III. テモテへの手紙第二の人物早見リスト

1. 先祖、1: 3
2. ロイス、1: 5
3. エウニケ、1: 5
4. オネシフォロ、1: 16
5. ヒメナイ、2: 17
6. ヤンネとヤンブレ、3: 8 と 9 節
7. 福音宣教者、4: 5
8. デマス、4: 10
9. ルカ、4: 11
10. マルコ、4: 11
11. ティキコ、4: 12
12. アレクサンドロ、4: 14

X IV. テモテへの手紙第二に登場する地名の地図上の位置

1. パウロはどこに投獄されたのか。
2. 1: 12 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
3. アジア、1: 15
4. ローマ、1: 17
5. エフェソス、1: 18、4: 12

6. アンテオケ、3: 11
7. イコニオン、3: 11
8. リストラ、3: 11
9. テサロニケ、4: 10
10. ガラテヤ、4: 10
11. ダルマティア、4: 10
12. トロアス、4: 13
13. コリント、4: 20
14. ミレトス、4: 20

XV. テモテへの手紙第二についてのディスカッションのための質問

1. 1: 9 はテトス 3: 5 とどのように似ているか。
2. オネシフォロは獄中にあるパウロに何をしてあげたのか(1: 16-18)。
3. II テモテ 2: 2 はとても重要な聖句である。なぜか。
4. なぜ 2: 11 は古代の賛美歌からの引用と考えられているのか。
5. 2: 15 は何を指しているか。
6. 2: 25 は神が悔い改めさせてくださるということを意味しているのか。もしそうならそのことが意味していることは何か。
7. 「墮落した者たち」を助けるために信徒が行うべき事柄を挙げなさい(2: 24-25)。
8. 3: 6-7 で取り扱われている人および事柄は何か。
9. 3: 16 はなぜとても重要な聖句なのか。
10. なぜパウロはトロフィモを癒すことができなかったのか。

テトスへの手紙への導入

I. 書かれた事情の概略

- A. テトスへの手紙は、「牧会書簡群」として知られるパウロの手紙の一群に属している。このためテモテへの手紙第一とテトスへの手紙およびテモテへの手紙第二には〔福音伝道の〕協力者達へのパウロの助言として(1)偽教師達との対決方法(2)地域教会の指導方法(3)神のような人格を形成するように励ます方法が記されている。これらの書が書かれた時系列上の順序は明らかにテモテへの手紙第一あるいはテトスへの手紙、そしてテモテへの手紙第二である。テトスへの手紙はテモテへの手紙第一と同じ主題を取り扱っている。テトスへの手紙が最初に書かれたようだ。というのはローマ人への手紙とほぼ同様に導入部がとてども長くてしかも神学的な議論になっているからである。
- B. パウロとこれらの協力者達の地理的移動は、使徒行伝に記されているパウロの地理的移動とは一致しない。だから解説者達の多くはこのことが、パウロが監獄から釈放されて第4回伝道旅行に出かけたことの証拠であると推測している。
- C. この第4回伝道旅行の時期は紀元 60 年代初頭から中期ないしは紀元 68 年に違いないといえる。というのはパウロがネロ帝の治世下に断頭刑に処せられたのとネロ帝が死んだのが紀元 68 年だからである。

II. テトスという人物について

- A. テトスはパウロが最も信頼した〔福音伝道の〕協力者であった。このことは、パウロがテトスを問題のある地であるコリントとクレタに送ったという事実により証明されている。
- B. テトスは生粋の〔父母両系ともに〕異邦人であり(テモテは片親の家系がギリシヤ人であった)、パウロの説教を通して回心した。パウロはテトスに割礼を施すことを拒否した(ガラテヤ2章を参照)。
- C. テトスはパウロの手紙の中にしばしば登場する(Ⅱコリント 2: 13、7: 6-15、8: 6-24、12 章 18 節、ガラテヤ 2: 1-3、Ⅱテモテ 4: 10 を参照)が、ルカが書いた使徒行伝の中にその名が見あたらないことはとても驚くべきことである。注解書の中にはこのことを次のように理論化しているものがある。
 - 1. テトスはルカの親類(多分兄弟)だったのかもしれない、自分の著書にテトスの名を登場させることはルカにとって文化的に不適切だったのかもしれない。
 - 2. テトスへの手紙はルカにとってパウロの生涯と働きについての主要な情報源であったので、ルカの名と同様にその名が見あたらないのかもしれない。
- D. 使徒行伝 15 章に記されているように、テトスはパウロとバルナバに同行して全ての主要なエルサレム会議に参加した。
- E. この書には主に、クレタでの働きについてパウロがテトスに与えた助言が記されている。

テトスはパウロの公的な代理人を務めている。

- F. 新約聖書中のテトスに関する最後の情報は彼がダルマティアで働くように送られたということである(Ⅱテモテ 4: 10 を参照)。

Ⅲ. 偽教師達

- A. クレタにパウロの説く福音に反発する偽教師達の一群がいるのは明らかである。
1. 偽教師達の誤りは、全信徒に期待される神のような生活様式に関連があるようだ。
 2. 神のような生活様式の実例(1: 1 と 16 節、2: 7 と 14 節、3: 1 と 8 節と 14 節)
 3. 性質上の特質の要約(2: 11-14、3: 4-7)
- B. この誤った教えには明らかにユダヤ教の特質が見られる(1: 10 と 14 節、3: 8-9)。これらの異端思想はユダヤ教の律法主義とギリシャの推論的思想(グノーシス主義)の混ざったものである。ここに登場する偽教師達はコロサイ人への手紙とエペソ人への手紙に記されている偽教師達と似ている。牧会書簡群に特記されているのは異端であり、排他的な教会運営ではない。

Ⅳ. 用語と聖句の早見リスト

1. 神のようであること、1: 1
2. 「永遠の命の希望に」、1: 2
3. 「偽ることのない神」、1: 2
4. 客を親切にもてなす、1: 8
5. ユダヤ人の作り話、1: 14
6. 健全な教え、2: 1
7. 忍耐、2: 2
8. 「現世的な」、2: 12
9. 「祝福に満ちた希望」、2: 13
10. 贖い、2: 14
11. 「新たに造りかえる洗い」、3: 5

Ⅴ. 人物早見リスト

1. 長老たち、1: 5
2. 監督、1: 7
3. 「割礼を受けている人たち」、1: 10
4. 「預言者自身」、1: 12
5. 「支配者に、権威者に」、3: 1
6. ティキコ、3: 12

7. アポロ、3: 13

VI. 登場する地名の地図上の位置

1. クレタ、1: 5
2. ニコポリス、3: 12

VII. ディスカッションのための質問

1. 父なる神と御子イエスが「救い主」と呼ばれていることはなぜ重要なのか。
2. 1: 16 は偽教師達とどのように関連しているか。
3. 2: 1-5 は教会の指導者達あるいは教会員達を指しているか。
4. なぜ 2: 11 はとても重要な聖句なのか。
5. 2: 13 ではイエスは神と呼ばれているか。
6. なぜ 3: 5 前半はパウロの根本的テーマなのか。
7. 3: 5 後半は洗礼により再び生まれかわることを教えているか。

フィレモンへの手紙への導入

I. 緒言

- A. この書は、紀元1世紀のギリシャ・ローマ世界でとても一般的であった私的書簡の一例である。この手紙の長さは多分パピルス紙一枚程度であったと思われる(ヨハネの手紙第三を参照)。この手紙の主な宛先は不明であるが、多分(1)フィレモン(2)アフィアとアルキポ[コロサイ 4: 17 を参照]あるいは(3)ある意味で家庭教会全体だろう。
- B. この手紙を読むと分かることは次のようなことである。
 - 1. 使徒パウロの牧会方法
 - 2. 紀元1世紀の家庭教会の様子(ローマ 16: 5、I コリント 10: 19、コロサイ 4: 17 を参照)
- C. キリスト教はすでに地中海世界の社会環境を急激に変化させていた。福音伝道における社会的障害は取り除かれつつあった(I コリント 12: 13、ガラテヤ 3: 28、コロサイ 3: 11 を参照)。

II. 著者

- A. この手紙を読んだ多くの人々(F. C. Baur を除く)はこの手紙の著者が使徒パウロであると確信している。
- B. フィレモンへの手紙とコロサイ人への手紙が密接に関連していることの根拠となる事柄
 - 1. 同じ発信元
 - 2. 同じ人々(パウロとテモテ)の挨拶
 - 3. 同じ結語
 - 4. ティキコはコロサイ人への手紙を届け、オネシモと一緒に旅した(コロサイ 4: 7 と 9 節を参照)。フィレモンへの手紙をパウロが書いたのなら、コロサイ人への手紙もパウロが書いたことになる(現代の学者達の中にはこのことを疑う者もいる)。
- C. この手紙は初期教会の時代の異端的マルシオン(紀元 140 年代にローマにもたらされた)および正典のリストであるムラトーリ断片(紀元 180~200 年にローマで書かれた)中のパウロの書簡群に加えられている。

III. 書かれた年代

- A. コロサイ人への手紙の書かれた年代はパウロが(エフェソスやピリピやシーザリアやローマで)投獄されていた時期と関連がある。ローマで投獄されていた時期が使徒行伝に記された事実と最もよく適合する。
- B. ローマで投獄されていた時期と仮定すると、いつ頃かという疑問が生じる。使徒行伝の記述によればパウロは紀元 60 年代の初め頃に獄中にいた。しかし彼は釈放されて牧会書簡群(テモテへの手紙第一と第二およびテトスへの手紙)を書き、その後再び捕えられて、

ローマ皇帝ネロが自殺した紀元 68 年 6 月 9 日より前に殺された。コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙とフィレモンへの手紙の書かれた年代についての有識者達の推測の中で最も確からしいものは、パウロが最初に投獄された紀元 60 年代の初め頃である。ピリピ人への手紙は多分紀元 60 年代の中頃にかけて書かれたと思われる。

C. 多分、ティキコはオネシモと一緒にコロサイ人への手紙とエペソ人への手紙とフィレモンへの手紙を小アジアに届けたと思われる。後に(多分数年後に)エパフロデイトは身体の病から回復した後にピリピ人への手紙を自分の母教会に持ち帰った。

D. F. F. Bruce と Murry Harris の学説に若干の修正を加えると、パウロの著書の書かれた順序はこのようになると考えられる。

書	書かれた年代	書かれた場所	使徒行伝との関係
ガラテヤ人への手紙	紀元 48 年	シリアのアンテオケ	14: 28、15: 2
テサロニケ人への手紙第一	紀元 50 年	コリント	18: 5
テサロニケ人への手紙第二	紀元 50 年	コリント	
コリント人への手紙第一	紀元 55 年	エフェソス	19: 20
コリント人への手紙第二	紀元 56・57 年	マケドニア	20: 2
ローマ人への手紙	紀元 57 年	コリント	20: 3
獄中書簡群			
コロサイ人への手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
エペソ人への手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
フィレモンへの手紙	紀元 60 年代初頭	ローマ	
ピリピ人への手紙	紀元 62 年後半 ～63 年	ローマ	28: 30-31
第4回伝道旅行			
テモテへの手紙第一	紀元 63 年(あるいはそれ以降。ただし紀元 68 年より前)	マケドニア	
テトスへの手紙	紀元 63 年	エフェソス(?)	
テモテへの手紙第二	紀元 64 年	ローマ	

IV. この手紙の書かれた事情(フィレモンへの手紙に登場する人々)

A. フィレモンはコロサイで奴隷の所有者であった。フィレモンは多分パウロのエフェソス伝道中にパウロによって回心した。

B. オネシモは逃亡した奴隷であった。オネシモもパウロによって回心したが、それはパウロが

ローマで投獄されていた時期(紀元 61~63 年)であった。2人がどのように出会ったかは明らかではない。多分(1)2人とも投獄されていた(2)オネシモが使いとしてパウロのもとに送られた(3)逃亡したことについての助言を求めるためにオネシモがパウロに会ったのだろう。

- C. エパfrasは小アジア出身の信徒で、Lycus 川溪谷(コロサイ、ラオデキア、ヒエラポリス)に諸教会を建て上げた。エパfrasは獄中のパウロを訪ねて、コロサイにいる異端のこととフィレモンの信仰深さについて語った。
- D. ティキコはコロサイ人への手紙とエペソ人への手紙とフィレモンへの手紙をこの地域に届けた(コロサイ 4: 7-9、エペソ 6: 21-22 を参照)。オネシモもティキコと一緒に戻って自分の主人に会った(11 節を参照)。フィレモンへの手紙は新約聖書に加えられている私的書簡2通のうちの1通である(ヨハネの手紙第三を参照)。

約 50 年後(紀元 110 年)にイグナティウスは、後に自身の殉教の地となるローマに向かう途上で、オネシモと呼ばれるエフェソスの主教に宛てて手紙(「エペソの人々への手紙」1 章 3 節)を書いている。その主教はこの回心した奴隷だったに違いない。

V. この手紙の書かれた目的

- A. この手紙にはパウロがどのように自身の使徒の権威を用いて牧会を励ましたかが表れている。
- B. この手紙にはキリスト教がどのように兄弟姉妹達を、奴隷とその所有者の関係や貧富の差から解放したかが表れている。この真実は時に適ってローマ帝国に急激な変化をもたらした。
- C. この手紙には、(いつの日か)ローマの監獄から釈放されて小アジアに戻る日が来るだろうというパウロの信条が表れている。

VI. 用語と聖句の早見リスト

- 1. 「あなたの家にある教会」、1 節
- 2. わたしの子オネシモ、10 節
- 3. 役に立たない... 役立つ、11 節
- 4. 「あなたがあなた自身をわたしに負っていること」、19 節

VII. 人物早見リスト

- 1. アフィア、1 節
- 2. オネシモ、10 節
- 3. エパfras、23 節
- 4. マルコ、24 節

VIII. 登場する地名の地図上の位置—なし

IX. ディスカッションのための質問

1. 8 節でパウロはどのように自身の使徒の権威を主張しているか。
2. この短い書は奴隷の問題にどのように衝撃を与えたのか。
3. 18 節はオネシモが自分の主人のところで盗みを働いたことを意味しているか。
4. 19 節はパウロが通常に書記を用いていたことを意味しているか。

ヘブル人への手紙への導入

I. 緒言としての重要事項

私がこの書を研究してゆくにつれて、私の神学がパウロの神学によって形造られていっていることがより明らかとなってきた。新約聖書の他の大勢の著者達に神の啓示による自分達の思想を表現させることは私にとってとても難しいことであった。なぜなら私は性癖上それらの思想をパウロの思想パターンにあてはめてしまいがちだからである。このことはヘブル人への手紙に見られる信仰の継続の強調において特にはっきりしている。ヘブル人への手紙において信仰とは法的な立場(信仰による義認)ではなく、終始神に忠実な生活なのである(11~12章)。

ヘブル人への手紙の研究活動中に生じる疑問の多くが著者(ペテロでもヤコブでもない)から出ることはないのではないかと私は恐れている。ヘブル人への手紙は新約聖書中の多くの書と同様に定期報告文書である。著者の思想パターンが私に満足のいくものでなくても、著者の思想パターンが私の重視しているものでなくても、あるいは著者がだしぬけに自身の思想パターンを突き付けてきても私は著者に語らせなければならない。私は敢えて、神の啓示を受けた新約聖書の著者達のメッセージを自分の組織神学とすりかえたりはしない。

自分が完全に理解あるいは好ましく思っていない、新約聖書中の緊張に耐え忍ぶくらいなら私は自分の神学教義を悔い改めるほうがましだと思っている。自分が現代の福音伝道上の慣例主義的な判断基準を通して新約聖書を見ているのではないかと私は恐れている。神の約束、つまり神の愛と備えと権力維持の約束を私は認めたいが、同時に新約聖書の著者達の力強い警告と命令によってそれが誤りであるとはっきりと悟っている。私はヘブル人への手紙からの著者のメッセージを聞く必要を強く感じているが、しかしそれはとても苦痛なのだ。私はその(新約聖書中の)緊張を説明によって取り除きたい。事実、私は自由な救いと全てを犠牲にする信徒の生活を認めたいと思う。しかし、理想が相入れないなら私はどこに境界線を引けばよいのか。神との永遠の交わりとは信仰による最初の応答だろうか、それとも信仰による継続的な応答なのだろうか。ヘブル人への手紙には信仰による継続的な応答の義務がはっきりと記されている。信徒の生活は始めからではなく終わりから見えるものなのだ。

このことは行い指向の救いではなく行い指向の堅信(信仰確認)を意味している。信仰とは(恵みの)証しであってしくみではない。信徒は行いによって救われるのではなく、(神の御心にかなう)行いをするように救われるのである。行いは救いの手段ではなく救いの結果なのだ。神のような、忠実な、日々のキリストらしさは私達の行いではなく私達の内に見えるキリストのお姿に表れるのだ。変化がなく、そして変わり続けていないなら、そのような信仰生活には証しも安心もない。神だけが心と状況とを御存知なのだ。安心とは信仰生活における慰めを意味しているのであって、生活様式を通した証しのない第一義的な神学的主張ではない。

この神の啓示を受けた新約聖書の著者が私達にはっきりと語ってくれるように、またヘブル人への手紙が組織神学の枠組みの中で神学上の脚注におとしめられることがなく、カルヴァン

主義的あるいはアルミニアン主義的な書となるように私は祈る。

II. はじめの洞察

- A. この書は、ラビの聖書解釈によって解釈された旧約聖書の聖句を用いてメッセージを伝えている。原著者の意図を理解するために、この書は現代西洋思想によってではなく紀元1世紀のラビ主導のユダヤ教によって解釈されなければならない。
- B. この書の初めは説教のようであり(決まった挨拶の言葉がなく)、また終わりは手紙のようである(13章に典型的なパウロの結語が見られる)。これは多分、礼拝堂での説教が手紙に変化したものと思われる。著者は 13: 22 で自著を「勧めの言葉」と呼んでいる。これと同じ聖句は使徒行伝 13: 15 でも説教の意味で用いられている。
- C. これはモーセへの契約についての考察としての新約聖書の解説書である。
 - 1. 旧約聖書についてのとても権威ある見解
 - 2. 新・旧の両契約の比較
 - 3. 新約聖書中で唯一、イエスを私達のあがめる司祭と呼んでいる書
- D. この書には、墮落(「ひるむこと」。10: 38 を参照)つまりユダヤ教への回帰(2章、4章、5章、6章、10章、12章。Insight Press 刊 R. C. Glaze Jr. 著 *No Easy Salvation* を参照)に対する警告が数多く見られる。
- E. 一般化されすぎているが、この書に私達は、崇高なる神の成し遂げられた御業としての救い(つまり信仰による義認)を強調することによって、第一の真理としての安心をパウロが主張しているのを見ることができる。ペテロの手紙とヤコブの手紙とヨハネの手紙第一および第二は新しい契約に対する継続的責任を強調し、安心が日々のものであって、変わりそして変わり続ける生活によって確認されることを主張している。ヘブル人への手紙の著者は神に忠実な生活を強調し(11章を参照)、人生の終わりから見た安心を主張している。現代西洋の合理的思想はこれらの観点に特別な意味を持たせようとするが、新約聖書の著者達は、ただお一人の神なる著者(つまり聖霊)によって、それらの観点を互いに緊張させたままこれら3つの観点全てを認めようとする。安心とは決して目標などではなく、神の約束に対する活きた信仰の副産物なのだ。

III. 真の著者

- A. 東方教会(エジプトのアレキサンドリア)は、古代パピルス写本 P⁴⁶ 中でヘブル人への手紙をパウロの著書に加えていることから分かるように、ヘブル人への手紙の著者がパウロであるという説を受け入れている。この写本は Chester Beatty パピルスと呼ばれ、紀元2世紀末に書き写された。この写本ではヘブル人への手紙がローマ人への手紙の後に収録されている。アレキサンドリアの(教会)指導者達の中には、ヘブル人への手紙の著者がパウロであることに関連する文学上の問題を認めている者がいた。

1. アレキサンドリアのクレメンス(紀元 150~215 年)は自著(エウセビウスが引用)で、パウロがヘブル人への手紙をヘブル語で書き、ルカがギリシャ語に翻訳したと述べている。
 2. オリゲン(紀元 185~253 年)は、ヘブル人への手紙の草案(原案)はパウロのものだが書いたのはルカやローマのクレメンスのような後の時代の後継者であると主張している。
- B. この書は、西方教会に受け入れられてムラトリー断片(紀元 180~200 年頃にローマから書き送られた新約聖書の正典のリスト)と呼ばれた、パウロの書簡群のリストには収録されていない。
- C. ヘブル人への手紙の著者について私達が知っていること
1. 第二世代のユダヤ人信徒であることが明らかである(2: 3)。
 2. セプトウアギンタと呼ばれる、旧約聖書のギリシャ語訳本から引用している。
 3. 古代の礼拝堂での礼拝様式について述べ、現代の礼拝堂での儀式については述べていない。
 4. 古代ギリシャ語の文法と統語法を用いて書いている(この書はプラトン主義的ではない。フィロではなく旧約聖書を指向している)。
- D. この書には著者名が記されていないが、著者は宛先の人々(読者達)のよく知る人物であった(6: 9-10、10: 34、13: 7-9 を参照)。
- E. ヘブル人への手紙の著者がパウロであることについて疑う説の根拠
1. 文体が(13章を除いて)他のパウロの著書とは大きく異なる。
 2. 用いられている語彙が異なる。
 3. 用いられている言葉と引用聖句の用法と強調されている事柄に他のパウロの著書とのわずかな違いが見られる。
 4. パウロが友人達や協力者達を「兄弟」と呼ぶときには常に人名が先に言われるが、13章 23 節では「われわれの兄弟テモテ」と人名が後に言われている。
- F. ヘブル人への手紙の著者がパウロであることについての理論
1. アレキサンドリアのクレメンスは、自著 *Hypotyposes* (エウセビウスが引用)で述べているように、パウロがヘブル語で書いたヘブル人への手紙をルカがギリシャ語に翻訳したと信じていた(ルカはコイネギリシャ語に堪能であった)。
 2. オリゲンは、ルカとローマのクレメンスがヘブル人への手紙を書いたが、パウロの教えに従ったと述べている。
 3. Jerome とアウグスティヌスは、ヘブル人への手紙が正典として西方教会に受け入れられやすくするためだけに、ヘブル人への手紙の著者がパウロであることを受け入れた。
 4. テルトウリアヌスは、自著 *De Pudic* の20章で述べているように、バルナバ(パウロと親交のあったレビ人)がヘブル人への手紙を書いたと信じていた。
 5. マルチン・ルターは、アレキサンドリアで(弟子)訓練を受けた知識人でパウロと親交の

- あったアポロ(使徒行伝 18: 24 を参照)がヘブル人への手紙を書いたと述べている。
6. カルヴァンはローマのクレメンス(紀元 96 年に初めてヘブル人への手紙を引用)あるいはルカがヘブル人への手紙を書いたと述べている。
 7. Adolph von Harnack はアキラとプリスキラ(アポロに福音の全てを教え、パウロとテモテと親交があった。使徒行伝 18: 26 を参照)がヘブル人への手紙を書いたと述べている。
 8. William Ramsey 卿は、パウロがカイザリアで投獄されていたときにピリポ(福音宣教者)がパウロに代わってヘブル人への手紙を書いたと述べている。
 9. ピリポあるいはシラス(シルワノ)がヘブル人への手紙を書いたと主張する研究者もいる。

IV. 宛先

- A. 表題「ヘブル人への」はヘブルの人々を指している。従ってこの書は全てのユダヤ人に宛てて書かれた(アレキサンドリアのクレメンスの著書でエウセビウスが引用した *Ecclesiastical History* の第4巻14章を参照)。
- B. R. C. Glaze Jr. 著 *No Easy Salvation* に基づく内的証拠はユダヤ人信徒の特定のグループあるいはシナゴーク(礼拝堂)が宛先として指定されていると主張している(6: 10、10 章 32~34 節、12: 4、13: 7 と 19 節と 23 節を参照)。
 1. この手紙には旧約聖書からの聖句の引用が多数あり、また主題がユダヤ人に関係していることから、宛先はユダヤ人信徒であると思われる(3: 1、4: 14-16、6: 9、10: 34、13: 1-25 を参照)。
 2. ユダヤ人信徒は迫害を経験していた(10: 32、12: 4 を参照)。ユダヤ教はローマ帝国で合法的宗教として認められていたが、キリスト教は紀元1世紀後半にシナゴークでの礼拝から分離すると非合法であると考えられた。
 3. ユダヤ人信徒は(ヘブル人への手紙が書かれた当時)信仰歴が長いのにまだ未熟であった(5: 11-14 を参照)。彼らはユダヤ教の教えを完全に破ってしまうことを恐れていた(6: 1-2 を参照)。
- C. 13: 24 の聖句が曖昧であることはヘブル人への手紙が(1)イタリアから(2)イタリアへ、多分ローマから(へ)書かれたことを意味していると思われる。
- D. 宛先の所在地は、著者の特定に関する様々な理論と関連している。
 1. アレキサンドリア—アポロ
 2. アンテオケー—バルナバ
 3. カイザリア—ルカあるいはピリポ
 4. ローマ—ローマのクレメンス。13: 24 にイタリアに関する記述がある。
 5. スペイン—これはリラのニコラス(紀元 1270~1340 年)の理論であった。

V. 書かれた年代

- A. ローマ帝国の将軍(後に皇帝となった)Titus による紀元 70 年のエルサレム壊滅の直後
1. 著者はパウロの仲間のテモテの名を挙げている(13: 23 を参照)。
 2. 著者は、神殿で続けられている(8: 13、10: 1-2 を参照)いけにえの儀式について述べている。
 3. 著者がこの書の中で述べている迫害はネロ帝の治世(紀元 54~68 年)に行なわれたものと一致していると思われる。
 4. 著者は読者達に、ユダヤ教およびその儀式に参加しないように励ましている。
- B. 紀元 70 年以後
1. 著者はヘロデの神殿における儀式ではなく礼拝堂における礼拝について述べている。
 2. 著者は迫害について述べている。
 - a. 多分ネロ帝の治世に行なわれたもの(10: 32-34 を参照)
 - b. 多分その後の時代、ドミリアヌス帝の治世に行なわれたもの(12: 4-13 を参照)
 3. この書は紀元1世紀後半のラビ主導のユダヤ教の復興(ヤムニアの著書を参照)と関連があると思われる。
- C. ローマのクレメンスがこの書から引用していることから、紀元 96 年以後。

VI. 書かれた目的

- A. シナゴーク(ユダヤ教の礼拝堂)を出て、教会とともに公の場に出てゆくようにユダヤ人信徒を励ますため(13: 13 を参照)。
- B. 福音伝道の召命に従うようにユダヤ人信徒を励ますため(マタイ 28: 19-20、使徒行伝 1: 8 を参照)。
- C. 6章と10章は、これらのユダヤ人信徒達と交流のあるユダヤ人未信者達に対する呼びかけとなっている。「わたしたち」、「あなたがた」、「彼ら」の3つのグループがあることに注目しよう。彼ら(ユダヤ人信徒達と交流のあるユダヤ人未信者達)は、信徒である友人達や礼拝仲間の生活に現れている、豊富ではっきりとした(神の)証しに個人的に応答するように警告を受けている。
- D. この歴史的な教会再建の提案は R. C. Glaze Jr. 著 *No Easy Salvation* からの抜粋である。
「問題は多数派の信徒と少数派の未信者との間の緊張ではなかった。事実はその正反対であった。この教会のユダヤ人信徒達は自分達の信仰およびしもべとしての意識にとっても妥協していたので、2つのグループ(ユダヤ人信徒達と他民族の信徒達)はともに1つの教会で礼拝できていたようだ。どちらのグループも他方の意識から深刻な影響を受けることはなかった。ユダヤ人信徒のグループの説教はもはや礼拝堂の未信者のグループを堅信(信仰確認)および決断に導くことはなかった。ユダヤ人信徒達は信徒としての完全な勇気ある生活を送るようという要求を受け入れることに消極的であったので、彼らの信

仰は停滞状態にあった。ユダヤ人未信者達はうわべの(表面的な)違いを繰り返し拒み続けることによってかたくなになっていった。これらのグループはそうして共存しうる仲間となっていた。

『成熟を目指して進む』(6: 1)ことにユダヤ人信徒達が消極性を示す動機となったのは2つの現象であった。それらはユダヤ教の伝統の尊重およびキリスト教を完全に受け入れるために犠牲を払うことへの消極性であり、そのことによって異邦人信徒達はますます心を動かされて信仰を深めていった。」(23 ページ)

VII. ヘブル人への手紙の簡単な概略

1: 1-3	預言者に対する御子の優越性
1: 4~2: 18	天使に対する御子の優越性
3: 1~4: 13	モーセの契約に対する御子の優越性
4: 14~5: 10 と 6: 13~7: 28	大祭司に対する御子の優越性
5: 11~6: 12	ユダヤ人未信者達に対するユダヤ人信徒達の優越性
8: 1~10: 18	モーセの契約の各条文に対する御子の優越性
10: 19~13: 25	信徒の内に現われ示された御子の優越性

VIII. 用語と聖句の早見リスト

1. 「この終わりの時代には」、1: 2
2. 「神の栄光の反映」、1: 3
3. 「神の本質の完全な現れ」、1: 3
4. 大いなる方、1: 3
5. 「押し流されてしまわないために」、2: 1
6. 「天使たちを通して語られた言葉」、2: 2
7. 「イエスはすべての人のために死んで下さったのです」、2: 9
8. 「救いの創始者」、2: 10
9. 「大祭司」、2: 17、4: 15
10. なだめ、2: 17
11. 使徒、3: 1
12. 大祭司、3: 1
13. 告白、3: 1、4: 14
14. 今日、3: 13
15. 「7日目」、4: 4
16. 「安息日の休み」、4: 9
17. 「もろもろの天を通過された」、4: 14

18. 「罪を犯されなかったが」、4: 15
19. 「近づこうではありませんか」、4: 16
20. 「初歩」、5: 12
21. 種々の洗礼、6: 2
22. 「約束のもの」、6: 15
23. 「垂れ幕」、6: 19
24. 「イエスはいつそう優れた契約の保証となられたのです」、7: 22
25. とりなし、7: 25
26. 聖所、8: 2
27. 「天にあるものの写しであり影であるもの」、8: 5
28. 「新しい契約」、8: 8 と 13 節
29. 「至聖所」、9: 3
30. アロンの杖、9: 4
31. 償いの座、9: 5
32. 「おびただしい証人の群れ」、12: 1
33. 苦い根、12: 15
34. 天のエルサレム、12: 22

IX. 人物早見リスト

1. 「長子」、1: 6
2. 「死をつかさどる者」、2: 14
3. 「神に反抗する者」、3: 16
4. メルキゼデク、5: 6
5. 5: 11～6: 8 では「あなたがた」、「彼ら」、「わたしたち」の3つのグループが登場する。それぞれ誰を指しているか。
6. ケルビム、9: 5
7. エノク、11: 5
8. ラハブ、11: 31
9. 羊の大牧者、13: 20
10. テモテ、13: 23

X. 登場する地名の地図上の位置

1. サレム、7: 1
2. エリコ、11: 30
3. シオンの山、12: 22

4. イタリア、13: 24

X I . ディスカッションのための質問

1. 1: 2-4 に登場する「御子」の御性質を挙げなさい。
2. なぜ天使たちはヘブル人への手紙の冒頭の数章に頻繁に登場するのか。
3. 天使たちは信徒たちとどのように関連しているか(1: 14)。
4. イエスはどのように天使たちよりわずかに低い者とされたのか(2: 9)。
5. 2: 18 と 4: 15 の大いなる真理は何か。
6. 3: 1-6 でモーセとイエスはどのように比較されているか。
7. 3: 7 が聖霊について意味していることは何か。
8. 3: 12 は何について述べているか。
9. 3: 11 の「彼らを決してわたしの安息をはずからせはしない」とはどのような意味か。
10. 3: 14 は信徒の安息について述べているか。
11. 4: 12 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
12. なぜ著者は古代カナンの司祭を話題にしているのか。
13. 5: 8-9 の重要性を説明しなさい。
14. 6: 1-2 に述べられている教義を挙げなさい。彼らはユダヤ人かそれとも信徒か。なぜか。
15. 6: 6 の用語「できない」は、救われた後墮落し再び救われた者たちについてなぜ反論しているのか。
16. なぜメルキゼデクは父も母もないと言われているのか(7: 3)。
17. アブラハムがメルキゼデクに十分の一を支払うことはなぜとても重要なのか(7: 4-10)。
18. 8: 13 と 10: 4 は旧約聖書について何を述べているか。
19. 9: 22 はヒンドゥー教についてどのように反論しているのか。
20. 10: 25 と 39 節はどのように歴史的背景と関連しているか。
21. 6章と10章はどのように関連しているか。
22. 11章をあなた自身の言葉で要約しなさい。
23. 12: 2 は何を指しているか。
24. 13: 8 はなぜとても重要なのか。

ヤコブの手紙への導入

I. 緒言

- A. この書はキリスト教の日々の実践を強調しているので、新約聖書の中でソレン・キルケゴールが愛読した書であった。
- B. この書は、パウロがローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙で強調している「信仰による義認」と矛盾する事柄が記されていることが理由と思われるが、マルティン・ルターにあまり好まれなかった。
- C. この書の属する(文学)ジャンルは新約聖書中の他の書とは全く異なる。
 - 1. 熱烈な預言者によって語られた箴言の新しい契約における書といっても過言ではない。
 - 2. イエスの死の直後に書かれ、とてもユダヤ教的で実践的な書である。

II. 著者

- A. この書の著者は、伝説によればイエスの異母弟(4人のうちの1人。マタイ 13: 55、マルコ 6章 3 節、使徒行伝 1: 14 と 12: 17、ガラテヤ 1: 19 を参照)ヤコブ(ヘブル語の人名。英語では James)である。ヤコブはエルサレムの教会の指導者であった(紀元48~62年。使徒行伝 15: 13-21、ガラテヤ 2: 9 を参照)。
 - 1. ヤコブはいつも膝まづいて祈っていた(Hegesippus の著書[エウセビウスが引用]にそう記されている)ので「義人ヤコブ」と呼ばれ、後に「らくだのひざ」とあだ名をつけられた。
 - 2. ヤコブはキリストの復活後まで信徒ではなかった(マルコ 3: 21、ヨハネ 7: 5、I コリント 15: 7 を参照)。
 - 3. 五旬節での聖霊の御臨在の際にヤコブは二階の部屋にいた(使徒行伝 1: 14 を参照)。
 - 4. ヤコブは結婚していた(I コリント 9: 5 を参照)。
 - 5. ヤコブはパウロから(多分使徒達の)柱(中心的存在)と呼ばれた(ガラテヤ 1: 19 を参照)が、12人の使徒達のうちの1人ではなかった。
 - 6. Josephus は自著 *Antiquities of the Jews* の20巻9章1節でヤコブが紀元62年にサンヘドリンのサドカイ人によって石打ちにされたと述べており、また他の伝説(紀元2世紀の著述家達、アレキサンドリアのクレメンスあるいは Hegesippus)によればヤコブは神殿の壁に打ちつけられた(磔にされた)と言われている。
 - 7. イエスの死後多世代にわたってイエスの親族がエルサレムの教会の指導者に指名された。
- B. 自著 *Studies in the Epistle of James* の中で A. T. Robertson はこの手紙を書いたのはヤコブであると認めている。

「使徒行伝 15: 13-21 の演説をした人物がこの使徒書簡が書いたという証拠は数多く見られる。この手紙に表現されている思想と似た思想はほとんどなく、文体の模倣は稀だからである。これと同じ類似性はヤコブの手紙と、多分これもヤコブによって書かれたと思われるアンテオケへの手紙(使徒行伝 15: 23-29)の間にも見られる。また、ヤコブが個人的に聞いたかあるいは(他の使徒から)その要旨を聞いたと思われる山上の説教を回想している記述がはっきりと見られる。この手紙にも同じような生き生きとした描写があり、それはイエスのお教えの特徴を知るうえでとても重要である」(2 ページ)。

A. T. Robertson はここでは J. B. Mayor 著 *The Epistle of St. James* の iii ~ iv ページに倣った記述をしている。

- C. 新約聖書に登場する使徒の一団にはヤコブという名の人物が他に2人いる。しかし、(ゼベダイの子)ヨハネの兄弟のヤコブは紀元44年初頭にヘロデ・アグリッパ1世の命令で殺された(使徒行伝 12: 1-2 を参照)。「小ヤコブ」あるいは「若いほうのヤコブ」と呼ばれるもう一人のヤコブは使徒のリストの外には登場しない。この使徒書簡の著者は明らかによく知られた人物であった。
- D. ヤコブとイエスの関係について3つの理論が提唱されている。
1. Jerome はヤコブがイエスの従兄弟(両親は Alphaeus と Mary of Clopas)であると言っている。Jerome はマタイ 27: 56 とヨハネ 19: 25 との比較からこの理論を得た。
 2. ローマカトリック教会の伝説によればヤコブはイエスの父ヨセフがマリアと結婚する前に妻としていた女性との間にもうけた異母兄である(オリゲンのマタイ 13: 55 の解説およびエピファニウスの著書 *Heresies* の78章を参照)。
 3. テルトウリアヌス(紀元160~220年)とヘルヴィディウス(紀元366~384年)およびプロテスタント聖職者の大半はヤコブがヨセフとマリアの間に生まれた真の異父母兄弟であると主張している(マルコ 6: 3、I コリント 9: 5 を参照)。
 4. 上記の学説1と2はマリアの永遠の処女性に関するローマカトリック教会の教義の擁護のもとに発展した。

III. 書かれた年代

A. 著者についての上述の理論が受け入れられるならば、ヤコブの手紙の書かれた年代は2通り考えられる。

1. [早い方の説]紀元49年のエルサレム会議(使徒行伝15章)の前(もしこの年に書かれたのが事実なら、ヤコブの手紙は最も初期に回覧された新約聖書の書ということになる)。
2. [遅い方の説]紀元62年のヤコブの死の直前

B. 早い方の説の根拠

1. 2: 2 で「シナゴグ」という用語が用いられている。

2. 読者である教会が組織化されていない。
 3. 5: 14 で用語「長老」がユダヤ人の意味で用いられている。
 4. 異邦人への伝道(使徒行伝15章を参照)についての論争が述べられていない。
 5. ヤコブの手紙は、エルサレムを去ったか、多分パレスティナを去った(1: 1 を参照)初期のユダヤ人信徒の共同体に宛てて書かれているようだ。
- C. 遅い方の説の根拠
1. ヤコブは多分、パウロの書いたローマ人への手紙に応答して(2: 14-20、4: 1 以降を参照)、パウロとは正反対の方法で異端の不適切な言動を正そうとしたようだ(Ⅱペテロ 3: 15-16 を参照)。もしこのことが事実なら、ヤコブの手紙にふさわしい題名は「中庸的修正」ということになる。
 2. この書は明らかに、この書には全く見られない重要なクリスチアンの教義を想定している。

IV. 宛先

- A. 「(世界中に)離散している十二部族」(1: 1)という聖句は大きな手がかりである。また、この手紙が「カトリック使徒書簡群」の中に収められていることは、この手紙の回覧書簡としての性質を反映している。離散しているこれらの部族はパレスティナの外にいるユダヤ人信徒達であると思われるが、明らかにひとつの教会が特別で重要というわけではない。
- B. 1: 1 の聖句には3通りの解釈がありうる。
1. ユダヤ人—用語「兄弟たち」が繰り返し用いられており、またイエスに関する重要な福音の真理が記されていないのでこれはありえない。それに、エジプト脱出後に元の十二部族の多くは戻ることがなかった。これと同じ比喩は黙示録 7: 4-8 で信徒について象徴的に用いられている。
 2. ユダヤ人信徒達—この書にユダヤの雰囲気を感じられることとヤコブがエルサレムの教会の指導者であったことから、これが最もそれらしく思われる。
 3. 霊的なイスラエルとしての教会—Ⅰペテロ 1: 1 で用語「ディアスポラ」が用いられていることとパウロが婉曲的に教会(ユダヤ人信徒達と異邦人信徒達)を霊的なイスラエルと描写している(ローマ 2: 28-29、4: 16 以降、ガラテヤ 3: 29 と 6: 16 を参照)ことから、これはありうる。

V. 書かれた事情

- 2つの主要な理論がある。
1. 偶像崇拜の背景のある紀元1世紀のユダヤ人信徒の生活に新しい契約を特に適用しようという試み。
 2. 解説者の中には、裕福なユダヤ人達がユダヤ人信徒を迫害していたと信じている者もい

る。初期の信徒達が反ユダヤ人主義者達からの異端攻撃にさらされていたというのもありえる。この時代は明らかに実際的必要と迫害の時期であった(1: 2-4 と 12 節、2: 6-7、5: 4-11 と 13~14 節を参照)。

VI. 文学ジャンル

- A. この手紙であり説教でもある書は、正典(ヨブ記~雅歌)と外典(紀元前 180 年頃に書かれた Ecclesiasticus)の両方にある知恵の文学の知識を反映している。この手紙は実践的生活つまり行いに表れる信仰(1: 3-4 を参照)を強調している。
- B. ある意味でこの手紙のヤコブの語り口はユダヤ人の知恵の教師達およびギリシャとローマの(ストア派のような)道徳巡回師達の語り口ととてもよく似ている。例えば
 - 1. 緩い文章構造(次々に話題を変える)
 - 2. 命令形動詞が多い(54 個)
 - 3. 痛烈な非難(質問を通して反発する人々の存在の可能性。2: 18 と 5: 13 を参照)。これは マラキ書とローマ人への手紙とヨハネの手紙第一にも見られる。
- C. 旧約聖書からの直接的な引用がわずかである(1: 11、2: 8 と 11 節と 23 節、4: 6 を参照)の に、ヨハネの黙示録と同様に旧約聖書の聖句を暗示する言葉が数多く見られる。
- D. ヤコブの手紙の要旨は概ねその書自体よりも長い。これは、聴衆の注意を引くために次々に話題を変えるラビの話術を反映している。ラビ達はその手法を「真珠のひも」と呼んだ。
- E. ヤコブの手紙は(1)賢人[哲人][知恵の教師達]の書と(2)[アモス書やエレミヤ書のような]預言者の書という旧約聖書の文学ジャンルの組み合わせである。ヤコブは旧約聖書の真理を用いているが、それをイエスの山上の説教に組み込んでいる。

VII. 内容

- A. ヤコブはイエスの御言葉を暗示する成句を用いているが、それらの御言葉は共観福音書群に見られ、新約聖書中の他の書よりも多い(1: 5 と 6 節と 22 節、2: 5 と 8 節と 13 節、3: 12 と 18 節、4: 10 と 12、5: 12 を参照)。ヤコブの手紙にはイエスの御言葉の引用も含まれていたようだ(1: 27、2: 13、3: 18、4: 11-12 と 17 節を参照)。
- B. ヤコブの手紙はイエスの山上の説教の回想文である。

ヤコブの手紙	山上の説教
1: 2	マタイ 5: 1-2
1: 4	マタイ 5: 48
1: 5	マタイ 7: 7(21: 26)
1: 12	マタイ 5: 3-11
1: 20	マタイ 5: 22
1: 22-25	マタイ 7: 24-27

2: 5	マタイ 5: 3(25: 34)
2: 8	マタイ 5: 43、7: 12
2: 13	マタイ 5: 7(6: 14-15、18: 32-35)
3: 6	マタイ 5: 22 と 29 節と 30 節
3: 12	マタイ 7: 16
3: 18	マタイ 5: 9、7: 16-17
4: 4	マタイ 6: 24
4: 11-12	マタイ 7: 1
4: 13	マタイ 6: 34
5: 2	マタイ 6: 19-20
5: 10-11	マタイ 5: 12
5: 12	マタイ 5: 34-37

- C. この手紙の内容は応用神学である(行いの[伴わ]ない信仰は死んでいる)。108 の節のうち 54 が命令形動詞である。

VII. 正典化

- A. ヤコブの手紙が正典に加えられるまでには時間がかかり、困難を極めた。
1. 「ムラトーリ断片」と呼ばれる、紀元 200 年頃にローマで編纂された正典のリストにはヤコブの手紙は加えられなかった。
 2. 「Cheltenham リスト」(別名「Karl Mommsen のカタログ」)と呼ばれる、紀元 360 年頃に北アフリカで編纂された正典のリストにはヤコブの手紙は加えられなかった。
 3. 新約聖書の古代ラテン語版にはヤコブの手紙は加えられなかった。
 4. エウセビウス著 *Historical Ecclesiasticus* の第2巻23章24節～24章および第3巻25章3節によれば、エウセビウスはヤコブの手紙を議論(討論)書群(ヘブル人への手紙、ヤコブの手紙、ペテロの手紙第二、ヨハネの手紙第二および第三、ユダの手紙、ヨハネの黙示録)に加えている。
 5. ヤコブの手紙は紀元4世紀まで西方教会に受け入れられず、紀元5世紀にペシッタ訳聖書が改訂されるまで東方教会には正典に認可された書として記録されなかった。
 6. アンテオケの聖書解釈学校の指導者(代表つまり校長)であったモプスエティアのテオドリウス(紀元 397～428 年)はヤコブの手紙を正典と認めなかった(彼はカトリック使徒書簡群の全ての書を正典と認めなかった)。
 7. エラスムスはマルティン・ルターと同様にヤコブの手紙に疑いを持ち、この手紙を「価値無き使徒書簡」と呼んだ。ローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙に強調されている「信仰による義認」と矛盾する事柄がヤコブの手紙で強調されていると感じたからである。

B. ヤコブの手紙の正典性(正典としての正当性)の証拠

1. ローマのクレメンスの著書(紀元96年に書かれた)および後の紀元2世紀のイグナティウスとポリカルポスと殉教者ユスティヌスとイレネウスの著書の中に暗示されている。
2. 外典ではあるが一般に知られている、紀元130年頃に信徒によって書かれた「ヘルマスの羊飼い」と呼ばれる書の中に暗示されている。
3. オリゲン(紀元185~245年)がヨハネの福音書についての自身の注解書の14章23節で直接的に引用している。
4. エウセビウスは自著 *Historical Ecclesiasticus* の第2巻23章でヤコブの手紙を議論(討論)書群に加えたが、この書が多く教会において正典と認められたと付け加えている。
5. 紀元412年に改訂されたシリア語訳聖書(ペシッタと呼ばれている)に加えられている。
6. 東方教会ではオリゲンとダマスコのヨハネが、西方教会では Jerome とアウグスティヌスがそれぞれこの書の正典性を擁護した。紀元393年のヒッポの公会議と紀元397年および419年のカルタゴの公会議においてヤコブの手紙は正典であると公認された。
7. アンテオケの聖書解釈学校の指導者(代表)であったクリソストム(紀元345~407年)とテオドリウス(紀元393~457年)はヤコブの手紙を正典と認めた。

IX. 用語と聖句の早見リスト

1. 「十二部族」、1: 1
2. 離散している、1: 1
3. 「思いなさい」、1: 2
4. 認められ、1: 12
5. 命の冠、1: 12
6. 「移り変わりも影の動きもない」、1: 17
7. 「御言葉を行う人」、1: 22
8. 完全な律法、1: 25
9. 「悪霊どももそう信じています」、2: 19
10. より厳しい裁き、3: 1
11. 地獄、3: 6
12. 「天や地を指して誓う」、5: 12
13. 油を塗ってもらい、5: 14
14. 「互いに罪を告白し合いなさい」、5: 16

X. 人物早見リスト

1. 「心が定まらない人」、1: 8

2. 「光の父なる神」、1: 17
3. ラハブ、2: 25
4. 「万軍の主」、5: 4
5. ヨブ、5: 11
6. 長老たち、5: 14
7. エリヤ、5: 17

X I . 登場する地名の地図上の位置—なし

X II . ディスカッションのための質問

1. 1: 2 はどのように真理となりうるか。
2. 祈りはどのような制約を受けているか(1: 5-8、4: 1-5)。
3. 1: 9-11 はどのように文化的立場に関する通念を覆しているか。
4. 1: 13 はどのようにマタイ 6: 13 に例えられているか。
5. 1: 22 はどのようにこの書の主題となっているか。
6. 2: 1-7 は礼拝の場面について述べているか、それとも教会内での交わりの場面について述べているか。それはなぜか。
7. 2: 7 は信徒の生活のどの出来事について述べているか。
8. 2: 10 はなぜ重要な真理なのか。
9. 2: 17 はなぜ教会内に多くの論争を引き起こすのか(2: 20を参照)。
10. パウロとヤコブはそれぞれ異なる意味でどのようにアブラハムを例として用いているか(2章 18~26節)。
11. 3: 1-5 の要点をあなた自身の言葉で説明しなさい。
12. 世の知恵と神の知恵の違いを説明しなさい(3: 15-17)。
13. 4: 5 はなぜ解釈がとても難しいのか。
14. 5: 1-6 はなぜユダヤ人信徒を驚かせたといえるのか。

ペテロの手紙第一への導入

I. 著者

A. 使徒ペテロが著者であることの内的証拠

1. 1: 1 に述べられている。
2. イエスと十二使徒の(御)言葉と(御)生涯における体験(5: 1 の目撃証言)の暗示
 - a. E. G. Selwyn 著 *The First Epistle of St. Peter* (1946 年刊)中の例
 - (1)1: 3 — ヨハネ 21: 27
 - (2)1: 7-9 — ルカ 22: 31、マルコ 8: 29
 - (3)1: 10-12 — ルカ 24: 25 以降、使徒行伝 15: 14 以降
 - (4)3: 15 — マルコ 14: 29 と 71 節
 - (5)5: 2 — ヨハネ 21: 15 以降
 - b. Alan Stibb 著 *The First Epistle General of Peter* (1971 年刊)中の例
 - (1)1: 16 — マタイ 5: 48
 - (2)1: 17 — マタイ 22: 16
 - (3)1: 18 — マルコ 10: 45
 - (4)1: 22 — ヨハネ 15: 12
 - (5)2: 4 — マタイ 21: 42 以降
 - (6)2: 19 — ルカ 6: 32、マタイ 5: 39
 - (7)3: 9 — マタイ 5: 39
 - (8)3: 14 — マタイ 5: 10
 - (9)3: 16 — マタイ 5: 44、ルカ 6: 28
 - (10)3: 20 — マタイ 24: 37-38
 - (11)4: 11 — マタイ 5: 16
 - (12)4: 13 — マタイ 5: 10 以降
 - (13)4: 18 — マタイ 24: 22
 - (14)5: 3 — マタイ 20: 25
 - (15)5: 7 — マタイ 6: 25 以降
3. 使徒行伝の中のペテロの説教と似た語句
 - a. 1: 22 — 使徒行伝 2: 23
 - b. 2: 7-8 — 使徒行伝 4: 10-11
 - c. 2: 24 — 使徒行伝 5: 30、10: 39(特に十字架の意味での *xylon* の使用)
 - d. 4: 5 — 使徒行伝 10: 45
4. 同時代である紀元1世紀の伝道活動との比較
 - a. シルワノ(シラス) — 5: 12

b. マルコ(ヨハネ・マルコ) — 5: 13

B. 使徒ペテロが著者であることの外的証拠

初期教会に古くから広く認められていた。

- a. 似た成句が見られる。多分ローマのクレメンス著「コリントの信徒への手紙」(紀元 95 年)からの引用と思われる。
- b. 似た成句が見られる。多分「バルナバの手紙」(紀元 130 年)からの引用と思われる。
- c. ヒエラポリスの主教パピアスが自著(紀元 140 年)中でエウセビウスの著書からの引用によって暗示している。
- d. ポリカルポスが自著「ピリピの信徒への手紙」の8章1節で引用しているが、書の題名は挙げていない(ポリカルポスは紀元 155 年に召天)。
- e. イレネウス(紀元 140~203 年)が自著の中で引用している。
- f. オリゲン(紀元 185~253 年)が自著の中で引用している。I ペテロ 5: 13 でペテロがマルコを「わたしの息子」と呼んでいることはペテロが「ペテロの福音書」を書いたことを意味するとオリゲンは信じていた。
- g. テルトウリアヌス(紀元 150~222 年)が自著の中で引用している。

C. (一部の解説者達が)使徒ペテロがペテロの手紙第一の著者であることを疑問視する理由

1. 紀元 180~200 年頃にローマで編纂された正典のリスト「ムラトリー断片」にはペテロの手紙第一は加えられていない。
2. ペテロの手紙第一は高級で洗練されたコイネギリシャ語で書かれているが、このことはペテロが無学の(正式な教育を受けていない)ガリラヤの漁師であることから考えると驚くべきことである。
3. ペテロの手紙はパウロのローマ人への手紙やエペソ人への手紙と酷似しているように見える。
4. 文中に記されている迫害の時期は後の時代に起こったものに該当すると思われる。
 1. ドミトリアヌス帝の治世(紀元 81~96 年)
 2. トラヤヌス帝の治世(紀元 98~117 年)

D. 現代の学者達による、回答となりうる見解

1. ムラトリー断片は保存状態が悪く、原文の少なくとも1行が紛失している(B. F. Westcott 著 *A General Survey of the History of the Canon of the New Testament* 第6版 289 ページを参照)。
2. ペテロは無学ではなく(使徒行伝 4: 13 を参照)聖職者を養成する学校での訓練を受けていなかっただけである。ガリラヤに住むユダヤ人の多くが生来2ヶ国語を話していたことはよく知られていた。この議論におけるもう一つの大きな問題はペテロが書記を用いていたことである。I ペテロ 5: 12 の言葉遣いはペテロがシルワノ(シラス)を書記として

用いたことをはっきりと示唆している。

3. ペテロとパウロはともに、初期教会において一般的であった礼拝用語あるいは訓練用語をしばしば用いた。彼らは数年間にわたって交流もしていたようだ(使徒行伝、ガラテヤ人への手紙、Ⅱペテロ 3: 15-16 を参照)。

ペテロの著書とパウロの著書が似ていることの最も確からしい理由は、ペテロが自分の伝道旅行に助手として連れていったシラス(シルワノ)を書記として用いたことで説明できると私には思える。著者が日常的に書記を用いる自由がどのくらいあったのかは明らかではない。

4. ペテロの手紙第一は必ずしもローマ帝国全土にわたる迫害を反映していない。信徒が帝国政府に服従する必要をペテロが認めていたこと(2: 13-17 を参照)は、帝国全土にわたって公的な迫害が行なわれていた時代には珍しいことだと思われた。

ネロ帝(紀元 54~68 年)の精神病(例えば大言壮語)の進行によって地域的な、特に小アジアでの皇帝崇拝が盛んとなり、それに伴って地域的な迫害が激化した。ペテロの手紙第一の記述はドミトリアヌス帝やトラヤヌス帝の治世よりもネロ帝の治世に合っている。この時代の迫害は地方政府の官吏達や皇帝崇拝だけでなくユダヤ人のグループによって行なわれたとも考えられる。

- E. ペテロの手紙第一自体には後の時代の著者を暗示する記述はない。

Ⅱ. 書かれた時代

- A. 書かれた時代は明らかに著者が誰かということと関連がある。
- B. 伝説ではネロ帝の治世中のローマでのペテロとパウロの死、多分紀元 65 年に書かれたとされている。もしそうなら、ペテロの手紙第一が書かれたのは紀元 63~64 年頃でなければならないということになる。
- C. ローマのクレメンスが自著(紀元 95 年に書かれた)中でペテロの手紙第一を暗示しているなら、紀元1世紀中期に書かれたと考えられる。
- D. ペテロが死んだのは紀元 67~68 年頃でペテロの手紙第一が書かれたのは紀元 65~66 年頃だと A. T. Robertson は信じている。私は、ペテロが死んだのは紀元 64~65 年頃でペテロの手紙第一が書かれたのはこの直前だと思う。

Ⅲ. 宛先

- A. 紀元1世紀の書簡では典型的なことだが、宛先が 1: 1 に「ポントス、ガラテヤ、カッパドキア、アジア、ビティニアなど各地に離散して仮住まいをしている人たち」と記されている。これらのローマ帝国の属州(ガラテヤとは多分北部の少数部族のガラテヤだろう)は現在のトルコ北部にある。これらの地域は明らかにパウロもペテロも伝道活動を行なわなかった場所である(1: 12 を参照)。多分これらの教会の人々は五旬節の時に回心したと思われる。

- B. これらの教会はペテロの著書の書かれた時代にユダヤ人信徒達によって始められたと思われるが、教会員の大半は異邦人であった。
1. 1: 14 — 以前は神を知らなかった
 2. 1: 18 — 先祖伝来のむなしい生活
 3. 2: 9-10 — 今や神の民となった
 4. 2: 12 — 異邦人の間で
 5. 4: 3-4 — 異邦人の罪のリスト
- C. この書にはユダヤ教の要素が含まれている。
1. 用語「部外者」、「ディアスポラ」が用いられていることは旧約聖書的な背景を反映している(ヨハネ 9: 35、使徒行伝 7: 6 を参照)。
 2. 旧約聖書の聖句の使用
 - a. 出エジプト記19章(2: 5 と 9 節を参照)
 - b. イザヤ53章(1: 19、2: 22 と 24 節と 25 節を参照)
 しかしこれらの事例はユダヤ教の教会を反映していない。
 3. 旧約聖書で用いられている呼び名であるイスラエルが教会(つまり「祭司の王国」)に変わっている。
 - a. 2: 5
 - b. 2: 9
 4. 教会訓練用教本(教義問答集[要覧])からの抜粋が、旧約聖書においてメシアについて述べている聖句を引用している。
 - a. 1: 19 — イザヤ 53: 1(子羊)
 - b. 2: 22 — イザヤ 53: 5
 - c. 2: 24 — イザヤ 53: 4 と 5 節と 11 節と 12 節
 - d. 2: 25 — イザヤ 53: 6
- D. ペテロはユダヤ人への伝道活動を行うように特別に召されたが(ガラテヤ 2: 8 を参照)、パウロと同様にユダヤ人にも異邦人にも伝道した(使徒行伝10章を参照)。

IV. 書かれた目的

- A. ペテロの手紙第一は教義的特徴と実践的特徴の両方を合わせ持っている。しかし、パウロが自らの書簡を教義の序章と実践の終章(結論の章)に分けたのに対し、ペテロは両者を融合した。ペテロの書は要約がとても難しい。多くの意味でペテロの書は手紙というよりは説教であるといえる(ジャンルを参照)。
- B. この書の主な議題は受難と迫害である。このことは2通りに表現されている。
1. イエスは受難と拒絶の究極の例として表わされている(1: 11、2: 21 と 23 節、3: 18、4: 1 と 13 節、5: 1 と 9 節と 10 節を参照)。

2. イエスに従う人々はイエスの生活様式とお心構えを見習うように召されている(1: 6-7、2: 19、3: 13-17、4: 1 と 12~19 節、5: 9 を参照)。
- C. キリスト教布教の初期には受難と迫害がとても頻繁に起こっていたので、イエスの再来についての記述が多く見られても驚くにはあたらない。新約聖書の多くの書と同様に、この書には全体的に終末論的な記述が見られる。

V. ジャンル

- A. この書には紀元1世紀のギリシャ・ローマ世界に典型的な序文と結語が見られる。
1. 1: 1-2
 - a. 著者
 - b. 宛先
 - c. 祈り
 2. 5: 12-14
 - a. 終わりの挨拶
 - (1) 誰から
 - (2) 誰に
 - b. 祈り
- B. この手紙の主要な部分は手紙というよりは説教に似ている。解説者達の中にはこの手紙が
1. 最初の説教集
 2. 最初の洗礼式文
 3. 初期教会における教義問答集[要覧]の最初の合本
だったのではないかと推測する者もいる。
- C. この手紙は4: 11の頌栄歌で締めくくられているように思われるが、ギリシャ語の原典ではこの箇所で終わっていない。4: 12 から 5: 11 まではこの手紙の意図的な要約のように見える。
- D. ペテロの手紙第一は、パウロのコロサイ人への手紙と全く同じように、ペテロが個人的に始めていない諸教会への回覧書簡の役割を果たし、またパウロのガラテヤ人への手紙およびエペソ人への手紙と全く同じように、来るべき問題に対して信徒達に注意を喚起する役割を果たしていると私は個人的に信じている。
- 回覧書簡というこのジャンルはこの手紙にあまり個人的な序文と結語がない理由の説明となる。このジャンルはこの手紙に迫害の特別な例が記されていない理由の説明ともなっている。

VI. 正典化

- A. ペテロの手紙第一を正典に加えるかという問題はペテロの手紙第二についても大きな論争を生んでいるので、私はここでそれを論じることにする。
- B. エウセビウスの著書 *Ecclesiastical History* の第 3 巻 3 章 25 節ではペテロの手紙第一は「非議論書」の一つに挙げられている。初期教会はペテロの手紙第一が使徒ペテロによって書かれた真の手紙であることを決して疑わなかった。
- C. ペテロが書いたとされる偽の書が多数あるので、正典性の問題は泥沼化している。初期教会はこれらの偽の書のいずれも決して認めず、論争の渦中にあるペテロの手紙第一と第二のみを使徒ペテロによって書かれた真の書と認めている。

偽の書とは

- a. ペテロ言行録
- b. ペテロとアンデレの言行録
- c. ペテロとパウロの言行録
- d. ペテロとパウロの受難録
- e. ペテロと十二使徒の言行録
- f. ペテロの黙示録
- g. ペテロの福音書
- h. ペテロの受難録
- i. ペテロの説教集
- j. ペテロ言行録のスラブ語版

である(これらの偽名の書の各々についての議論が *Zondervan Pictorial Encyclopedia of the Bible* 第4巻 721～723 ページと 732～733 ページと 740 ページにあるので見よ)。ペテロが書いたとされるこれらの書のうちで新約聖書の正典の一つとして重要視されているものはない。このことは、そのこと自体が、ペテロの手紙第一と第二を正典に加えることについて多くを物語っている。

VII. ペテロという人物

[1] ペテロの家族

- A. ペテロの家族はガリラヤ湖(あるいはティベリアス湖。ヨハネ 1: 44 を参照)北岸のベトサイダという町の異邦人の住むガリラヤ地区に住んでいて、ある時点でカペナウムに移住したことがはっきりしている(マルコ 1: 21 と 29 節を参照)。
- B. ペテロの父親の名はヨナ(マタイ 16: 17 を参照)あるいはヨハネ(ヨハネ 1: 42、21 章 15～17 節を参照)であった。
- C. ペテロの生来の名(生まれたときに親がつけた名)はシモン(マルコ 1: 16 と 29 節と 30 節と 36 節を参照)で、紀元1世紀のパレスティナでは一般的な名であった。この名はユダヤ人の間ではシメオンと呼ばれた(使徒行伝 15: 14、Ⅱペテロ 1: 1 を参照)。

マタイ 16: 18 とマルコ 3: 16 とルカ 6: 14 とヨハネ 1: 42 でイエスはペテロに新しい名(「岩」、つまり永遠の強さと安定を意味する *Petros*)を与えられた。この名はアラム語では *Cephas* と呼ばれた(ヨハネ 1: 42、I コリント 1: 12、3: 22、9: 15、15: 5、ガラテヤ 1: 18、2: 9 と 11 節と 14 節を参照)。新約聖書ではこれら2つの名はしばしば同時に登場する(マタイ 16: 16、ルカ 5: 8、ヨハネ 1: 40、6: 8 と 68 節、13: 6 と 9 節と 24 節と 36 節、18: 10 と 15 節と 25 節、20: 2 と 6 節、21: 2~3 節と 7 節と 11 節と 15 節を参照)。

- D. ペテロの兄弟の名はアンデレであった(マルコ 1: 16 を参照)。アンデレは洗礼者ヨハネの弟子であり(ヨハネ 1: 35 と 40 節を参照)、後にイエスを信じて従った(ヨハネ 1: 36~37 節を参照)。アンデレはシモンをイエスのところに連れていった(ヨハネ 1 章 41 節を参照)。数か月後イエスはガリラヤ湖のほとりで彼ら(アンデレとシモン)に出会われ、彼らを御自分の公式の常時随員の弟子と呼ばれた(マタイ 4: 18-20 とマルコ 1: 16-18 とルカ 5: 1-11 を参照)。
- E. ペテロは結婚していた(マルコ 1: 30、I コリント 9: 5 を参照)が、子供のことについては何も述べていない。

[2] ペテロの職業

- A. ペテロの家族は釣り船数隻を所有し、召使いも雇っていた。
- B. ペテロの家族はヤコブとヨハネとその父ゼベダイの仕事仲間だったようだ(ルカ 5: 10 を参照)
- C. イエスの死後、短期間だがペテロは漁の仕事に戻っていた(ヨハネ 21 章を参照)。

[3] ペテロの人格

- A. ペテロの強さ
1. ペテロは献身的にイエスに従ったが、極めて衝動的な性格の持ち主であった(マルコ 9: 5、ヨハネ 13: 4-11 を参照)。
 2. ペテロは信仰による業を試みたが、しばしば失敗した(例えば水の上を歩くこと、マタイ 14: 28-31 を参照)
 3. ペテロは勇敢で死をも恐れなかった(マタイ 26: 51-52、マルコ 14: 47、ルカ 22: 49-51、ヨハネ 18: 10-11 を参照)。
 4. ヨハネ 21 章に記されているように、復活された後、イエスはペテロを十二使徒の長に任命すると個人的にペテロに告げられ、悔い改めと指導力回復の機会を与えられた。
- B. ペテロの弱さ
1. ペテロには元々ユダヤ教の律法主義を重視する傾向があった。
 - a. 異邦人と一緒に食事(ガラテヤ 2: 11-21)

- b. 食物に関する律法(使徒行伝 10: 9-16)
- 2. 他の全ての使徒達と同様に、ペテロはイエスの急進的な新しいお教えとそれらの意味を完全に理解していたわけではなかった。
 - a. マルコ 9: 5-6
 - b. ヨハネ 13: 6-11 と 18: 10-11
- 3. ペテロはイエスから個人的に厳しく非難された(マルコ 8: 33、マタイ 16: 23)。
- 4. ゲッセマネでイエスが神に切実な求めの祈りをなさっている時にペテロは祈らずに眠っていた(マルコ 14: 32-42、マタイ 26: 36-46、ルカ 22: 40-60)。
- 5. ペテロはイエスを知らないと言った(マルコ 14: 66-72、マタイ 26: 69-75、ルカ 22: 56-62、ヨハネ 18: 16-18 と 25~27 節)。

[4]使徒のグループにおけるペテロの指導力

- A. 使徒のリストは(新約聖書中に)4つある(マタイ 10: 2-4、マルコ 3: 16-19、ルカ 6: 14-16、使徒行伝 1: 13 を参照)。ペテロの名は常にリストの最初にあった。十二使徒の名は4つのリストのうちの3つに分けられて記された。このことによって使徒達を出身(土地と家族)別に順番に確認することができたと私は思う。
- B. ペテロはしばしば使徒のグループの代弁者を務めた(マタイ 16: 13-20、マルコ 8: 27-30、ルカ 9: 18-21 を参照)。これらの聖句はグループ内でのペテロの権威を主張するためにも用いられている(マタイ 16: 18 を参照)。しかし、まさにこの文脈の中でペテロはサタンの手先だとイエスからお叱りを受けている(マタイ 16: 23、マルコ 8: 33 を参照)。

また、自分達の中で誰が最も偉大であるかについて使徒達が議論しているとき、ペテロはそれに該当しないと思われている(マタイ 20: 20-28、特に 24 節、マルコ 9: 33-37、10: 35-45 を参照)。
- C. ペテロはエルサレムの教会の指導者ではなかった。この地位にあったのはイエスの異父弟のヤコブであった(使徒行伝 12: 17、15: 13、21: 18、I コリント 15: 7、ガラテヤ 1: 19、2: 9 と 12 節を参照)。

[5] イエスの復活後のペテロの働き

- A. ペテロの指導的役割は使徒行伝の冒頭の数章にはっきりと見られる。
 - 1. ペテロは(イスカリオテの)ユダの死(自殺による)で生じた十二使徒の欠員に伴う補欠選挙において指導的役割を果たした[選挙監督を務めた](使徒行伝 1: 15-26 を参照)。
 - 2. ペテロは五旬節において最初の説教を行った(使徒行伝2章を参照)。
 - 3. ペテロは足の不自由な男性を癒し、記録では2度目の説教を行った(使徒行伝3章 1~10節、3: 11-26 を参照)。

4. 使徒行伝4章でペテロはサンヘドリンに対して大胆に呼びかけた。
 5. 使徒行伝5章でペテロはアナニアとサフィラの不義を例にとって教会に訓告を与えた。
 6. 使徒行伝 15: 7-11 でペテロはエルサレム会議において発言した。
 7. 使徒行伝には他にもペテロに関する出来事と奇跡がいくつか記されている。
- B. しかし、ペテロは必ずしも常に福音の本質を具現化してはいなかった。
1. ペテロは旧約聖書的な思想を保持していた(ガラテヤ 2: 11-14 を参照)。
 2. コルネリウス(使徒行伝10章を参照)やその他の異邦人達に福音を伝えるためにペテロは特別な啓示を受けなければならなかった。

VIII. 沈黙の年月

- A. 使徒行伝15章に記されているエルサレム会議に出席した後のペテロについてはほとんどあるいは全く知られていない。
1. ガラテヤ 1: 18
 2. ガラテヤ 2: 7-21
 3. I コリント 1: 12、3: 22、9: 5、15: 5
- B. 初期教会の伝説
1. ローマでのペテロの殉教は、紀元 95 年にローマのクレメンスがコリントの教会に書き送った手紙の中で述べられている。
 2. テルトウリアヌス(紀元 150~222 年)もネロ帝の治世(紀元 54~68 年)下のローマでのペテロの殉教について自著で述べている。
 3. アレキサンドリアのクレメンスは自著(紀元 200 年)でペテロがローマで殺されたと述べている。
 4. オリゲンは自著(紀元 252 年)で、ペテロは頭を下にして(天地逆さまで)十字架につけられてローマで殉教したと述べている。

IX. 用語と聖句の早見リスト

1. あらかじめ立てられた御計画、1: 2
2. 「イエス・キリストの血をふりかけられた」、1: 2
3. 「新たに生まれる」、1: 3
4. いろいろな試練、1: 6
5. 「あなたがたの信仰の証し」、1: 7
6. 「イエス・キリストの啓示」、1: 7 と 13 節
7. 魂、1: 9
8. 「傷や汚れのない子羊」、1: 19

9. 「キリストは天地創造の前からあらかじめ知られていました」、1: 20
10. 「神の生きた不変の言葉」、1: 23
11. 「混じりけのない御言葉の乳」、2: 2
12. 「生きた石」、2: 4
13. 「聖なる祭司」、2: 5
14. 「かなめ石」、2: 6
15. 「つまずきの石」、2: 8
16. 従う、2: 13
17. 「罪に対して死に、義によって生きる」、2: 24
18. 「キリストのお受けになった傷によってあなたがたはいやされました」、2: 24
19. 憐れみ深い、3: 8
20. 弁明、3: 15
21. 「洗礼は今やあなたがたを救うのです」、3: 21
22. 試練、4: 12
23. 「悪魔に抵抗しなさい」、5: 9

X. 人物早見リスト

1. 「聖なる方」、1: 15
2. 「あなたがたの魂の羊飼いであり保護者でいらっしゃる方」、2: 25
3. 長老たち、5: 1
4. 大牧者、5: 4
5. シルワノ、5: 12
6. マルコ、5: 13

X I . 登場する地名の地図上の位置

1. ポントス、1: 1
2. ガラテヤ、1: 1
3. カッパドキア、1: 1
4. アジア、1: 1
5. ビティニア、1: 1
6. シオン、2: 6
7. バビロン、5: 13

X II . ディスカッションのための質問

1. 信徒の受け継ぐ財産とは何か説明しなさい(1: 4-5)。

2. 1: 11 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
3. 天使たちが知りたいと思っていることとは何か(1: 12)。
4. 信徒たちはどのように 1: 16 に従うべきか。
5. 救われることによって人はどのように成長するのか(2: 2)。
6. 2: 5 および 9 節はなぜ重要なのか。
7. 2: 16 はローマ14章とどのように関連しているか。
8. 3: 3 は現代とどのように関連しているか。
9. 私達の祈りは私達と配偶者との関係に影響を及ぼしうるか(3: 7)。
10. 捕われていた霊たちのところに宣教するためにイエスはどこへ行かれたのか(3: 19)。
11. グノーシス主義神学の観点から 3: 22 を説明しなさい。
12. ペテロの手紙第一全体の主題とは何か。

ペテロの手紙第二への導入

I. 緒言

A. この導入書の目的つまり主眼は、ペテロの手紙第二の著者が誰かということに関する問題を詳細に議論することではない。私の個人的結論は、ペテロの手紙第二の著者が誰かということに関する見解を強制的に否定する理由はないというものである。この問題を考えるうえで有用な3つの文献がある。

1. *The Journal of the Society of Biblical Literature* の1972年版3～24ページのBruce M. Metzgerの記事「文章偽造と偽の正典碑文」

2. *The Journal of the Evangelical Theological Society* 第42巻第4分冊の645～671ページのMichael J. Krugerの記事「ペテロの手紙第二の正統性」

3. E. M. B. Green 著 *2 Peter Reconsidered*。1961年に *Tyndale Press* より刊。

B. ペテロの手紙第二がペテロによって書かれていない可能性について考えるとき、多くの事柄が私の心をよぎる。

1. 誰がペテロの手紙第二を書いたかについての考察を行っても、この書が神の啓示によって書かれた信頼に値する書であるという私の見解は変わらない。著者が誰かということは靈感ではなく聖書解釈に影響を与えるが、それは信仰を前提条件とした記録可能な歴史的過程である。

2. なぜ私は偽名に煩わされているのか。明らかに紀元1世紀のギリシャ・ローマ世界では習慣的に偽名が用いられていた(Metzgerの記事)。

3. ペテロの手紙第二がペテロによって書かれていないということを私は自身の嗜好を理由に認めたくないのか、それとも私は歴史的な証拠や原文中の証拠を誠実に評価できるのか。伝統が私をある種の結論に導いているのか。

4. 初期教会(シリアの教会を除く)はペテロの手紙第二の著者がペテロであることを疑問視していたが、この書のメッセージは疑わなかった。ペテロの手紙第二のメッセージは新約聖書の他の書と神学的に一致し、使徒行伝に記されたペテロの説教と類似点の多い正統なメッセージである。

C. エウセビウスは信徒の著書を3つのカテゴリーに分類している。

1. 公認書

2. 著者が誰かについての議論がまだ結論に至っていない書

3. 偽名による書

エウセビウスはペテロの手紙第二をヤコブの手紙とユダの手紙とヨハネの手紙第二・第三とともにカテゴリー2(著者が誰かについての議論がまだ結論に至っていない書)に分類している。エウセビウスはペテロの手紙第一がペテロによって書かれたことを認めたが、ペテロの手紙第二については疑い、ペテロが書いたとされる他の書、つまり(1)ペテロ言行

録(2)ペテロの福音書(3)ペテロ説教集(4)ペテロの黙示録を偽名による書として却下した。

II. 著者

- A. この書は新約聖書の書の中で、著者についての伝説において最も議論の多い書である。
- B. これらの疑念のある理由は内的な事柄(文体と内容)および外的な事柄(後の時代に受け入れられたこと)がある。

内的な事柄

1. 文体

- a. ペテロの手紙第二の文体はペテロの手紙第一とは全く異なる。このことはオリゲンと Jerome が認めている。
 - (1)ペテロを著者と認めない人々がいることをオリゲンは認めたが、自分の著書の中でペテロの手紙第二からの引用を6回も行っている。
 - (2)このこと、つまりペテロを著者と認めない人々がいるのはペテロが複数の書記を用いたからだとして Jerome は主張した。彼はまた、自分の時代にペテロを著者と認めない人々がいることを認めた。
 - (3)エウセビウスは *Ecclesiastical History* の第3巻3章1節でこの内的な事柄を次のように述べている「しかしこのいわゆる2番目の使徒書簡を我々は正典と認めていない。にもかかわらずこの書は明らかに多くの信徒にとって有用であり、他の書とともに研究が進められている」。
- b. ペテロの手紙第二の文体は極めて独特である。アンカーバイブルの *The Epistle of James, Peter, and Jude* の 146～147 ページで B. Reicke はその独特な文体を「アジアニズム(アジア主義)」と呼んでいる。

『ペテロの手紙第二の文体はその主要な表現が小アジアに由来することから「アジアニズム」文体と呼ばれ、その特徴は重苦しく冗漫で(言葉数の多い)大げさな小説まがいの誇張した表現様式と平易さへの昔ながらの理想をくじくことをいとわない点にある。… 疑う余地もなくこの使徒書簡は、信徒にとって最初の世紀となった時代にも重要視されていた、アジアの(神)学校の書式に従って書かれたのだ。』
- c. ペテロは自分が十分には使いこなせない言語(つまりコイネギリシャ語)でこの手紙を書こうとしていたようだ。彼の母語はアラム語であった。

2. ジャンル

- a. この手紙は紀元1世紀の典型的な書簡であろうか。
 - (1)緒言と結語に典型的な表現が見られる。
 - (2)しかしこの手紙は、ガラテヤ人への手紙やエペソ人への手紙やヤコブの手紙やヨハネの手紙第一と同様に、諸教会に回覧される書簡であったようだ。

b. この手紙は「契約」と呼ばれるユダヤの文学ジャンルに該当すると思われる。この文学ジャンルには以下のような特徴がある。

(1) 別れの説教

(a) 申命記31～33章

(b) ヨシュア24章

(c) 12人の家父長達の契約

(d) ヨハネ13～17章

(e) 使徒行伝 20: 17-28

(2) 死の時が近づいていることの預言(テモテへの手紙第二を参照)

(3) 伝統を守り続けるようにという聴衆への訓告

3. ペテロの手紙第二の2章とユダの手紙の関係

a. 明らかに文章上の借用が見られる。

b. 聖書外典からの引用を暗示する記述が見られることから、多くの解説者はユダの手紙とペテロの手紙第二を正典と認めていない。しかし、多くの解説者に正典と認められているはずのペテロの手紙第一にも(聖書外典の)第一エノクからの引用を暗示する記述が見られ、またパウロもギリシャの詩を引用している。

4. この書自体には使徒ペテロが発信者であると明記されている。

a. 1: 1 にペテロの名が見られる。ペテロはシメオン・ペテロと呼ばれている。ペテロという名はイエスが彼に与えられた名である(マタイ16章を参照)。シメオン(シモンではない)は稀で見(聞き)慣れない名である。何者かがペテロの名をかたつてこの書を書こうと試みたとすれば、このセム語系の綴りが選ばれたことはとても驚くべきことであり、偽名を用いるうえでは逆効果であるといえる。

b. 1: 16-18 でペテロはキリストの変容(マタイ 17: 1-8、マルコ 9: 2-8、ルカ 9: 28-36 を参照)を目撃したと主張している。

c. ペテロは最初の手紙(3: 1 を参照)を書いたと主張しているが、その手紙とはペテロの手紙第一である。

5. 正典性

a. 新約聖書に見られる使徒達の教えと矛盾する記述がこの手紙には見られない。

b. 独特な記述(例えば火によって滅ぼされる世やパウロの著書が聖書と同様にみなされていること)が若干あるが、グノーシス主義や養子論あるいは明らかに異端的と思われる思想に関する記述は見られない。

外的な事柄

1. エウセビウスは紀元1・2世紀の信徒の著書を3つのカテゴリーに分類している。

a. 公認書

b. 著者が誰かについての議論がまだ結論に至っていない書

c. 偽名による書

ペテロの手紙第二はヘブル人への手紙とヤコブの手紙とヨハネの手紙第二・第三とともに議論中の書(著者が誰かについての議論がまだ結論に至っていない書)に分類されている。

2. ペテロの手紙第二はマルシオン正典(紀元 154 年編纂)中には見られない。マルシオン正典には新約聖書の他の多くの書も加えられていない。
3. ペテロの手紙第二はムラトーリ断片(紀元 180~200 年編纂)中には見られない。ムラトーリ断片には保存状態が悪いせいかヘブル人への手紙とヤコブの手紙とペテロの手紙第一も載っていない。
4. ペテロの手紙第二は東方(シリア)教会では正典と認められなかった。
 - a. ペシッタ(紀元5世紀前半に編纂)中には見られない。
 - b. イラクで発見されたフィロキセニアナ(紀元 507 年に書かれた)と北アフリカで発見されたハルクレアン版聖書(紀元 616 年に書かれた)には載っている。
 - c. クリソストムとモプスエシアのテオドリウス(アンテオケの聖書解釈学校の代表者)は全てのカトリック使徒書簡を正典と認めなかった。
5. ペテロの手紙第二は、ナグ・ハマディのグノーシス主義的原典中に見られる「真理の福音書」と「ヨハネの聖書外典」の中で引用されている(Andrew K. Helmbold 著 *The Nag Hammadi Gnostic Texts and the Bible* の 91 ページを参照)。コプト聖書中のこれらの書は古代ギリシヤ語原典の翻訳である。ペテロの手紙第二が引用されているなら、この書が紀元2世紀に書かれたということとはありえない。
6. UBS⁴(8 ページ)で紀元3~4世紀に書かれたと特定された P⁷² にペテロの手紙第二は載っている。
7. ローマのクレメンスは自著(紀元 95 年に書かれた)でペテロの手紙第二を暗示あるいは引用した。
 - a. I クレメンス 9: 2 — II ペテロ 1: 17
 - b. I クレメンス 23: 3 — II ペテロ 3: 4
 - c. I クレメンス 35: 5 — II ペテロ 2: 2
8. ペテロの手紙第二は殉教者ユスティヌス(紀元 115~165 年)の著書 *Dialogue with Trypho* の 82 章 1 節の中で暗示されている(2 章 1 節)。これらの箇所は初期の信徒の著書の中でギリシヤ語の用語 *pseudoprophetai* が用いられている、ただ2つの箇所である。
9. イレネウス(紀元 130~200 年)はペテロの手紙第二を暗示していたようだ(エウセビウス著 *Historical Ecclesiasticus* の第5巻32章2節での II ペテロ 3: 8 の引用箇所および第3巻 1 章 1 節での II ペテロ 1: 15 の引用箇所において彼の名が引用されている)。
10. アレキサンドリアのクレメンス(紀元 150~215 年)はペテロの手紙第二の最初の注解書(現在は紛失しているが)を書いた。
11. 最新の正典リストとされていたアタナシウスの復活祭書簡(紀元 367 年に書かれた)の中に

ペテロの手紙第二が見られる。

12. ペテロの手紙第二はラオデキアの初期教会会議(紀元 372 年開催)とカルタゴの初期教会会議(紀元 397 年開催)において正典と認められた。
13. ペテロの著書とされている他の書(ペテロ言行録、アンデレとペテロの言行録、ペテロとパウロの言行録、ペテロとパウロの受難記、ペテロと十二使徒の言行録、ペテロの黙示録、ペテロ説教集)が初期教会において全て偽名による書(神の啓示に基いて書かれた書)として正典とは認められなかったことは興味深い。

Ⅲ. 書かれた年代

- A. これは著者が誰であるかによる。
- B. ペテロが著者であると確信するなら、書かれた時期はペテロの死の前のいつかということになる(1: 14 を参照)。
- C. 教会の伝説によれば使徒ペテロはネロがローマ皇帝であった時期にローマで殉教した。ネロは紀元 64 年に信徒への迫害を始めた。ネロは紀元 68 年に自殺した。
- D. ペテロの後継者がペテロの名でペテロの手紙第二を書いたとすれば、書かれた年代は遅くとも紀元 130~150 年と考えられる。というのは、「ペテロの黙示録」と「真理の福音書」と「ヨハネの聖書外典」でペテロの手紙第二が引用されているからである。
- E. アメリカの有名な考古学者 W. F. Albright は、ペテロの手紙第二に死海文書との類似点が見られることを理由に、ペテロの手紙第二が紀元 80 年以前に書かれたと主張している。

Ⅳ. 宛先

- A. II ペテロ 3: 1 中にペテロの手紙第一についての言及があるなら、宛先は同じ(現在のトルコ北部)と考えられる。
- B. ペテロの手紙第二は、試練に耐え、偽教師に抵抗し、宣べ伝えられた福音に忠実に、キリストの再臨に期待しながら生活するように全信徒に勧める勧告の手紙といえるようだ。

Ⅴ. 書かれた事情

- A. ペテロの手紙第一で迫害と受難が述べられているのと同じように、ペテロの手紙第二では偽教師について述べられている。
- B. 誤った教えの本質は明らかではないが、二律背反的なグノーシス主義と関連があるようだ(2: 1-22, 3: 15-18 を参照)。この書では初期グノーシス主義と神秘的宗教の専門用語が用いられている。このことはそれらの神学を攻撃する意図的な護教学的手法であったようだ。
- C. ペテロの手紙第二はテサロニケ人への手紙第二と同様に、神の子らが皆栄光を受け、信じない者らが皆裁かれることになる、未来の、しかし確実に来るキリストの再臨(3: 3-4 を

参照)という主題が述べられている。ペテロの手紙第一において用語 *apocalupsis* がイエスの再臨を指して象徴的に用いられているのに対し、ペテロの手紙第二では *parousia* が用いられているのは興味深い。これは多分複数の書記(例えば Jerome)が用いられたことを反映しているのだろう。

VI. 用語と聖句の早見リスト

1. 僕、1: 2
2. 神の力、1: 3
3. 神のようであること、1: 3
4. 「神の本性を分かち合う者」、1: 4
5. 「永遠の御国」、1: 11
6. 「わたしが地上の住みかを間もなく離れなければならないこと」、1: 14
7. 「わたしたちの主イエス・キリストが来られること」、1: 16
8. 「わたしたちはキリストの威光を目撃したのです」、1: 16
9. 「わたしの愛する子」、1: 17
10. 「明けの明星が昇る」、1: 19
11. 偽預言者、2: 1
12. 偽教師、2: 1
13. 「罪を犯した天使たち」、2: 4
14. 地獄(Tartarus)、2: 6
15. 「権威を侮る」、2: 10
16. 「栄光ある天使たちをののしる」、2: 10
17. 「聖なる掟」、2: 21
18. 「主の来られる日を早める」、3: 12
19. 新しい天と新しい地、3: 13
20. 汚れがなく責められることのない、3: 14

VII. 人物早見リスト

1. ノア、2: 5
2. ロト、2: 7
3. バラム、2: 15

VIII. 登場する地名の地図上の位置—なし

IX. ディスカッションのための質問

1. 1: 1 はイエスを神と呼んでいるか。
2. 1: 10 は神の尊厳と人の自由意志とをどのように関連づけているか。
3. イエスがペテロにペテロの死について語られたのはいつか(1: 14)。
4. 1章がペテロの時代にイエスを反映させる様式を挙げなさい。
5. 1: 20-21 が主張する大いなる真理とは何か。
6. 2章で述べられている偽指導者達の特徴を挙げなさい。
7. 2: 1 の「自分たちを贖ってくださった主を否定すること」はなぜとても悲しいことなのか。
8. 2: 8 はなぜ驚くべきことなのか(2: 20)。
9. 2: 20 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
10. 3: 4 での偽教師達の主張は正確にはどのようなことか。
11. なぜ地は水からできたと言われているのか(3: 5)。
12. 3: 8 の意味していることは何か。
13. 3: 9 後半は I テモテ 2: 4 とどのように関連しているか。
14. 3: 10 で述べられている真理は聖書中で他にどこにあるか。
15. ペテロがパウロについて述べていることはなぜとても重要なのか。
16. ペテロの手紙第二の中心主題は何か。

ヨハネの手紙第一への導入

I. この書の独自性

- A. ヨハネの手紙第一は、「本社からの激励のオフィスメモ」(社内書簡)的な性質を持つ限りでは個人の書簡ではない。
1. 慣習的な挨拶(誰から誰へ)がない。
 2. 個人向けの挨拶や締めくくりのメッセージがない。
- B. この書には個人名が記されていない。これは極めて珍しいことである。新約聖書の諸書のうちで著者名が記されていないのはヘブル人への手紙とヨハネの手紙第一だけである。しかし、教会内部の偽教師達に関する問題に現状で直面している信徒達に宛ててこの手紙が書かれたことは明らかである。
- C. この手紙は力強い神学教書である。
1. イエスの中心性
 - a. 完全なる神であられ、そして完全なる人であられる方
 - b. (偽教師達の説く)神秘的な体験や秘密の知識ではなく、イエス・キリストへの信仰によって救いがもたらされる。
 2. 信徒の生活様式に求められること
 - a. 兄弟愛
 - b. 従順
 - c. 墮落した世のしくみの拒絶
 3. ナザレのイエスを通して永遠の救いがもたらされるという確信(「知る」が 27 回用いられている)
 4. 偽教師達の見分け方
- D. この手紙のコイネギリシャ語は新約聖書の中の書のうちで最も洗練度が低いが、この手紙ほどにイエス・キリストの深遠で永遠の真理の奥深さへと読者をいざなう書は他にない。
- E. ヨハネの手紙第一はヨハネの福音書の前置き的な手紙として書かれたのかもしれない。紀元1世紀に出現したグノーシス派と呼ばれる異端はこの両書を背景に誕生した。ヨハネの福音書は福音伝道の勧めとして書かれたが、ヨハネの手紙第一は信徒に宛てて書かれた。
- 有名な注解者の Westcott は、ヨハネの福音書はイエスの神性を肯定的に述べ、ヨハネの手紙第一はイエスの人間性を肯定的に述べていると主張している。
- F. ヨハネはこの手紙を陰陽両面の(二元論的な)用語を用いて書いている。これは死海文書とグノーシス派の偽教師の特徴である。ヨハネの手紙第一の文章構造中に見られる二元論は言語(光対闇)にも文体(否定的な記述の後の肯定的な記述)にも表れている。これは縦の二元論(『上から』対『下から』)を用いたヨハネの福音書とは異なる。
- G. ヨハネが複数の主題を繰り返し用いているので、ヨハネの手紙第一の要約はとても難し

い。この書は複数種の反復模様を一緒に織り込んだ真理のつづれ織りのような書である (Bill Hendricks 著 *Tapestries of Truth, The Letters of John* を参照)。

II. 著者

A. ヨハネの手紙第一の著者が誰かについての議論は、ヨハネの著作集、つまり福音書とヨハネの手紙第一から第三および黙示録の著者が誰かについての議論の一部である。

B. 2つの根本的な見解がある。

1. 伝統的見解

a. 伝統的見解とは、初期教会の教父達の間で統一見解となっている、イエスの最愛の使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたという見解である。

b. 初期教会における、使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたことの証拠のまとめ

(1) ローマのクレメンスは紀元 90 年に書いた自著でヨハネの手紙第一について暗示している。

(2) スミルナのポリカルポスは自著 *Philippians 7* (紀元 110~140 年に書いた) でヨハネの手紙第一を引用した。

(3) 殉教者ユスティヌスは自著 *Dialogue* の 123 章 9 節 (紀元 150~160 年に書いた) でヨハネの手紙第一を引用した。

(4) ヨハネの手紙第一を暗示している書

(a) アンテオケのイグナティウスの著書 (書かれた時期は不明だが、紀元 100 年代初頭と言われている)

(b) ヒエラポリスのパピアス (紀元 50~60 年の間に生まれ、紀元 155 年頃に殉教した) の著書

(5) リヨンのイレネウス (紀元 130~202 年存命) は使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたとした。初期教会の時代の護教論者で、異端を非難する書を 50 作も書いたテルトゥリアヌスはしばしばヨハネの手紙第一を引用した。

(6) 使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたとした初期教会の時代の書には他にもアレキサンドリアのクレメンスとオリゲネスとディオニュシウスの著書やムラトリー断片 (紀元 180~200 年編纂) あるいはエウセビウスの著書 (紀元 3 世紀に書かれた)。

(7) Jerome (紀元 4 世紀後半に存命) は使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたことを断言したが、そのことが自分の生きた時代に一部の人々から否定されたことを認めた。

(8) 紀元 392~428 年にアンテオケの主教であったモプスエスティアのテオドリウスは使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたことを否定した。

c. 使徒ヨハネがヨハネの手紙第一を書いたのなら、私達は使徒ヨハネについて何を知

っているか。

- (1) 使徒ヨハネはゼベダイとサロメの息子であった。
 - (2) 使徒ヨハネは兄弟のヤコブとともにガリラヤ湖で漁師をしていた(多分数隻の小船を持っていた)。
 - (3) 使徒ヨハネの母親がイエスの母マリアの姉妹であった(ヨハネ 19: 25 とマルコ 15 章 20 節を参照)と信じている者もいる。
 - (4) (a) 使用人を雇っていた(マルコ 1: 20 を参照)
(b) 数隻の小船を持っていた
(c) エルサレムに家を持っていた(マタイ 20: 20 を参照)
ので、使徒ヨハネが裕福であったことは明らかである。
 - (5) 使徒ヨハネはエルサレムの大祭司の家に入出入りしていたが、このことは使徒ヨハネが著名な人物の一人であったこと(ヨハネ 18: 15-16)を示している。
 - (6) イエスの母マリアを献身的に世話したヨハネがヨハネの手紙第一を書いたとされた。
- d. 初期教会の伝統的見解の全てにおいて、使徒ヨハネは他の全ての使徒よりも長生きし、イエスの母マリアがエルサレムで死んだ後に小アジアへ移って、その地域で最大の都市エフェソスに定住したという証言がなされている。使徒ヨハネはこの都市からパトモス島(海岸から少し離れたところにあった)に追放されたが、後に釈放されてエフェソスに戻った(エウセビウスがポリカルポスとパピアスとイレネウスの著書から引用した記述によれば)。

2. 現代の学者達の見解

- a. 現代の学者の大多数がヨハネの全ての著書間の類似性、特に成句と語彙と文法形式が似ていることを認めている。このことの良い例は、これらの著書の特徴であった明確な対比、例えば命と死、真理と誤りである。これと同じはつきりとした対比はこの時代に書かれた他書、例えば死海文書や初期グノーシス主義者の著書に見られる。
- b. 使徒ヨハネが書いたと伝統的に見なされている5つの書の間内部関係については諸説ある。著者は1人だという説もあれば、2人あるいは3人だという説もある。最も確からしい見解は、たとえヨハネの弟子数名によって書かれたとしても、ヨハネの著書は全て一人の人物の思想の産物だという意見であると思われる。
- c. 私は個人的には、老使徒ヨハネがエフェソスでの自らの働きを終える頃に5つの書全てを書いたのだと信じている。

III. 書かれた年代

明らかにこれは著者の特定と関係がある。

- A. 使徒ヨハネがこれらの手紙、特にヨハネの手紙第一を書いたのなら、この手紙が書かれ

たのは紀元1世紀末のいつかということになる。この時期にはグノーシス主義者の偽神学者や哲学者が台頭してきたのでこの見解は年代的に符合するし、老人が若い信徒達に語りかけているように思われる、ヨハネの手紙第一の中の用語(「子たちよ」)とも符合すると思われる。イエスが十字架に架かれた後にヨハネは68年も生きたとJeromeは言っている。このことはこの伝説と符合すると思われる。

B. ヨハネの手紙第一は紀元85年から95年の間に書かれ、ヨハネの福音書は紀元95年までに書かれたとA. T. Robertsonは考えている。

C. *The New International Commentary Series on I John*の著者I. Howard Marshallはヨハネの手紙第一の書かれた年代を紀元60年から100年としており、この見解は現代の学者達の見解に近く、この推定年代をもとにすればヨハネの著書群の書かれた年代を推定できるようになるかもしれないと主張している。

IV. 宛先

- A. 伝説によれば、エフェソスを主要都市とする小アジアのローマ帝国の属州に宛ててこの書は書かれた。
- B. この手紙は(コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙と同様に)、偽教師達、特にキリストの人間性を否定し神性を肯定する、キリスト仮現説を信じるグノーシス主義者達の問題に直面していた小アジアの特定の教会群に宛てて書き送られたようだ。
- C. アウグスティヌス(紀元4世紀)はこの手紙がパルティア人(バビロン)に宛てて書き送られたと言っている。彼の見解はカシオドリウス(紀元6世紀初頭)に支持された。これは多分、IIヨハネ1章の聖句「選ばれた婦人」とIペテロ5:13の聖句「バビロンにいる婦人」との混同から生じた見解だと思われる。
- D. 紀元180~200年にローマで編纂された、初期教会の時代の新約聖書の正典リストであるムラトリー断片によれば、この手紙は「ヨハネの仲間の弟子達と司教達への勧告の後に」書かれた。

V. 異端

- A. この手紙自体は明らかにある種の誤りの教え(1:6以降の「わたしたちが...と言いながら~するなら」および2:9と4:20の「...と言いながら~する者」を参照)への応答である。
- B. ヨハネの手紙第一の文中にある証拠から私達は異端の根本的教義のいくつかを学ぶことができる。
 - 1. イエス・キリストの受肉の否定
 - 2. 救いにおけるイエス・キリストの中心性の否定
 - 3. 信徒にふさわしい生活様式の欠如
 - 4. 知識(しばしば神秘)の強調

5. 排他主義への傾倒

C. 紀元1世紀の歴史的背景

紀元1世紀のローマ世界は東洋と西洋の宗教の入り混じる時代にあった。ギリシャとローマの神殿の神々は評判が悪かった。神秘的な宗教は神との個人的関係と秘密の知識を強調するものであったのでとても盛んであった。世俗的なギリシャ哲学が盛んであった。この折衷的宗教の世界にキリスト教信仰の排他主義(イエスだけが神への道である。ヨハネ 14: 6 を参照)が入った。異端の正確な背景が何であれ、そのことはキリスト教の見せかけの排他主義をもっともらしく見せてギリシャ・ローマのより多くの聴衆に知的に受け入れられるようにする試みであった。

D. 使徒ヨハネがこの手紙の中で述べていると思われるグノーシス主義者のグループ

1. 初期グノーシス主義

- a. 紀元1世紀の初期グノーシス主義の根本的教義は、霊と悪の間の存在論的(永遠の)二元論の強調であったと思われる。霊(崇高なる神)は善で物質は本質的に悪であると考えられた。この対比はプラトン主義における理想と現実、天と地、見えないものと見えるものの対比と似ている。この教義には、救いに必要とされる秘密の知識(魂が天使の諸階層[*aeons*]を通して崇高なる神の御許へ行けるようにするためのパスワードつまり秘密の暗号)の過度の強調も見られる。
- b. 明らかにヨハネの手紙第一の(書かれた)背景の中にあったと思われる初期グノーシス主義には2つのタイプがあった。

(1)キリスト仮現説に基づくグノーシス主義

物質が悪であることを理由にイエスの真の人間性を否定する。

(2)コリントのグノーシス主義

崇高なる神と悪なる物質の間にある多数の *aeons* つまり天使の諸階層の一つとしてキリストを位置づける。この「キリストの霊」はイエスが洗礼を受けられたときに人間イエスの内に住まれ、イエスが十字架に架かれる前にイエスから離れられた。

- (3)これら2つのグループには禁欲主義(ある物を体が欲するなら、その物は悪であるという思想)を貫く者達もいれば二律背反主義(ある物を体が欲するなら、その物を他者に与えよという思想)を貫く者達もいた。紀元1世紀に発展したグノーシス主義の思想体系は記録が残っていない。紀元2世紀半ばまで記録に残されなかったのだ。「グノーシス主義」についてさらに知りたいなら、

(a) Hans Jonas 著 *The Gnostic Religion* (Beacon Press 刊)

(b) Elaine Pagels 著 *The Gnostic Gospels* (Random House 刊)

を読みなさい。

2. イグナティウスは自著 *to the Smyrnaeans* の4~5章で、使徒ヨハネがこの手紙の中で

述べていると思われるもう一つのグノーシス主義者のグループを示唆している。そのグループはイエス・キリストの受肉を否定し、二律背反的な生活様式を貫いていた。

3. しかし、可能性は低いですが、使徒ヨハネがこの手紙の中で述べていると思われるもう一つのグノーシス主義者にアンテオケのメアンデリウスがいる。この人物はイレネウス著 *Against Heresies* の23章に登場することで知られている。彼はサマリア人シモンの追従者で秘密の知識の弁護者であった。

E. 現代の異端

1. この異端の本質は、人々がキリスト教の真理を他の思想体系と混合しようとするときに、現代の私達に示される。
2. この異端の本質は、人々が個人的関係の排除と生活様式を通した信仰を目指す「正しい」教義を強調するときに、現代の私達に示される。
3. この異端の本質は、人々がキリスト教を排他的な知識に転換するときに、現代の私達に示される。
4. この異端の本質は、人々が禁欲主義や二律背反主義に傾倒するときに、現代の私達に示される。

VI. 書かれた目的

A. 信徒のための実践的意図

1. 喜びを与える(1: 4を参照)
2. 神の御心にかなう生活を送るように励ます(1: 7を参照)
3. キリストにある救いの確信を与える(5: 13を参照)
4. 互いに愛し合い、世を愛さないように命令(忠告)する

B. 信徒のために教義を説く意図

1. イエスの神性と人間性を区別して考えるという誤りに対する反論
2. 神の御心にかなう生活を欠いた知識偏重主義を霊性と区別して考えるという誤りに対する反論
3. 人は他者との関わりを断つことで救われうるという誤りに対する反論

VII. 用語と聖句の早見リスト

1. 初めから、1: 1
2. 命の言葉、1: 1
3. 永遠の命、1: 2
4. 交わり(*koinonia*)、1: 3
5. 神は光である、1: 5
6. 歩む、1: 6と7節

7. イエスの血、1: 7
8. わたしの子たち、2: 1
9. 償い、2: 2 と 4: 10
10. 知る、2: 3 と 4 節と 18 節と 20 節と 21 節など
11. つながる、2: 6 と 17 節と 24 節と 25 節と 27 節など
12. 新しい掟、2: 7
13. イエスの名によって、2: 12
14. 世、2: 15
15. 終りの時、2: 18
16. 油を注がれている、2: 20 と 27 節
17. 公に言い表す、2: 23 と 4: 2 と 3 節と 15 節など
18. 霊を確かめる、4: 1
19. 裁きの日、4: 17
20. 神から生まれた、5: 18

VIII. 人物早見リスト

1. 弁護者、2: 1
2. 偽り者、2: 4 と 22 節
3. 反キリスト、2: 18 と 4: 3
4. 反キリストたち、2: 18
5. あなたがたを惑わそうとしている者たち、2: 26
6. 悪魔、3: 8 と 10 節
7. カイン、3: 12
8. 悪い者、5: 18

IX. 登場する地名の地図上の位置

なし

X. ディスカッションのための質問

1. I ヨハネ 1: 1-4 であまりにも多くの知覚動詞(聞く、見る、扱う)が用いられているのはなぜか。
2. 1: 9 はなぜとても重要な節なのか。この節は誰に対する語りかけとなっているのか。
3. 1: 10 は 3: 6 および 9 節とどのように関連しているか。
4. 用語「知る」がヨハネの手紙第一でとても頻繁に用いられているのはなぜか。ヘブル語での意味を定義しなさい。

5. 反復句「わたしたちが...と言いながら～する」の意味は何か。
6. ヨハネが対決している偽教師達とは誰か。聖書的なキリスト教に反発する彼らの信条を説明しなさい。
7. 3: 2 はどの教義と関連しているか。
8. 3: 6 と 9 節はなぜ解釈がとても難しいのか。
9. 4: 8 は戦う信徒達とどのように関連しているか。
10. 4: 13-14 には三位一体の概念が見られる。この概念をあなた自身の言葉で説明しなさい。
11. 4: 19 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
12. ヨハネの手紙第一には、信徒達に自分達をクリスチャンだと確信させる3つの試練が見られる。それら3つの試練を挙げなさい。
13. 5: 13 はなぜとても重要な節なのか。
14. 5: 14-15 は信徒達に、自分達の祈りが常に肯定的に応えられることを約束しているか。
15. 死に至る罪とは何か(5: 16)。
16. 5: 18 は信徒達に、サタンの試みや誘惑を全く受けることはないことを約束しているか。
17. 聖句「この世全体が悪い者の支配下にあるのです」の意味は何か。

ヨハネの手紙第二と第三への導入

I. 緒言

- A. ヨハネの手紙第二と第三は、紀元1世紀の終わりを迎えようとしていた地域教会、多分小アジアのローマ帝国の属州にあった教会群に対する平等なメッセージであると私は確信する。
- B. ヨハネの手紙第二は異端つまり巡回説教者達の問題を論じ、ヨハネの手紙第三は巡回説教を行う信徒達を助けるようにとの勧告の手紙となっている。
- C. ヨハネの手紙第三には3つの人名が特記されている。
1. ガイオ(初期教会において神の御心に適う生き方をした人)
 - a. 聖書の他の箇所にはガイオという名の人物が3人登場する。マケドニアのガイオ(使徒行伝 19: 29)とデルベのガイオ(使徒行伝 20: 4)とコリントのガイオ(ローマ 16: 23 と I コリント 1: 14)である。
 - b. 「使徒名簿」の名で知られる書には、ヨハネの手紙第三に登場するガイオが使徒ヨハネの指名で就任したペルガモンの司教という役職で記載されている。
 2. ディオトレフェス(初期教会において神の御心に適う生き方をせずに問題の種となった人)
 - a. 新約聖書の中でこの人物の名が登場するのはこの書だけである。彼の名は「ゼウスの庇護を受けた者」という意味のとても珍しい名である。「ゼウス」は「旅人の守り神」であるのに、その神の名にちなんだ名を持つ者が旅人を迫害していたというのは何とも皮肉なことである。
 - b. ディオトレフェスの行状は 9~10 節に暴露されている。
 3. デメトリオ(ヨハネの手紙を持ってこの地域教会を訪れた人)
 - a. 明らかにこの人物は伝道旅行団の一員であり、エフェソスにいた使徒ヨハネからの手紙を持ってこの地域教会を訪れた人である。
 - b. 「使徒名簿」と呼ばれる伝統的な書には、デメトリオが使徒ヨハネの指名で就任したフィラデルフィアの司教という役職で記載されている。
- D. 初期教会は巡回説教者(教師・福音伝道者)の評価・援助方法について議論を重ねた。*The Didache or The Teaching of the Twelve Apostles* と呼ばれる、紀元2世紀初頭の信徒の記した初期の非正典的書にはこれらの(巡回説教者[教師・福音伝道者]の評価・援助方法の)指針が記されている。

第6章—教師・使徒・預言者について

「従って、誰であれ、来て以前から言われてきたこれらのことの全てを教えてくれる者は受け入れなさい。しかし、その教師自身が心変わりして、他の教義によってこれらのことの全てを無にするようなことを教えるなら、その教師の言うことを聞き入れてはならない。だが、その教師が主の義と知識とを増し加えるように教えてくれるなら、その教師を主として

受け入れなさい。しかし、使徒と預言者については、伝える福音の程度に応じてこのようにしなさい。あなたがたのところに来る使徒は誰でも主として受け入れなさい。しかしその使徒は1日以上とどまるべきではない。だが必要なら2日泊めてあげなさい。しかし3日以上とどまるなら、その使徒は偽預言者である。だからその使徒が去っていくまでは、泊まるまでの間にパン以外のものを与えないようにしなさい。金銭を要求するなら、その使徒は偽預言者である」(380 ページ)。

第12章—信徒の受け入れ

「しかし、誰であれ聖霊によって発言する者は金銭あるいはその他のものを与えなさい。そうでないならその者の言うことを聞き入れてはならない。だが、必要を覚えている他者のために何かくれるように言っているなら、誰もその者を裁かないようにしなさい。

しかし、主の御名によって来る者は誰でも受け入れなさい。後になってその者がそのような者であることがわかるだろう。というのは、その者は物事の分別のある者だろうからである。来る者が旅人なら、できるだけのことをして助けてあげなさい。しかし、その者があなたがたのところにとどまるつもりがないなら、必要であれば2～3日泊めてあげてよいが、それ以上はとどまらせるべきではない。だが、その者があなたがたのところにとどまるつもりなら、その者が職人ならば食べていくために働かせなさい。しかし、その者が無職なら、信徒としてのあなたがたの理解度に応じてその者の世話をしやり、その者が怠惰な生活を送らないようにしてやりなさい。だが、その者がそのようにする(あなたがたの世話を受ける)つもりがないなら、その者はキリストの悪口を言いふらす者である。そのような者を避けるように注意しなさい」(381 ページ)。

II. 用語と聖句の早見リスト

1. 「初めから」、Iヨハネ 1: 1
2. 「神は光である」、Iヨハネ 1: 5
3. 言い表す、Iヨハネ 1: 9
4. 「わたしの子たち」、Iヨハネ 2: 1
5. 弁護者、Iヨハネ 2: 1
6. 償い、Iヨハネ 2: 2
7. 知る、Iヨハネ 2: 3
8. 「主につながる」、Iヨハネ 2: 6
9. 「世を愛してはならない」、Iヨハネ 2: 15
10. 「終りの時」、Iヨハネ 2: 18
11. 油を注がれている、Iヨハネ 2: 27
12. 「霊と水と血」、Iヨハネ 5: 8

13. 「死に至る罪」、Iヨハネ 5: 16
14. 「偶像を避けなさい」、Iヨハネ 5: 21

Ⅲ. 人物早見リスト

1. 命の言葉、Iヨハネ 1: 2
2. 反キリスト、Iヨハネ 2: 18(Ⅱヨハネ 7 節)
3. 反キリストたち、Iヨハネ 2: 18
4. 選ばれた婦人、Ⅱヨハネ 1 節
5. その子たち、Ⅱヨハネ 1 節
6. 選ばれたあなたの姉妹の子たち、Ⅱヨハネ 13 節
7. ガイオ、Ⅲヨハネ 1 節
8. ディオトレフェス、Ⅲヨハネ 9 節
9. デメトリオ、Ⅲヨハネ 12 節

Ⅳ. 登場する地名の地図上の位置—なし

Ⅴ. ディスカッションのための質問

1. Iヨハネ 1: 1-5 であまりにも多くの知覚動詞が用いられているのはなぜか。
2. 自分に罪がないと言っている者がいるのはなぜか(Iヨハネ 1: 8)。
3. Iヨハネ 2: 2 はヨハネ 3: 16 とどのように関連しているか。
4. Iヨハネ 2: 7-8 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
5. Iヨハネ 2: 12-14 は教会内の様々な世代のグループと関連しているか。それとも、全信徒と関連しているか。
6. Iヨハネ 2: 22-23 をグノーシス主義神学の立場から説明しなさい。
7. Iヨハネの段落 2: 28~3: 3 の中心真理は何か。
8. Iヨハネ 3: 6 と 9 節はなぜ解釈がとても難しいのか。
9. Iヨハネ 3: 15 は山上の説教とどのように関連しているか。
10. Iヨハネ 3: 20 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
11. 人は霊をどのように試すのか(Iヨハネ 4: 1-6)。
12. Iヨハネ 4: 2 はグノーシス主義神学とどのように関連しているか(Ⅱヨハネ 7 節)。
13. Iヨハネ 4: 7-24 の中心真理は何か。
14. Iヨハネ 5: 13 はこの書全体の主題の一つとしてどのように機能しているか。
15. 神は全ての祈りに応えられるか(Iヨハネ 5: 14-15)。
16. Ⅱヨハネ 10 節は個人の家つまり教会について述べているか。
17. Ⅲヨハネ 2 節は健康と繁栄を約束する聖句なのか。

ユダの手紙への導入

I. 緒言

- A. ユダの手紙は誤ちと反逆と裁きの反復的な危険について述べた衝撃的な書である。信徒達は常に護られなければならない。信徒達を護るのは(1)父なる神の召しと愛と護りの力、そして(2)御言葉の知識と神のような生活と傷ついた仲間の信徒への慈みである。
- B. しかし、警告のただ中にあっても、ユダの手紙の結論は神の護りの力を讃える最強の祈りの一つである。
- C. ユダの手紙とペテロの手紙第二の関係は、以下の事柄がはっきりしないため明らかではない。
1. どちらが先に書かれたか
 2. 類似点と相違点がはっきりしているのはなぜか
 3. 一方は来たるべき異端を、もう一方は現状で存在する異端をどのように言い表しているか
 4. 両方の著者がともに引用している初期教会の文書はあるか
 5. 信徒が関与した反逆の実例は記されているか
- D. この書は
1. 神の護りの力(1 節と 24 節)
と
 2. 自分自身を護る信徒(21 節)
の間の神学的バランスを描写している。

II. 著者

- A. ユダ(ヘブル語のアルファベット表記では Judah、ギリシャ語のアルファベット表記では Judas)は自身を2つの呼び名で言い表している。
1. 「イエス・キリストのしもべ」パウロが通常用いていた自身の呼び名とこれは正確には同じではない。しかしこれらは英語での呼び名としては同じように見える。パウロは常に所有格叙述句の前に名詞「奴隷」を置いている。このことはペテロの手紙第二の場合も同じである。
しかし、ユダの手紙における語順とヤコブの手紙における語順は同じである(叙述所有格句が前に来る)。
 2. 「ヤコブの兄弟」新約聖書にはヤコブという名の人物が多く登場するが、その名自体は言うまでもなくヤコブ 1: 1 に登場する人物を連想させる。イエスの異父弟ヤコブは、パウロが伝道旅行をした時期(使徒行伝 15 章を参照)にエルサレムの教会の指導者であった。イエスのこれら2人の異父弟達が謙遜して自分達をイエスとは生物学的に関連のある者だと言わなかったのだと推測がなされてきた。

- B. 序文が簡潔であることはこの書の著者が初期教会において有名で有力な（I コリント 9: 3 を参照）人物であることを反映しているが、著者についての情報は何も残っていない。もしも後の時代の誰かが過去の有名な人物の名をかたって（偽名で）この書を書こうとしたのなら、ユダの手紙でそのようなことがあったとは考えられない。
- C. ユダがヘブル人信徒でイエスの異父弟であったという古くからの伝説にはいくつかの仮定が存在する。
1. ヤコブとの家族関係（ヤコブ 1: 1 を参照）
 2. 旧約聖書からの引用を引き続き行っている
 3. ヘブル語の文献に特徴的な、数字の3に関する表現の使用
 - a. 旧約聖書に記されている背信の出来事を3つ挙げている
 - b. 旧約聖書に登場する人物を3名挙げている
 - c. 冒頭の挨拶
 - (1) 3つの動詞「召されている」「愛されている」「護られている」
 - (2) 3つの祈りの求め「憐れみ」「平和」「愛」
- D. ユダの手紙のギリシャ語の文体は洗練されたコイネギリシャ語である。ユダには国際人的素養があったに違いない（I コリント 9: 5 を参照）。
- 人柄に関して言えば、ユダはヤコブと同じような人物であった。この罪と反逆の世の中で神のような生活を送る義務について無意味で唐突な議論をユダはしなかった。

III. 書かれた年代

- A. 確実性のある説はなく、ただの推測である。
- B. 手がかりとなる事柄をいくつか挙げてみよう。
1. ユダの存命時期。ユダがヤコブの弟でイエスの異父弟ならばこれが手がかりとなる。
 2. ユダの手紙とペテロの手紙第二の文学上の関係。ユダの手紙の 25 の節のうち 16 (3 ~ 18 節) が II ペテロ 2: 1-18 と何らかの関連がある。ペテロがペテロの手紙第二を書いたのなら、ユダの手紙の書かれた時期はペテロの存命時期に近い（ペテロは紀元 64 年に殉教した）。しかし、誰が誰の書から引用したかは明らかではない。
 - a. ユダの手紙からペテロの手紙第二への引用
 - b. ペテロの手紙第二からユダの手紙への引用
 - c. どちらも初期教会の文書あるいは教会の伝説から引用している
- C. この書の内容は、書かれた時期が紀元1世紀の中頃であることを暗示している。異端がはびこるには十分な時間が過ぎていた。使徒達が実在した時期が過ぎたばかりであった（18~19 節）。しかし、単独の教義だけが発展したわけではなかった。ユダは偽教師達の道徳的問題について述べているが、その教義の誤りについては議論していない。ユダは旧約聖書から実例を引用しているが、イエスのお教え（引用あるいは物語）は引用してい

ない。

- E. 自著 *Historical Ecclesiasticus* の第3巻19章1節～20章6節でエウセビウスはいくつかの伝説について述べている。
- (1)ユダの孫達(男性)が反逆容疑でドミトリアヌス帝から尋問を受けるためにローマへ連行された。
 - (2)ユダの孫達(男性)はユダ王国の王の子孫であった。
 - (3)ユダの孫達(男性)はナザレのイエスの親類であった。
- ドミトリアヌス帝の治世は紀元 81 年から 96 年であった。
- F. ユダの手紙の書かれた年代は紀元 60 年代から 80 年代であると考えられる。

IV. 宛先と書かれた事情

- A. 初期教会は神学的に一枚岩のようではなかった。使徒達でさえ福音の様々な側面を強調した。使徒達の殉教が始まり(つまり信徒にとって指導を仰ぐことのできる使徒が少なくなりまた遠方に出かけて行き)キリストの再来が先延ばしになってゆくにつれて、初期教会は福音宣教に用いるのにふさわしい事柄の「標準化」という試練に直面した。旧約聖書、イエスの御言葉とお教え、そして使徒達の説教が標準となった。
- B. 明確な権威が変遷し分裂していた時代にユダの手紙は書かれた。信徒達(地域教会を指すのか、あるいは地理上の地域にいた信徒達を指すのかは明らかではない)は、理論神学や理論哲学の生み出した誤りの教えの大量流入に直面していた。異端について知られていることは次のことであった。
1. 異端は教会の集会(愛餐会。12 節を参照)の一部であった。
 2. 異端は不道徳で人心操作の巧みな教師達で、神の人々の間に分裂を引き起こしていた(19 節を参照)。
 3. 異端は自分達の神学の中で「天使」を(用語として)用いまた議論していたようだ。
 4. 異端は「知識」(*gnosis*)を強調していたようだ。

紀元1・2世紀のギリシャ・ローマ世界に精通している人が見れば、これらの特徴は「グノーシス主義」と呼ばれる哲学・神学運動にあてはまる。紀元2世紀のこれらの特殊な異端の起源が多くの近東思想の共通要素であったことは確かに事実である。グノーシス主義の本質である二元論の各要素については死海文書の中で述べられている。新約聖書の多くの書(エペソ人への手紙～コロサイ人への手紙、牧会書簡群、ヨハネの手紙第一と第二)は同種の誤った教えおよび偽教師達と闘うために書かれた。

V. 書かれた目的

- A. 著者は信徒達の共通の救いについて書くことを望んでいた(3 節を参照)。
- B. 教会内の交わりの時に誤った教えおよび偽教師達が侵入したこと(12 節を参照)で著者は

「教会に一度伝えられた信仰」(3節と20節を参照)という炎上する問題について述べることにした。著者の目標は正統性を主張することであったが、著者は教義ではなく神のような生活に関する主題を議論した(この点はヤコブ 2: 14-24 と全く同様である)。人々の生活様式は偽教師達の神学の中にはっきりと見ることができる。

C. 著者は

1. 霊的に成長する(20節を参照)
 2. 救いを確信する(21節と24～25節を参照)
 3. 墮落した者達を助ける(22～23節を参照)
- ように信徒達を励ましたいと思っている。

VI. 正典化

- A. この書は初めは正典と認められた(ローマのクレメンスが紀元 94 年頃に書いた自著の中で引用している)が、後に議論の対象となり、最終的に完全に認められた(紀元 325 年のニケーア会議と紀元 397 年のカルタゴ会議において)。
- B. 正典承認における大きな問題は聖書外典(Ⅰエノクと「モーセの昇天」)の中でこの書が引用されていることである。これらの書、特にⅠエノクは紀元1世紀の信徒達の間で広く回覧され、神学的に影響を与えた。
1. このことはなぜ問題なのか。それは聖書外典が権威ある書であることを意味しているのか。
 - a. 神の啓示に拠らずに書かれた書(民数記 21: 14-15 と 26～30 節[民数記22～23章のバラムの予言]、ヨシュア 10: 13、Ⅱサムエル 1: 18 以降、Ⅰ列王記 11: 41、14: 19 と 29 節、15: 7 と 23 節と 31 節を参照)が旧約聖書で引用されている。
 - b. 描写のための資料としてイエスは聖書外典を用いられた(マタイ 23: 35 を参照)。
 - c. ステパノは聖書外典を用いた(使徒行伝 7: 4 と 14～16 節を参照)。
 - d. パウロはしばしば聖書外典を用いた。
 - (1) 荒れ野を放浪していた時期のイスラエルの子らの末裔であるキリストを岩に例えたラビのミドラシュ(Ⅰコリント 10: 4 を参照)。
 - (2) 出エジプト記 7: 11 と 22 節および 8: 7(Ⅱテモテ 3: 8 を参照)に登場するファラオの呪術師達の名はユダヤの聖書外典から採られた。
 - (3) ギリシャの著述家達
 - a) 詩人アラトウス(使徒行伝 17: 28)
 - b) 詩人メナンデルス(Ⅰコリント 15: 33)
 - c) 詩人エピメニデスまたはエウリペス(テトス 1: 12)
 - e. ヤコブ 5: 17 でヤコブはラビの伝承を用いた。
 - f. 黙示録 12: 3 でヨハネは近東宇宙論の神話を用いた。

2. なぜユダはこれらの聖書外典を用いたのか
 - a. 多分、偽教師達が自由に用いていたからだろう
 - b. 多分、宛先において敬意を払われて読まれていたからだろう
- C. ユダの手紙の正典性を裏付ける証拠
 1. 自著でユダの手紙を引用あるいは暗示している人物
 - a. ローマのクレメンス(紀元 94~97 年に書いた著書で)
 - b. ポリカルポス(紀元 110~150 年に存命)
 - c. イレネウス(紀元 130~202 年に存命)
 - d. テルトウリアヌス(紀元 150~220 年に存命)
 - e. アテナゴラス(紀元 177 年に書いた著書で)
 - f. オリゲン(紀元 184~254 年に存命)

(これらは *International Critical Commentary* の 305~308 ページから採った)
 2. 自著でユダの手紙の書名を挙げている人物
 - a. アレキサンドリアのクレメンス(紀元 150~215 年に存命)
 - b. エルサレムのキリル(紀元 315~386 年に存命)
 - c. Jerome(紀元 340~420 年に存命)
 - d. アウグスティヌス(紀元 400 年に書いた著書で)
 3. ユダの手紙を記載している正典リスト
 - a. ムラトリー断片(紀元 200 年編纂)
 - b. Barococcio(紀元 206 年編纂)
 - c. アタナシウスの正典リスト(紀元 36 年編纂)
 4. ユダの手紙を正典と認めた会議
 - a. ニケーア会議(紀元 325 年開催)
 - b. ヒッポ会議(紀元 393 年開催)
 - c. カルタゴ会議(紀元 397 年と 419 年に開催)
 5. ユダの手紙を記載している訳本(諸言語訳聖書)
 - a. 古代ラテン語訳聖書(紀元 150~170 年編纂)
 - b. 改訂版シリア語訳聖書でペシッタと呼ばれている聖書(紀元5世紀編纂)
- D. その後、教会はユダの手紙の正典性(神の啓示に投げ書かれた書であることを疑った。エウセビウスはユダの手紙を「議論中の書」に挙げた(*Historical Ecclesiasticus* の第3巻25章)。クリソストムと Jerome は、聖書外典からの引用があることを理由に、ユダの手紙を正典承認についての議論中の書とした。シリアの初期教会はペテロの手紙第二とヨハネの手紙第二および第三とともにユダの手紙を正典と認めなかった。
- E. 第一エノクについて少し述べよう。この書は元々ヘブル語で書かれた(しかし現在は死海文書中にあるアラム語で書かれた断片以外は紛失している)が、後にギリシャ語に翻訳さ

れ(断片数点のみが現存)紀元 600 年までにエチオピアで写本された(写本1部が現存)。この書は聖書外典の書かれた時期に書かれたが、エチオピア写本が示すように、多数回編集された。この書は初期教会に大きな影響を与えた。テルトゥリアヌスはこの書を聖書として引用している。バルナバの手紙の中でこの書は(聖書として)引用され、イレネウスとアレキサンドリアのクレメンスは自著の中でこの書を引用している。紀元4世紀までにこの書は初期教会において注目されなくなっていった。

VII. 用語と聖句の早見リスト

1. 「わたしたちが共にあずかる救い」、3 節
2. 「聖なる者たちに一度伝えられた信仰」、3 節
3. 淫行(放蕩、不道德)、4 節
4. 「自分の領分」、6 節
5. 「闇のもとの永遠の束縛」、6 節
6. 「不自然な肉の欲」、7 節
7. 「永遠の火」、7 節
8. 愛餐会、12 節
9. 聖なる者たち、14 節
10. 「聖霊のお導きのもとに祈る」、20 節
11. 唯一の神、25 節

VII. 人物早見リスト

1. 「ひそかに紛れ込んで来ているある者たち」、4 節
2. 「自分の住まいを見捨ててしまっている天使たち」、6 節
3. ミカエル、9 節
4. バラム、11 節
5. コラ、11 節
6. エノク、14 節
7. 「(～)できるお方に」、24 節

VIII. 登場する地名の地図上の位置

1. エジプト、5 節
2. ソドムとゴモラ、7 節

IX. ディスカッションのための質問

1. どのような類の偽教師達についてユダは述べているか(8～13 節)。

2. なぜユダは聖書外典を引用したのか(9 節と 14～15 節)。
3. 神の愛のうちに人はどのように自身を守るのか(21 節)。
4. ユダの手紙の中心主題は何か。
5. ユダの手紙はペテロの手紙第二とどのような関連があるか。

旧約聖書の預言への導入

I. 緒言

A. はじめに

1. 預言の解釈様式について信徒の共同体の中に一致は見られない。何世紀にもわたって様々な真理が正統的見解として確立されてきたが、ここで述べようとしていることはその見解ではない。
2. 旧約聖書の預言には細かく定義されたいくつかの段階がある。
 - a. 王政期以前(サウル王の治世以前)
 - (1) 預言者と呼ばれた人々
 - a) アブラハム(創世記 20: 7)
 - b) モーセ(民数記 12: 6-8、申命記 18: 15 と 34: 10)
 - c) アロン(出エジプト 7: 1) [モーセの代弁者]
 - d) ミリアム(出エジプト 15: 20)
 - e) メダトとエルダド(民数記 11: 24-30)
 - f) デボラ(士師記 4: 4)
 - g) 無名の預言者(士師記 6: 7-10)
 - h) サムエル(I サムエル 3: 20)
 - (2) 一集団として登場する預言者達(申命記 13: 1-5、18: 20-22)
 - (3) 預言者の集団あるいは団体(I サムエル 10: 5-13、19: 20、I 列王記 20: 35 と 41 節、22: 6 と 10~13 節、II 列王記 2: 3 と 7 節、4: 1 と 38 節、5: 22、6: 1 等)
 - (4) 預言者と呼ばれたメシア(申命記 18: 15-18)
 - b. 書記ではない、王政を行う預言者達(王として統治した)
 - (1) ガド(I サムエル 7: 2、12: 25、II サムエル 24: 11、I 歴代誌 29: 29)
 - (2) ナタン(II サムエル 7: 2、12: 25、I 列王記 1: 22)
 - (3) アヒヤ(I 列王記 11: 29)
 - (4) エフー(I 列王記 16: 1 と 7 節と 12 節)
 - (5) 無名の預言者(I 列王記 18: 4 と 13 節、20: 13 と 22 節)
 - (6) エリヤ(I 列王記 18 章、II 列王記 2 章)
 - (7) ミカヤ(I 列王記 22 章)
 - (8) エリシャ(II 列王記 2: 8 と 13 節)
 - c. 伝統的な書記である預言者達(王と同様に国家元首であった)
イザヤ~マラキ(ダニエルを除く)

B. 聖書中の用語

1. *ro'eh* これは「先見者(預言者)」の意味で、I サムエル 9: 9 に出てくる。この用語は

用語 *Nabi* (「預言者」の意味)に変化しつつある様相を持ち、語幹「召し出す」に由来する。*ro'eh* は一般的なヘブル語の用語「見る」に由来する。この人物は神の目的と御計画を理解し、物事における神の御心(御意志)を知るうえでの相談役となった。

2. *hozeh* これは「先見者(預言者)」の意味で、Ⅱサムエル 24: 11 に出てくる。この用語は基本的に *ro'eh* の類義語である。この用語はより稀なヘブル語の用語「見る」に由来する。この用語の分詞形は最も頻りに預言者を指して用いられる。
3. *nabi'* これは「預言者」の意味で、アッカド語の動詞 *nabu* (「召し出す」の意味)やアラビアの動詞 *naba'a* (「公告する」の意味)と同語族(語源)である。これは預言者を言い表した最も一般的な旧約聖書の用語である。この用語は 300 回以上用いられている。正確な語源は明らかではないが、ここでは「召し出す」の意味が最も合っていると思われる。アロンを通したモーセとファラオの関係を YHWH が言い表されたのがこの用語であると理解するのが多分最も正しいと思われる(出エジプト 4: 10-16、7: 1、申命記 5: 5 を参照)。預言者とは神の御言葉を神の民に伝える人のことをいう(アモス 3: 8、エレミヤ 1: 7 と 17 節、エゼキエル 3: 4 を参照)。
4. I 歴代誌 29: 29 において上記の 3 つの用語は全て預言者という職業的地位を指して用いられている。
サムエルには *ro'eh*
ナタンには *nabi'*
ガドには *hozeh*
5. 成句 *'ish ha* つまり *'elohim* (「神の人」の意味)も神の代弁者をより広い意味で言い表している。これは「預言者」の意味で旧約聖書中で 76 回用いられている。
6. 用語「預言者」はギリシャ語に起源がある。この用語はギリシャ語の用語 *prophemi* に由来する。*pro* は「～の前に」あるいは「～のために」の意味で、*phemi* は「話す」の意味である。

II. 預言の定義

- A. 用語「預言」はヘブル語において英語よりも広いセム語域を網羅している。ヨシュア記から列王記まで(ルツ記を除く)の歴史書をユダヤ人は「古代預言者の書」と名付けた。アブラハム(創世記 20: 7、詩篇 105: 5)とモーセ(申命記 18: 18)は預言者として描写されている(ミリアムも同様である。出エジプト 15: 20)。だから、推測上の英語の定義に注意しよう。
- B. 「預言主義は神の御関心と御目的と御関与に関する事柄のみの意味を認めて歴史を理解することとして正当に定義されうる」(*Interpreter's Dictionary of the Bible* 第3巻 896 ページ)。
- C. 「預言者は哲学者でも組織神学者でもなく、神の民が自身の現在を作り変えて未来を形作ることができるように神の民に神の御言葉を伝える、契約の仲介者である」(『預言者と預

言』、*Encyclopedia Judaica*、第13巻 1152 ページ)。

Ⅲ. 預言の目的

- A. 預言は神が御自分の民に語られる手段であり、神が御自分の民の生活と世の出来事とを支配されるうえで御自分の民にお与えになる、御自分の民が置かれている現状におけるお導きと希望である。預言者のメッセージは基本的に(神の民の)集団に対して語られる。その意図は神の民を叱り、励まし、信仰と悔い改めに導き、神御自身と神の御計画を神の民に知らせることにある。しばしばこの語(預言)は神が代弁者をお選びになることを明言するために用いられる(申命記 13: 1-3 と 18: 20-22)。この語は、究極的な解釈をすれば、メシアを指しているといえる。
- B. しばしば預言者は生涯において歴史的・神学的危機に直面し、終末論的状况に置かれた。この歴史の終末論的見方(目的論)はイスラエル(神の民)および神の選びと契約上の約束に対してイスラエルが持っている意識に独特の概念である。
- C. 預言者の地位は、神の御心を知る手段としては最高司祭の地位と均衡を保ち、それに取って代わっているように思われる。ウリムとチュミムの口頭でのメッセージは神の代弁者の言葉を超えている。また、預言者の地位はマラキ以後イスラエルにおいて消滅していたようだ。400年後に洗礼者ヨハネが現れるまで預言者の地位にある者は現れていない。新約聖書における預言の賜物が旧約聖書とどのような関連があるのかは明らかではない。新約聖書の預言者達(使徒行伝 11: 27-28、13: 1、14: 29 と 32 節と 37 節、15: 32、I コリント 12: 10 と 28~29 節、エペソ 4: 11)は新たな啓示を明らかにする人物ではなく、契約に基づいた状況における神の御心を預言あるいは解き明かす人物である。
- D. 預言は本質的に排他的あるいは独断的な予知ではない。予知は人が自身の地位と言葉を確認可能なものとする手段の一つであるが、次のことは覚えておかなければならない「旧約聖書の預言の2%未満はメシアに関連がある。5%未満は新しい契約の世について特に述べたものである。1%未満はまだ起こっていない出来事に関連がある」(Fee と Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の 166 ページ)。
- E. 預言者は民に対する神の代表者であり、祭司は神に対する民の代表者である。これは一般的な意見である。神に質問をするハバククのような例外的な人物がいる。
- F. 預言者を理解することが難しい理由の一つは、預言者の著書がどのように構成されているかが知られていないことにある。預言者の著書の中の事柄は時系列順に書かれていない。預言者の著書は主題を中心に書かれているように思われるが、その記述様式は必ずしも期待通りではない。預言者の著書にはしばしば明確な歴史背景や時間の枠組みや神命の明確な区別が記されていない。従って
- (1)一つの背景的な事柄をもとに預言者の著書を読み通すこと
 - (2)トピックをもとに預言者の著書を要約すること

(3)それぞれの神命の中の中心真理あるいは著者の意図を確かめることは難しい。

IV. 預言の特徴

- A. 旧約聖書には「預言者」と「預言」の概念の発展が見られるようだ。初期のイスラエルではエリヤやエリシャのような強力なカリスマ的指導者に率いられた預言者の団体が結成された。成句「預言者の息子たち」は時々この団体を指して用いられた(Ⅱ列王記2章)。この時代の預言者達には(しばしば)恍惚状態になるという特徴があった(Ⅰサムエル 10 章 10～13 節、19: 18-24)。
- B. しかし、この時代は瞬く間に過ぎ去り、預言者達が個別に活動する時代となった。王となり宮殿に住んだ預言者達が(真偽ともに)いた(例えばガドやナタン)。また、独立した、あるいは時にイスラエル社会において全く地位を持たなかった預言者達もいた(アモス)。預言者には男性も女性もいた(Ⅱ列王記 22: 14)。
- C. 預言者はしばしば未来を明らかにするが、それには人類の即時の応答が条件となる。しばしば預言者の仕事は、人類の応答に影響されない、御自分の造られたものに対する神の普遍的な御計画を明らかにすることであった。この普遍的で終末論的な神の御計画は古代近東地域の預言者達の間では独特のものであった。予知および契約への忠実性は預言的メッセージの2つの要点である(Fee と Stuart の共著書の 150 ページを参照)。このことは預言者が主に共通の主題を探求する集団の形で活動したことを意味している。預言者達は通常、排他的にはなく、国家に対して呼びかけた。

預言の大半は口頭で発表された。後にそれらの預言は主題や時系列あるいは近東文学の他の様式に基づいて統合された。口頭で発表されたので、書き下された韻文のようにはそれらの預言は構成されたものではなかった。このため、預言は書物になるとそのまま読み下すのが難しくなり、特別な歴史背景を知ることなしには理解が難しくなる。

預言者のメッセージの伝え方にはいくつかの様式があった。

- 1. 法廷 神は御自分の民を法廷へと導かれる。しばしばその法廷の場は YHWH が妻(イスラエル)を不忠実を理由に拒絶する離婚訴訟となる(ホセア4章、ミカ6章)。
- 2. 葬儀 この種のメッセージはその特別な韻律とこの行事に特徴的な「悲哀」によって特殊な形式を持つ(イザヤ5章、ハバクク2章)。
- 3. 契約を祝福する言葉 契約の条件的性質が強調され、一連の言葉が、良くも悪くも未来に向けて述べられる。

V. 真の預言者の承認の聖書における証拠

- A. 申命記 13: 1-5(予知としるし)
- B. 申命記 18: 9-22(偽預言者と真の預言者)

C. 男性も女性も召されて預言者に指名される。

1. ミリアム(出エジプト15章)
2. デボラ(士師記 4: 4-6)
3. フルダ(Ⅱ列王記 22: 14-20、Ⅱ歴代誌 34: 22-28)

周辺諸国の文化では預言者は占いによって承認された。イスラエルでは預言者は

1. 神学的選考(YHWHの御名の使用)
2. 歴史的選考(正確な予知)

によって承認された。

VI. 預言の解釈における有用な指針

- A. 各神命の歴史背景と文脈とに留意して原著者(編集者)である預言者の意図を見出さない。
- B. 神命の一部だけでなく全体を読んで解釈し、満足のいくまで要約しなさい。その神命が他の神命とどのように関連があるかを見なさい。その預言書全体を要約しなさい。
- C. 預言書の原文自体から比喩的用法を見つけるまで、文字通りの解釈を試みなさい。それから比喩的な言葉を韻文にしなさい。
- D. 歴史背景と言い換え文をもとに象徴的行為を分析しなさい。この預言書は古代近東文学であって西洋(現代)文学ではないことを覚えておきなさい。
- E. 預言を注意深く解釈しなさい。
 1. その預言は著者の時代に特有のものか。
 2. その預言はイスラエルの歴史において最終的に実現したか。
 3. その預言はまだ起こっていない未来の出来事か。
 4. その預言は現在実現しているか、それともまだ実現していない未来の出来事か。
 5. 現代の著述家ではなく聖書の著者に答えを導いてもらいなさい。

特別な関連事項

1. その預言は条件的な応答によって確認できるか。
2. 誰がその預言をしたかは明らかなことか(そしてそれはなぜか)。
3. その預言が多発的に実現する聖書的・歴史的可能性はあるか。
4. 神の啓示を受けた新約聖書の著者達は、私達には知られていない、旧約聖書の多くの箇所では予型論あるいは言葉遊びが用いられているようだ。私達は神の啓示を受けていないので、それらの聖書箇所についてこのような追究をすることは避けたほうがよさそうだ。

VII. 有用な書籍

Carl E. Armerding と W. Ward Gasque 共著 *A Guide to Biblical Prophecy*
Gordon Fee と Douglas Stuart 共著 *How to Read The Bible For All Its Worth*
Edward J. Young 著 *My Servants the Prophets*
The Expositor's Bible Commentary 第6巻「イザヤ書～エゼキエル書」、Zondervan 社刊
J. A. Alexander 著 *The Prophecies of Isaiah*、1976 年、Zondervan 社刊
H. C. Leupold 著 *Exposition of Isaiah*、1976 年、Baker 社刊
D. David Garland 編 *A Study Guide Commentary*、「イザヤ書」、1978 年、Zondervan 社刊

ヨハネの黙示録への導入

重要な導入記事

(なぜ信徒は黙示録についてとても多くの教義的解釈をするのか)

数年にわたる終末論の研究を通じて、信徒の大半が終りの時の詳細で組織的な時系列を知らないこと、あるいは求めていないことを私は知った。一部の信徒は神学的・心理学的・特定教派偏重主義的理由からこの分野のキリスト教に注目あるいはこれを重視している。これらの信徒達は、どのように全てのことが終わりを迎えるのか、そして福音の緊急性を見逃してしまうのかということばかり考えてしまうようになったようだ。信徒達は神の終末論的な(終りの時の)御計画を乱すことはできないが、救済(救世)論的な(救いの教義)義務(命令。マタイ 28: 19-20 を参照)には関与できる。キリストが再来されて神の約束がこの世において最高潮に達することを大半の信徒達は認めている。神の約束がこの現世において最高潮に達することをどのように理解するかということから生じる解釈上の問題はいくつかの事柄に由来している。

1. 旧約聖書の預言と新約聖書の使徒の説教との間の緊張
2. 聖書の説く一神教(唯一の神)とイスラエルの選び(特別な人々)との間の緊張
3. 聖書における契約と約束の条件的側面(「もし...なら...」)と、墮落した人類を救うことへの神の無条件の忠実さとの間の緊張
4. 近東の文学ジャンルと近代西洋の文学類型との間の緊張
5. 現在ある神の御国とまだ来ていない神の御国との間の緊張
6. キリストの再来が差し迫っていることを信じることと、最初にいくつかの出来事が起こらなければならないということ信じることとの間の緊張

これらの緊張についてひとつずつ議論していこう。

第1の緊張

旧約聖書の預言者達は、地上の全ての国々が集まってダビデのような支配者に仕えるエルサレムの中心にあるパレスティナにユダヤ人の王国が再建されると預言しているが、新約聖書の使徒達はこの話題に全く触れていない。旧約聖書は神の啓示によって書かれてはいないのだろうか(マタイ 5: 17-19 を参照)。新約聖書の著者達は終りの時の重要な出来事を省略してきたのだろうか。

世の終りに関する情報源はいくつかある。

1. 旧約聖書の預言者達
2. 旧約聖書の黙示的書の著者達(エゼキエル 37~39 章、ダニエル 7~12 章を参照)
3. ユダヤの黙示的な聖書外典(例えば I エノク)の著者達
4. イエス御自身(マタイ 24 章、マルコ 13 章、ルカ 21 章を参照)

5. パウロの著書(Ⅰコリント15章、Ⅱコリント5章、Ⅰテサロニケ4章、Ⅱテサロニケ2章を参照)
6. ヨハネの著書(黙示録を参照)

これらの情報源は全て終りの時に関する事柄(出来事、時系列、人物)を明確に示しているだろうか。もしそうでないなら、それはなぜか。それらは全て(ユダヤの聖書外典を除く)神の啓示に基づいているだろうか。

聖霊は、理解可能な用語と知識分野を用いて旧約聖書の著者達に真理を明らかにされた。しかし、革新的な啓示を通して聖霊は旧約聖書のこれらの終末論的な概念を普遍的規模に拡張された。関連する事例をここに挙げよう。

1. 都市エルサレムは神の民(シオン)の比喩として用いられ、悔い改め信じた全ての人類を神が受け入れられることを言い表した用語(黙示録20~22章の「新しいエルサレム」として新約聖書に投影されている。文字通りの現実の都市を神の民の意味に神学的に拡張したことは、ユダヤ人やユダヤ人の王国の首都が存在する以前に創世記3:15に記された、墮落した人類を救うという神の約束の中に予示されている。アブラハムの召し(創世記12:3を参照)でさえ異邦人が関与していた。
2. 旧約聖書では神の民の敵とは古代近東の周辺諸国を指しているが、新約聖書ではその意味が、神を信じず反神的でサタンの啓示を受けた全ての人々に拡張されている。戦いは地理的・地域的抗争から普遍的抗争へと変化している。
3. 旧約聖書にとっても不可欠な、土地に関する約束(創世記の家父長への約束)は今や全地に対するものとなった。新しいエルサレムは近東地域だけに独占的に与えられるのではなく、再び造られた地に与えられるのだ(黙示録21~22章を参照)。
4. 旧約聖書の拡張された予言的概念の例としては他にこのようなものがある:
 - (1)アブラハムの子孫は今や霊的に割礼を受けている(ローマ2:28-29を参照)。
 - (2)異邦人も今では契約の民とみなされている(ホセア1:10、2:23[ローマ9:24-26で引用]、レビ26:12、出エジプト29:45[Ⅱコリント6:16-18と出エジプト19:5で引用]、申命記14:2[テトス2:14で引用]を参照)。
 - (3)神殿は今や地域教会(Ⅰコリント3:16を参照)や信徒個人(Ⅰコリント6:19を参照)が神殿である。
 - (4)イスラエルとその特徴を言い表した旧約聖書の聖句でさえ今や神の人々(ローマ9:6とガラテヤ6:16の「イスラエル」、Ⅰペテロ2:5と9-10および黙示録1:6を参照)全てを言い表している。

予言的モデルは完成され、拡張され、そして今やより総(包)括的である。イエスと、新約聖書を書いた使徒達は旧約聖書の預言者達とは異なる方法で終りの時を示している(Martin Wyngaarden 著 *The Future of The Kingdom in Prophecy and Fulfillment* を参照)。旧約聖書モデルを文字通りのもの、つまり規範的なものにしてしようとする現代の解釈者は黙示録をユダヤ教の書そのものにし、イエスとパウロの言葉の意味を無理やり霧のようにあいまいにしているのだ。新約聖

書の著者達は旧約聖書の予言をゆがめず、その究極の宇宙的意味を示している。イエスとパウロの終末論には組織的な論理体系はない。それらの目的は救いと牧会(霊的指導)である。

しかし、新約聖書の中にさえ緊張はない。終末論的出来事の体系化はない。驚くべきことに、多くの意味で黙示録はイエスの教え(マタイ24章、マルコ13章を参照)の代わりに旧約聖書の終りの時の暗示を用いているのだ。それはエゼキエルとダニエルとゼカリヤの始めた文学ジャンルに属するが、発展したのは聖書外典(ユダヤ教の黙示文学)の書かれた時期であった。これはヨハネが旧約聖書と新約聖書とを関連づける方法だったのかもしれない。それは人類の反逆と神の救いの御業の太古の様式を示しているのだ。しかし、黙示録に旧約聖書の用語と人物と出来事が登場するのに、それら(旧約聖書の用語と人物と出来事)が紀元1世紀のローマの価値基準に従って再解釈されていることは覚えておかなければならない。

第2の緊張

ただお一人の、霊なる、創造主で救い主なる神を聖書は強調している。それ自体の書かれた時代における旧約聖書の独自性はその一神教にある。周辺諸国は全て多神教徒であった。神がお一人でいらっしゃることは旧約聖書の啓示の中心であった(申命記6:4を参照)。創造は、神と、神のお姿に似せて神のようなものとして造られた人類(創世記1:26-27を参照)とが交わる目的のための段階であった。しかし人類は反逆し、神の愛と御主導と御目的に対して罪を犯した(創世記3章を参照)。神の愛と御目的はとても強く、墮落した人類を救うという神の確かな約束なのだ(創世記3:15を参照)。

一人の人、一つの家族、一つの国家をその他の人類との交わりのために神が用いられるときに緊張が生じる。神がアブラハムとユダヤ人を司祭の王国として選ばれたこと(出エジプト19:4-6を参照)によって奉仕ではなく高慢が、また受け入れではなく排斥が生じた。神がアブラハムを召されたのは全人類の祝福のためであった(創世記12:3を参照)。旧約聖書における選びは奉仕のためであって救いのためではないということは覚えておかなければならないし、また強調の必要がある。個人的な信仰と従順によらなければ全てのイスラエルは神に義とされず、また生まれながらの権利に厳密に基づいて永遠の救いを得られる(ヨハネ8:31-47を参照)ことはない。イスラエルは自分の使命を忘れ、義務を特権に、また奉仕を特別な地位に変えてしまったのだ。神は全ての人(事)のために一人の人(一つの事)を選ばれるのだ。

第3の緊張

条件付きの契約と無条件の契約の間には神学的緊張つまり逆説がある。神の救いの御目的と御計画が無条件のものであることは確かな事実である(創世記15:12-21を参照)。しかし、それには人の応答が常に条件となるのだ。

「もし...ならば...」という表現は旧約聖書にも新約聖書にも見られる。神は忠実なお方でいらっしゃるが、人類は不忠実である。この緊張は多くの誤解を生んできた。解釈においてはただ一

つの「ジレンマの角」、つまり神の御忠実さと人の努力、そして神の統治と人類の自由意志に注目してしまいがちである。どちらも聖書的であり必要である。

このことは終末論、つまり旧約聖書において神がイスラエルに対してなされた約束と関連がある。神がそのような約束をなされたのなら、そのことがその約束を確定する。読者の皆さん、そうでしょう。神は御自分のなされた約束を守られる。そのことには神の名声が関係する(エゼキエル 36 章 22～38 節を参照)。しかし、人類は神の祝福の道具なのだ。無条件の契約と条件付きの契約はイスラエルにおいてではなくキリストにおいて実を結ぶのだ(イザヤ 53 章を参照)。神の究極の御忠実さは、あなたの両親が誰かということにではなく、悔い改めて信じるであろう人々全ての救いにあるのだ。神の契約と約束の全てにとって重要なのはイスラエルではなくキリストなのだ。聖書に神学的な括弧があるなら、それは教会ではなくイスラエルである(ガラテヤ 3 章を参照)。

世を救うという使命は教会に与えられてきた(マタイ 28: 19-20、使徒行伝 1: 8 を参照)。これは神がユダヤ人を完全に拒んでこられたという意味ではない(ローマ 9～11 章を参照)。確かに、しかし独占的にではなく、終わりの時のイスラエル信徒には場所と目的がある(ゼカリヤ 12: 10)。

第4の緊張

聖書の正しい解釈においてジャンルは重要な要素である。教会は西洋の(ギリシャの)文化背景のもとに発展した。現代西洋文化のもとで育まれた文学類型に比べて東洋の文学は比喻や象徴的表現はるかに多い。聖書の預言(旧・新約聖書両方の)を解釈するためにそれらの歴史や文学類型を用いるという罪を信徒は犯してきた。各世代および各地の信徒達は黙示録を解釈するために東洋の文化、歴史、そして写実性を用いてきた。それらの信徒達は皆間違っているのだ。現代西洋文化が聖書の預言の中心だと考えるのは傲慢である。

神の啓示を受けた原著者達が書こうと選んでいるジャンルは読者が読もうと選んでいるジャンルとは文字通り対照的である。黙示録は歴史物語ではない。手紙(1～3章)と預言を組み合わせた、概して黙示文学といえる書である。原著者達が書こうと意図したこと以上のことを聖書から読み取ろうとすることは、その(原著者達が書こうと意図したこと)の一部を無視することと同じく間違っているのだ。傲慢な態度での解釈、あるいは教義に固執した解釈は黙示録を解釈するうえで極めて不適切である。

聖書の適正な解釈が合意に至ったことは教会では一度もなかった。私は論理的(逆説的)に解釈する。私は聖書の特定の箇所ではなく全体に関心がある。聖書の東洋的な考え方は、互いに緊張をはらんだ2つの事柄の対(組)の形で真理を表す。私達(著者のアトリーの生まれ育ったアメリカおよびヨーロッパの人々)の西洋では真理に釣り合いをもたせようとするが、それは正しくないのではなく、真理にバランスをとったつもりでも実際にはそうならないだけなのだ。各世代の信徒への呼びかけの目的の変化に留意することで、黙示録の解釈における行き詰まりの少なくともいくつかは取り除くことができると私は思う。黙示録をその書かれた時代とその属するジャンルに即して解釈しなければならないことは多くの解釈者にとって明らかである。黙示録の歴史的な解

釈においては、最初の読者達が何を理解しそして理解できたかを読み取らなければならない。多くの意味で現代の解釈者達はこの書の象徴的事柄の多くが持つ意味を見失ってきた。黙示録の書かれた最も主な目的は迫害されている信徒達を励ますことである。黙示録は(旧約聖書の預言者達の書がそうであったように)神が歴史を支配されていることを示し、また歴史が予定された終わりの時、つまり裁きと祝福の時へと向かっていることを肯定的に記している。紀元1世紀のユダヤ教の黙示用語を用いて黙示録は神の愛と御臨在と御力と御統治とを肯定的に記しているのだ。

黙示録は各世代の信徒にこれらと同じような神学的機能を果たしている。黙示録は善と悪の普遍的闘争を描写している。紀元1世紀に書かれた原文を私達は目にすることができないが、それは力強く心地よい真理ではない。現代西洋の解釈者達が黙示録の記述を自分達の現行の歴史に無理やりあてはめようとすれば誤った解釈の様式が繰り返されることになるのだ。

反神的な指導者(Ⅱテサロニケ2章を参照)や文化の猛攻撃にさらされるとき、最後の世代の信徒にとっても黙示録の記述は(旧約聖書の中のイエスの御生涯に関する記述と同様に)驚くほどその通りとなりうることは確かにありえる。イエスの御言葉(マタイ24章、マルコ13章、ルカ24章を参照)およびパウロの言葉(Ⅱテサロニケ2章を参照)も歴史的に明らかとなるまで、黙示録の記述がこれらのように現実となることは誰にも分からない。想像も推測も教義主義も全て適切なことではない。黙示文学ではこの柔軟性が認められている。歴史物語を超えたお姿をお持ちで、そして象徴的でいらっしやることを神に感謝しよう。神は支配され、統治され、そして来られるのだ。

現代の多くの注解書ではこのジャンルのこの点が見落とされているのだ。ユダヤの黙示文学というあいまいで象徴的で劇的なジャンルに公平であるよりは、現代西洋の解釈者達はしばしば明確で論理的な神学体系を組み立てようとする。この現実を J. Howard Marshall 編 *New Testament Interpretation* の中の自分の記事「新約聖書解釈の試み」において Ralph P. Martin はよく言い表している。

「この書の劇的性質を認め、宗教的真理を表現する手段として言葉がどのように用いられているかを思い起こさない限り、我々は黙示録の理解において悲惨な誤りを犯し、この書(黙示録)を単なる文学上の韻文を集めたものであり、また空想および現実の歴史における出来事の記録と見なすという誤った解釈をすることになるだろう。後者(黙示録を空想および現実の出来事の記録と見なすこと)を試みようとするれば解釈上のあらゆる問題に出くわすことになる。また、さらに深刻なことには、そのことによって黙示録の本質的な意味が誤解され、キリストにある神の御統治とその御統治における力と愛との融合(5:5と6節「獅子は子羊である」を参照)という逆説的の真実を神話的韻文の形をとる言葉で劇的に主張した書としての、新約聖書中のこの書の大きい価値が見落とされることになる。」(235 ページ)

W. Randolph Tate は自著 *Biblical Interpretations* の中でこのように述べている。

「黙示文学、特にダニエル書と黙示録ほどに、とても熱心に読まれながらも読後に大きな失望感を抱かせるジャンルは聖書中において他にはない。このジャンルは文体と文章構造および書かれ

た目的が根本的に誤解されたために長い間甚だしく誤って解釈されていた。間もなく起ころうとしていることを明らかにしようとする記述があまりにも多いために、黙示録は未来への道路地図や未来予想図と見なされてきた。この見解の悲劇的な誤りは、黙示録の記述が著者の生きた時代よりも読者の生きている時代にあてはまると推定していることである。黙示文学(特に黙示録)についてのこの誤った考え方に基づく見解では、現行の出来事を用いて原典の象徴的事柄を解釈するための手がかりとしての暗号文であるかのように黙示書を扱う。… 解釈を行う際にまず認めなければならないことは、黙示文学が象徴主義を通してメッセージを伝えているということである。比喩的な象徴的事柄を文字通りに解釈することは解釈を誤ることにすぎない。問題は黙示録の中に記された出来事が歴史的事実であるかどうかということではない。それらの出来事は歴史的事実かもしれない。言い換えれば実際に起こったことかもしれないし、起こりえたことかもしれない。しかし著者はそれらの出来事を記して、現実の姿や元の姿を通してその意味を伝えているのだ。」(137 ページ)

Ryken と Wilhost と Longman III 世共編の *Dictionary of Biblical Imagery* には次のような記述がある。

「現代の読者はしばしばこのジャンルに困惑し、いらだっている。予期しない比喩的表現や現世離れした出来事は誇張されていて、多くの聖句とは調和しないように思われる。この文学を表面的に解釈しようとするれば、多くの読者は急いで『そのとき何が起ころうとしているのか』を見極めなければならない、黙示的なメッセージの意図を見失うことになる。」(35 ページ)

第5の緊張

神の国は現世にあり、また未来に実現することになっている。この神学的矛盾は終末論の観点から注目されている。旧約聖書に記されたイスラエルへの預言の全てが文字通り成就することを期待するなら、神の国の実現は概してイスラエルにとって地理的所有権と生来の神学的優位性を回復することになるのだ。これには、教会が秘かな喜びを抱いているという黙示録5章の記述とその後の章のイスラエルに関する記述が必要となるだろう。

しかし、神の国がキリストの最初の御臨在のときに存在したことに注目するなら、議論の中心はキリストの受肉、御生涯、お教え、死、そして復活となる。そこでは現在の救いが強調される。一部の人々へのキリストの千年にわたる御統治ではなく、キリストが全ての人々に救いをもたらされることによって神の国が来て、そして旧約聖書(の預言)が成就するのだ。

世にキリストが2回来られることが聖書に記されていることは確かに事実だが、それらの記述のどこが強調されているのか。旧約聖書の預言の多くはキリストの最初の御臨在、つまりメシアの王国の樹立(ダニエル2章を参照)を強調しているように私には思える。多くの意味でこれは神の永遠の御統治(ダニエル7章を参照)やキリストの千年にわたる御統治(黙示録20章を参照)と似ている。旧約聖書では神の永遠の御統治が強調されているが、その御統治はメシアの御業によってはっきりと示されている(I コリント 15: 26-27 を参照)。どちらが真実か、あるいはどちらも真実な

のかということではなく、どこが強調されているのかということが問題なのだ。一部の解釈者達がメシアの千年にわたる御統治に注目しすぎるようになったために、聖書中で父なる神の永遠の御統治が注目されていることを見落とすようになったことは言うておかなければならない。キリストの御統治は予備的な出来事である。世にキリストが2回来られることが旧約聖書には明記されていないのと同じように、メシアの一時的な御統治も明記されていないのだ。

イエスの説教とお教えの要点は神の国である。神の国は現世(の救いと奉仕の中)にあり、また未来に(普遍的で力あるものとして)ある。メシアの千年にわたる御統治(黙示録20章を参照)に注目するなら、黙示は予備的な事柄であり、究極的な事柄ではない(黙示録21~22章を参照)。メシアの一時的な御統治が必要な事柄であることは旧約聖書には明記されていない。事実、ダニエル7章に記されているメシアの御統治は永遠に続くことであり、千年間だけのことではない。

第6の緊張

イエスは間もなく、突然に、思いがけなく来られることになっている(マタイ 10: 23、24: 27 と 34 節と 44 節、マルコ 9: 1 と 13: 30 を参照)と多くの信徒は教えられてきている。しかし、そのことに関する限り全ての世代の信徒は考え方を誤っているのだ。イエスの再来が近づいていることは全ての世代の信徒に約束された大いなる希望であるが、現実にはイエスの再来を目撃するのはただ一つの世代(迫害された世代)である。イエスが明日来られるのだと思って信徒は生活しなければならないが、同時にイエスの再来がまだ先のことだと思って大宣教命令(マタイ 28: 19-20 を参照)を実行に移すための計画を立てなければならない。

福音書群(マルコ 13: 30、ルカ 17: 2 と 18: 8 を参照)およびテサロニケ人への手紙第一と第二の中には未来のイエスの再来(Parousia)に基づく文が見られる。最初に起こらなければならない歴史的出来事がいくつかある。

1. 世界規模の福音伝道(マタイ 24: 15、マルコ 13: 30 を参照)
2. 「罪の人」の啓示(マタイ 24: 15、II テサロニケ2章、黙示録を参照)
3. 大迫害(マタイ 24: 21 と 24 節、黙示録を参照)

これらには意図的なあいまいさが見られる(マタイ 24: 42-51、マルコ 13: 32-36 を参照)。毎日を人生最後の日と思って生活しながら、これからの福音伝道の働きを計画し、そのために自己訓練に励もう。

一貫性とバランス

終末論についての現代の解釈の諸見解には全て真実が半分しか含まれていないことを言うておかなければならない。それらの見解は一部の原文についてはよく説明し解釈している。問題は、一貫性とバランスにある。しばしば、既定の神学的骨組みを聖句で肉付けする一連の前提が存在する。論理的で時系列に沿った組織的な終末論を聖書は明らかにしていない。聖書のそのような姿は家族アルバムに似ている。貼られている写真は真実を写しているが、それらの写真は必ずし

も時系列と文脈に沿って論理的に並んではいない。写真の中にはアルバムから剥がれ落ちたものがあり、後の世代の家族員達には正しい貼り戻しの方法が分からない。黙示録の適正な解釈において重要なことは、文学ジャンルの選択において明らかとなった原著者の意図である。多くの解釈者は新約聖書の他のジャンルの解釈用具と方法とを黙示録の解釈にも適用しようとする。彼らはイエスとパウロの(お)教えから神学的構造を組み立てる代わりに旧約聖書に注目し、黙示録をその記述の実例と見なしている。

この注解書を不安を抱き動揺しながら書いていることを私は認めなければならない。不安と動揺の原因は黙示録 22: 18-19 ではなく、神の民の間に起こりそして起こり続けている、この書の解釈についての論争の激しさにある。私は神の啓示を大切に思っている。誰もが嘘をつくからこのことは真実なのだ(ローマ 3: 4 を参照)。教義書ではなく考えを喚起する書として、道路地図ではなく標識として、「主が言われるように」ということではなく「もし... なら... 」ということを書いた書としてこの注解書を用いてもらいたい。私は自身の拙さと偏見と神学的課題に直面するようになってきた。私は他の解釈者達が直面しているそれらの事柄をも見てきた。人々が見出せると期待している事柄を黙示録の中に見出しているのはほぼ間違いないようだ。このジャンルは自身を濫用されるようにしむけているのだ。しかし、このジャンル(黙示録)はある目的のために聖書中に存在している。黙示録が結論の「御言葉」として新約聖書の末尾に置かれているのは偶然ではない。黙示録には神から各々のそして全ての世代の神の子らへのメッセージが記されている。神は私達に御自分を理解してほしいとお思いなのだ。仲間割れをせずに手を取り合い集まろう。真理かもしれないことや真理だったかもしれないこと、あるいは真理でありうるのではなく、何が明らかで中心的な(重要な)ことかを認めよう。神は私達皆を助けてくださる方なのだ。

この余白を用いて、黙示録の解釈方法についてのあなた自身の仮定を挙げなさい。この書の解釈において私達は皆自分なりの偏見を持ち込んでいる。それらの偏見を明らかにすることで、それらの偏見が解釈に及ぼす影響を小さくして、教義への偏重を抑えることができる。

- 1.
 - 2.
 - 3.
 - 4.
- など

ヨハネの黙示録への導入 (他書の導入と同形式)

I. 緒言

- A. 大人になってからの神学者人生の大半において、聖書を信じる人々が文字通りに聖書を解釈している(確かに歴史物語についてはその通りである)ということを私は前提にしてきた。しかし、聖書を預言や詩や寓話(たとえ話)あるいは黙示文学として解釈することは、神の靈感によって書かれた書である聖書の要点を見失うことになるということが私にとってますます明らかとなってきている。聖書の適正な解釈において重要なことは文字通りの解釈ではなく著者の意図である。聖書からやみくもに情報を引き出そうとすること(教義の特殊化)は、神の靈感を受けた原著者の意図したことの一部を考慮せずに聖書を解釈することと同じように危険で誤解を招きやすいことである。聖書の適正な解釈においては、なるべく長い文脈、歴史的背景、御言葉自体に表わされた著者の意図、そして著者のジャンルの選択に注目すべきである。ジャンルは著者と読者の間に交わされる文学的な契約である。この重要な事柄を見落すことは確実に解釈を誤ることにつながるのだ。

黙示録は確かに真実の書であるが、歴史物語ではなく、文字通りに解釈されるべき書ではない。黙示録が朗読されるのを聞くだけで、このジャンル自体がこの点を声高々に主張しているのが分かる。これは、黙示録が神の靈感によって書かれた書ではないとか、真実の書ではないということではなく、黙示録が単に比喩的、暗号的、象徴的、暗喩的、そして想像的な書であるということの意味している。

- B. 黙示録は黙示文学というユダヤの独特な文学ジャンルの書である。緊張過多の時代においてこの書はしばしば、神が歴史を支配され、御自分の民に御自身を顕わされることになっているという確信を表現するために用いられた。この種の文学には次のような特徴がある。
1. 神の普遍的統治(一神教と決定論)の強調
 2. 善と悪の間の、そしてこの世と来るべき世の間の闘争(二元論)
 3. 秘密の暗号的な言葉(旧約聖書や聖書外典のユダヤの黙示文学では一般的)の使用
 4. 色、数字、動物、時に半人半獣の使用
 5. 幻や夢の形での仲介役の天使の使用。しかし通常は仲介役の天使を通して幻や夢を見せられる。
 6. 終わりの時(新しい世)に主に注目している。
 7. 終わりの時のメッセージを伝えるための、決まった一組の象徴的事柄(現実には存在しない)の使用
 8. この種の(文学)ジャンルの例
 - a. 旧約聖書

(1) イザヤ24～27章、56～66章

(2) エゼキエル37～48章

(3) ダニエル7～12章

(4) ヨエル 2: 28～3: 21

(5) ゼカリヤ1～6章、12～14章

b. 新約聖書

(1) マタイ24章、マルコ13章、ルカ21章、I コリント15章(ある意味で)

(2) II テサロニケ2章(多くの意味で)

(3) 黙示録(4～22章)

9. 聖書外典(D. S. Russell 著 *The Method and Message of Jewish Apocalyptic* の 37～38 ページより抜粋)

a. I エノク、II エノク(エノクの神秘)

b. 喜びの書

c. シビルの宣託Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ

d. 十二家父長の契約

e. ソロモンの箴言

f. モーセの昇天

g. イザヤの殉教

h. モーセの黙示録(アダムとエバの生涯)

i. アブラハムの黙示録

j. アブラハムの契約

k. II エスドラス(IV エスドラス)

l. バルクⅡ、Ⅲ

C. これらの黙示文学作品は口頭で発表されることはなかった。これらは高度な文章構造を持つ文学作品である。文章構造は適正な解釈において重要である。黙示録の著者は7つの封印と7つのラッパと7つの鉢で文章構造を分けるようにしている。各々の文章構造のサイクルごとに裁きが増大する。封印のサイクルでは4分の1が、ラッパのサイクルでは3分の1が、鉢のサイクルでは全てが破壊される。各サイクルの終わりにキリストが再来される。封印のサイクルでは 6: 12-17 に、ラッパのサイクルでは 11: 15-18 に、鉢のサイクルでは 19: 1-21 にキリストの再来が記されている。このことは黙示録の記述が時系列順に並んでいないこと、そして旧約聖書における3つの相次ぐ暴力による裁きと同じ時間の長さを持つことを予見したいくつかの劇的な出来事であることを示している。

黙示録には序文と結語および7つの文章区分がある。

1. 1: 1-8(序文)

2. 1: 9～3: 22

3. 4: 1～8: 1
4. 8: 2～11: 19
5. 12: 1～14: 20
6. 15: 1～16: 21
7. 17: 1～19: 21
8. 20: 1～22: 5
9. 22: 6-21(結語)

7つの教会、7つの封印、7つのラツパ、7つの鉢という表現に見られるように、数字「7」がこの書の文章構造において大きな役割を果たしていることは明らかである。「7」の他の例としては次のような事柄がある。

1. 7つの燭台、1: 12
2. 神の7つの霊、1: 4、3: 1、4: 5、5: 6
3. 7つの星、1: 20、2:1
4. 7つの雷、10: 3
5. 7つの幸福、1: 3、14: 13、16: 15、19: 9
6. 7人の王、17: 10
7. 7つの災い、21: 9
8. 数字「7」と動物との関連
 - a. 7つの角... 7つの目、5: 6
 - b. 7つの頭... 7つの冠、12: 3、13: 1
 - c. 胸に7つの頭をもつ女、17: 3と7節と9節
 - d. 7つの丘に座っている女、17: 9

D. この書の解釈は神学的偏見を最も受けやすい。あいまいな細部の記述の解釈において、人の立てた前提は根拠となりうる。これらの神学的前提は大小様々の役割を果たしている。

1. 象徴的出来事の起源
 - a. 旧約聖書における暗示
 - (1)創造、人類の堕落、大洪水、エジプト脱出、エルサレム回復のような、旧約聖書中の主題
 - (2)預言者達からの数百の暗示(大半は引用ではない)
 - b. 聖書外典であるユダヤの文学(エノク書、バルク書、シビルの神託、II エスドラス)
 - c. 紀元1世紀のギリシャ・ローマ世界
 - d. 古代近東の宇宙論的な創造に関する記述(特に黙示録12章)
2. この書の時間枠
 - a. 紀元1世紀
 - b. 全ての世紀

- c. 最後の世代
3. 組織神学に基づく時間枠
- a. キリストの千年統治
 - b. キリストの千年統治後
 - c. キリストの千年統治以前

- d. 天啓法(神の定め・摂理)による、キリストの千年統治以前

聖書解釈の多様性(様々な解釈方法)と好ましくない教義主義([神の御心は]全て知られているという態度)とを考慮して、聖書をどのように解釈すべきだろうか。まず、現代西洋の信徒達がこのジャンルを理解していないことと、紀元1世紀の信徒達がすぐには理解できなかったであろう歴史的な暗示に気付いていないことを認めよう。次に、全ての世代の信徒達が自分達の個人的な歴史背景に黙示録を無理やり当てはめてきたことで皆間違いを犯してきたことを認めよう。そして、神学体系を読み取る前に聖書を熟読しよう。各々の幻および宣託の文脈を捜し出し、一つの叙述文の中の中心真理を述べてみよう。中心真理は全ての世代の信徒達にとって同じであるはずのものであり、一方で黙示録の記述が誰に特定されたものであるかは第一世代および最終世代の信徒達だけにとって価値があると思われる。黙示録の記述は価値あるものかもしれないが、それらの書かれた目的を明らかにすることになるのは神学ではなく歴史である。さらに、この書が主に、未信徒からの迫害のただ中にある信徒への慰めおよび神に忠実であるようにという励ましの言葉となっていることを覚えておこう。この書は全ての世代の信徒達の好奇心に応えることや終わりの時に起こることの詳細な計画を大まかに述べることを意図して書かれてはいない。最後に、墮落した人の世と神の御国との間の軋轢(あつれき。衝突、対立、矛盾)をこの書は明記している。黙示録はまず世が勝っている(カルバリー[におけるイエス・キリストの磔刑]のように)ことを明らかにするだろう。しかし、待つてほしい。神は尊厳ある方でいらっしやって、歴史と生死とを支配されている。神の民は神にあって勝利しているのだ。

- E. 解釈が困難であいまいであるにもかかわらず、この書には一つのメッセージ、つまり全ての世代の神の民に対する神からの啓示の言葉が記されている。特別な労力が必要であるとしてもこの独特な書を研究する価値はある。新約聖書の正典におけるこの書の(伝道)戦略上の立場はこの書の究極のメッセージを物語っている。黙示録についての自身の簡易注解書の中で Alan Johnson はこのように述べている「確かに、福音書群を別にすれば、聖書の至る所に見られる、キリストの教義と弟子としての心得に関する最も深淵で感動的な教えが黙示文学には記されていると言ってよい。キリストよりも預言にばかり注目している者たちの熱狂ぶりも解釈上の論点の多様性も、この不思議な書の中にあるキリストの真理を私達が追い求めるうえで妨げとはなりえない」(9 ページ)。

黙示録の中のこれらの御言葉が真に、御自分の教会に対するイエスの最後の御言葉であることを覚えておこう。現代の教会は敢えてそれらを見向きを無視あるいは過小評価しないようにして

いるのだ。これらの御言葉は、神の尊厳(一神教)と悪しき者の現実(限定二元論)と相次ぐ墮落の結果(人類の反逆)および人類に対する神の救いの約束(無条件の契約。創世記3章15節と12:1-3、出エジプト19:5-6、ヨハネ3:16、Ⅱコリント5:21を参照)の観点から、信徒に迫害と苦難に備えることを勧めるために書かれたものなのである。

Ⅱ. 著者

A. 使徒ヨハネが著者であることの内的証拠

1. 著者が4回もヨハネと自称している(1:1と4節と9節、22:8を参照)
2. ヨハネは別の名前でも自称している
 - a. 僕[しもべ](1:1、22:6を参照)
 - b. 兄弟であり、苦難を共にする者(1:9を参照)
 - c. 預言者(22:9を参照)。自著を預言の書と呼んでいる(1:3、22:7と10節と18節と19節を参照)

B. 初期の信徒である著者達による、使徒ヨハネが著者であることの外的証拠

1. ゼベダイの子である使徒ヨハネ
 - a. 殉教者ユスティヌス著 *Dialogue with Trypho* (ローマで紀元250年に書かれた)の81章
 - b. イレネウス著 *Against Heresies* (リヨン[フランス]で書かれた)の第4巻14:2、17:6、21:3、第5巻16:1、28:2、30:3、34:6、35:2
 - c. テルトウリアヌス著 *Against Praxeas* (アフリカ北部で書かれた)の27章
 - d. オリゲネスの著書(いずれもアレキサンドリアで書かれた)
 - (1) *On the Soul* 第50巻8:1
 - (2) *Against Marcion* 第2巻5章
 - (3) *Against Heretics* 第3巻14章と25章
 - (4) *Against Celsus* 第6巻6章と32章、第8巻17章
 - e. ムラトリー正典(ローマで紀元180~200年に編纂)
2. 他の候補
 - a. ヨハネ・マルコ

この説を最初に提唱したのはアレキサンドリアの主教ディオニュシウス(紀元247~264年在任)であった。ディオニュシウスは黙示録の著者が使徒ヨハネであるという説を否定したが、それでも黙示録を正典と認めた。彼はその説の却下の根拠を使徒ヨハネの他の著書との語彙および文体の相異とした。カイザリアのエウセビウスはこのディオニュシウスの説を支持した。
 - b. 長老ヨハネ

この説はエウセビウスの著書の中のパピアスの著書からの引用による。しかし、パ

ピアスの著書からの引用では多分もう一人の著書の存在を主張する代わりに使徒ヨハネに対してこの称号が用いられたと考えられる。

c. 洗礼者ヨハネ

(後に編集が加えられたが)この説は J. Massyngberde Ford が Anchor Bible Commentary の中で提唱した。その説の主な根拠は洗礼者ヨハネが「子羊」をイエスを指して用いたことであった。この称号が他書で見られるのは黙示録だけである。

- C. 使徒ヨハネが著者であることについての疑念を最初に述べたのはアレキサンドリアの主教ディオニュシウス(紀元 247~264 年在任)であった(ディオニュシウスの著書は紛失しているが、彼の説に同意したカイザリアのエウセビウスはその説を引用した)が、その根拠は次のようなことであった。
1. 自分の書いた福音書と書簡群で使徒ヨハネは自らをヨハネと自称していないが、黙示録では自らをヨハネと自称している。
 2. 黙示録の文章構造はヨハネの福音書およびヨハネの手紙第一~第三のものとは異なる。
 3. 黙示録の中の語彙はヨハネの福音書およびヨハネの手紙第一~第三のものとは異なる。
 4. 黙示録の文法様式はヨハネの福音書およびヨハネの手紙第一~第三のものより質が劣る。
- D. 現代の学者による、使徒ヨハネが著者であることについてのおそらく最も痛烈な批判は、R. H. Charles 著 *Saint John* 第1巻の 34 ページ以降の記述だろう。
- E. 現代の学者の大多数は新約聖書の中の多くの書の著者についての伝統的な説を却下してきた。黙示録に関するこの傾向の良い例は、有名なカトリックのヨハネ研究者である Raymond E. Brown だろう。Anchor Bible Commentary シリーズの導入部で彼はこのように述べている(「黙示録は)ゼベダイの子ヨハネでもなく、ヨハネの福音書およびヨハネの使徒書簡群の著者でもない、ヨハネという名のユダヤ人信徒の預言者によって書かれた」(774 ページ)。
- F. 多くの意味で黙示録の著者は明らかではない。黙示録と使徒ヨハネの他の著書との間には驚くべき共通点と相違点がある。この書の理解において重要なことは著書が人ではなく神だということである。黙示録の著者は自身を神の啓示を受けた預言者だと信じていた(1 章 3 節、22: 7 と 10 節と 18 節と 19 節を参照)。

III. 書かれた年代

- A. これは明らかに、著者が誰であるかということと総合的に関連がある。
- B. 書かれたと思われる年代

1. 迫害に関する内的証拠と合っていることから、伝統的にはドミトリアヌス帝の治世(紀元 81～96 年)に書かれたとされている。
 - a. イレネウス著 *Against Heresies* の第5巻 30: 3(エウセビウスが引用)「それ(この迫害)は大昔に見られたものではなく、ほぼ我々の世代に、つまりドミトリアヌス帝の治世の末期に見られたものである。」
 - b. アレキサンドリアのクレメンス
 - c. アレキサンドリアのオリゲネス
 - d. カイザリアのエウセビウス著 *Church History* の第3巻 23: 1
 - e. ビクトリヌス著 *Apocalypse* の第10巻11章
 - f. Jerome
2. 紀元3世紀の著述家エピファニウスの著書 *Haer* の 51: 12 と 31 節によれば、ヨハネが黙示録を書いたのはクラウディウス帝の治世(紀元 41～54 年)中のパトモス(の監獄)からの釈放後であった。
3. ネロ帝の治世(紀元 54～68 年)に書かれたという説もある。その根拠は
 - a. 皇帝崇拝に基づく迫害が背景にあったことが明らかである。
 - b. 皇帝ネロの名をヘブル語で書くと獣の数字666に等しくなる。

IV. 宛先

- A. 1: 4 から、黙示録の本来の宛先は、アジアにあったローマ帝国の属州の7つの教会であったことは明らかである。これらの教会が宛先になっていることから、この手紙を配達した人が辿った道程が分かる。
- B. 黙示録のメッセージは、墮落した世の社会から迫害されている全ての教会と信徒と特別な関連がある。
- C. 新約聖書の正典の結語的な書として、この書は全ての世代の全ての信徒への究極のメッセージとなっている。

V. 書かれた事情

- A. この書が書かれた背景には、ローマ帝国におけるユダヤ教の法的保護をめぐる地域教会の分裂に起因する迫害があった。公式記録によれば、この分裂はヤムニア出身のユダヤ教指導者達が地域の礼拝堂にナザレのイエスを呪うことを命じる宣誓文を発表した紀元 70 年頃に起こった。
- B. ローマ帝国の公式記録によれば、ネロ帝の治世(紀元 54～68 年)からドミトリアヌス帝の治世(紀元 81～96 年)にかけて皇帝崇拝は教会と甚だしく対立するようになった。しかし、全帝国規模の迫害の公式記録はない。明らかに黙示録はローマ帝国東部の属州において地域的な皇帝崇拝が盛んであったことを反映している(「聖書考古学批評」1993 年5月

・6月号 29～37 ページを参照)。

VI. 統語法

- A. 黙示録のギリシャ語原典には多くの文法上の問題がある。
- B. これらの問題の原因は次のようなことが考えられる。
 - 1. ヨハネのアラム的思考様式
 - 2. パトモスにはヨハネの代筆をしてくれる書記がいなかった。
 - 3. 幻の激しい続発
 - 4. 意図的な(心理)効果
 - 5. このジャンル(黙示文学)が非常に比喩的であること。
- C. 同様の文法上の特異性がユダヤの他の黙示書に見られる。

VII. 正典性

- A. 黙示録は東方教会において当初は正典と認められなかった。そのため、ペシッタ聖書(紀元5世紀編纂のシリア語聖書)には収録されていない。
- B. 紀元3世紀末にアレキサンドリアのディオニュシウスが、その後紀元4世紀初頭にエウセビウスが、黙示録の著者は使徒ヨハネではないと言った。エウセビウスは黙示録を「(正典承認の)議論中の」書の一つに挙げながらも自ら編纂した正典リストには載せた(*Ecclesiastical History* 第3巻 24: 18 と 25: 4 と 39: 6 を参照)。
- C. ラオデキアの会議(紀元 360 年頃開催)で黙示録は正典リストから除外された。Jerome は黙示録を正典と認めなかったが、カルタゴの会議(紀元 397 年開催)では黙示録は正典リストに加えられた。西方教会がヘブル人への手紙を正典と認めたことに妥協して東方教会は黙示録を正典と認めることにした。
- D. 黙示録をキリスト教の正典と認める過程において聖霊が歴史的手順を導かれたというのは信徒の立てた仮説であることを私達は認めるべきである。
- E. プロテスタント運動(宗教改革)における2人の主要な神学者は黙示録のキリスト教の教義上の立場を否定した。
 - 1. マルティン・ルターは黙示録を預言書とも使徒の著書とも呼ばず、黙示録が神の啓示による書であることを根本から否定した。
 - 2. 黙示録以外の新約聖書の各書の注解書を書いたジャン・カルヴァンは黙示録が神の啓示による書であることを根本から否定した。

VIII. 解釈の歴史的理論

- A. 周知のように黙示録は解釈が難しい。従って、教義主義に則った解釈はふさわしくない。
- B. 象徴的事柄は

1. 旧約聖書の中の黙示的な文章
 - a. ダニエル書
 - b. エゼキエル書
 - c. ゼカリア書
 - d. イザヤ書
 2. 聖書外典とされているユダヤの黙示文学
 3. 紀元1世紀のギリシャ・ローマ世界の歴史背景(特に黙示録17章)
 4. 古代近東の創造神話(特に黙示録12章)
- C. 一般に4つの大きな解釈の流派がある。
1. 懐古主義者

このグループは主につまり排他的に黙示録を紀元1世紀のアジアにあったローマ帝国の属州の諸教会と関連づけて見ている。彼らによれば黙示録の全ての記述と預言は紀元1世紀に成就した。
 2. 歴史主義者

このグループは黙示録を歴史(主に西洋文明の歴史、またある意味でローマカトリック教会の歴史)の回想書として見ている。2・3章に登場する7つの教会への手紙はしばしばある時期を描写するのに用いられる。これらの手紙が同時期に発信されたという見解もあれば時系列順に発信されたという見解もある。
 3. 未来主義者

このグループは黙示録を、文字通りにそして歴史的に成就することになっている Parousia(キリストの再来)の直前に起こる出来事を述べた書として見ている。
 4. 理想主義者

このグループは黙示録を、歴史的な重要性のない善と悪との間の闘争を総合的に象徴する書として見ている。

これらの説には全てある程度の正当性があるが、ジャンルと比喩的表現の選択におけるヨハネの意図的なあいまいさを見落としている。問題はどの説が正しいかということではなく、これらの説の間のバランスにあるのだ。

IX. この書の書かれた目的

- A. 黙示録の書かれた目的は、歴史における神の尊厳と、神にあって万物が最高のものになるという約束とを示すことである。(神に対して)忠実であるということは、この墮落した世の社会における迫害と攻撃のただ中において信仰と希望を持ち続けるということである。この書で主に述べられているのは紀元1世紀および全ての世紀における信徒への迫害と信徒の忠実さである。現在を作り変える努力の結果としての未来を預言者が語っているということを覚えておこう。黙示録はこの世がどのように終わることになっているかだけではなく

(新しい)世がどのように続いていくのかについても述べている。*The Expositors Bible*

Commentary 第1巻に寄稿した自分の記事「聖書の終末論」の中で Robert L. Sancy はこのように述べている「聖書の預言者達の主な関心事は未来の出来事の起こる時期と時系列ではなかった。預言者達にとって重要なことは自分達と同時代の人々の霊的状态であり、終わりの時に神が不義の裁きと信仰ある人々の祝福のために来られることは現代においてそれが倫理的に強調されるように挿入された事柄である」(104 ページ)。

B. 黙示録の書かれた一般的な目的は TEV 聖書と NJB 聖書の短い緒言の中によくまとめられている。

1. TEV 聖書の 1122 ページ「ヨハネの黙示録は、主イエス・キリストへの信仰のゆえに信徒達が迫害されている時期に書かれた。著者の主な関心は読者に希望と励ましを与えること、そして苦難と迫害の時にも信仰と希望を持ち続けるように勧めることである。」

2. NJB 聖書の 1416 ページ「聖書はこの書の希望のメッセージと数多くの象徴的事柄で締めくくられている。希望のメッセージとは、信徒達をさいなむ試練からの救いの幻であり、輝かしい未来が来るという約束である。聖書全体に多用されている比喩的事柄を用いてそのメッセージは表現されているが、そのことによって旧約聖書に慣れ親しんだ読者は全ての特徴ある事物、つまり動物や色や数字などを思い出し、それらから多くの言外の意味を読みとることができる。大多数の人々による礼拝行為が本来象徴している事柄と新しい聖なる都市においてメシアが栄光をもって君臨されるという最後の幻は十分なほどに明らかであるが、この意味で黙示録は来たるべき出来事の秘密で暗示的な啓示である。ダニエル書以前のユダヤの書には、迫害されている神の民を最終的な救いと勝利があるという安心を与えて励ますという伝統があった。」

C. 贖いの主題を第一に考えることは解釈者にとって重要なことである。

1. 神はキリストを通して個人と集団と宇宙に救いをもたらされている。

2. 神の贖いは霊的で実体的である。教会は救われているが安全ではないのだ。いつの日か安全になることになっているのだ。

3. 墮落した反抗的で自己中心的な人類を今も神は愛しておられる。封印とラツパによる神のお怒りは贖いのためである(9: 20-21、14: 6-7、16: 9 と 11 節、21: 7、22: 17 を参照)。

4. 墮落した人類だけでなく墮落した被造物をも神は回復される。あらゆる程度の悪は取り除かれることになっているのだ。

D. キリストの再来に際して起こる出来事の時系列表やキリストの再来の時期や様式を記した書としてこの書を見てはいけない。この書はしばしば西洋の歴史の「神秘」として解釈されてきた。各々の世代の人々は自分達の歴史を無理やり黙示的な象徴ととらえてきた。そうする限りにおいて全ての人々が誤りを犯してきたのだ。

これらの預言の詳細は、反キリストのもとで苦しむ最終世代の信徒達にとって(今よりも)はるかに明らかにされることになっている。文字通りの解釈によってこの書は無視され

たり(カルヴァンによる)軽視されたり(ルターによる。ルターは「使徒の書でもなく預言の書でもない書」とみなした)過度に強調されたり(千年統治論者達による)した。

X. ボブの解釈の鍵

- A. ユダヤ教の背景を考慮する必要がある
1. 旧約聖書の黙示的ジャンルは象徴的事柄の多い文学のタイプである。
 2. 数多くの暗示が旧約聖書から引用されている(黙示録の404の節のうち275の節に旧約聖書から引用された暗示が含まれている)。これらの象徴的事柄の持つ意味は紀元1世紀のローマの状況を考慮して解釈されてきた。
 3. 預言による予告では現在の出来事が終わりの時の出来事を予告するのに用いられる。しばしばこれらの出来事の紀元1世紀における歴史的成就是究極的な終わりの時における歴史的成就を指している。
- B. この書全体の文章構造から、著者がこの書を書いた目的を知ることができる。
1. 封印、ラツパ、そして鉢は同じ時期を網羅している。黙示録は連続的行為で描かれるドラマである。
 2. メシアの一時的な御統治は父なる神の永遠の御統治の準備である(I コリント 15 章 26~28 節を参照)。天の御国は地上の王国を超越しているのだ。
- C. この書のいかなる解釈においても歴史的な事柄を考慮しなければならない。
1. (ローマ帝国の)皇帝崇拝の存在
 2. (ローマ帝国の)東部の諸属州における地域的な迫害
 3. ある事柄が決して述べていないことを聖書は述べることはできない。黙示録の解釈は第一にヨハネの生きた時代に関連したものでなければならない。その解釈には数多くの成就した出来事と適用が含まれるかもしれないが、それらは原典と紀元1世紀という時代に基づくものでなければならない。
- D. 私達の文化的・言語学的・実存主義的背景のために、黙示録の中にあるいくつかの意味不明の言葉の意味は分からないままとされてきた。多分、終わりの時の出来事自体はこれらの象徴的事柄の適正な解釈に光を投げかけることになるだろう。この黙示的預言の記述の全てを無理やり解釈しようとしてはいけない。現代の解釈者はこれらの幻の中にある主な真理を見出すように努めなければならない。
- E. 解釈上重要な事柄のいくつかを要約しよう。
1. 象徴的事柄の歴史的起源
 - a. 旧約聖書の主題
 - b. 旧約聖書の暗示
 - c. 聖書外典の黙示文学
 - d. 紀元1世紀のギリシャ・ローマ世界の状況

2. 著者による象徴的事柄の定義方法

- a. 導き手の天使達との会話
- b. 天の合唱隊の賛美歌
- c. 著者自身がそれらの象徴的事柄の意味について述べている。

3. この書の文章構造(特に封印とラッパと鉢に関する記述の間の言い換え)

F. 参考文献

1. 黙示録の注解で私が気に入っているのは George Eldon Ladd と Alan F. Johnson の書いたものである。両者の見解は一致していない。神に忠実で、正規の教育を受けた、誠意あるこの2人の学者の意見の相違があまりにも甚しいので、注解書に書かれているのは警告の言葉だと言ってよい。Zondervan 社刊の Alan F. Johnson の *Commentary on Revelation* の中の言葉を引用しよう。

「4: 1 から黙示録の最後の節までに巧みに用いられている比喩的表現と幻、そしてこれら(比喩的表現と幻)がどのように1~3章と関連しているかを見る限り、注解者達のこれらの章についての見解が大きく異なっていることは驚くにあたらない。問題の一つは解釈の問題である。つまりそれらの比喩的表現と幻が何を意味しているかということである。もう一つの問題は時系列の問題である。つまりこれらの事柄がいつ起こったかということである。さらに、ヨハネは旧約聖書から正確に引用した事物について解釈を行ったのか、それともこれらの事物を自由に再解釈したのかという疑問も浮かぶ。何が象徴的で何がありのままの事柄なのか。それらの問いの答えは解釈者の解釈方法によって決まることになるだろう。これらの問いの中で教義から答えを出せるものは少ないので、黙示のさらなる意味を知るための自由な議論を聖霊が導いてくださることを期待して様々な解釈を行ってゆく必要がある。」(69 ページ)

2. 黙示録と旧約聖書の関係についての一般的な入門書として、私は John P. Milton の *Prophecy Interpreted* と John Bright の *The Authority of the Old Testament* を勧める。黙示録とパウロの関係についての十分な議論を記した書としては、私は James S. Stewart の *A Man In Christ* を勧める。

X I . 用語と聖句の早見リスト

1. 「すぐにも起こるはずのこと」、1: 1 と 3 節
2. 「雲に乗って来られる」、1: 7
3. アーメン、1: 7
4. 「アルファであり、オメガである」、1: 8
5. 「口からは鋭い両刃の剣が出て」、1: 16
6. 「死と陰府(よみ)の鍵」、1: 18
7. 「あなたは初めの頃の愛から離れてしまった」、2: 4

8. 「勝利を得る者には」、2: 7
9. 「神の樂園にある命の木」、2: 7
10. 「サタンの集い」、2: 9 と 3: 9
11. 「第二の死」、2: 11
12. 「サタンの奥深い秘密」、2: 24
13. 「命の書」、3: 5
14. 「ダビデの鍵」、3: 7
15. 「新しいエルサレム」、3: 12
16. 「わたしは霊に満たされた」、4: 2
17. ガラスの海、4: 6
18. 巻物、5: 1
19. 七つの封印、5: 1
20. 「屠られたような小羊」、5: 6
21. 「七つの角と七つの目」、5: 6
22. 「大きな苦難」、7: 14
23. 「金の香炉」、8: 3
24. 「底なしの淵」、9: 2
25. ハレルヤ、19: 1
26. 「小羊の婚宴」、19: 9
27. 「神はお怒りになりぶどうの搾り桶を踏まれる」、19: 15
28. 「千年の間それ[竜]を縛っておき」、20: 2
29. 新しいエルサレム
30. 「輝く明けの明星」、21: 16

X II. 人物早見リスト

1. 「御自分の天使によってお伝えになった」、1: 1
2. ヨハネ、1: 2
3. 「七つの霊」、1: 4
4. 全能なる方、1: 8
5. 1: 12-16 で述べられているのは誰か。この記述はどこに由来するか。
6. ニコライ派の者たち、2: 6 と 15 節
7. イゼベル、2: 20
8. 長老たち、4: 4 と 10 節
9. ユダ族から出た獅子、5: 5
10. 「白い馬が現れ、それに乗っている者は弓を持っていた」、6: 2

11. 「殺された人々の霊を祭壇の下に」、6: 9
12. 「額に. . . 刻印を押して」、7: 3
13. 「大群衆」、7: 9
14. 「一つの星が天から」、9: 1
15. 「もう一人の力強い天使」、10: 1
16. 「二人の証人」、11: 3
17. 一人の女、12: 1
18. 「大きな赤い竜」、12: 3
19. 「男の子」、12: 5
20. 「海の中から上ってくる一匹の獣」、13: 1
21. 「地の中から上ってくるもう一匹の獣」、13: 11
22. バビロン、14: 8
23. 大淫婦、17: 1
24. 「白い馬とそれに乗っている方」、19: 11
25. ゴグとマゴグ、20: 8

XIII. 登場する地名の地図上の位置

1. パトモス、1: 9
2. エフェソス、1: 11
3. スミルナ、1: 11
4. ペルガモン、1: 11
5. ティアティラ、1: 11
6. サルデイス、1: 11
7. フィラデルフィア、1: 11
8. ラオディキア、1: 11
9. シオンの山、14: 1

XIV. ディスカッションのための質問

1. 黙示録はどの文学ジャンルに属するか。この書の特徴を挙げなさい。
2. 2章と3章に述べられている7つの教会はなぜ存在するのか。
3. なぜ地上の全ての部族はその方のために嘆き悲しむことになるのか(1: 7)。
4. 1章に出てくる7つの事物を全て挙げなさい。
5. イエスが教会の燭台を取りのけられることになっているとはどのような意味か(2: 5)。
6. 7つの教会のそれぞれに対するメッセージの中に共通して見られる事柄を挙げなさい。
7. 4～5章の背景になっていることは何か。

8. 7つの封印と7つのラッパと7つの鉢の関係は何か。
9. 6章に登場する7人の馬上の人とは誰か。この比喩的表現はどこに由来するか。
10. 14万4千人とは誰か。なぜユダヤの部族は不正確に挙げられているのか。
11. なぜ封印で4分の1の破壊、ラッパで3分の1の破壊、鉢で完全な破壊というように裁きが激しくなるのか。
12. 9: 13-19 で述べられている2億の騎兵とは誰か。
13. 12: 7-10 に記されている天の戦いについて述べなさい。
14. 獣が聖なる者たちに戦いを挑むことをなぜ神は許されたのか(13: 7)。
15. 獣はどのようにキリストを真似ているか。
16. 最初の復活に与ることになるのは誰か(2: 4-6)。第二の復活に与ることになるのは誰か。
17. 22: 3 の重要性とは何か。
18. 22: 5 はどのように 20: 4 と関連しているか。
19. 22: 18-19 をあなた自身の言葉で説明しなさい。
20. 黙示録の中心主題は何か。

補遺1 用語集

養子論 これはイエスと神性との関係についての古い考え方の一つである。この考え方の要旨は、イエスはあらゆる点で普通の人間であり、洗礼(マタイ3: 17、マルコ1: 11を参照)あるいは復活(ローマ1: 4を参照)の際に特別な意味で神の養子となられたということである。イエスはとても模範的な生活を送られたので、神は機会を見て(洗礼、復活)御自分の「御子」としてイエスを養子とされた(ローマ1: 4、ピリピ2: 9を参照)。これは初期教会と8世紀の少数派の意見であった。神が人となる(受肉)代わりにその逆のことが起こり、人が神となっているのだ。

神の御子でありすでにおられる神でいらっしゃるイエスが模範的な生活を送られたことに対してどのように賞賛されたかを言い表すことは難しい。もしイエスがすでに神でいらっしゃったなら、イエスはどのように賞賛されたのか。もしイエスがすでにおられる神としての栄光を受けられたなら、イエスはどのようにさらなる栄誉を受けられたのか。私達には理解が難しいが、父なる神は御自分の御意志の完全な成就という特別な意味でイエスに栄光を与えられたのである。

アレキサンドリア学派 この聖書解釈の方法は紀元2世紀にエジプトのアレキサンドリアで開発された。これはプラトンの弟子であったフィロの提唱した解釈の基本原則を用いている。これはしばしば寓話法と呼ばれる。これは宗教改革の時代まで教会内で影響力があった。その最も有力な擁護者は Origen とアウグスティヌスであった。Moises Silva 著 *Has The Church Mised The Bible?* (Academic 社が 1987 年刊)を見よ。

Alexandrinus エジプトのアレキサンドリアで発見された、この5世紀のギリシャ語原典は旧約聖書と聖書外典と新約聖書の大半から構成されている。これは現代の私達がギリシャ語の新約聖書の完全な書(マタイの福音書とヨハネの福音書とコリント人への手紙第二の一部を除く)の主な書として認めている書の一つである。この「A」と呼ばれる原典と「B」と呼ばれる原典(Vaticanus)の内容が一致する場合、これは多くの実例において大半の学者達から本物の原典とみなされる。

寓話 これは元々はアレキサンドリア学派のユダヤ教の中で生みだされ発展した聖書解釈の方法の一つである。この方法はアレキサンドリアのフィロによって普及した。この方法の主旨は聖書の歴史的背景と文脈を無視することによって読者の持つ文化あるいは哲学体系と聖句を関連づけることにある。この方法では各聖句の背後にある隠れた精神的意味が探られる。イエスがマタイ13章で、またパウロがガラテヤ4章で真理を伝えるために寓話を用いたことを認めなければならない。しかしこれ(真理を伝えるために寓話を用いたこと)は厳密には寓話の形ではなく予型論の形であった。

解釈辞典 これは新約聖書におけるギリシャ語のあらゆる形式を明らかにする研究道具の一種である。これはギリシャ語の形式と基本的定義をギリシャ語のアルファベット順に収録したものである。これは、隔行訳との組み合わせによって、ギリシャ語を母語としない信徒が新約聖書におけるギリシャ語の文法の形式と統語法の形式を解析できるようにしている。

聖句の類似 これは、聖書の全ての書が神の啓示によって書かれ、互いに矛盾せず相補っているという見解を表現するために用いられる成句である。この前提を認めることは聖書原典の解釈において並列文を用いる際の基礎的事柄である。

不明瞭さ これは文書中に2つ以上の意味がある場合または2つ以上の事柄が同時に示されている場合に生じる不確実さを指している。ヨハネが意図的に不明瞭さ(二重定義)を用いている可能性がある。

神人同形説 「人間に関する性質を持つ」という意味を表すので、この用語は神に関して私達が用いる宗教的な言葉を表現している。この用語は人類を意味するギリシャ語の用語に由来する。この用語は、私達が神に関する事柄をまるで人間に関する事柄であるかのように言い表す用語である。神は人間に関する身体的、社会的、心理学的用語の中に表現されている(創世記 3: 8、I 列王記 22: 19-23 を参照)。もちろんこれは単なる類似である。しかし、私達を指す、人間に関する用語以外に、神に関して用いるのに適した用語はない。従って、私達が神に関して知っている事柄は、真理ではあるが限られている。

アンテオケ学派 この聖書解釈の方法は紀元3世紀のシリアのアンテオケで開発され、エジプトのアレキサンドリアで開発された寓話をもとにする方法に対抗する方法であった。この方法の要旨は聖書の歴史的意味に注目することであった。この方法では聖書が普通の人間について書かれた文学と解釈される。この学派は、キリストが2つの御性質をお持ちである(ネストリウス主義)のか、それとも1つの御性質をお持ちである(一人の人間でいらっしゃるのとともにお一人の神でいらっしゃる)のかについての論争を生んだ。この学派はローマカトリック教会から異端とみなされ、ペルシアに追放されたが、学説はわずかに重要性を持っていた。その聖書解釈上の基本原理は後にプロテスタントの古典的宗教改革者達(ルターとカルヴァン)の聖書解釈の原理となった。

対句 これはヘブル語の韻文(詩)の行間の関係について述べるために用いられる3つの叙述用語のうちの一つである。これは互いに反対の意味を持つ詩の行に関連がある(箴言 10: 1 と 15: 1 を参照)。

黙示文学 これはユダヤの主な、多分独特でさえある文学ジャンルである。これはユダヤが外部

世界の勢力からの侵略と支配を受けた時代に用いられた、謎の意味不明なタイプの文学であった。この文学ではお一人の人間の姿をされた救いの神が世の出来事を創造されて支配され、そしてイスラエルは神から特別な関心を持たれ保護されているとみなされている。この文学は神の特別な御業を通した究極の勝利を約束している。

この文学には多くの意味不明な用語が見られるのでとても象徴的で空想的な印象がある。この文学ではしばしば色、数字、映像、夢、天使の仲介、秘密の暗号となる用語、あるいは善と悪との間の明確な二元論によって真理が表現される。この文学ジャンルの例は、旧約聖書ではエゼキエル書(36～48章)、ダニエル書(7～12章)、ゼカリヤ書、新約聖書ではマタイの福音書24章、マルコの福音書13章、テサロニケ人への手紙第二の2章、黙示録である。

護教論者(護教学) これは「法的弁論」を意味するギリシャ語の語幹に由来する。これは、クリスチャンの信仰についての証拠と合理的な議論とを探求する神学の中の特殊な教義である。

A priori これは用語「前提」と本質的に同意語である。これは、真理であると仮定された、予め受け入れられた定義や原理や立場からの理由づけと関連がある。これは試されたり解析されたりすることなく受け入れられる事柄である。

アリウス主義 アリウスは紀元3世紀から4世紀初頭にかけてエジプトのアレキサンドリアの教会で長老をつとめた人物であった。彼はイエスがすでにおられた方ではあるが神ではいっしょやらない(父なる神とは同一の方ではいっしょやらない)と主張したが、これは多分箴言 8: 22-31 に基づいた見解であろう。彼は紀元 318 年から長年にわたってアレキサンドリアの主(司)教と論争を繰り広げた。アリウス主義は東方教会の公的な見解となった。紀元 325 年のニケーア公会議ではアリウス主義が非難され、御子イエスの神との同一性と神性が主張された。

アリストテレス 古代ギリシャの哲学者の一人であり、プラトンの弟子であり、アレキサンダー大王の師であった。彼の影響は現代でさえ現代の科学の多くの分野に及んでいる。これは彼が観察と分類を通して知見を強調したからである。これは科学的方法の教義の一つである。

自筆 これは聖書の原本に対してつけられる名である。これらの原本、つまり手書きの原稿は全て失なわれている。写本の写本だけが現存している。これをもとにヘブル語訳やギリシャ語訳やその他の古代語訳聖書の異本の多くが書かれた。

Bezae これは紀元6世紀のギリシャ語とラテン語の原典である。この原典の分類上の名は「D」である。この原典には福音書群と使徒行伝と一般的な使徒書簡のいくつかが収録されている。この原典の特徴は書記の付け加えた書き込みが多いことである。この原典は、欽定訳以降に伝統的

に主な元本(翻訳のもとになる原典として用いられる聖書原典)として用いられているギリシャ語の原典「Textus Receptus」の元本となった。

偏見 これはある事柄あるいは見解に対する強い性向を表現するのに用いられる用語である。これは特定の事柄あるいは見解に関して公平性を保つことが不可能であるような心の態度である。これは偏った立場からの物の見方である。

聖書権威主義 この用語は非常に特別な意味で用いられている。これは原著者が自分の生きた時代の人々に語ったことの意味およびこの真理の私達の生きている時代への応用と定義されている。聖書権威主義は通常は聖書自体を私達の唯一の権威ある手引きと見る考え方と定義されている。しかし、現代の不適切な解釈を根拠として、私は聖書についてのそのような概念を、歴史的背景や文法構造に基づく教義によって解釈されるものとして限定的にとらえてきた。

正典 これは神の啓示によって書かれたと信じられている書を指して用いられる用語である。これは旧・新約聖書の両方を指している。

キリスト中心神学 これはイエスの中心性を表現するのに用いられる用語である。私はこの用語を、イエスは全ての聖なる者の主であるという概念と結びつけて考えている。旧約聖書はイエスがそのこと(イエスは全ての聖なる者の主であるということ)の成就であり最終目的でいらつしやることを指摘している(マタイ 5: 17-48)。

注解書 これは特殊な型の研究書である。これには聖書中の書の総合的な背景事項が記されている。従ってこれは聖書中の各書の意味することの説明を試みた書であるといえる。主に応用面について述べたものもあれば、より専門的に聖句を解説したものもある。これらの書は有用ではあるが、読者は自身の予備的研究を終えた後にこれらの書を読むべきである。その解説者の解釈は決して批判されることなしに受け入れられるべきではない。多くの場合、様々な神学的知見をもとにして数冊の注解書を比較することが有益となる。

コンコーダンス これは聖書研究の道具の一種である。これは旧・新約聖書中にある全ての用語のリストである。これは(1)特別な英語の用語の背後にあるヘブル語あるいはギリシャ語の用語の決定(2)同じヘブル語あるいはギリシャ語の用語が用いられている文の比較(3)同じ英語の用語に訳されている2つの相異なるヘブル語あるいはギリシャ語の用語が存在する箇所の検索(4)特定の書あるいは著者の特定の語の使用頻度の調査(5)読者が聖書中の聖句を見つける手助け(Walter Clark 著 *How to Use New Testament Greek Study Aids* の 54~55 ページ)に有用である。

死海文書 これは紀元 1947 年に死海付近で発見された、ヘブル語あるいはアラム語で書かれた一連の古代原典群である。それらの原典群は紀元1世紀のユダヤ教分派の經典であった。紀元 60 年代に古代ローマ帝国の支配による抑圧と暴動があったので、ユダヤ教分派の信徒はそれらの原典群を陶器の壺に入れて密閉し、洞窟や土中の穴に隠した。それらの原典群は紀元1世紀のパレスティナの歴史背景を理解するうえで有用であり、マソラ原典が少なくとも紀元前数世紀までさかのぼる限り非常に正確であると明言している。それらの原典群は「DSS」と略記されている。

演繹法 これは一般的原理を理由付けのために特別に利用する、論理展開つまり理由付けの方法である。これは、観察により明らかとなった特定の事柄(事実)から一般的な結論(理論)を導く科学的方法を反映する帰納法の反対である。

弁証法 これは互いに矛盾あるいは逆説という緊張関係にあると思われる2つの事柄について、その2つの逆説の両方の立場を含んだ統一的な見解を見出すための理由付けの方法である。聖書的教義の多くには弁証法的な2つの事柄の対、例えば予定運命と自由意志、安全と忍耐、信仰と行い、決断力と弟子の身分、クリスチャンの自由とクリスチャンの責任、がある。

ディアスポラ これはパレスティナ在住のユダヤ人が約束の地の地理的境界外に住む他のユダヤ人を指して用いているギリシャ語の術語(専門用語)である。

Dynamic equivalent これは聖書翻訳の理論の一つである。聖書翻訳は、ある英語の用語を必ずヘブル語あるいはギリシャ語の用語にあてはめるという「逐語」対応から、元の用語あるいは成句の意味をあまり考慮せずに思想のみを翻訳する「言い換え」へと続く一連の行為と見ることができる。これらの2つの理論の間にあるのが、本物の原典(の内容)を尊重しながらも現代の文法形式や熟語に則して翻訳するという「dynamic equivalent」である。これらの翻訳理論については Fee と Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の 35 ページと Robert Bratcher の *Introduction to the TEV* の中に十分な議論がある。

折衷主義 この用語は聖書批評との関連で用いられる。これは自筆の原典と内容の近い原典を様々なギリシャ語の原典から選び出す練習を指している。その選び出しの練習において、本物の原典つまり自筆の原典はいかなるグループのギリシャ語原典にも含まれないという考え方は除かれている。

聖書の自己解釈 これは聖書解釈とは反対のことである。聖書解釈が原著者の意図を「導き出す」ならば、この用語は部外者の思想あるいは意見を「導入する」ことを意味する。

語源学 これは語の本来の意味を確定しようと試みる用語研究の一分野である。これから語幹の意味や特別な用法は容易に明らかとなる。解釈においては語源よりむしろその語の現代における意味や用法が主に注目される。

聖書解釈 これはある特定の文章を解釈する練習を意味する術語(専門用語)である。これは歴史的背景や文脈や統語法や語の現代における意味をもとにして原著者の意図を理解するためにその文章が暗示する内容を「導き出す」ことを意味する。

ジャンル これは様々な文学のタイプを意味するフランス語の用語である。この用語の主な意味は様々な形をとる文章を共通の特徴を持つ範疇、例えば歴史物語、韻文(詩)、格言(ことわざ)、黙示文学、法律文書、に分類することである。

グノーシス主義 この異端説について私達が知っていることの多くは紀元2世紀に書かれた不可知論に関する書に由来している。しかし、その概念が始まったのは紀元1世紀(あるいはそれ以前)であった。

研究者の中には紀元2世紀の Valentius と Cerinthus のグノーシス主義の教義を(1)物と霊はどちらも永遠である(存在論的二元論)。物は悪であり、霊は善である。霊である神は悪い物の形成に直接関与することはできない(2)神と物の間にはエマンティオ[神からの流出物。eons。天使階層]がある。その最終つまり最下層のものは旧約聖書に見られる YHWH であり、それが宇宙(kosmos)を形造った(3)イエスは YHWH のようなエマンティオであるが、より大規模で、より真の神に近い。研究者の中にはイエスを最高位にある方だが神よりは下位で、受肉した神ではありえないとみなしている者もある(ヨハネ 1: 14 を参照)。イエスは霊的な幻影である[I ヨハネ 1: 1-3、4: 1-6 を参照](4)救いはイエスへの信仰を通してだけでなく、特別な人々だけが知る特別な知識を通して得られる。知識(パスワード)は天球を通るのに必要とされる。ユダヤの律法主義も神のもとへ近づくのに必要である、と述べている者もある。

グノーシス主義の偽教師達は2つの互いに対立する倫理体系を、つまり(1)ある人々にとっては、生活様式は救いと無関係である。それらの人々にとっては、救いと霊性は天球の天使階層(eons)を通して秘密の知識(パスワード)の中に要約される。(2)その他の人々にとっては、生活様式は救いに不可欠であると主張した。彼らは真の霊性の証拠としての禁欲生活を強調した。

聖書解釈学 これは聖書解釈の手助けとなる原理を意味する術語である。これは特別な指針と方法論の組み合わせである。聖書解釈学は通常2つの範疇、つまり一般原理と特殊原理に分かれる。これらは聖書中に見られる様々なタイプの文学に関連がある。各タイプ(ジャンル)の文学は独自の指針だけでなくいくつかの一般的仮定と解釈の手順も持っている。

強い批評 これは聖書中の特定の書の歴史的背景と文章構造に注目する聖書解釈の手順である。

熟語 この語は個々の用語の通常の意味とは無関係の特別な意味を持つ、種々の文化の中に見られる成句として用いられる。現代語の例としては「それはすごく良かった」とか「殺し文句ね」という表現がある。聖書にもこの種の成句が見られる。

啓示 これは神が人類に語られている概念に与えられる名である。その概念の全ては通常3つの用語(1)黙示—神は人類の歴史に働かれている(2)靈感—神は御自身の御業の正しい解釈とその御業の意味を特定の選ばれた人々に示され、人類のために記録するよう命じられている(3)啓示—神は御自身が姿を現されていることを人類が理解できるように御自身の霊を送ってくださっている。

帰納法 これは特定の事柄から全体的な事柄へと考えを進める論理学つまり理由付けの方法である。これは現代科学の実験的方法である。これはアリストテレスの研究方法の基礎である。

隔行訳 これは読者が自分にとって外国語である言語で書かれた聖書中の言葉の意味と構造を解析できるようにする研究道具の一種である。その聖書の元々の言語(読者にとって外国語である言語)の行のすぐ下に逐語レベルで英語訳の行が置かれている。この道具は「解釈辞典」と組み合わせるとヘブル語とギリシャ語の用語の形式と基本的定義を示すことができるようになる。

靈感 これは神が聖書の著者達に御自身の黙示を正確かつ明確に記録させることによって人類に語られる概念である。その概念の全ては通常3つの用語(1)黙示—神は人類の歴史に働かれている(2)靈感—神は御自身の御業の正しい解釈とその御業の意味を特定の選ばれた人々に示され、人類のために記録するよう命じられている(3)啓示—神は御自身が姿を現されていることを人類が理解できるように御自身の霊を送ってくださっている。

記述のための言語 これは旧約聖書に書かれている熟語と関連させて用いられる。これは物事の五感への現れ方を通して私達の生きる世界を表現している。これは科学的な表現ではなく、そのようなこと(科学的な表現)を意図したものではなかった。

律法主義 この立場では規則や儀式が過剰に強調される。これは神に受け入れられることを目的とした規則正しい行いに依存する傾向がある。これは聖なる神と罪深い人類との契約の重要な特質を軽視して行いを重視する傾向がある。

逐語法 これはアンテオケで始まった、原典を中心にして歴史的に聖書を解釈する方法の別名である。これは、解釈では比喩的な言葉が認められていながらも実際には人の言葉の通常によく知られた意味がもとになって解釈がなされていることを意味している。

文学ジャンル これは韻文(詩)や歴史物語のような、人が意志伝達的手段として用いる様々な方法を指している。文学タイプには全ての種類の文学に適用される一般原理に加えて各々独自の特別な聖書解釈の手順がある。

文学単位 これは聖書中の書の思想の大きな分かれ目を指している。これはいくつかの節や段落や章で構成され得る。これはそれ自体が中心的な主題を持つまとまりである。

軽い批評 「聖書批評」を見よ。

原典 この用語はギリシャ語の新約聖書の様々な写本と関連がある。通常それらは(1)それらが書かれている紙材[パピルス、皮]または(2)書体(全て大文字あるいは流状)によって様々なタイプに分類される。それは「MS」(単数形)あるいは「MSS」(複数形)と略記されている。

マソラ聖書 これは紀元9世紀の旧約聖書のヘブル語の原典であり、ユダヤ教の学者達によって編纂され、母音記号と行外の注記が付け加えられている。これは現代の英訳の旧約聖書の正典となっている。この原典はヘブル語の MSS、特に死海文書のイザヤ書によって歴史的に正典と断定された。これは「MT」と略記されている。

換喩 これはある事物の名を用いて関連する他の事物について述べる比喩的表現である。例えば「やかんが沸いている」は現実には「やかんの中の水が沸いている」ことを意味する。

ムラトリー断片 これは新約聖書の正典目録である。これは紀元 200 年以前にローマで書かれた。これはプロテスタントの新約聖書と同じく 27 の書から構成されている。これは、古代ローマ帝国領内の諸地域の教会が4世紀の教会大会議以前に「事実上」正典を定めていたことをはっきりと示している。

自然の啓示 これは神の人への自己顕示(御自身を顕わされること)の一種である。これには自然の秩序(ローマ 1: 19-20)と道徳意識(ローマ 2: 14-15)が関係する。これは詩篇 19: 1-6 とローマ 1~2章で述べられている。これは、神が聖書に、そして究極的にナザレのイエスに特別に御自身を顕わされる特別な啓示とは異なる。

この神学的概念はクリスチャンの科学者達の間で起こっている「古い地球」運動(例えば Hugh

Ross の著書)によって再び強調されている。彼らはこの概念を用いて、全ての真理は神の真理であると主張している。自然は神についての知識への開かれた扉である。それは特別な啓示(聖書)とは異なる。この概念によって現代科学において自然の秩序を研究することができるようになった。これは現代西洋科学の世界を立証する素晴らしい新たな機会であると思う。

ネストリウス主義 ネストリウスは紀元5世紀のコンスタンティノープルの総(大)司(主)教であった。彼はシリアのアンテオケで(聖職者としての)訓練を受け、イエスが一人の人間とお一人の神の2つの性質をお持ちであると認めていた。この見解は、イエスが1つの性質をお持ちとするアレキサンドリアの正説を逸脱したものであった。ネストリウスの主な関心はマリアに与えられた「神の母」という称号にあった。ネストリウスはアンテオケで(聖職者としての)訓練を受けたことをアレキサンドリアの Cyril から非難され、破門された。アンテオケが歴史的背景と文法事項と文脈を手がかりに聖書の解釈を行う中心地であったのに対して、アレキサンドリアは第4の要素(寓話)を手がかりに聖書の解釈を行う中心地であった。結局、ネストリウスは聖職を剥奪されて追放された。

原著者 これは聖書の本物の著者つまり作者を指している。

パピルス これはエジプトの筆記用具の一種である。川岸に生えている葦で出来ている。ギリシャ語の新約聖書の最古の原典はこれの上に書かれた。

並列文 これは、聖書の全ての書は神から与えられたものであり、従ってそれ(聖書)自身を最も良く解釈し、逆説的な事実群を調停するものであるという概念である。これは不明瞭な文の解釈を試みる際にも有用である。これはまた、解読中の原典上の最も明確な文および手がかりとなるその他の全ての聖句を見出すのにも有用である。

言い換え これは聖書翻訳の理論の一つの名である。聖書翻訳は、ある英語の用語を必ずヘブル語あるいはギリシャ語の用語にあてはめるという「逐語」対応から、元の用語あるいは成句の意味をあまり考慮せずに思想のみを翻訳する「言い換え」へと続く一連の行為と見ることができる。これらの2つの理論の間にあるのが、本物の原典(の内容)を尊重しながらも現代の文法形式や熟語に則して翻訳するという「dynamic equivalent」である。これらの翻訳理論については Fee と Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の 35 ページに十分な議論がある。

段落 これは散文中の解釈上の基本単位である。それには一つの中心的な考えとその発展とが見られる。その要旨に固執すれば多かれ少なかれ原著者の意図を見落としてしまうことになるだろう。

教区制 これは地域教会または地域文化の中に閉じ込められた偏見に関連がある。これは聖書的真理の文化を超えた性質あるいはその応用を認めない。

逆説 これは、一見矛盾しているように見え、互いに緊張状態にあるが、どちらも真実であるような事実群を指している。それらは互いに反対の立場から真実を述べることによって事実を構成している。聖書的真理の多くは逆説的な(弁証法的な)対によって表わされる。聖書的真理は単独の星ではなく、星々が描く模様によりつくられる星座である。

プラトン 古代ギリシャの哲学者の一人であった。彼の哲学はエジプトのアレキサンドリアの学者達を通して、そして後にはアウグスティヌスを通して初期教会に大きな影響を与えた。彼は地上の万物は幻想的であり、靈的原型を単に模倣したに過ぎないと断定(仮定)した。神学者達は後にプラトンの「イデア」を靈的王国と同一視した。

前提 これは私達がある事柄について予め成している理解を指している。しばしば私達は聖書自体を調べる前に物事に対して意見や判断を成してしまう。この傾向は偏見や *a priori* 的立場や仮定や予備的理解としても知られている。

聖句引用による解釈法 これはその文章単位中の前後の文脈やより長い文脈を考慮せずに聖書の一節を引用することによって聖書を解釈する練習である。これは聖書の一節から原著者の意図を排除する行為であり、通常は聖書の権威を主張しながらも個人的見解を裏付けようと試みることを指している。

ラビ主導のユダヤ教 このユダヤ人の生活様式はバビロン脱出(紀元前 586～538 年)で始まった。司祭達の影響力が大きく、また神殿が破壊されたので、地域のシナゴーク(礼拝堂)がユダヤ人の生活の中心となった。地域におけるこれらのユダヤ人の文化と交流と礼拝と聖書研究の中心地は国家の宗教生活の中心となった。イエスの時代にはこの「書記の宗教」は司祭の宗教の対極にあった。紀元 70 年のエルサレム陥落の時、パリサイ人を中心とする書記団の見解がユダヤ人の宗教生活の方向性を支配していた。その見解の特徴は口伝の伝統(タルムード)の中に説明されているようなトーラの実践的かつ法的な解釈にある。

黙示 これは神が人類に語られている概念に与えられる名である。その概念の全ては通常3つの用語(1)黙示—神は人類の歴史に働かれている(2)靈感—神は御自身の御業の正しい解釈とその御業の意味を特定の選ばれた人々に示され、人類のために記録するよう命じられている(3)啓示—神は御自身が姿を現されていることを人類が理解できるように御自身の霊を送ってくださっている。

セム語領域 これはある語に関連する意味の全てを指している。これはある語が様々な文脈中で表す、それぞれ異なった意味である。

セプトウアギンタ これはヘブル語の旧約聖書のギリシャ語訳本に与えられる名である。伝説によればこの原典はユダヤ教の学者 70 名がエジプトのアレキサンドリア図書館で 70 日間で編纂した。伝説にある出来事の年代は紀元前 250 年頃である(現実には完成までにおそらく 100 年以上を要したようである)。この訳本は(1)ヘブル語のマソラ原典との比較に必要な古代の原典として用いるにふさわしい(2)紀元前3世紀および2世紀にユダヤ人がどのように旧約聖書を解釈していたかを知る手がかりとなる(3)イエスの拒絶の前にユダヤ人がメシアについてどのような理解をしていたかを知る手がかりとなる、という理由で重要である。この原典は「LXX」と略記されている。

Sinaiticus これは紀元4世紀のギリシャ語の原典である。これはドイツの学者 Tischendorf によってシナイ山の伝説の場所 Jebel Musa の聖 Catherine 修道院で発見された。この原典は「アレフ[\aleph]と呼ばれるヘブル語のアルファベットの第一の文字によって分類上の名が付けられている。この原典には旧・新約聖書が全て収録されている。この原典は私達が最古のアンシアル MSS とみなしている原典の一つである。

霊化 この用語は文の歴史的ならびに文学的内容を取り除いて他の判断基準に基づいてその文を解釈するという目的で寓話(たとえ話)を用いることと同じ意味を持つ。

同義語 これは(現実には意味が互いに全く同じセム語の2つの用語はないが)意味が互いに全く同じかまたはとてもよく似ている用語群を指している。それらは互いにとても深い関係があるので一つの文の中で意味を損なうことなく置き換えが可能である。これはヘブル語の詩の対句法の3つの様式の一つにおいても用いられている。この意味でこれは詩において同じ真理を表す2つの行を指している(詩篇 103: 3 を参照)。

統語法 これは文の構造を指すギリシャ語の用語である。これはいくつかの文の断片を組み合わせて一つの考えとして完成させる方法と関連がある。

統語 これはヘブル語の韻文(詩)のタイプと関連のある3つの用語のうちの一つである。この用語は互いに意味を増し加えるように、時に「最高潮」と呼ばれる状態となるように並んで詩を構成してゆく韻つまり行を指している。

組織神学 これは聖書中の真理を統一的かつ合理的に関連づけようと試みる解釈の場である。これは範疇(神、人、罪、救い、など)によって、単に歴史的というよりはむしろ論理的に表現され

たクリスチャン神学である。

タルムード これはユダヤの口伝の伝統を集めたものの名称である。ユダヤ人はこれを神がシナイ山でモーセに口頭で与えられたものだと信じている。事実、これはユダヤの教師達が長年にわたって集めた知恵であることが明らかとなっている。書物の形をとるタルムードは2つ、つまりバビロニア版と、それよりも短く未完のパレスティナ版がある。

聖書批評 これは聖書原典の研究である。本物の聖書原典は現存せず、代わりに互いに内容の異なる写本が現存しているだけであるので、聖書批評は必要である。これは異本についての説明を行い、自筆の旧・新約聖書の本来の内容に近づけようと試みている。これはしばしば「軽い批評」と呼ばれている。

Textus Receptus これは紀元 1633 年に編纂されたギリシャ語の新約聖書の Elzevir 版の名である。この聖書は少し後の時代のギリシャ語の原典およびエラスムス(紀元 1510~1535 年編纂)と Stephanus(紀元 1546~1559 年編纂)と Elzevir(紀元 1624~1678 年編纂)によるラテン語版聖書から編纂されたギリシャ語の新約聖書である。A. T. Robertson は自著 *An Introduction to the Textual Criticism of the New Testament* の 27 ページで「ビザンティン聖書は実質上 Textus Receptus である」と言っている。ビザンティン聖書は3つの古代ギリシャ語原典群(西方原典とアレキサンドリア原典とビザンティン原典)の中で最も価値が低い。幾世紀にもわたって手書きで写されたためにこの聖書には累積的な誤りが見られる。しかし、A. T. Robertson はこのようにも言っている「Textus Receptus は我々にとって十分な正確性を保った聖書である」(自著 *An Introduction to the Textual Criticism of the New Testament* の 21 ページ)。このギリシャ語の原典について行なわれた書写の伝統(特に紀元 1522 年のエラスムスのラテン語版聖書の第3版)は紀元 1611 年編纂の欽定訳において編纂の基礎となった。

トーラ これは「教え」を意味するヘブル語の用語である。これはモーセの著書(創世記から申命記まで)の公的な表題となった。これはユダヤ人にとってはヘブル語の正典のうちで最も権威ある書のグループである。

予型論 これは解釈の特殊な型である。通常これには、ある類似した象徴を用いて旧約聖書の文中で見出された新約聖書の真理が関与している。この種の聖書解釈学はアレキサンドリア学派の方法論の要点であった。この種の聖書解釈法は濫用されているので、この方法は新約聖書中に記されている特殊な事例の解釈のみに用いられるべきである。

Vaticanus これは紀元4世紀のギリシャ語の原典である。この原典はバチカン図書館で発見され

た。元々この原典には旧約聖書と聖書外典と新約聖書が全て収録されていた。しかし、いくつかの書(創世記、詩篇、ヘブル人への手紙、教書群、ピレモンの手紙、黙示録)が失われた。この原典は自筆の本物の原典を特定するうえでとても有用な原典である。この原典は大文字「B」によって分類上の名が付けられている。

ウルガタ聖書 これは Jerome によりラテン語に訳された聖書の訳本の名である。これはローマカトリック教会によって正式訳つまり「一般」訳聖書とされた。このラテン語訳は紀元 380 年代になされた。

知恵の書 これは古代近東地域で一般的な文学ジャンルであった(現代世界にもある)。実質上これは、幸運にも詩や諺や随筆に慣れ親しんできた新しい世代に指針を与えようという試みである。これは集団社会に対してよりも個人に対して語られる言葉である。これは歴史を暗示させるためには用いられず、人生経験と観察に基づいている。聖書ではヨブ記から雅歌までが YHWH の御臨在と礼拝を推測しているが、この宗教的世界観は全ての時代の全ての人の経験において明らかではない。

一つの文学ジャンルとしてはこれは一般的真理を述べている。しかし、この文学ジャンルを全ての特別な状況において用いることはできない。これらは必ずしも個々の状況の全てに適用されることはない一般的な記述である。

これらの賢人は敢えて人生の難問を投げかける。しばしば彼らは伝統的な宗教観に挑戦する(ヨブ記と伝道者の書)。彼らは人生の悲劇についての(問題への)安易な答えにバランスと緊張をもたらず。

世界図と世界観 これらは対をなす用語である。これらはどちらも創造に関連する哲学的概念である。用語「世界図」は「どのように」創造されたかを指し、「世界観」は「誰が」創造したかに関連している。これらの用語は、どのように創造されたかではなく誰が創造したかを主に述べている創世記の1~2章の解釈に関連がある。

YHWH これは旧約聖書における神の契約の御名である。これは出エジプト 3: 14 で初めて登場する。これはヘブル語の用語「ある」の使役形である。ユダヤ人はこの御名を軽い気持ちで呼んでしまうことを恐れて、「主」を意味するヘブル語の用語 *Adonai* をその代わりに用いた。この契約の御名はこのようにして英語に訳された。

補遺2 原典批評

この主題はこの注解書に見られる御言葉を解説する方法とみなされるだろう。以下に示す資料が用いられることになる。

I. 英訳聖書の御言葉

- A. 旧約聖書
- B. 新約聖書

II. 「原典批評」とも呼ばれる「軽い批評」の問題と理論の簡単な説明

III. さらなる読解のための推奨文献

I. 英訳聖書の御言葉

A. 旧約聖書

1. マソラ聖書(MT)—このヘブル語の子音字で綴られた聖書は紀元 100 年にラビ(ユダヤ教の指導者)の Aquiba により書かれた。母音記号、アクセント(抑揚)、行間のコメント、句読点、そしてその他の文法上の記号は紀元6世紀から9世紀にかけて付け加えられた。その付け加えの仕事はマソラ編集者として知られるユダヤ教の学者によってなされた。彼らを用いた原文体はミシュナ、タルムード、タルガム、ペシッタ聖書、ウルガタ聖書に見られるものと同じであった。
2. セプトゥアギンタ(LXX)—伝説によればセプトゥアギンタはエジプト王プトレマイオス2世(紀元前 285~246 年)の後援のもとにアレキサンドリア図書館において70日間にわたって70名のユダヤ教の学者によって編纂された。その翻訳(ギリシャ語訳)はおそらくアレキサンドリア在住のユダヤ教の指導者の求めによるものであろう。この伝説は「アリストテレス書簡」に由来する。LXX はその大半がラビ(ユダヤ教の指導者)の Aquiba の聖書(MT)に由来するヘブル語聖書の様々な伝統に基づいている。
3. 死海文書(DSS)—死海文書は古代ローマ帝国でいう紀元前の時代(紀元前 200 年~紀元 70 年)に「エセネ派」と呼ばれるユダヤ教の分派によって書かれた。死海周辺の数箇所で見発見されたヘブル語の原典は MT や LXX 以降の様々なヘブル語聖書群の特徴を示している。
4. これらの聖書の比較が解釈においてどのように旧約聖書の理解の助けとなっているかの特別な例
 - a. LXX は翻訳者と研究者が MT を理解する際の助けとなっている。
 - (1)イザヤ 52: 14 は LXX では「それほどに、**彼**は多くの民を驚かせるであろう」
 - (2)イザヤ 52: 14 は MT では「それほどに、**あなたは**多くの民を驚かせた」
 - (3)LXX ではイザヤ 52: 15 中の代名詞がはっきりと示されている。

- (a) LXX では「それほどに彼は多くの民を驚かせるであろう」
- (b) MT では「それほどに彼は多くの民を驚かせた」
- b. DSS は翻訳者と研究者が MT を理解する際の助けとなっている。
 - (1) イザヤ 21: 8 は DSS では「そこで見張りは叫んだ。『見張り台の上に私は立ち. . . 』」
 - (2) イザヤ 21: 8 は MT では「そして私は獅子のように叫ぶ。わが主よ、私は一日中見張り台の上に立ち. . . 」
- c. LXX と DSS はイザヤ 53: 11 の内容を明確に理解する際の助けとなっている。
 - (1) LXX と DSS では「自らの魂の苦しみの後に彼は光を見て満足するだろう」
 - (2) MT では「彼は自らの魂の苦しみの. . . を見て満足するだろう」

B. 新約聖書

1. ギリシャ語訳の新約聖書は完全なものと部分的なものを問わず 5300 件以上が現存している。約 85 件はパピルスに書かれており、268 件は全て大文字(アンシアル体)で書かれた原典である。後に紀元9世紀頃に流状書体(小文字体)が発達した。書物の形をとるギリシャ語の原典は約 2700 件ある。日課表(聖句集)と呼ばれ、礼拝に用いられた聖句のリストも約 2100 ほど現存している。
2. 部分的なものを含めて、パピルスに書かれた新約聖書のギリシャ語訳原典が美術館に約 85 件収められている。紀元2世紀に書かれたとされるものもあるが、大半は紀元3世紀あるいは4世紀に書かれたとされている。これらの MSS の中に新約聖書全体が記されているものはない。これらが新約聖書の最古の写本であるからというだけで異本が少ないと断言することはできない。これらの多くは局所的に用いられるために手早く書き写された。その過程において注意は払われなかった。従ってそれらには多くの異本が存在する。
3. Codex Sinaiticus はヘブル語の文字^α(アレフ)つまり(01)で知られ、Tischendorfによりシナイ山の聖 Catherine 修道院で発見された。紀元4世紀に書かれたとされ、旧約聖書の LXX とギリシャ語訳の新約聖書が収められている。「アレキサンドリア原典」タイプの聖書である。
4. Codex Alexandrinus は「A」つまり(02)で知られ、エジプトのアレキサンドリアで発見された紀元5世紀のギリシャ語原典である。
5. Codex Vaticanus は「B」つまり(03)で知られる。ローマのバチカン図書館で発見され、紀元4世紀中頃に書かれたとされている。旧約聖書の LXX とギリシャ語訳の新約聖書が収められている。「アレキサンドリア原典」タイプの聖書である。
6. Codex Ephraemi は「C」つまり(04)で知られ、一部が破損した紀元5世紀のギリシャ語原典である。
7. Codex Bezae は「D」つまり(05)で知られる紀元5世紀あるいは6世紀のギリシャ語原典である。いわゆる「西洋聖書」の代表である。付け加えられた事柄が多く、欽定訳聖書の編纂時に原典として使用されたギリシャ語訳聖書である。
8. 新約聖書の MSS はそれぞれ特徴を持つ3つ、あるいは可能であれば4つのグループに分

けられる。

a. エジプトのアレキサンドリア原典

- (1) P⁷⁵、P⁶⁶ (紀元前 200 年頃)。福音書群が収められている。
- (2) P⁴⁶ (紀元前 225 年頃)。パウロの書簡群が収められている。
- (3) P⁷² (紀元前 225 年～250 年頃)。ペテロの書簡群とユダの手紙が収められている。
- (4) Codex B (紀元前 325 年頃)。Vaticanus と呼ばれ、旧・新約聖書全体が収められている。
- (5) このタイプの聖書からの Origen 引用
- (6) この聖書タイプの見られる他の MSS としては \aleph 、C、L、W、33 がある。

b. 北アフリカの西洋聖書

- (1) 北アフリカの教父 Tertullian と Cyprian および古代ラテン語訳聖書からの引用
- (2) Irenaeus からの引用
- (3) Tatian と古代シリア語訳聖書からの引用
- (4) Codex D 「Bezae」はこの聖書タイプに倣っている。

c. コンスタンティノーブルの東ビザンティン聖書

- (1) この聖書タイプは 5300 件の MSS の 80% 以上に反映されている。
- (2) シリアのアンテオケの教父 Cappadoceans と Chrysostom と Therodoret による引用
- (3) Codex A。福音書群中のみ
- (4) Codex E (紀元 8 世紀)。新約聖書全体が収められている。

d. 4 つめの考えられるタイプはパレスティナの「シーザー原典」である。

- (1) 主にマルコの福音書中にのみ見られる。
- (2) これの原典として使用されたのは P⁴⁵ と W である。

II. 「原典批評」とも呼ばれる「軽い批評」の問題と理論

A. 異本はどのようにして生まれたのか

1. 偶然の発生 (発生の大多数を占める)

- a. 手で書き写す際の見落とし。類似する 2 つの語の読み取りを後回しにして、その 2 つの語の間にある全ての語を見落としてしまうこと (類似語誘因脱落)。
 - (1) 2 文字の語あるいは句の見落とし (重字脱落)
 - (2) ギリシャ語原典の句あるいは行を誤って繰り返し書き写してしまうこと (重複誤写)
- b. 口述筆記によって書き写す際に聞き違いで綴りを間違えること (ギリシャ文字の η [エータ、イータ] を「イー」と聞き違えること)。このような綴りの間違いは音の似たギリシャ語の単語との意味や綴りの混同の誘因となる。
- c. 最古のギリシャ語原典には章あるいは節の分割がなく、句読点もわずかしかなく、または全くなく、語間の分割もなかった。異なる箇所では文字と文字の間を分割して異

なる語とすることは可能である。

2. 故意の(意図的な)発生

- a. 書き写される原典の文法形式の向上のために(原典の内容が)変更された。
- b. 書き写される原典と他の聖書原典との(内容の)一致を図るために(原典の内容が)変更された(言い換え文の調和)。
- c. 2つあるいはそれ以上の異本をつなぎあわせて一続きの聖書原典とするために(原典の内容が)変更された(異本合成)。
- d. 原典中に発見された問題の解決のために(原典の内容が)変更された(Iコリント 11: 27 と Iヨハネ 5: 7-8 を参照)。
- e. 原典の正しい解釈のためにある書記が行間に付け加えた、歴史的背景に関する情報を、その書記の書き写しの仕事を引き継いだ次の書記が原典の本文中に書き入れてしまったこと(ヨハネ 5: 4 を参照)。

B. 原典批評の基本原則(異本が存在する場合に本物の原典を判別するための論理的指針)

1. 最もごちない、つまり文法的に異和感のある原典が本物である可能性がある。
2. 最も短い原典が本物である可能性がある。
3. より古い原典は歴史的に(書かれた年代が)本物に近く、他の事柄も全て本物と同じであるのでより重要性が高い。
4. (他の聖書原典の発見された場所とは)地理的に離れた場所で発見された MSS は大半が本物であるといえる。
5. 教義的に弱い原典、特に異本についての神学的大議論、例えば Iヨハネ 5: 7-8 における三位一体の記述の多様性に関する原典はより本物とみなされている。
6. 他の異本の起源を最もよく説明しうる原典が本物である可能性がある。
7. 問題となるこれらの異本の様々な見解を調整するうえで助けとなる2つの引用
 - a. J. Harold Greenlee 著 *Introduction to New Testament Textual Criticism* の 68 ページには「議論が可能な原典にはクリスチャンの教義に固執しているものはない。従って新約聖書の研究者は自分が今研究している原典に神の啓示による本物の原典以上の正統性つまり教義的な強さを求めていることに気付かなければならない」とある。
 - b. W. A. Criswell 氏は *The Birmingham News* の Greg Garrison 氏との対談で自分は聖書中のいかなる啓示の言葉も信じないと言い、「必ずしも全ての言葉が幾世紀にもわたって現代まで翻訳者達によって明らかにされてきたわけではない」と述べている。Criswell 氏はまたこのように言っている「私は原典批評を大いに信じている。私が思うに、マルコの福音書 16章の後半は異端説である。それは神の啓示による記述ではなく、ただのでっちあげである。... それらの原典でその聖書箇所(の)記述を比べてみれば、マルコの福音書の結論がそのようには記されていないことに気付く。誰かがそれを付け加えたのだ...」。

SBC 無謬論者協会の代表も、「改ざん」はヨハネの福音書5章のベテスダの池でのイエスについての記述においても明らかであると主張している。彼はまた、(イスカリオテの)ユダの自殺(マタイ27章と使徒行伝1章を参照)の2つの異なる記述について議論し、「それは単に自殺についての観点の違いである」と言っている。Criswell氏はそれに対して「それが聖書中にあるなら、それについての説明があるはずだ。そうするとユダの自殺についての記述が2つあることになる」と言っている。Criswell氏はさらにこのように言っている「原典批評はそれ自体素晴らしい科学である。それははかないものではない。それは場違いなものではない。それは壮大で中心的である...」。

Ⅲ. 原典の問題(原典批評)

A. さらなる読解のための推奨文献

1. R. H. Harrison 著 *Biblical Criticism: Historical, Literary and Textual*
2. Bruce M. Metzger 著 *The Text of the New Testament: Its Transmission, Corruption and Restroration*
3. J. Harold Greenlee 著 *Introduction to New Testament Textual Criticism*

補遺3

ギリシャ語の文法構造の簡単な定義

コイネギリシャ語はしばしばヘレニズム(アレクサンドロス大王の時代以降の古代ギリシャ世界)ギリシャ語と呼ばれ、アレクサンドロス大王の遠征(紀元前336~323年)以降約800年間(紀元前3世紀~紀元5世紀)にわたって地中海世界の共通(公用)言語であった。それは単なる簡略化された古代ギリシャ語ではなく、多くの意味でより新しい形のギリシャ語であり、古代近東世界ならびに地中海世界の第二共通(公用)言語となった。

新約聖書のギリシャ語はある意味で独特だが、それは多分、ルカとヘブル人への手紙の著者を除くその言語の使用者が主にアラム語を用いていたからだろう。だから彼らの文体はアラム語の熟語と(文法等の)構造形態の影響を受けていた。また、彼らは新約聖書と同じくコイネギリシャ語で書かれたセプトウアギンタ(旧約聖書のギリシャ語訳)を読み、また引用していた。しかしセプトウアギンタはギリシャ語を母語としないユダヤ人学者達によっても書かれている。

新約聖書の文体に厳密な文法構造をあてはめることはできないということを覚えておくべきである。新約聖書の文体は独特だが、(1)セプトウアギンタ(2)Josephusの著作物のようなユダヤ人の書いた書物(3)エジプトで発見されたパピルスではとても一般的である。では私達はどのように新約聖書の文体の文法構造を解明すべきだろうか。

一般のコイネギリシャ語と新約聖書のコイネギリシャ語の文法的特徴は流動的である。多くの意味でその当時は文法の簡略化が盛んな時代であった。文脈は私達にとって大きな助けとなるだろう。より大きな文脈において単語群だけが意味をもつならば、文法構造は(1)著者特有の文体と(2)特定の文脈をもとに理解されうる。ギリシャ語の様式と構造を厳密に定義することはできない。

コイネギリシャ語は主として動詞中心の言語であった。解釈においてはしばしば動詞の型と形が重要となる。主節の大半においては冒頭に動詞が現れているが、これは動詞が他の品詞より優先されることを示している。ギリシャ語動詞の解釈においては3種類の情報に注目しなければならない。3種類の情報とは(1)時制と態と法が本質的に強調している事柄[語形論つまり形態論](2)特定の動詞の基本的意味[辞書編集法、辞書学](3)文脈の流れ(統語法)である。

I. 時制

A. 時制つまり相は動詞と完了した行為あるいは完了していない行為との関係を取り扱う。これはしばしば「完了時制」あるいは「未完了時制」と呼ばれる。

1. 完了時制は行為の存在に注目する。何かが起こったということ以外に詳しいことは分かっていないのだ。その行為の始まりと継続あるいは最高潮については述べられていない。
2. 未完了時制は行為の継続過程に注目する。それは連続行為や持続行為や継続行為などの用語で表現される。

- B. 時制は著者がその行為を進行中のものとしてどのように見るかによって分類される。
1. それは起こった＝アオリスト
 2. それは起こり、結果が伴った＝完了形
 3. それは過去に起こり、結果が伴っていたが、今は起こっていない＝過去完了形
 4. それは起こっている＝現在形
 5. それは起こっていた＝未完了形
 6. それは起こることになっている＝未来形
- これらの時制がどのように解釈の助けとなるかの具体例としては用語「救う」が挙げられる。その語はその過程と最高潮とを示すためにいくつかの時制で用いられた。
1. アオリスト—「救った」(ローマ 8: 24 を参照)
 2. 完了形—「救われ、その結果が伴い続けている」(エペソ 2: 5 と 8 節を参照)
 3. 現在形—「救われている」(I コリント 1: 18、15: 2 を参照)
 4. 未来形—「救われることになっている」(ローマ 5: 9、10 節、10: 9 を参照)
- C. 動詞の時制に注目して、解釈を試みる者は原著者が自身(の行為)を表現するのに特定の時制を選択した理由を探る。標準的な「飾りのない」時制はアオリストであった。それは通常の「不特定の」、「限定されていない」、「他と区別されていない」動詞形であった。それは文脈が特定しているに違いない様々な動詞形で用いられる。それは単に何が起こったかを述べている。過去に関する時制は直説法の中でのみ表現される。他の時制が用いられたとしても、より特別な何かが強調されていた。それらの時制とは何だろうか。
1. 完了時制。これは結果を伴う完了した行為について述べる。ある意味でそれはアオリストと現在時制の結合したものであった。通常は付随する結果あるいは行為の完了に注目する(例: エペソ 2: 5 と 8 節「あなたがたは救われ、そして救われ続けているのです」)。
 2. 過去完了時制。これは付随する結果の発生が終わっていることを除けば完了時制と似ている。例: ヨハネ 18: 16「ペテロは扉の外に立っていた」
 3. 現在時制。これは未完結つまり未完了の行為について述べる。通常は出来事の継続に注目する。例: I ヨハネ 3: 6 と 9 節「神に結ばれている者は誰も罪を犯し続けることはありません」「神の子となった者は誰も罪を犯し続けることはありません」
 4. 未完了時制。この時制と現在時制との関係は完了時制と過去完了時制との関係に似ている。未完了時制は、起こっていたが今は終わった未完結の行為つまり過去における行為の始まりについて述べている。例: マタイ 3: 5「そこでエルサレム全土から人々が出て彼のもとに集まり始めた」
 5. 未来時制。これは通常は未来の時間枠に組込まれる行為について述べている。それは現実の出来事よりはむしろその出来事が起こる可能性に注目する。それはしばしばその出来事が起こる確実性について述べる。例: マタイ 5: 4-9「... は幸いである。彼らは...」

II. 態

- A. 態はその動詞の行為とその主語との関係を表す。
- B. 能動態はその主語がその動詞の行為を行っていることを普通に、予想されたように、強動的にではなく言い表す方法であった。
- C. 受動態はその主語が部外者によって行なわれたその動詞の行為を受けていたことを意味している。その行為を行う部外者はギリシャ語訳の新約聖書では以下に示すような前置詞と格で示された。
 - 1. 奪格の *hupo* で示される当事者(マタイ 1: 22、使徒行伝 22: 30 を参照)
 - 2. 奪格の *dia* で示される、間接的に関与している者(マタイ 1: 22 を参照)
 - 3. 通常、助格(具格)の *en* で示される物事
 - 4. 助格(具格)のみで示される人あるいは物事
- D. 中間態はその主語がその動詞の行為を生みだし、またその動詞の行為に直接関係することを意味している。それはしばしば高位の人物に関する事柄の態と呼ばれる。この文法構造はある意味で節あるいは文の主語を強調している。この文法構造は英語には見られない。ギリシャ語では様々な意味つまり訳がありうる。この動詞形には例えば以下に示すようなものがある。
 - 1. 再帰動詞—主語自体の直接的行為。例: マタイ 27: 5「首をつって死んだ」
 - 2. 強意(強調)の動詞—主語がそれ自体の行為を生み出す。例: II コリント 11: 14「サタン自身が光の天使を装うのです」
 - 3. 相補的動詞—2つの主語の相互作用。例: マタイ 26: 4「彼らは相談し合った」

III. 法

- A. コイネギリシャ語には4つの法がある。それらは動詞と現実との関係を、少なくとも著者自身の心の中で示している。それらの法は広い意味で2通りに区分される。ひとつは現実を示すグループ(直説法)であり、もうひとつは可能性を示すグループ(仮定法、命令法、願望法)である。
- B. 直説法は起こった行為あるいは起こっていた行為を少なくとも著者の心の中で表現する通常の法であった。それはギリシャ語にだけ見られる法であり、特定の時を表現しているが、ここでもその特質は二次的なものである。
- C. 仮定法は起こりうる未来の行為を表現した。何かがまだ起こっていなかったが、そうなる(起こる)可能性はあった。それは未来形直説法ではとても一般的であった。それとの違いは、仮定法はある程度の疑わしさを表現しているということであった。英語ではこれはしばしば用語“could”、“would”、“may”、“might”で表現されている。
- D. 願望法は論理的に実現可能な願望を表現した。それは仮定法よりもさらに一步現実から進んだ行為を表現する法と考えられた。願望法はある条件の下での可能性を表現した。願望法は新約聖書では稀であった。それが最も頻繁に用いられているのはパウロの有名な聖句

「決してそうではない」(KJV、「神が禁じられている」)であり、15回も用いられている(ローマ 3: 4 と 6 節と 31 節、6: 2 と 15 節、7: 7 と 13 節、9: 14、11: 1 と 11 節、I コリント 6: 15、ガラテヤ 2: 17、3: 21、6: 14 を参照)。他の例はルカ 1: 38、20: 16、使徒行伝 8: 20、I テサロニケ 3 章 11 節に見られる。

- E. 命令法は実行可能な命令を強調したが、話者の意図が強調された。それは意志的な可能性のみを主張し、他者の選択を条件とする。祈りと第三者の要求には命令法の特別な用法がある。これらの命令は新約聖書では現在時制とアオリスト時制にのみ見られる。
- F. 分詞をもうひとつの型の法に区分する文法もある。それらはギリシャ語訳の新約聖書ではとても一般的であり、通常は形容動詞と定義されている。それらは関連する主動詞と関連づけて訳される。分詞には様々な訳が可能である。いくつかの英訳聖書を参照すべきである。ここでは Baker 社刊 *The Bible in Twenty Six Translations* が大きな助けとなる。
- G. アオリスト能動態直説法は出来事を普通に、つまり「特定せずに」記述する方法である。他のいかなる時制と態と法もこれほどには原著者の伝えたかった特別な解釈上の重要性を持たなかった。

IV. ギリシャ語に馴染みのない人には以下の学習の手引きが必要な情報を与えてくれるだろう。

- A. Barbara&Timothy Friberg 著 *Analytical Greek New Testament*、Grand Rapid の Baker 社から 1988 年刊
- B. Alfred Marshall 著 *Interlinear Greek-English New Testament*、Grand Rapid の Zondervan 社から 1976 年刊
- C. William D. Mounce 著 *The Analytical Lexicon to the Greek New Testament*、Grand Rapid の Zondervan 社から 1993 年刊
- D. Ray Summers 著 *Essentials of Greek New Testament*、Nashville の Broadman 社から 1950 年刊
- E. Illinois 州 Chicago の Moody 聖書学院の学界公認のコイネギリシャ語のコースが受講可能である。

V. 名詞

- A. 統語論的には名詞は格によって分類される。格は名詞の語尾が屈折(変化)した形であり、動詞と文の他の要素との関係を示すものであった。コイネギリシャ語では格の機能の多くは前置詞で示された。格が様々な関係を明らかにしたので、前置詞はこれらの考える機能をよりはっきりと区別できるようにした。
- B. ギリシャ語の格は以下の8種類に分類される。
 1. 主格は命名に用いられ、通常は文あるいは節の主語であった。それはまた、動詞「～である」や「～になる」と連結させて叙述的な名詞あるいは形容詞に用いられた。
 2. 属格(所有格)は記述に用いられ、通常は関連する語の属性つまり特質に帰属された。それは質問「どの」の答えとなった。それはしばしば英語の前置詞“of”を用いて表現された。

3. 奪格は属格と同じ語尾変化形を用いたが、離脱を表現するのに用いられた。それはしばしば時間、空間、源、起源、程度上の一点からの離脱を述べた。それはしばしば英語の前置詞“from”を用いて表現された。
4. 与格は個人的な事柄を表現するのに用いられた。これは肯定的な事柄も否定的な事柄も述べていたようだ。しばしばこれは間接目的語であった。それはしばしば英語の前置詞“to”を用いて表現された。
5. 所格(位置格)は奪格と同じ語尾変化形を用いたが、空間、時間上の位置あるいは論理的限界を表現するのに用いられた。それはしばしば英語の前置詞“in”、“on”、“at”、“among”、“during”、“by”、“upon”、“beside”を用いて表現された。
6. 助格(具格)は奪格および所格と同じ語尾変化形を用いた。それは手段あるいは提携を表現した。それはしばしば英語の前置詞“by”あるいは“with”を用いて表現された。
7. 対格は行為の完結を表現するのに用いられた。それは限界を表現した。それは主に直接目的語として用いられた。それは質問「どの程度」の答えとなった。
8. 呼格は直接的発言に用いられた。

VI. 接続詞と接続語

- A. とても多くの接続詞があるので、ギリシャ語は非常に正確な言語である。それら接続詞は思想(節、文、段落)を連結する。それらはあまりにも多数(多種類)あるので、それらが(見当たらないこと(連辞[接続詞])はしばしば聖書解釈上重要なことである。事実、これらの接続詞と接続語は著者の思想の方向を示している。それらはしばしば、著者が伝えようとしていることとは正確には何かを見定めるうえで重要である。
- B. ここにそれらの(ギリシャ語の)接続詞と接続語およびそれらの意味を挙げる(この情報は主に H. E. Dana と Julius K. Mantey 共著 *A Manual Grammar of the Greek New Testament* から少しずつ集めた)。

1. 時間接続詞

- a. *epei*、*epeide*、*hopote*、*hos*、*hote*、*hotan* (仮定法)—「～の時」
- b. *hoes* —「～の間」
- c. *hotan*、*epan* (仮定法)—「～の時はいつでも」
- d. *hoes*、*achri*、*mechri* (仮定法)—「～まで」
- e. *priv* (不定詞)—「～の前に」
- f. *hos* —「～以来」、「～の時」、「～と同時に」

2. 論理接続詞

- a. 目的
 - (1) *hina* (仮定法)、*hopos* (仮定法)、*hos* —「～するために」、「～のために」
 - (2) *hoste* (分節的対格不定詞)—「～のために」
 - (3) *pros* (分節的対格不定詞)または *eis* (分節的対格不定詞)—「～のために」

- b. 結果(目的と結果の文法形の間には密接な関係がある)
- (1) *hoste* (不定詞。これが最も一般的である)―「～して. . .」、「そして～」
 - (2) *hiva* (仮定法)―「そして～」
 - (3) *ara* ―「そして～」
- c. 原因あるいは理由
- (1) *gar* (原因/影響あるいは理由/結論)―「～から」、「～ので」
 - (2) *dioti*、*hotiy* ―「～ので」
 - (3) *epei*、*epeide*、*hos* ―「～から」
 - (4) *dia* (対格を伴う)と *dia* (分節的不定詞を伴う)―「～ので」
- d. 推論
- (1) *ara*、*poinun*、*hoste* ―「だから」
 - (2) *dio* (最強の推論接続詞)「そのために」、「したがって」、「だから」
 - (3) *oun* ―「だから」、「それで」、「そして」、「その結果」
 - (4) *toinoun* ―「その結果」
- e. 反意あるいは対比
- (1) *alla* (強い反意接続詞)―「しかし」、「～以外は」
 - (2) *de* ―「しかし」、「しかしながら」、「だが」、「一方」
 - (3) *kai* ―「しかし」
 - (4) *mentoi*、*oun* ―「しかしながら」
 - (5) *plen* ―「それにもかかわらず」(主にルカの福音書で)
 - (6) *oun* ―「しかしながら」
- f. 比較
- (1) *hos*、*kathos* (比較節を導く)
 - (2) *kata* (複合語で。*katho*、*kathoti*、*kathosper*、*kathaper*)
 - (3) *hosos* (ヘブル人への手紙で)
 - (4) *e* ―「～より」
- g. 継続あるいは連続
- (1) *de* ―「そして」、「さて」
 - (2) *kai* ―「そして」
 - (3) *tei* ―「そして」
 - (4) *hina*、*oun* ―「そして」
 - (5) *oun* ―「そして」(ヨハネの福音書で)
3. 強調用法
- a. *alla* ―「確かに」、「本当に」、「事実」
 - b. *ara* ―「事実」、「確かに」、「現実に」

- c. *gar* —「しかし現実」、 「確かに」、 「事実」
- d. *de* —「事実」
- e. *ean* —「～さえ」
- f. *kai* —「～さえ」、 「確かに」、 「現実」
- g. *mentoi* —「事実」
- h. *oun* —「現実」、 「まさにそのとおり」

VII. 条件文

- A. 条件文は1つ以上の条件節を含む文である。この文法構造は、主動詞の行為が起こる、あるいは起こらない条件、理由、原因を示すので解釈の助けとなる。条件文には4つの型がある。それらは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した文を願望だけを述べた文に変換している。
- B. 第一種条件文は「もし～」で表現されているとはいえ、著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した行為あるいは存在を表現している。いくつかの文脈ではそれは「～だから」と訳されているようだ(マタイ 4: 3、ローマ 8: 31 を参照)。しかし、これは全ての第一種条件文が現実(事実、真実)に忠実であるという意味ではない。しばしばそれらは主張を強調したり誤りを明らかにするのに用いられた(マタイ 12: 27 を参照)。
- C. 第二種条件文はしばしば「事実と反対のこと」と呼ばれる。それは事実には忠実ではないことを強調している。例を挙げよう。
1. 「この人がもし預言者なら、自分に触れている女が誰で、どのような者か分かるはずだ。」
(ルカ 7: 39)
 2. 「あなたたちはモーセを信じたのであればわたしをも信じたはずである。」(ヨハネ 5: 46)
 3. 「もし今なお人の気に入られようとしているなら、わたしはキリストのしもべではありません」
(ガラテヤ 1: 10)
- D. 第三種条件文は起こり得る未来の行為を述べる。それはしばしばその行為の起こる可能性について断言する。それは通常は偶然性を暗示する。主動詞の行為は「もし～」節の行為に付随する。例えば I ヨハネ 1: 6-10、2: 4 と 6 節と 9 節と 15 節と 20 節と 21 節と 24 節と 29 節、3: 21、4: 20、5: 14 と 16 節。
- E. 第四種条件文は可能性を最も排除した事柄を述べた文である。それは新約聖書では稀である。事実、条件文の両部分(「もし～」節と従属節)が定義に合っているような完全な第四種条件文はない。部分的な第四種条件文の例は I ペテロ 3: 14 の冒頭の節(「もし～」節)である。結論の節(従属節)が部分的に第四種条件文となっている文の例は使徒行伝 8: 31 である。

VIII. 禁止

- A. *me* 分詞のついた現在形直説法動詞はしばしば(排他的にではなく)すでに進行している行為の停止を強調している。例えば「地上に富を蓄えてはいけません。 . . .」(マタイ 6: 19)、「自

分の生活のことで思いわずらってはいけません. . .」(マタイ 6: 25)、「あなたがたの体を不義の道具として罪に任せてはなりません. . .」(ローマ 6: 13)、「神の聖霊に逆らってはいけません. . .」(エペソ 4: 30)、「酒に酔いしれてはなりません. . .」(エペソ 5: 18)。

B. me 分詞のついたアオリスト仮定法動詞は「ある行為をし始めてはならない」という強調である。例えば「. . . だと思っははいけません」(マタイ 5: 17)、「. . . で思いわずらってはいけません. . .」(マタイ 6: 31)、「. . . を恥じてはなりません」(Ⅱテモテ 1: 8)。

C. 仮定法を伴う二重否定はとても強制的な否定である。それは「決して、絶対に. . . ない」あるいは「いかなる状況下でも. . . ない」のように表現される。例えば「その人は決して死ぬことがない」(ヨハネ 8: 51)、「わたしは決して. . . しません」(Ⅰコリント 8: 13)。

IX. 冠詞

A. コイネギリシャ語では限定冠詞「その」は英語の限定冠詞 the と同様の用法を持っていた。その基本的機能は「指示詞」としての機能、つまり語や名や句に注目させることであった。その用法は新約聖書では著者により異なる。この限定冠詞には以下のような機能もあったようである。

1. 指示代名詞のような対照用品詞としての機能
2. 予め導入された主語つまり人物を示すしとしての機能
3. 連結動詞のある文中で主語をはっきりさせる手段としての機能。例えば「神は霊である」(ヨハネ 4: 24)、「神は光である」(Ⅰヨハネ 1: 5)、「神は愛である」(4: 8 と 16 節)

B. コイネギリシャ語には英語の不定冠詞 a と an のような不定冠詞がなかった。不定冠詞がないことは以下のようなことを意味したようである。

1. 物事の特徴あるいは特質が注目される
2. 物事の範疇が注目される

C. 新約聖書の著者によって冠詞の用法は様々である。

X. ギリシャ語の新約聖書における強調の様式

A. 強調の様式は新約聖書の著者によって様々である。最も堅実で形式的な著者はルカとヘブル人への手紙の著者である。

B. 以前に述べたように、アオリスト能動態直説法は標準的で不特定のものを強調したが、他のいかなる時制と態と法もこれほどの解釈上の重要性を持たなかった。これはアオリスト能動態直説法が文法的な重要性を持って用いられることが稀であったという意味ではない(例: ローマ 6: 10[2回])。

C. コイネギリシャ語の語順

1. コイネギリシャ語は英語と同じように語順によらない語尾屈折(語尾変化)の言語であった。従って著者は通常の予想される語順を変化させて以下のようなことを示していたようだ。
 - a. 著者が読者に示したかったこと

- b. 読者を驚かせていたであろう著者の思想
 - c. 著者が深く感動したこと
2. ギリシャ語の通常の語順は未解決の問題である。しかし、予想される通常の語順は
- a. 連結動詞の場合
 - (1) 動詞
 - (2) 主語
 - (3) 補語
 - b. 他動詞の場合
 - (1) 動詞
 - (2) 主語
 - (3) 目的語
 - (4) 間接目的語
 - (5) 前置詞句
 - c. 名詞句の場合
 - (1) 名詞
 - (2) 修飾語
 - (3) 前置詞句

となる。

3. 語順は聖書解釈上きわめて重要である。例えば

- a. 「彼らは友好のしるしとしてわたしとバルナバに右手を差し出しました」 聖句「友好のしるしとして右手を」は分割されて、その重要性を示すために文頭に置かれている(ガラテヤ 2: 9)。
- b. 「キリストとともに」は文頭に置かれた。キリストの死は中央に置かれた(ガラテヤ 2 章 20 節)。
- c. 「それは少しずつ多くのしかたで」(ヘブル 1: 1)は文頭に置かれた。対比されているのは神がどのように御自身を現わされたかということであり、啓示の内容ではない。

D. 通常、ある程度の強調は以下に示すような文筆技法によって示される。

- 1. 動詞の語尾屈折(変化)形の中にすでにある代名詞の反復。例:「わたしは、わたし自身は、いつもあなたがたとともにいる。…」(マタイ 28: 20)
- 2. 存在が予想される接続詞あるいは語・句・節・文をつなぐその他の品詞の不在。これは連辞[接続詞]省略(「非拘束」と呼ばれる。接続用品詞の存在が予想されたので、その不在は注意を引くことになる。例:
 - a. 主イエス・キリストが山上の説教で語られた幸福に関する章句、マタイ 5: 3 以降(列記による強調)

- b. ヨハネ 14: 1(新しいピック)
 - c. ローマ 9: 1(新しい章)
 - d. IIコリント 12: 20(列記による強調)
3. 文脈中にある語句の反復。例:「神の栄光のために」(エペソ 1: 6 と 12 節と 14 節)。この聖句は三位一体の神のお一人お一人の御業を示すために用いられた。
4. 熟語あるいは用語間の言葉(音)遊びの使用
- a. 婉曲語法—(口に出して言うことが)禁止されている主題を他の用語で置きかえる。例えば死は「眠り」(ヨハネ 11: 11-14)に、男性生殖器は「足」(ルツ 3: 7-8、I サムエル 24: 3)に置きかえられている。
 - b. 遠回しな表現—神の御名を他の用語で置きかえる。例えば「天の御国」(マタイ 3: 21)、「天からの声」(マタイ 3: 17)。
 - c. 比喩的表現
 - (1) ありえない誇張(マタイ 3: 9、5: 29-30、19: 24)
 - (2) 穏やかな口調で述べられた極端な発言(マタイ 3: 5、使徒行伝 2: 36)
 - (3) 擬人化(I コリント 15: 55)
 - (4) 皮肉(ガラテヤ 5: 12)
 - (5) 韻文[ピリピ 2: 6-11]
 - (6) 語間の音遊び
 - (a) 「教会」
 - (i) 「教会」(エペソ 3: 21)
 - (ii) 「召し」(エペソ 4: 1 と 4 節)
 - (iii) 「召された」(エペソ 4: 1 と 4 節)
 - (b) 「自由な」
 - (i) 「自由な女」(ガラテヤ 4: 31)
 - (ii) 「自由」(ガラテヤ 5: 1)
 - (iii) 「自由な」(ガラテヤ 5: 1)
 - e. 熟語的言葉—通常は文化的な言葉と特定の言葉
 - (1) 「食物」の比喩的使用(ヨハネ 4: 31-34)
 - (2) 「神殿」の比喩的使用(ヨハネ 2: 19、マタイ 26: 61)
 - (3) 思いやりを意味するヘブル語の熟語と「憎む」(創世記 29: 31、申命記 21: 15、ルカ 14: 36、ヨハネ 12: 25、ローマ 9: 13)
 - (4) 「全ての」対「多くの」。イザヤ 53: 6(「全ての」)および 53: 11 と 12 節(「多くの」)を比較せよ。これらの用語はローマ 5: 18 と 19 節に見られるものと同意語である。
5. 一語の用語の代わりに一組の聖句を用いること。例:「主イエス・キリスト」
6. *autos* の特別用法

- a. 冠詞(限定用法)が付いているときは「同じ」と訳される。
- b. 冠詞(叙述用法)が付いていないときは強意の再帰代名詞—「彼自身」、「彼女自身」、「それ自身」として訳される。

E. ギリシャ語を母語としない聖書研究者は以下に示すいくつかの方法で強調を見分けることができる。

1. 解釈用の辞書とギリシャ語—英語聖書(隔行にギリシャ語と英語で書かれた聖書)の使用
2. 英訳聖書群、特に様々な翻訳理論の比較。例:「逐語」訳(KJV、N KJV、ASV、NASB、RSV、NRSV)と”dynamic equivalent”訳(Williams、NIV、NEB、REB、JB、NJB、TEV)の比較。ここでは Baker 社刊の *The Bible in Twenty-Six Translations* が大きな助けとなるだろう。
3. Joseph Bryant Rotherham 著 *The Emphasized Bible* (Kregel 社の 1994 年刊)の使用
4. 文字通り忠実に訳された聖書の使用
 - a. 1901 年刊の *The American Standard Version*
 - b. Robert Young 著 *Young's Literal Translations of the Bible* (Guardian Press の 1976 年刊)

文法の研究は退屈だが正しい解釈のためには必要である。これらの簡単な定義と注解と実例はギリシャ語を母語としない人々にこの巻の文法解説を用いるよう勧める意図がある。確かにこれらの定義は簡略化されすぎている。それらは教義の理解のためだけにではなく新約聖書の統語法のより深い理解のための布石として用いられるべきである。読者がこれらの定義によっても他の学習参考書、例えば新約聖書の専門的解説書を理解できるようになることを望む。

私達は聖書の文脈中に見られる情報に基づいて自らの解釈を裏付けることができなければならない。文法は解釈を裏付ける証拠となる事柄(複数)の中で最も助けとなるもののひとつである。他の証拠物件には歴史的背景、文脈、現代用語の用法、言い換え文などが含まれる。